慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	東南アジア大陸部諸言語の動詞連続
Sub Title	
Author	春日, 淳(Kasuga, Atsushi) 清水, 政明(Shimizu, Masaaki) 上田, 広美(Ueda, Hiromi) 岡田, 知子(Okada, Tomoko) 峰岸, 真琴(Minegishi, Makoto) 鈴木, 玲子(Suzuki, Reiko) 岡野, 賢二(Okano, Kenji) 澤田, 英夫(Sawada, Hideo) 三上, 直光(Mikami, Naomitsu) 東南アジア諸言語研究会(Tōnan Ajia shogengo kenkyūkai)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2017
Jtitle	,p.1- 222
JaLC DOI	10.14991/BB23436924
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BB23436924-00000000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東南アジア大陸部諸言語の動詞連続

東南アジア諸言語研究会編

慶應義塾大学言語文化研究所

まえがき

慶應義塾大学言語文化研究所の共同研究プロジェクト「東南アジア諸言語研究会」は、その研究成果として、これまで『東南アジア大陸部諸言語の「行く・来る」』(2003 年)、『東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造』(2006 年)、『東南アジア大陸部諸言語の動詞句』(2013 年) の計 3 冊の報告書を刊行してきた。それらはいずれも、東南アジア大陸部に行われる、ベトナム語、クメール語、タイ語、ラオ語、ビルマ語、ロンウォー語の 6 言語についての記述的研究である。各報告書の内容は、言語間の比較対照がしやすいように、共通の例文をもとに言語ごとに記述する方式をとっている。

本書は第 4 冊目の成果報告書として刊行するものである。テーマは、東南アジア諸言語に広く観察される動詞連続 (serial verb construction) である。本書で言う動詞連続とは、動詞のみの連続だけでなく、動詞が名詞句を伴った動詞句の連続をも含めた構造を意味する。動詞連続は最も研究者の関心を引く文法現象のひとつであり、それゆえにこの現象をめぐる論考は少なくないが、残念ながらその定義や扱う範囲は研究者によって異なり、合意が得られていないのが現状である。その点を考慮し、本書では、執筆者はそれぞれの視点から動詞連続を取り上げることにした。いずれの論文も動詞連続の包括的把握のためには欠かすことのできない重要な現象を扱っており、全体として多角的な記述を特色とする報告書となった。本書が言語研究の進展の一助となることを切に願うものである。なお、各言語の概要については、既刊の報告書を参照していただければ幸いである。

「東南アジア諸言語研究会」参加者は次の通りである。(五十音順)

上田広美　岡田知子　岡野賢二　春日　淳　澤田英夫　清水政明　鈴木玲子
三上直光　峰岸真琴

東南アジア諸言語研究会
代表者　三上直光

目　次

まえがき

ベトナム語における動詞 V1 と V2 の主体が異なる連続 V1V2 について・・・・・・・・・・・1
春日　淳

ベトナム語の動詞連続 ―「付帯」表現を中心に―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
清水政明

クメール語の動詞句の連続について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
上田広美、岡田知子

タイ語の動詞連続・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
峰岸真琴

ラオ語の二動詞連続型について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98
鈴木玲子

ビルマ語の動詞連続～動作的な動詞を中心に～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・130
岡野賢二

ロンウォー語の複動詞構造・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・162
澤田英夫

タイ語、クメール語、ベトナム語の「～てくる」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・208
三上直光

執筆者一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・222

ベトナム語における動詞 V1 と V2 の主体が異なる連続 V1V2 について

春日　淳

目次

はじめに
1. 分析の対象
2. 随意性による分析
3. 語彙的アスペクトによる分析
4. V1V2N2 と V1N2V2 の相異
5. まとめ
おわりに
付記
注
参考文献　辞書

はじめに

ベトナム語には、N を名詞、V を動詞として N1V1V2N2 の形の文[1)]を形成するとき、V1 が動作、V2 がその動作による結果状態を表し、V1 の主体は文の主語である N1、V2 の主体は N2 という、V1 と V2 の主体が異なる文が多数存在する[2)]。この N1V1V2N2 の文中で連続する動詞 V1, V2 は N2 を挟んで V1N2V2 という連続を許すものとそうでないものがある（以下の例(1)~(7)を参照）[3)]。以下に N1V1V2N2 と N1V1N2V2 の具体例を挙げる（V1V2N2 と V1N2V2 の V1, V2 を太字で強調、第 1 節以降も同様）。

(1) a. Tân **xô ngã** Bình.（(人名）＋押す＋転ぶ＋（人名）：タンはビンを押し倒した）[4)]
　　b. Tân **xô** Bình **ngã**.（(人名）＋押す＋（人名）＋転ぶ：タンはビンを押し倒した）
(2) a. Tân **đập vỡ** kính cửa sổ.（(人名）＋叩く＋割れる＋窓ガラス：タンは窓ガラスを叩き割った）

b. Tân **đập** kính cửa sổ **vỡ**.（（人名）＋叩く＋窓ガラス＋割れる：タンは窓ガラスを叩き割った）

(3) a. Anh ấy **cưa rời** gỗ.（彼＋（鋸で）切る＋離れる＋材木：彼は材木を切り離した）

b. *Anh ấy **cưa** gỗ **rời**.（彼＋（鋸で）切る＋材木＋離れる）[5)]

(4) a. Anh ấy **đun sôi** nước.（彼＋沸かす＋沸く＋水：彼はお湯を沸かした）

b. ?Anh ấy **đun** nước **sôi**.[6)]（彼＋沸かす＋水＋沸く：彼はお湯を沸かした）

(5) a. Anh ấy **phơi khô** áo.（彼＋干す＋乾く＋服：彼は服を干して乾かした）

b. *Anh ấy **phơi** áo **khô**.（彼＋干す＋服＋乾く）

(6) a. Anh ấy **lau sạch** bàn.（彼＋拭く＋清潔な＋机：彼は机をきれいに拭いた）

b. ?Anh ấy **lau** bàn **sạch**.[7)]（彼＋拭く＋机＋清潔な：彼は机をきれいに拭いた）

(7) a. Anh ấy **nhuộm đỏ** vải.（彼＋染める＋赤い＋布：彼は布を赤く染めた）

b. *Anh ấy **nhuộm** vải **đỏ**.（彼＋染める＋布＋赤い）[8)]

第 4 節で改めて論じるが、不適格とされた(3b), (5b), (7b)も結果を意図することを明示する前置詞 cho を V2 に前置させ、それぞれ cho rời, cho khô, cho đỏ とすれば、結果の意図が明示され適格となる。

これらの文に共通する特徴は、V1 が N1 の意志のコントロールによってその動作が意図され得る随意動詞であり、V2 が主体である N2 の意志のコントロールとは関係なく起こる事態、あるいは状態を表す不随意動詞であるということである[9)]。

本稿の目的は、このような随意動詞 V1 と不随意動詞 V2 の連続する V1V2（以下「V1V2 連続」と呼ぶ）の意味特徴を明らかにし、それが V1N2V2 の場合とどう異なるかについて考察することである。その際、V1, V2 が単独で持つ随意性と V1V2 連続が持つ随意性のほかに、動作・状態の基本的な区別に関わる、動態動詞(dynamic verb)であるか状態動詞(stative verb)であるかということ、動詞の表す動作・状態と時間との関わりにおいて動詞を分類する、継続動詞(durative verb)であるか瞬間動詞(punctual verb)であるかということ、また、その他の語彙的アスペクトとして、達成(accomplishment)、到達(achievement)、状態(state)を考慮する[10)]。

本稿の構成は次の通りである。第 1 節では分析の対象を限定する。第 2 節では V1, V2 単独と V1V2 連続について随意性による分析を行う。第 3 節では進行アスペクトの標識 đang と V1V2 の共起のあり方から、V1, V2 単独と V1V2 連続の持つ語彙的アスペクトと意味特徴について分析する。第 4 節では V1V2 連続と V1N2V2 の場合の相異について論じる。第 5 節では V1V2 連続の意味特徴についてまとめを行う。

1. 分析の対象

本稿では、分析の対象を次のように限定する。すなわち、V1 と V2 がそれぞれ単独の意

味を保ちながら連続し、随意性についても V1 の随意、V2 の不随意が保たれ、V1 が N1 を主体とする動作、V2 が N2 を主体とする事態・状態で N1 の動作である V1 の結果、という関係にあるもの。すなわち、下の(1)のような V1, V2 は分析の対象から除かれることになる。

(1) Nam **làm vỡ** bình hoa.（(人名）＋する＋割れる＋花瓶：ナムは花瓶を割った）

上の(1)の V1 である làm は、動詞としての元来の意味が「する、作る」であるが、 (1)では使役動詞として使用されている。V1 が使役動詞の場合、どのような動作をしてその結果としての N2 の動作や状態(V2)を生じさせたかという動作の指定がない [11)]。

さらに、下の(2), (3)のような V1V2 連続も分析の対象から除く。(2), (3)のような V1V2 は、V1 の元来の意味がある種の変化を起こしたり希薄化したりして、V2 の意味と結合し、新たな意味を持つ複合語となったものである。

(2) Lan **đánh thức** Nam.（(人名）＋叩く＋目覚める＋（人名）：ランはナムを起こした）
(3) Anh ấy **đánh rơi** ví.（彼＋叩く＋落ちる＋財布：彼は財布を落とした）

(2), (3)の V1 である đánh は元来「叩く」という意味の随意動詞であるが、(2)ではその意味が変化し、一種の使役的な用法をもち、thức「目覚める」と複合して「起こす」（目覚めさせる）という意味の複合動詞となっている。また、(3)では đánh の意味が希薄化し、不随意動詞 rơi「落ちる」と複合し、不随意の複合動詞 đá nhrơi「落とす」となっている。

さらに本稿では、分析の対象とする随意動詞(V1)と不随意動詞(V2)からなる V1V2 連続を「はじめに」の例(1)~(7)の例に現れた次の V1V2 連続に限ることにする [12)]。

分析の対象とする V1V2 連続

xô ngã「押し倒す」、đập vỡ「叩き割る」、cưa rời「(鋸で）切り離す」、đun sôi「沸騰させる」、phơi á o「干して乾かす」、lau sạch「きれいに拭く」、nhuộm đỏ「赤く染める」

2. 随意性による分析

ある動詞が随意動詞であるか不随意動詞であるかを判定するには、動作主体の意志を表す định「～つもりだ」との共起を見るのが有効である。以下に、第 1 節で分析の対象として掲げた V1V2 連続を成すそれぞれの動詞 V1, V2 について định との共起関係を示す。

(1) Tân định **xô** Bình.（タンはビンを押すつもりだ）
(2) *Bình định **ngã**.[13)]
(3) Tân định **đập** kính cửa sổ.（タンはガラスを叩くつもりだ）

(4) *Kính cửa sổ định **vỡ**.
(5) Anh ấy định **cưa** gỗ.（彼は材木を（鋸で）切るつもりだ）
(6) *Gỗ định **rời**.
(7) Anh ấy định **đun** nước.（彼はお湯を沸かすつもりだ）
(8) *Nước định **sôi**.
(9) Anh ấy định **phơi** áo.（彼は服を干すつもりだ）
(10) *Áo định **khô**.
(11) Anh ấy định **lau** bàn.（彼は机を拭くつもりだ）
(12) Bàn định **sạch**.
(13) Anh ấy định **nhuộm** vải.（彼は布を染めるつもりだ）
(14) *Vải định **đỏ**.

上の(1)~(14)に見るように、随意動詞は định と共起し、不随意動詞は định と共起しない。

ただ、随意動詞と不随意動詞が主体の意志のコントロールが働くかどうかによって区別されるということは、当然、主体が有情物[＋Human]か無情物[－Human]かということ[14)]も関係してくる。一般に、動作の主体が有情物ならば意志のコントロールが働く可能性があり[15)]、無情物ならば意志のコントロールは働かない。

次に、(1)~(14)の例中の動詞が V1V2 連続を成して使用された場合 định との共起が可能かどうかを見る。

(15) Tân định **xô ngã** Bình.（タンはビンを押し倒すつもりだ）
(16) Tân định **đập vỡ** kính cửa sổ.（タンは窓ガラスを叩き割るつもりだ）
(17) Anh ấy định **cưa rời** gỗ.（彼は材木を切り離すつもりだ）
(18) Anh ấy định **đun sôi** nước.（彼はお湯を沸かすつもりだ）
(19) Anh ấy định **phơi khô** áo.（彼は服を干して乾かすつもりだ）
(20) Anh ấy định **lau sạch** bàn.（彼は机をきれいに拭くつもりだ）
(21) Anh ấy định **nhuộm đỏ** vải.（彼は布を赤く染めるつもりだ）

上で見る通り(15)~(21)のすべての V1V2 連続において định と共起し得る。このことから、これらの V1V2 連続は全体として随意動詞として働いていることがわかる。つまり、V1V2 連続は複合動詞のように働き、V1 の随意性に意味の重点が置かれているのである[16)]。しかし、V1V2 連続は V1 単独の場合とは異なり、V2 の不随意的な結果の意図まで含意していると考えられる。その根拠となるのが、(15)~(21)の文に nhưng N2 không V2「しかし、N2 は V2 にならなかった」を後置した表現がいずれも可能となることである。この例として、(15)をこの表現にした(22)を挙げる。

(22) Tân định **xô ngã** Bình nhưng Bình không **ngã**.（ナムはビンを押し倒すつもりだったが、しかしビンは倒れなかった）

以下に、文 N1V1V2N2 内の N1, N2 が有情物であるか無情物であるか[±H(uman)]という主体の有情性と V1, V2 の随意性[±Vol(untary)]についてまとめておく [17]。

表 1. 文 N1V1V2N2 内の N1, N2 の有情性と V1, V2 の随意性

V1V2	N1 の有情性	V1 の随意性	V2 の随意性	N2 の有情性
xô ngã 押し倒す	[＋H]	[＋Vol]	[－Vol]	[＋H]
đập vỡ 叩き割る	[＋H]	[＋Vol]	[－Vol]	[－H]
cưa rời 切り離す	[＋H]	[＋Vol]	[－Vol]	[－H]
đun sôi 沸騰させる	[＋H]	[＋Vol]	[－Vol]	[－H]
phơi khô 干して乾かす	[＋H]	[＋Vol]	[－Vol]	[－H]
lau sạch きれいに拭く	[＋H]	[＋Vol]	[－Vol]	[－H]
nhuộm đỏ 赤く染める	[＋H]	[＋Vol]	[－Vol]	[－H]

3. 語彙的アスペクトによる分析

V1V2 の語彙的アスペクト（Lexical Aspect、以下 LA と略記）が、V1, V2 単独の LA を基本的には引き継ぐ形で成立していることは間違いないが、V1, V2 の LA の単純な複合ではない。以下、LA の判定として、進行・継続・繰り返しなどが可能かどうかを判定するために、進行アスペクトの標識 đang[18]、継続動詞であるか瞬間動詞であるかを判定するために時間副詞句 ~giây/phút/tiếng/ngày「～秒間／分間／時間／日間」、達成(accomplishment)あるいは到達(achievement)の特徴を持つかどうかを判定するために時間副詞句 trong ~giây/phút/tiếng/ngày「～秒／分／時間／日{-で／以内に}」[19]を用いる。以下、V1, V2 単独の場合と V1V2N2 の場合に加えて V1N2V2、V1N2choV2 の場合も含めてテストした結果を示す。

表 2. đang および時間副詞句との共起

V1V2	V1 V2	đang V	đang V1V2 N2	đang V1N2 V2	đang V1N2 cho V2	V 時間	V trong 時間
xô ngã	xô	＋	－	－	＋	＋	－
押し倒す	ngã	－				－	－
đập vỡ	đập	(＋)	(＋)	－	＋	(＋)	(＋)
叩き割る	vỡ	(＋)				－	－

c ưa rời	c ưa	＋	－	－	＋	＋	＋
切り離す	rời	－				－	－
đun sôi	đun	＋	－	＋	＋	＋	＋
沸騰させる	sôi	＋				－	＋
phơi khô	phơi	＋	－	－	＋	＋	＋
干して乾かす	khô	＋				－	＋
lau sạc h	lau	＋	－	－	＋	＋	＋
きれいに拭く	sạc h	＋				－	＋
nhuộm đỏ	nhuộm	＋	（＋）	－	＋	＋	＋
赤く染める	đỏ	＋				（＋）	＋

注：＋は共起可能なことを、－は共起不可能なことを表し、（＋）は共起が可能だが、共起しないこともあることを表す。枠内で＋あるいは－が上下 2 行にあるものは、V1, V2 それぞれについて、上の 1 行のみにあるものは、V1V2 連続についての結果を示す。

表 2 に見る通り、V1V2N2 は基本的に đang と共起しないが、これは、V1V2 連続の結果状態を表す V2 が進行・継続中である動作と矛盾することによる。しかし、đập vỡ「叩き割る」は下記のような例では、何度も繰り返し V1 の動作「叩く」ことを行い、その間に V2 の結果状態が生じているような場合には đang との共起が許容される [20)]。けれども V1N2V2 の場合は đang との共起が許されない。V1N2V2 の場合は、N2 を挟んで V1 と V2 が分断され、V1V2 の複合動詞的な働きもないため不適格となる。だが、結果の意図が明示される V1N2c hoV2 の場合は đang と共起する。これは、V2 の結果の意図と V2 の動作の進行とが矛盾しないためである。

(1) a. Tân đang **đập vỡ** kính c ửasổ.（(人名）＋～している＋叩く＋割れる＋窓ガラス：タンは窓ガラスを叩き割っている）

b. *Tân đang **đập** kính c ửasổ **vỡ**.（(人名）＋～している＋叩く＋窓ガラス＋割れる）

c .Tân đang **đập** kính c ửasổ c ho**vỡ** .（(人名）＋～している＋叩く＋窓ガラス＋割れる：タンは窓ガラスを叩き割ろうとしている）

nhuộm đỏ「赤く染める」も đập vỡ と類似の結果である。ただ、V2 の LA が đập vỡ の vỡ では ac hievement（「割れる」の意味の場合）あるいは state（「割れている」という結果の残存状態を表す場合）であるのに対し、nhuộm đỏ の đỏ では state（「赤い」という状態）である点が異なる。nhuộm đỏ も Anh ấy đang nhuộm đỏ vải.では布を染めるという動作 V1 が進行しながら布が赤く(V2)なっていくという意味を表し、*Anh ấy đang nhuộm vải đỏ では同じ意味を表すことができない。一方、Anh ấy nhuộm vải c hođỏ.は適格である。

次に c ưarời を取り上げる。c ưarời は xô ngã と同様の結果を示す。けれども、[trong 時間]

と V1 の共起に関して、次のような相違点が認められる。すなわち、cưa rời の V1(cưa)は[＋trong 時間]であるのに対し、xô ngã の V1(xô)は[－trong 時間]であり cưa が達成(achievement)の特徴を持つのに対し xô がそれを持たないことがわかる。

次に đun sôi について論じる。đun sôi は特異な結果を示す。まず、đang V1V2N2 に関しては、đập vỡ, nhuộm đỏ を除いて、他の V1, V2 の組合せと同様の結果である。đang V1N2 cho V2 に関しては、他のすべての組合せと同様の結果である。đang V1N2V2 に関しては他の組合せのいずれとも異なり、[＋đang V1N2V2]である。

(2) a. *Anh ấy đang **đun sôi** nước.
b. Anh ấy đang **đun** nước **sôi**.（彼はお湯を沸かしている）
c. Anh ấy đang **đun** nước cho **sôi**.（彼はお湯を沸かそうとして火にかけている）

phơi khô と lau sạch は、すべてのテストにおいて同様の結果を示す。しかし、phơi は継続動詞であり、lau は継続動詞であるとともに accomplishment の特徴を持つ（lau trong 5 phút「5 分で拭く（拭き終わる）」）[21]。V2 である khô と sạch も state の特徴を持つことでは共通しているが、đang khô「乾いている」は結果の残存状態（乾いていない状態から乾いた状態への変化が起こり、その結果が残存している）と看做すことができ、その意味では achievement でもある。一方、đang sạch は、(3)のような文中では適格であり、state の特徴を表している。

(3) Cái này đang **sạch**, không cần phải rửa.（これ＋đang＋清潔な＋[否定辞]＋必要がある＋洗う：これは清潔だ、洗う必要がない）

(3)の sạch が achievement を表しているかどうかは、この文では不明である。なぜなら、(3)には、その発話時点で「これ」が清潔であることが示されているだけで、その前に清潔でない状態にあったかどうかは示されていないからである。

4. V1V2N2 と V1N2V2 の相異

第 3 節までに主に N1V1V2N2 内部の V1V2 連続について見てきた。本節では V1V2N2 と V1N2V2 がどのように異なるかを考察する。まず、前節でも述べたように、N1V1V2N2 内の V1V2 連続は V1 と V2 が複合動詞のように意味的に緊密に結びついたものである。一方、N1V1N2V2 内の V1 と V2 は、V2 が V1 の補語の N2（V2 の主体でもある）の後ろにあるために、V1V2 連続の V1 と V2 の意味は分断される。

次に、N1V1V2N2 と N1V1N2V2 の、否定辞 không との共起の可能性から両者の相異を考察する。否定辞 không との共起の可能性をまとめた表 3 を下に掲げる。

表 3. **N1V1V2N2** と **N1V1N2V2** の否定辞 **không** との共起

V1V2	N1V1V2N2	N1không V1V2N2	N1V1N2V2	N1không V1N2V2	N1V1N2 khôngV2	N1V1N2 nhưngN2 khôngV2
xô ngã 押し倒す	＋	＋	＋	＋	－	＋
đập vỡ 叩き割る	＋	＋	＋	(＋)	(＋)	＋
cưa rời 切り離す	＋	＋	－(＋cho rời)	－	－	＋
đun sôi 沸騰させる	＋	＋	(＋) [22]	＋	－	＋
phơi khô 干して乾かす	＋	(＋) [23]	－(＋cho khô)	－	(＋)	＋
lau sạch きれいに拭く	＋	＋	(＋) [24]	－	＋	(＋)
nhuộm đỏ 赤く染める	＋	＋	－(＋cho đỏ)	－[25]	(＋)	＋

注：＋は、その表現が適格であることを、－は不適格であることを表し、(＋) は適格な場合もあることを表す。また、(＋～)は、その表現ならば適格となることを表す。

まず、「はじめに」でもすでに述べたが、N1V1V2N2 は適格となり N1V1N2V2 が不適格となる V1, V2 の組合せは、cưa rời, phơi khô, nhuộm đỏ の 3 組である。これらを含む例を改めて以下に掲げる。

(4) a. *Anh ấy **cưa** gỗ **rời**.（彼＋（鋸で）切る＋材木＋離れる）
b. Anh ấy **cưa** gỗ cho **rời**. （彼＋（鋸で）切る＋材木＋cho＋離れる：彼は材木を（鋸で）切り離した）

(5) a. *Anh ấy **phơi** áo **khô**.（彼＋干す＋服＋乾く）
b. Anh ấy **phơi** áo cho **khô**.（彼＋干す＋服＋cho＋乾く：彼は服を干して乾かした）

(6) a. *Anh ấy **nhuộm** vải **đỏ**.（彼＋染める＋布＋赤い）
b. Anh ấy **nhuộm** vải cho **đỏ**.（彼＋染める＋布＋cho＋赤い：彼は布を赤く染めた）

さらに、N1V1N2V2 では許容度の低い文として、次の(7a)がある。

(7) a. ?Anh ấy **đun** nước **sôi.**[26]（彼＋沸かす＋水＋沸く：彼はお湯を沸かした）
b. Anh ấy **đun** nước cho **sôi**. （彼＋沸かす＋水＋cho＋沸く：彼はお湯を沸かした）

上の(4)~(7)の b に見るように、結果の意図を示す cho（元来は「与える」の意味の動詞）を V2 に前置させた場合はいずれも適格となる[27]。(4a), (5a), (6a)は、N1V1V2N2 の文とは異なり、それぞれ「彼は材木を（鋸で）切り離した」「彼は服を干して乾かした」「彼は布を赤く染めた」という意味にはならない[28]。結果の意図を表す前置詞 cho を V2 に前置させると、それらの意味を持つ適格な文になる点では、他の V1V2 と同様である。これは、N1V1N2V2 の場合、cưa rời, phơi khô, nhuộm đỏ の V1V2 の複合動詞的な意味の結びつきが分断され、さらに結果の意図も不明な文となっているからであると考えられる。cho によって結果の意図が明示された場合のみ、V1 の動作と V2 の結果が意味的な繋がりをもつのである。この場合、cho V2 に情報の焦点があると考えられる。これら 3 組が否定辞 không を V1 に前置させた N1khôngV1N2V2 において 3 組とも不適格と判断される理由もここに求められる。しかし、không が V2 に前置された場合は、次のような結果となる。

(8) *Anh ấy **cưa** gỗ không **rời**. （彼＋（鋸で）切る＋材木＋[否定辞]＋離れる）
(9) ? Anh ấy **phơi** áo không **khô**.（彼＋干す＋服＋[否定辞]＋乾く：彼は服を干したが乾かなかった）
(10) ? Anh ấy **nhuộm** vải không **đỏ**.（彼＋染める＋布＋[否定辞]＋赤い：彼は布を染めたが赤く染めたのではない）

(8)は不適格な文であり、(9)は、インフォーマントの判断からは許容度は低いが許容できる文である。(10)は、日本語訳に表れるように「布を染めたが赤く染めたのではない」という意味で、「布を赤く染めようとして染めたが赤く染まらなかった」という意味にはならない。このことから、(10)の không V2 の部分は、結果というよりも V1 の様態を示す（V1 を修飾する）ものと考える方が妥当であろう。

この 3 組以外の V1, V2 は、N1V1N2V2 の文が適格である。また、lau sạch を除いて N1khôngV1N2V2 も適格となる。lau sạch は、N1V1N2V2 についても他と異なり程度副詞 lắm を V2 に後置させるかによって(11a), (11b)のような許容度の相異が認められる。注 7 及び注 24 で述べたように、lắm を後置させた(11b)の V2(sạch)は lau bàn「机を拭く」という動作の結果に対する話し手の評価を表していると考えられる[29]。

(11) a. ?Anh ấy **lau** bàn **sạch**. （彼＋拭く＋机＋清潔な＋とても：彼は机をきれいに拭いた）
b. Anh ấy **lau** bàn **sạch** lắm.（彼＋拭く＋机＋清潔な＋とても：彼は机をとてもきれいに拭いた）

5. まとめ

第 4 節までに、N1V1V2N2 に現れる V1V2 連続の意味的特徴について、V1, V2 の持つ随意性、語彙的アスペクトを通じての分析、V1V2 と進行アスペクトの標識 đang との共起可能性、否定辞 không との共起可能性からの検討、さらに N1V1N2V2 との比較を通じての考察を行ってきた。その結果、V1V2 連続は、三上(2007)がすでに指摘しているように、一つの複合動詞として働き、V1 に意味の重点がある、ということが確認された。

N1V1N2V2 の中の V1, V2 については、N1V1V2N2 と異なり、各々独立した動詞として働き、V1N2 が一つの動詞句となり、V2 がこれを修飾する、あるいは V1N2 の動作の結果に評価を与える役割を果たすことがある、などの点が明らかになった。この場合、三上(2007)で指摘されたように、情報の焦点は V2 にあると考えられる。

おわりに

本稿で取り上げた V1V2 連続は、そのパターンも限られている。V1 が動作、V2 が結果を表し、V1 が随意動詞、V2 が不随意動詞という組合せの V1V2 連続をもれなく調査し、その意味特徴を明らかにするためには、随意性、語彙的アスペクト、アスペクト標識や否定辞との共起可能性、N1V1N2V2 中の V1, V2 との比較のほかに、使役性(Causativity)[30]、運動性(Kinesis)[31]なども含めた詳細な分析が必要となろう。これは、今後の課題としたい。

付記

本稿の作成にあたって、Vũ Đăng Khuê 氏（1952 年、ベトナム旧ハソンビン省生まれ、男性）には、インフォーマントとしてたいへんお世話になった。心より感謝申し上げたい。

注

1) より正確には NP を名詞句、VP を動詞句として NP1V1V2NP2 となるが、本稿では記号を簡略化し、N1V1V2N2 と表記する。
2) このような V1V2 は、ベトナム語以外にも東南アジアあるいは東アジア地域の孤立語には多く見られる。Bisang(1991:520, 2009: 800)、Enfield(2008:138-140)、Matthews(2006: 75-76)、峰岸(2007: 214-215)を参照されたい。また、このような V1V2 は、Aikhenvald(2006)の動詞連続構造(serial verb constructions)の分類のうちの、Ia. $C_{AUSE\text{-}EFFECT}$ SVCs (pp.14-16)に含まれるものである。なお、ベトナム語におけるこのような V1V2 に関する先行研究の中でもっとも詳細なものとしては、三上(2007)がある。

3) (1~7 b)のV1N2V2の適格性についての判断は、母語話者の間でも分かれる場合があるが、本稿はインフォーマントの判断に従う。

4) グロスはN1, V1, V2, N2ごとに付けてある。同じ形式でグロスを付けてある他の箇所でも同様である。

5) 別の文意「彼はバラバラの材木(gỗ rời)を切った」という解釈ならば適格である。

6) インフォーマントの感覚では許容度の低い文である。否定辞 không と共起した Anh ấy không đun nước sôi.「彼はお湯を沸かさなかった」は適格である。また、第3節でも触れるが、進行アスペクトの標識đangと共起したAnh ấy đang đun nước sôi.も適格な文である。

7) 程度の副詞 lắm「とても」を sạch に後置させて Anh ấy lau bàn sạch lắm.「彼は机をとてもきれいに拭いた」とすれば問題なく許容される文となる。

8) 別の文意「かれは赤い布を染めた」という解釈ならば適格である。

9) 随意性(Voluntariness)および随意動詞(Voluntary Verb)、不随意動詞(Involuntary Verb)についての見解は、研究者間で必ずしも一致しているわけではない。本稿では、随意性（随意／不随意であること）について峰岸(2007:211)の以下の定義を参考にした。

随意性　有情物である動作主が、ある動作をコントロールできるのは、その動作を行おうと企てることまでである場合、これを随意的動作と呼ぶ。動作あるいは動作の結果が実現されるかまでは含意されない。

不随意性　事態（有情物の行為の結果、無情物の状態、状態の変化といった出来事全般）に関して、その事態の成立そのものに着目し、特定の関与者によるコントロールに着目する必要のない事態を不随意的事態とよぶ。

なお、Minegishi(2011)では随意動詞／不随意動詞という対立を Voluntary Verb（随意動詞）／Spontaneous Verb（自発動詞）という対立に置き換えている。

10) Vendler(1967: 106)では、動詞（句）を分類する time schema として activity, accomplishment, achievement, state を挙げているが、この分類がそのまま本稿の語彙的アスペクトによる動詞分類の基準ではない。本稿では、まず、動態動詞(dynamic verb)はその動作性[＋dynamic, －stative]から静態動詞[－dynamic, ＋stative]と区別され、継続動詞(durative verb)はその動作・状態の起こる時間の継続性[＋durative, －punctual]から瞬間動詞[－durative, ＋punctual]と区別する。Vendler の accomplishment（本稿の訳は「達成」）は、終点を持つ一定時間継続可能な動作を表す。この特徴をもつ動詞としては、vẽ (tranh)「（絵を）描く」のほか、xây (nhà)「（家を）建てる」、đào (giếng)「（井戸を）掘る」、khắc (tranh gỗ)「（板絵を）彫る」などが含まれる。 trong＋時間名詞（giây/phút/tiếng/ngày/tháng/năm など）「～秒間／分間／時間／日間／ヵ月間／年間で」と共起し、vẽ trong 5 tháng「5か月で描く」、xây trong một năm「1年で建てる」、đào trong 5 ngày「5日間で掘る」、khắc trong 3 tháng「3か月で彫る」のように表現される。これらの動詞に共通する特徴は、時間副詞の表す時

間内に途切れることなくその動作が起こり、動作の終了とともにその動作によってもたらされた生産物(product)が残ることである（上の例では、tranh「絵」、nhà「家」、giếng「井戸」、tranh gỗ「板絵」)。achievement（到達）は、終点を持つ瞬間的な動作を表し、この特徴を持つ動詞には đến「到着する」、mở「開（あ）く・開（ひら）く」、đóng「閉まる・閉じる」、chết「死ぬ」、sôi「沸く」などが含まれる。これらの動詞も accomplishment の動詞が共起すると同じ時間副詞句と共起し得る。ただしその意味は「～以内に V-する」である（đến trong 1 tiếng「1 時間以内に到着する」、chết trong 3 năm「3 年以内に死ぬ」、mở trong 5 giây「5 秒以内に開く」、đóng trong 5 giây「5 秒以内に閉まる」、sôi trong 30 giây「30 秒以内に沸く」)。これらの動詞は、動作が行われた後、その動作の結果が残されることが共通している（xe buýt đã đến rồi「(バスが）もう到着している」「của đang mở（ドアが）開いている」「của đang đóng（ドアが）閉まっている」「nó đã chết rồi（あいつは）もう死んでいる」nước đang sôi「(お湯が）沸いている」)。このように、その結果の残存状態の表現の仕方には相異がある。xe buýt đang đến は、バスがまさに今到着しようとしているコトを表す場合は、適格な表現であるが、バスがすでに到着しているコトを表す文としては不適格である。これと同様に、nó đang chết は、その人物が死につつあることをスローモーションのように捉えて表現した文としてのみ適格であり（通常は主語は rừng đang chết「森は死につつある」のように無情物が多い)、「死んだ」結果の残存状態として「死んでいる」コトを表す文としては不適格である。このような違いが生じるのには、đến や chết の属する動詞のカテゴリーと、mở や đóng の属する動詞のカテゴリーに相違があるからである。すなわち、 đến と chết は回復し得ない動作を表すのに対し、mở と đóng は回復の可能性のある（元の状態に戻る可能性のある）状態を表す。sôi についても「回復可能な状態」ということでは同様で、沸騰し続けている水や油が元の沸騰していない状態に戻る可能性がある。しかし、さらに詳細に見れば、đang mở や đang đóng はドアなどが開いていたり、閉じていたりする静止した状態を表しているのに対し、đang sôi はいったん沸点に達した水や油がその状態を動的に保っている、という違いがある（đang mở や đang đóng にも、文脈によっては、ドアなどが開き／閉じつつあるコトを表現した文としての解釈も可能である)。

11) 三上(2007: 177-178)参照。

12) V1V2 連続の意味と用法から分類されるすべての V1V2 連続のパターンが、この 7 種類の V1V2 連続に還元できるという訳ではない。本稿で扱えなかった V1V2 連続については、稿を改めて論じたい。

13) định ngã「転ぶつもりだ」は不適格な表現であるが、cố ý「故意に」を前置した cố ý ngã「故意に転ぶ」は適格な表現である。このことが直ちに ngã が随意動詞であることにはつながらない。ngã「転ぶ」の基本的な意味は、意志のコントロールと関係なく、体勢を崩して地面などに倒れることであるからである。cố ý という語は、意志のコントロールを含意しているが、そこには、ある動作を意志の助けを借りて無理にする、という含み

があり、随意／不随意の判定には有効ではない。

14) 本稿では、主体の属性として有情物[＋Human]、無情物[－Human]をたてる。これを有情物[＋Animate]、無情物[－Animate]とする用語法もあるが、本稿では人間を含む「動物」を生物として、生物[＋Animiate]、無生物[－Animate]とする。次のような例文では主体N1, N2 は[－Human, ＋Animate]である。また、định「～つもりだ」と共起した(ii)も物語中の描写などでなければ通常は許容度の低い文となる。

(i) Con mèo **cắn chết** con chim.（猫＋咬む＋死ぬ＋鳥：猫は鳥をかみ殺した）
(ii) ?Con mèo định **cắn chết** con chim.（猫は鳥を咬み殺そうとした）

人を除く「動物」が動作に意志のコントロールを働かせられるかは判断の分かれるところである。コントロールが働くと看做すならば、用語法としては、有生性 Animacy についての属性[±Animate]をたてるべきであるが、本稿では人を除く「動物」の意志の動作に対するコントロールについては判断できないという立場をとり、主体の属性については、「人であるかないか」という基準である[±Human]を用いる。

15) 主体が有情物であっても次のような動詞（(i)~(vi)の例中太字で強調したもの）では、意志のコントロールが働くとは考えられない。

(i) *Anh ấy định **biết** tin đó.（彼＋～つもりだ＋知る＋そのニュース）
(ii) *Anh ấy định **hiểu** vấn đề đó.（彼＋～つもりだ＋理解する＋その問題）
(iii) *Anh ấy định **yêu** Phương.（彼＋～つもりだ＋愛する＋（人名））
(iv) *Anh ấy định **thấy** máy bay.（彼＋～つもりだ＋見える＋飛行機）
(v) *Anh ấy định **đau** đầu.（彼＋～つもりだ＋痛む＋頭）
(vi) *Anh ấy định **sưng** tay.（彼＋～つもりだ＋腫れる＋手）

上の(i)~(iii)の動詞 biết「知る」、hiểu「理解する」、yêu「愛する」はある心理的な状態を表し、(iv)の thấy「見える」は知覚を、(v)の đau「痛む」は痛覚を、(vi)の sưng「腫れる」は身体の異常な変化を表す動詞であり、いずれも意志のコントロールとは関係ない不随意動詞である。これらの動詞の不随意動詞への分類については、峰岸(2007)、Minegishi(2011)も参照されたい。

16) 三上(2007)参照。

17) 主体の有情性と随意性について、一方には定まらない次の(i), (ii)のような例もある。xe「車」、tàu chở dầu「タンカー」の有情性は、文脈のない単独の 1 語としては[－Human]と看做すべきであるが、車は運転手なしでは走らず、タンカーは操縦士なしでは動かないことを考慮すれば、(i)と(ii)の例では[±Human]とすべきかもしれない。また、V1 の cán「轢く」、đâm「衝突する」の随意性については、運転手や操縦士の意志のコントロール

が働く場合もあることを考慮すれば[±Voluntary]とした方がよいかもしれない。

(i) Xe **cán chết** người.（車＋轢く＋死ぬ＋人：車が人を轢いた）
(ii) Tàu chở dầu **đâm chìm** tàu cá.（タンカー＋衝突する＋沈む＋漁船：タンカーが漁船に衝突して沈没させた）

随意性の判断に関わる命令の標識 đi との共起可能性については、cán chết と đâm chìm とで下の(iii), (iv)のように許容度についてインフォーマントの判断はやや異なるが、いずれも V1V2 連続としての cán chết, đâm chìm あるいは V1 単独の cán と đâm の随意性は[＋Voluntary]であると見てよいであろう。

(iii) a. ?**Cán chết** người đi.（人をひき殺せ）
b. ?**Cán** người **chết** đi.（人をひき殺せ）
(iv) a. **Đâm chìm** tàu cá đi.（漁船に衝突し沈没させろ）
b. **Đâm** tàu cá **chìm** đi.（漁船に衝突し沈没させろ）

また、動詞の基本的な意味としては随意動詞だが、文脈・状況によって不随意的用法を持つ次のような場合がある（(v)はインターネットのニュース記事からの例）。

(v) Trụ điện đang thi công **ngã đè chết** 1 công nhân, ...（工事中の電柱が倒れ作業員が 1 人圧死した）(tuoitre.vn/tin/chinh-tri-xa-hoi/20141217/tru-dien.../686607.html)

(v)の V1 の主語 trụ điện「電柱」は無情物[－Human]であり、動詞は V1「転ぶ」[－Voluntary]、V2「押さえつける」、V3「死ぬ」[－Voluntary]と連続している。V2 の đè「押さえつける」は、下の辞書的な意味と例文(v)からも随意動詞[＋Voluntary]と考えられる（(vi)は(v)と同様の不随意動詞的用法。(vi), (vii)のグロスは語ごと）。

đè の辞書的意味：ép lên trên bằng một vật nặng hoặc một lực mạnh（重い物や強い力で上から押さえつける）(ĐTĐTV)
例文：
(vi) Cây **đổ đè chết** người.（木＋倒れる＋押さえつける＋死ぬ＋人：木が倒れて人が圧死した）(ibid.)
(vii) lấy quyển sách **đè lên** tờ giấy（取る＋[類別詞]＋本＋押さえつける＋上がる＋[類別詞]＋紙：本を紙の上において押さえつける）(ibid.)

18) đang との共起については、三上(2016)を参照。

19) trong＋時間名詞は、到達(achievement)または達成(accomplishment)として「～以内に／で（V-する）」という意味に用いられることもあれば、継続動詞(durative verb)であることを表し「～間」（5 秒間、1 分間、3 時間、5 日間など）という意味で用いられることもある。到達か達成か（継続動詞で達成という特徴をもつこともあり得る）という判断は、文脈による。

20) đập vỡ とよく似たテストの結果を示す V1V2 連続に giẫm nát（踏む＋つぶれる）「踏みつぶす」がある。インフォーマントの判断では、Nam đang giẫm nát hoa.「ナムは花を踏みつぶしている」は適格な文である。これは、V1 の主体が幅のある時間の中で歩きながら花を踏み、その動作の進行の間につぶれていく花があることを意味する文である。一方 V1 と V2 の間に N2 が挟まれた V1N2V2 の*Nam đang đập hoa nát.は不適格であり、結果の意図が明示された V1N2choV2 の Nam đang đập hoa cho nát.「ナムは花をつぶそうとして踏んでいる」は適格である。これらの結果が生じる理由も đập vỡ の場合と同様に説明できる。

21) 注 19 でも述べたが、trong＋時間名詞との共起可能性からは、到達(achievement)の特徴を持つか達成(accomplishment)の特徴を持つか、あるいは、継続動詞(durative verb)であり、かつ accomplishment の特徴を持つか判断がつかない場合がある。それを確定するためには適切な文脈が必要である。ただ、動詞 phơi に関しては、判定テストの結果が示す[＋phơi trong 時間]は、achievement（「3 時間以内に干す」）や accomplishment（「3 時間で干す」）の特徴を示しているのではなく、継続動詞であることを表す[phơi 時間]（「3 時間干す」）と同様の意味であり、達成の特徴を示しているわけではない、と考えるのが妥当であろう。

22) 注 6 でも述べたように、このままでは許容度の落ちる文であるが、結果の意図を明示し đun nước cho sôi とすれば十分に許容できる文となる。

23) không phơi áo「服を干さなかった」のように V2 のない không V1N2 の方がより許容度の高い表現である。V1 の動作 phơi「干す」とその結果としての V2 の状態 khô は意味的に原因-結果の結びつきが強い V1V2 連続であり、「干さなかった」のだから「乾かなかった」は論理的な帰結として当然であり、V2 の khô は余分という解釈が可能かもしれない。

24) 注 7 でも述べたが、インフォーマントの判断では、V2 の sạch に程度副詞 lắm を後置させた lau bàn sạch lắm の方がより自然である。この sạch lắm は、V1 である lau の結果を示しているというよりも、話し手の V1 の動作の結果についての評価（「とてもきれいに拭いた」）を示していると考えた方がよさそうである。

25) インフォーマントの判断では、逆接の接続詞 mà を挟んで染めた色に焦点を当てた không nhuộm vải đỏ mà nhuộm vàng「布を赤く染めたのではなく黄色く染めた」とすれば、許容度の低い表現ではあるが、許容することはできる。

26) 注 6 及び注 22 を参照されたい。

27) これら 4 つの V1V2 のみならず、本稿で取り上げたすべての V1V2 において cho によっ

て結果の意図が明示されると適格な文となる。

28) V2 が N2 を修飾すると解釈し、「バラバラになった材木を切った」「乾いている服を干した」「赤い布を染めた」という意味ならば適格な文である。

29) V2 が sạch「清潔な」である場合の V1, V2 の組合せとしては、quét sạch「きれに掃く」rửa sạch「きれいに洗う」などがあるが、(i), (ii)の(a)(N1V1V2N2), (b)(N1không V1V2N2), (c)(N1V1N2V2), (d)(N1khôngV1N2V2)のように、その結果は一致しない。N1V1V2N2 と N1V1N2V2 に関しては、それぞれの文に程度副詞 lắm を後置させたほうが自然である。このことからも V2 (sạch)は結果を表すというよりも V1 の動作の結果に対する評価を表すと考えた方がよさそうである。

(i) a. ?Anh ấy **quét sạch** sàn nhà.（彼＋掃く＋清潔な＋家の床：彼は家の床をきれいに掃いた）

b. *Anh ấy không **quét sạch** sàn nhà.

c. ?Anh ấy **quét** sàn nhà **sạch**.（彼＋掃く＋家の床＋清潔な：彼は家の床をきれに掃いた）

d. *Anh ấy không **quét** sàn nhà **sạch**.

(ii) a. Anh ấy **rửa sạch** tay.（彼＋洗う＋清潔な＋手：彼は手をきれいに洗った）

b. Anh ấy không **rửa sạch** tay.（彼＋[否定辞]＋洗う＋清潔な＋手：彼は手をきれいに洗わなかった）

c. Anh ấy **rửa** tay **sạch**.（彼＋洗う＋手＋清潔な：彼は手をきれいに洗った）

d. Anh ấy không **rửa** tay **sạch**.（彼＋[否定辞]＋洗う＋手＋清潔な：彼は手をきれいに洗わなかった）

さらに、N1V1V2N2 の(ii a)と N1V1N2V2 の(ii c)に目的を表す句 để ăn cơm「食事をするために」を後置させると、次のように結果が分かれる。

(iii) a' *Anh ấy **rửa sạch** tay để ăn cơm.

c' Anh ấy **rửa** tay **sạch** để ăn cơm.（彼は食事をするために手をきれいに洗った）

このことを説明するには、rửa tay「手を洗う」という動作と ăn cơm「食事をする」という動作の意味的な結びつきを考慮する必要があろう。この 2 つの動作は意味的に強い結びつきをもつ。そのため、(iii c')では V2 である sạch が rửa tay「手を洗う」という動作を修飾し（その様態を示し）、rửa tay sạch「きれいに手を洗う」という句と để ăn cơm「食事をするため」という句が意味的に無理なく結びつき、適格な文となる。一方、(iii a')では、V1V2 連続である rửa sạch が複合動詞のように働き、rửa sạch tay で表される「手をきれいに洗う」という動作は、それだけでは、「食事をするため」という目的と直接結び

つかない。目的を表す標識 để によってその目的が明示されても、rửa sạch tay と ăn cơm は意味的な結びつきを確立できない、と解釈するのである。

30) 使役性(Causativity)の判定は、V1N2V2 において、V1 の動作が V2 の動作・状態変化を引き起こすと判断されるかどうかに関わる、と考えられるが、それだけでは判定が難しい場合もある。例えば（以下の文の意味は「はじめに」を参照）Nam xô Bình ngã.が適格な文であることから xô[＋Causative]と判断できるとして、*Anh ấy phơi áo khô.が不適格な文であることから phơi[－Causative]と判断来てよいか、Tân đập kính cửa sổ vỡ.が適格な文であることから、đập[＋Causative]と判断してよいかという問題がある。使役性について[＋Causative]であるとは、V1N2V2 において V1 が N2 の随意的動作 V2 を引き起こす場合に限る、あるいは V2 の動作（随意／不随意）に限り、状態変化は含まない、といった限定を設ける立場もあろうが、さらに議論が必要である。

31) 運動性(Kinesis)は、その動作や状態が動きを伴うか（動的か）、伴わないか（静的か）ということに関わるが、その判定のための有効な判定テストは容易に見つからない。例えば、đỏ「赤い」、sôi「沸く」は、その基本的な意味から đỏ[－Kinetic]、sôi[＋Kinetic]と考えられるが、ともに đang とも[trong 時間]とも共起する。その動詞に方向の付いた移動を表す移動動詞（ra「出る」、vào「入る」、 lên「上がる」、 xuống「下がる」など）を後置させ、状態変化を表す表現にすることが可能かどうか（可能ならばもともとは状態動詞という判定）というテストでも đỏ lên「赤くなる」、 sôi lên「沸騰する」ともに可能である。

参考文献

Aikhenvald, Alexandra Y. and R.M.W.Dixon (eds.) (2006) *Serial Verb Constructions: A Cross-Linguistic Typology*, Oxford: Oxford University Press.

Aikhenvald, Alexandra Y. (2006) Serial Verb Constructions in Typological Perspective. In Alexandra Y. Aikhenvald, and R.M.W.Dixon (eds.)(2006), 1-68.

Bisang, Walter (1991) Verb serialization, grammaticalization and attractor position in Chinese, Hmong, Vietnamese, Thai and Khmer. In Hansjakob Seiler and Waldfried Premper (eds)(1991), *Partizipation*, 509-562. Tübingen: Gunter Narr Verlag Tübingen.

Bisang, Walter (2009) Serial Verb Constructions. Language and Linguistics Compass 3/3 (2009) 792-814.

Enfield, N. J. (2008) Verb and Multi-Verb Constructions in Lao. In Anthony V. N. Diller, Jerold A. Edmondson and Yongxian Luo (eds.)(2008), *The Tai-Kadai Languages*, 83-183, London and New York: Routledge.

Matthews, Stephen (2006) On Serial Verb Constructions in Cantonese. In Alexandra Y. Aikhenvald,

and R.M.W.Dixon (eds.)(2006), 69-87.
三上直光 (2007)「ベトナム語の結果表現について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』38:169-189.
三上直光 (2011)「ベトナム語の「動詞＋主語」文に関する若干の考察」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』42:317-327.
三上直光 (2015)「ベトナム語動詞連続の意味的特徴について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』46:441-456.
三上直光 (2016)「ベトナム語動詞のアスペクト的意味—đang との共起関係から考える—」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』47:241-254.
峰岸真琴 (2007)「孤立語の他動性と随意性－タイ語を例に－」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨（編）『他動性の通言語学的研究』くろしお出版 205-216.
Minegishi, Makoto (2011) Voluntariness and Spontaneity in Thai. *Journal of the Southeast Asian Linguistic Society* 4.2:77-91.
Nguyễn Kim Thản (1999) *Động Từ trong Tiếng Việt*. Trung Tâm Khoa Học và Nhân Văn Quốc Gia, Viện Ngôn Ngữ Học, Hà Nội: Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội.
Vendler, Zeno (1967) *Linguistic Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.

辞書

Nguyễn Như Ý (chủ biên) (1999) *Đại Từ Điển Tiếng Việt*, Bộ Giáo Dục và Đào Tạo, Trung Tâm Ngôn Ngữ và Văn Hóa Việt Nam, TP.HCM: Nhà Xuất Bản Văn Hóa-Thông Tin.（略号 ĐTĐTV）

ベトナム語の動詞連続 —「付帯」表現を中心に—

清水政明

目次

0．はじめに
1．「付帯」表現の特徴と問題の所在
1.1．対象となる表現
1.2．問題の所在
2．VP1-VP2 の順序入れ替え可能性
3．主要部認定の可能性
3.1．đang の作用域
3.2．疑問文、連用修飾表現への言い換え
3.2.1．chuyện gì? 疑問文
3.2.2．như thế nào? 疑問文、một cách 構文
4．関連表現
5．おわりに

0．はじめに

三上(2015)は、2 つの動詞句から成るベトナム語の動詞連続([$_{VP1}$[V1(+NP1)]] [$_{VP2}$[V2(+NP2)]])が、その意味的特徴により、まず 2 つの事態が継起的に生起するか同時に生起するかで 2 分され、更にそれぞれが以下のように分類されると指摘した。

(1)　[継起]　継起、目的、方法、因果
　　[非継起]　方法、付帯、並列

本稿は、(1)の分類に見える「付帯」の類に焦点を当て、中でも **VP1 と VP2 の順序入れ替えが可能なケース**について考察する。なお、本稿における動詞連続の考察対象も基本的に三上（2015）に従い、「2 つの動詞句が表す動きや状態の主体が同一であり（従って V1、V2 とも動詞としての語彙的意味と自立性を有している)、そして動詞句と動詞句がポーズを置かずに発音されるもの」とする[1]。

1．「付帯」表現の特徴と問題の所在

1.1．対象となる表現

三上（2009, 2015）に指摘された「付帯」の特徴をまとめると以下のようになる。

(2)　a. VP2 の動作に付随する事態を VP1 が表す。

b. VP2 の成立時に、VP1 の動きや状態が持続しているという時間的な重なりがある。
c. VP1 の持続的意味を担う動詞は、変化の結果維持を表す動詞（例：姿勢変化、着脱を表す動詞）、継続動作を表す動詞、状態を表す動詞などである。

以上の諸特徴に当てはまる例として、三上（2015）には以下のような例が挙げられている[2]。

(3)
a. khóc xin lỗi Thu
泣く 謝る トゥー 「泣いてトゥーに謝る」
b. {ngồi/đứng/nằm} đọc sách
座る/立つ/寝る 読む 本） 「{座って/立って/寝て}本を読む」
c. dựa tường đọc sách
もたれる 壁 読む 本 「壁にもたれて本を読む」
d. ở nhà đọc sách
いる 家 読む 本 「家にいて本を読む」
e. mặc áo dài múa
着る アオザイ 踊る 「アオザイを着て踊る」
f. đeo kính đọc báo
身に付ける メガネ 読む 本 「メガネをかけて本を読む」
g. đội nón cắt lúa
かぶる 菅笠 刈る 稲 「菅笠をかぶって稲刈りをする」
h. vác hành lý lên cầu thang
担ぐ 荷物 上がる 階段 「荷物を担いで階段を上がる」
i. mang dù ra khỏi nhà
携帯する 傘 出る 離れる 家 「傘を持って家を出る」
j. đưa con đi công viên
連れる 子 行く 公園 「子を連れて公園に行く」
k. {cười/khóc} trả lời
{笑う/泣く} 返事する 「{笑って/泣いて}返事する」
l. im lặng gật đầu
黙る うなずく 「黙ってうなずく」
m. nhắm mắt nghe nhạc
閉じる 目 聴く 音楽 「目を閉じて音楽を聴く」

以上の例の内、d.及び l.の例に関しては、VP1 と VP2 の順序を入れ替えても文として成立可能である。

(4)
d. đọc sách ở nhà 「家で本を読む」
l. gật đầu im lặng 「静かにうなずく」

それを可能にする要因には、種々可能性が考えられるが、まず(2)b.に示されたように、VP1 の

事象と VP2 の事象に時間的重なりがあることが大前提となる。したがって、動詞連続の分類(1)の中で、事象の起こるタイミングに先後のある「継起、目的、因果」の類にはありえない。一方「方法」の類は、物理的タイミングは同時であっても、VP2 の実現には VP1 が前提となることから、VP1 と VP2 の間に論理的な継起関係があるとも言える。したがって、VP1 と VP2 の順序入れ替えは基本的に不可である。また「並列」の場合、理論的には VP1 と VP2 の入れ替え可能性が最も高いと思われるが、慣習的に VP1 と VP2 の順序が固定化している場合がしばしばである。cao gầy「背が高くてやせている」(*gầy cao)、thấp béo「背が低くて太っている」(*béo thấp) 等。したがって、VP1 と VP2 の順序入れ替えが可能な例は、基本的に「並列」、「付帯」の類の中の一部に限られることとなる。

1.2. 問題の所在

VP1 と VP2 の順序入れ替えが可能な場合、そもそも VP1-VP2 と VP2-VP1 の間には差異があるのか、あるとすればどのような差異か。まず考えられることとして、主要部先行型のベトナム語においては、前者の場合 VP1、後者の場合 VP2 が主要部となる主従関係が想定される。一方、順序入れ替えが可能である事実そのものが、VP1 と VP2 の等位性を示唆する可能性もある。以下では先ず、それぞれの表現の主要部を確定することの可能性について議論し、次いで、当該の VP1 と意味・形式両面において強い関連性を有する一群の動詞が、動詞連続内でいかに振る舞うかを分析し、意味的、形式的関連性を有しながらも異なるグループを成す VP1 の間の差異について考察する。

2. VP1-VP2 の順序入れ替え可能性

まず、「付帯」の意味を表す(3)の諸例を例に、順序入れ替えの可能性について VP1 の動詞の特徴を基準に考察する。(3)の諸例の中で、順序入れ替えができない VP1 の動詞（句）を改めて列挙すると、cười/khóc「笑う/泣く」、ngồi/đứng/nằm「座る/立つ/寝る」、dựa tường「壁にもたれる」、mặc áo dài「アオザイを着る」、đeo kính「メガネをかける」、đội nón「菅笠をかぶる」、vác hành lý「荷物を担ぐ」、mang dù「傘を持つ」, đưa con「子を連れる」, nhắm mắt「目を閉じる」となり、入れ替え可能な VP1 の動詞（句）は、ở nhà「家にいる」、im lặng「黙る」である。前者の動詞はすべてが動態動詞であると同時に、(2)c.に示された変化の結果維持を表す動詞（例：姿勢変化、着脱を表す動詞）及び継続動作を表す動詞である。一方後者は数が限られるが、いずれも静態動詞であることがわかる[3]。

以上を主な基準として、VP1-VP2 の順序入れ替えが可能な動詞連続の例を収集する。本稿では、Nguyễn Nhật Ánh の小説 *Tôi thấy hoa vàng trên cỏ xanh.*「青い草の上に黄色い花を見つけた」（Nhà xuất bản Trẻ, 2016）の中から、まず「付帯」表現の例を収集し、その中から分析対象となる例を一部前後の表現を簡略化したり語句を入れ替えたりしつつ収集する。

上記の基準に従い、「付帯」諸例の中で、VP1 が静態動詞である典型例を以下に示す。

(5) Tôi hồi hộp nhìn chú Đàn.
私 ドキドキする 見る ダンおじさん
「私はドキドキしながらダンおじさんを見た」

(5)の場合、VP2 の動詞がどのような主語の心理状態で遂行されるかを VP1 が表していることとなるが、このような場合 VP1 と VP2 の順序を入れ替えた(6)が可能となる。

(6) Tôi nhìn chú Đàn hồi hộp.
私 見る ダンおじさん ドキドキする
「私はドキドキしながらダンおじさんを見た」

また、(7)の例は、VP1 が動作を遂行する際の主語の心理状態や態度を表すのではなく、動作を遂行する際の様態をより視覚的に表現する例である。この場合にも VP1 と VP2 の順序入れ替えが可能である。

(7) Hai cha con cắm cúi gặt.
2 父 子 黙々とする 刈る
「二人の親子は黙々と稲刈りをした」

(8) Hai cha con gặt cắm cúi.
2 父 子 刈る 黙々とする
「二人の親子は黙々と稲刈りをした」

以上のように、VP1 と VP2 の順序入れ替えが可能な典型例においては、VP2 の動作を主語が遂行する際の心理状態、態度、及び視覚的様態を、静態動詞 VP1 が表現している例と言えよう。そこで、以下では VP1-VP2 及び VP2-VP1 それぞれの表現における主要部の認定が可能か否かの問題について考察する。

3．主要部認定の可能性

VP1 と VP2 の順序入れ替えが可能ということは、VP1 と VP2 の間に主従関係がなく、あくまで対等な関係である可能性がある。一方、主要部先行型のベトナム語においては、先行する要素が主要部である可能性も高い。そこで、いずれの要素が主要部であれるかの検証を試みる。従来動詞連続の主要部認定には様々な要素との共起可能性とその意味的差異がテストされてきたが、本稿では特に、動きや状態が「最中」であることを表すアスペクト形式 đang との共起関係、及び対応する疑問文や連用修飾表現への言い換え可能性を通じて、統語的・意味的両側面から VP1 と VP2 の関係について考察する。

3.1. đang の作用域

三上（2015）では、動詞連続を成す個々の要素の様々な意味を抽出する際に、đang を付加し、その作用域が VP1 と VP2 に及ぶ場合、「方法」あるいは「付帯」の意味であることが指摘されている。例えば、(9)は VP1 を mê（夢中になる）、VP2 を học tiếng Nhật（日本語を勉強する）とする広義の動詞連続の一例であるが、付加された đang の意味は明らかに VP1 のみに作用していることがわかる。

(9) Nó đang mê học tiếng Nhật.
私 <最中> 夢中だ 勉強する 日本語
「あの子は日本語の勉強に夢中だ」

それでは、上に見た VP1-VP2 の序列を成す諸例において、共起した đang の作用域について以下に見る。

(10) Tôi đang hồi hộp nhìn chú Đàn.
私 <最中> ドキドキする 見る ダンおじさん
「私はドキドキしながらダンおじさんを見ていた」

(11) Hai cha con đang cắm cúi gặt.
2 父 子 <最中> 黙々とする 刈る
「二人の親子は黙々と稲刈りをしていた。」

(10)と(11)はそれぞれ(5)と(7)に「最中」を表すアスペクト形式 đang を付加したものであるが、これらの文における đang の作用域は、いずれも VP1 と VP2 の両方に及んでいることが明らかである。これは VP1-VP2 の序列においては、それぞれの動詞句が統語的に対等の関係にある可能性を示唆する例と言える。一方、đang を残したまま VP1 と VP2 の順序を入れ替えた以下の例をみる。

(12) Tôi đang nhìn chú Đàn hồi hộp.
私 <最中> 見る ダンおじさん ドキドキする
「私はドキドキしながらダンおじさんを見ていた」

(13) Hai cha con đang gặt cắm cúi.
2 父 子 <最中> 刈る 黙々とする
「二人の親子は黙々と稲刈りをしていた。」

これら VP2-VP1 の序列においては、đang の作用域が VP2 に限定される。つまり、VP2-VP1 の序列においては、統語的な主要部が VP2 に限定される可能性が高い。

3.2. 疑問文、連用修飾表現への言い換え

次いで、意味的側面から主要部を探るべく、VP1、VP2 それぞれの内容を問う疑問文への言い換え可能性、つまり、VP1-VP2の場合、VP1＋chuy ệngì「こと＋何」、VP2-VP1の場合、VP2＋như thế nào「どのように」への言い換え、及び連用修飾表現への言い換え可能性について見る。

3.2.1. chuyện gì? 疑問文

例えば、(14)の例は(5)の VP2 の内容（nhìn chú Đàn「ダンおじさんを見る」）を問う疑問文である。ここでは、あえて chuy ệngì「何のこと」という名詞句で問うてみる。これを làm gì「何をする」に置き換えると、全ての例において疑問文への言い換えが可能であるが、敢えて名詞句で問うことにより、「V＋O」の形で VP1 の主要部性を浮き立たせることが可能となるからである。その言い換えが可能であれば、VP1-VP2 における VP1 も主要部としての意味的特徴を有する可能性が示唆される。

(14) Mày hồi hộp chuy ện gì ?
お前 ドキドキする こと 何
「お前は何にドキドキしていたの」

一方、(7)のような VP2 の動作を遂行する際の様子を視覚的に表現する VP1 の例は、làm gì? 疑問文への言い換えが可能であっても、chuy ệngì? 疑問文への言い換えは不可能である。

(15) * Hai cha con cắm cúi chuyện gì ?
2 父 子 黙々とする こと 何
「二人の親子は何を黙々としたの」

3.2.2. như thế nào? 疑問文、một cách 構文

次いで、VP2-VP1 の序列を有する(6)と(8)にそれぞれ対応する(16)と(17)の疑問文を見る。ここで想定される VP1 と VP2 の関係は、VP2 に対して、VP1 が連用修飾要素として機能する場合である。いずれの場合も(6)と(8)を答えとする疑問文として問題なく成立する。

(16) Mày nhìn chú Đàn như thế nào?
お前 見る ダンおじさん どのように
「お前はどのようにおじさんを見たの」

(17) Hai cha con gặt như thế nào?
2 父 子 刈る どのように
「二人の親子はどのように稲刈りをしたの」

一方、ベトナム語には静態動詞に một cách「１＋方法」を前置し、連用修飾表現を作る構文が存在する。そこで上記の例に対し、下記(18)の要領で một cách 構文への言い換え、つまり VP1 を VP2 の連用修飾要素にすることが可能かどうかを見る。まずは、(5)の類の例について見る。

(18) Tôi nhìn chú Đàn một cách hồi hộp.
私 見る ダンおじさん ドキドキする
「私はドキドキしてダンおじさんを見た。」

以下に VP1-VP2 の順序入れ替えが可能で、且つ một cách 構文への言い換えが可能な例を列挙する。

(19) a. chậm rãi giải thích
じっくり 説明する 「じっくりと説明する」
⇒ giải thích chậm rãi = giải thích một cách chậm rãi

b. vội vàng giải thích
急ぐ 説明する 「急いで説明する」
⇒ giải thích vội vàng = giải thích một cách vội vàng

c. thận trọng tìm kiếm
慎重な 探す 「慎重に探す」
⇒ tìm kiếm thận trọng = tìm kiếm một cách thận trọng

d. ngạc nhiên nhìn tôi
驚く 見る 私 「驚いて私を見る」
⇒ nhìn tôi ngạc nhiên = nhìn tôi một cách ngạc nhiên

e. lẩn thẩn nghĩ
ぼけっとする 考える 「ぼけっと考える」
⇒ nghĩ lẩn thẩn = nghĩ một cách lẩn thẩn

f. hăng hái tiến lên
せっせと 前進する 「せっせと前進する」
⇒ tiến lên hang hái = tiến lên một cách hăng hái

g. hứng thú biểu diễn
やる気満々の 演奏する 「やる気満々で演奏する」
⇒ biểu diễn hứng thú = biểu diễn một cách hứng thú

h. mải mê kể
夢中になる 話す 「夢中になって話す」

i. sung sướng　nhìn　nó　bay lên
嬉しい　見る　それ　飛び立つ「うきうきしながらそれが飛び立つのを
⇒ nhìn nó bay lên　sung sướng　=　nhìn nó bay lên　một cách　suong sướng　見る」

j. say sưa　đọc　sách
夢中になる　読む　本　「夢中になって本を読む」
⇒ đọc　sách　say sưa　=　đọc　sách　một cách　say sưa

k. tò mò　quan sát
興味津々　観察する　「興味津々観察する」
⇒ quan sát　tò mò　=　quan sát　một cách　tò mò

l. hớn hở　nhảy
うきうきする　跳びはねる　「うきうきしながら跳びはねる」
⇒ nhảy　hớn hở　=　nhảy　một cách　hớn hở

m. bẽn lẽn　kể.
もじもじする　話す　「もじもじしながら話す」
⇒ kể　bẽn lẽn　=　kể　một cách　bẽn lẽn

n. nắn nót　viết　hai　câu　thơ
丁寧な　書く　2　文　詩　「丁寧に2行の詩を書く」
⇒ viết hai câu thơ　nắn nót　=　viết hai câu thơ　một cách　nắn nót

o. ấp úng　hỏi　lại
しどろもどろの　問う　来る　「しどろもどろになりながら問い直す」
⇒ hỏi　lại　ấp úng　=　hỏi　lại　một cách　ấp úng

p. rụt rè　nhìn　lá thư
おずおずする　見る　手紙　「おずおずしながら手紙を見る」
⇒ nhìn　lá thư　rụt rè　=　nhìn lá thư　một cách　rụt rè

q. vẩn vơ　nghĩ
ぼんやりした　考える　「ぼんやりと考える」
⇒ nghĩ　vẩn vơ　=　nghĩ　một cách　vẩn vơ

r. sợ hãi　ngó　nhau
怯える　見る　互い　「怯えながら互いを見る」
⇒ ngó　nhau　sợ hãi　=　ngó　một cách　sợ hãi

s. ấm ức　đáp
怒りを抑える　答える　「怒りを抑えながら答える」
⇒ đáp　ấm ức　=　đáp　một cách　ấm ức

t. thích thú　　nghe
　興味を抱く　聴く　　「興味深く聴く」…
⇒ nghe　　thích thú　=　nghe　　một cách　　thích thú

一方、(7)の類の様に、VP1-VP2 の順序入れ替えは可能であるが、một cách 構文への言い換えが不可能な場合がある。

(20)　Hai　cha　con　cắm cúi　gặt.
　2　父　子　黙々とする　刈る
「二人の親子は黙々と稲刈りをしていた。」

(21)　Hai　cha　con　gặt　cắm cúi.
　2　父　子　刈る　黙々とする
「二人の親子は黙々と稲刈りをしていた。」

(22)　* Hai　cha　con　gặt　một cách　cắm cúi.
　2　父　子　刈る　黙々とする
「二人の親子は黙々と稲刈りをしていた。」

これら một cách 構文への言い換え不可の場合は、(7)の類と同様、より視覚的な動作や状況を表す場合である。以下その例を列挙する。

(23)　a. lui cui　gặt
　黙々とする　刈る　　「黙々と刈る」
⇒ gặt　　lui cui　/　*gặt　　một cách　　lui cui

b. xúm xít　xem
　ひしめき合う　見る　　「ひしめき合って見る」
⇒ xem　　xúm xít　/　*xem　　một cách　　lui cui

c. chập chờn　bay　lẫn　với　ma trơi
　見え隠れする　飛ぶ　混じる　と　火の玉　「火の玉と一緒に見え隠れしながら飛ぶ」
⇒ bay lẫn với ma tơi　　chập chờn　/　*bay lẫn với ma tơi　　một cách　　chập chờn

d. len lén　đi
　そっと　歩く　　「そっと歩く」
⇒ đi　　len lén　/　*đi　　một cách　　len lén

e. sè sẹ　phủi　chân
　そっと　埃を払う　足　　「そっと足で埃を払う」
⇒ phủi　chân　sè sẹ　/　*phủi　chân　một cách　sè sẹ

f. rón rén　　chui　　vô
　そっと　　潜る　　入る　　「そっと潜り込む」
⇒ chui vô　　rón rén　/　　*chui vô　　một cách　　rón rén

g. hầm hầm　　xô　　cửa
　カンカンになる　強く押す 戸　　「カンカンに怒りながら戸を押し開ける」
⇒ xô cửa　　hầm hầm　/　　*xô cửa　　một cách　　hầm hầm

h. lấm lét　　liếc
　恐る恐る　　ちらっと見る　　「恐る恐るちらっと見る」
⇒ liếc　　lấm lét　/　　*liếc　　một cách　　lấm lét

i. thút thít　　khóc
　しくしく　　泣く　　「しくしく泣く」
⇒ khóc　　thút thít　/　　*khóc　　một cách　　thút thít

j. bất thần　　dội　　vào　　tai
　突然　　こだまする　入る　　耳　「突然耳にこだまする」...
⇒ dội vào tai　　bất thần　/　　*dội vào tai　　một cách　　bất thần

ここで重要なことは、một cách 構文への言い換えが不可の場合のほとんどが、chuyện gì?疑問文への言い換えも不可である点である。

chuyện gì?疑問文への言い換え可能性は、VP1 の表す状態がどの程度視覚的に明確で具体的であるかに関係すると考えられる。つまり、言い換え可能な場合は、その表す状態が視覚的ではなく、「何のこと」についてそのような状態なのかを補語として取る可能性があるのに対し、言い換え不可の場合は、một cách 構文への言い換え不可の場合と同様、その表す状態が視覚的にはっきりしており、敢えてそれを問う必要がない場合と考えられる。

以上より、一見主要部性に差異があるように見える(5)と(7)の諸例であるが、その差異は個々の語彙の持つ意味的特徴からくる差異に過ぎないと言えるであろう。

因みに、chuyện gì?疑問文への言い換えが可能な場合、それに対する応答文は、例えば、例文(23)の場合、以下のような答えが可能となる。

(24)　Tôi　　hồi hộp　　chuyện　nhìn　　chú Đàn.
　　私　　ドキドキする　　こと　　見る　　ダンおじさん
　　「私はダンおじさんを見ることにドキドキしている。」

この文は、形式上 V1 と VP2 の間に名詞 chuyện（こと）を挿入した形となっており、やはり「V+O」の形で主要部としての特徴を明示する例である。

また、chậm rãi（じっくり）、vội vàng（急ぐ）、thận trọng（慎重な）、ngạc nhiên（驚く）、hăng hái（せっせこ）、hứng thú（やる気満々の）、mải mê（夢中になる）、sung sướng（嬉しい）、say sưa（夢中になる）、hớn hở（うきうきする）、thích thú（興味を抱く）に関しては、直接動詞句 VP2 に前置するほか、前置詞 với（～と）を介することも可能である。さらに、tò mò（興味深々）、ấm ức（しどろもどろの）に関しては、直接動詞に前置する他、2 つの前置詞 với（～と）あるいは về（～について）を介することも可能である。

以上より、意味的側面からは、VP1-VP2 の場合、VP1 のみが主要部となりうること、VP2-VP1 の場合、予測通り VP2 が主要部となりうる点を指摘する。

4．関連表現

ベトナム語を含む複数の言語の動詞連続を包括的に取り上げた Bisang (1991)は、広義の動詞連続の 3 分類、1．consecutivization（連接）、2．modifying verb serialization（修飾的動詞連続）、3．subordinating verb serialization（従属的動詞連続）を示した上で、ベトナム語の従属的動詞連続の一つとして、以下の例を挙げている。

(25) Anh ấy vội về nhà.
彼 急ぐ 帰る 家
「彼は急いで家に帰った。」

つまり、VP2（về nhà「家に帰る」）は VP1 の動詞（vội「急ぐ」）の目的語（object）と解釈され、muốn（欲する）、cố gắng（頑張る）等と同様に、従属的動詞連続の VP1 に相当する要素と考えられている。

ところで、上記(19)b.として vội vàng「急ぐ」が見られる。この形式は(25)に見える vội を基礎とした畳語（reduplication）であり、いずれも動詞連続の第一要素として生起した例ということになる。改めて、以下の 2 文を見たい。

(26) a. Tôi vội vàng viết bài.
私 急ぐ 書く 文章
「私は急いで文章を書く。」

b. Tôi vội viết bài.
私 急ぐ 書く 文章
「私は急いで文章を書く。」

これら 2 文はいずれも VP1-VP2 の順序入れ替えが可能であり、尚且つ(24)と同様 VP1 + chuyện + VP2 への言い換えも可能である。

(27) a. Tôi viết bài vội vàng.

私　書く　文章　急ぐ
「私は急いで文章を書く。」

b. Tôi　viết　bài　vội.
私　書く　文章　急ぐ
「私は急いで文章を書く。」

(28) a. Tôi　vội vàng　chuyện　viết　bài.
私　急ぐ　こと　書く　文章
「私は文章を書くことを急ぐ。」

b. Tôi　vội　chuyện　viết　bài.
私　急ぐ　こと　書く　文章
「私は文章を書くことを急ぐ。」

一見、何ら差異のないように見える 2 文であるが、3.1 と同様 đang の作用域を見ると、それらの間の差異が明らかとなる。

(29) a. Tôi　đang　vội vàng　viết　bài.
私　<進行>　急ぐ　書く　文章
「私は急いで文章を書いている。」

b. Tôi　đang　vội　viết　bài.
私　<進行>　急ぐ　書く　文章
「私は文章を書くことを急いでいる。」

(29)の例の場合、a.は確かに đang の作用域は VP1 と VP2 両方に及んでいるが、b.においては明らかに VP1 のみである。つまり a.の例は「付帯」を表す動詞連続であるが、b.は Bisang（1991）の指摘する通り、VP2（viết bài「文章を書く」）が VP1（vội「急ぐ」）の目的語であり、そのために、đang の作用域が VP1 のみにしか及んでいないと考えられる。

以下(30)に、第 3 節で紹介した VP1 としての各種静態動詞の中で[4]、対応する一音節語が存在するものを列挙する。

(30) a. vội vàng　―　vội
急ぐ　急ぐ
b. mải mê　―　mê
夢中になる　夢中になる
c. nôn nao　―　nôn

焦がれる		焦がれる
d. thích thú	—	thích
興味を抱く		好む
e. sợ hãi	—	sợ
怯える		恐れる
f. lo lắng	—	lo
心配する		気に掛ける
g. mải mê	—	mải
夢中になる		専念する
h. len lén	—	lén
そっと		そっと

但し、以上の各語が動詞連続の VP1 となる時、a. vội（急ぐ）と h. lén（そっと）のみが、VP2 との順序入れ替えが可能で、それ以外はすべて入れ替えが不可である点を指摘しておく。そこで、3.1 の方法で đang の作用域を見ると、(31)の【　】内の通りとなる。

(31) b. Chú đang mải mê kể. 【đang の作用域: VP1, VP2】
おじさん <進行> 夢中になる 話す
「おじさんは夢中になって話している。」
Nó đang mê đọc sách. 【VP1】
あいつ <進行> 夢中になる 読む 本
「あいつは読書に夢中になっている。」

c. Ông đang nôn nao chờ đợi. 【VP1, VP2】
お爺さん <進行> 焦がれる 待つ
「お爺さんは待ち焦がれている」
Nó đang nôn về. 【VP1】
あいつ <進行> 焦がれる 帰る
「あいつは帰りたがっている。」

d. Nó đang thích thú nghe. 【VP1, VP2】
あいつ <進行> 興味を抱く 聴く
「あいつは興味深そうに聞いている。」
Nó đang thích nghe nhạc. 【VP1】
あいつ <進行> 好む 聴く 音楽

「あいつは音楽にはまっている。」

e. Hai đứa đang sợ hãi ngó nhau. 【VP1, VP2】
2 子 <進行> 怯える 見つめる 互い
「二人は怯えながら見つめあっている。」
Hai đứa đang sợ gặp quái vật. 【VP1】
2 子 <進行> 恐れる 会う 怪物
「2 人は怪物に出くわすのを恐れている。」

f. Nó đang lo lắng theo dõi tình hình. 【VP1, VP2】
あいつ <進行> 心配する フォローする 状況
「あいつは心配そうに状況を見ている。」
Nó đang lo làm ăn. 【VP1】
あいつ <進行> 気にかける 生計を立てる
「あいつは生活のことを気にかけている。」

g. Chú đang mải mê kể. 【VP1, VP2】
おじさん <進行> 夢中になる 話す
「おじさんは夢中になって話している。」
Nó đang mải làm ăn. 【VP1, VP2】
あいつ <進行> 夢中になる 生計を立てる
「あいつは一生懸命生活している。」

h. Nó đang len lén đi. 【VP1, VP2】
あいつ <進行> そっと 歩く
「あいつはそろそろと歩いている。」
Nó đang lén mở thư ra. 【VP1, VP2】
あいつ <進行> そっと 開く 手紙 出る
「あいつはそっと手紙を開けている。」

1 音節語の場合 đang の意味が VP1 にのみ及ぶものが主流であるが（a, b, c, d, e, f)、VP2 にも及ぶものがあることがわかる（g, h)。VP1 のみに及ぶ場合は、上述の通り VP1-VP2 が「V+O」の関係となり、したがって VP1 が主要部と認定できる可能性が高い。一方 VP2 にまでその作用域が及ぶ場合には、1 音節語であっても「付帯」の意味を維持していることになる。

また、đang の作用域が VP1 のみに及ぶ場合、(32)のような chuyện gì?疑問文への言い換えや、更には、(33)のように VP2 の主題化が可能であることから、それが統語的にも意味的にも主要

部であることを示唆している。

(32) Mày vội chuyện gì ?
お前 急ぐ こと 何
「お前は何を急いでいるんだ。」

(33) Viết bài thì nó đang vội.
書く 文章 <主題> あいつ <進行> 急ぐ
「文章を書くことは、あいつは急いでいる。」

ただし vội「急ぐ」に関しては、(31)の 1 音節語で đang の作用域が VP1 のみに及ぶ例の内、唯一 VP1- VP2 の順序入れ替えが可能であり、「付帯」的意味も兼ね備えている可能性がある。

以上、動詞連続の中で、「付帯」の意味を持つ例の中でも、VP1 と VP2 の順序入れ替えが可能なものに特徴的な 2 音節語の特徴を分析し、それが reduplicate された語彙あるいは 1 音節語同士の複合語である場合、その基礎となる 1 音節語の特徴も合わせて分析した。その結果、1 音節語が VP1- VP2の VP1 となる場合には、VP1 と VP2 の間に主要部性に関し明らかな差異がある場合が主である点を指摘した。以上をまとめたものが(34)である。

(34)

VP1 (静態動詞)		*VP1-VP2*	*VP2-VP1*
VP1 (2 音節)	đang の作用域	VP1- VP2	VP2
	意味的主要部	VP1 / (VP1- VP2)	VP2
VP1 (1 音節)	đang の作用域	VP1 / (VP1- VP2)	
	意味的主要部	VP1 / (VP1- VP2)	

(VP1-VP2) : 一部の例で主要部が VP1, VP2 のいずれかに確定できないことを示す。

5．おわりに

本稿では、三上（2015）によるベトナム語動詞連続の意味分類のうち「付帯」表現を取り上げ、特に VP1 と VP2 の順序入れ替えが可能な諸例について考察した。まず当該諸例の VP1 は静態動詞であり、VP2 の動作を主語が遂行する際の心理状態、態度、及び視覚的様態を表現していることを示し、当該表現の主要部認定の可能性について考察した。

一方、「付帯」表現の VP1 として生起する静態動詞は、音韻的特徴として通常 2 音節からなる語であるが、それが reduplication あるいは 1 音節語をベースとする複合語の場合、その元となる 1 音節語が、動詞連続の中で 2 音節語とは異なる振る舞いをすることが観察された。つまり 2 音節語の場合、VP1- VP2 の序列において、いずれが統語的主要部かを決めることが難しく、

等位関係にある可能性が高いのに対し、1 音節語の場合、明らかに VP1 が主要部と認定可能である。この差異を生み出しているのは、形態的に関係のある 2 種の静態動詞の差に起因するものであるが（(30)を参照）、1 音節語は後続する動詞を補語とする傾向が強く、2 音節語の場合は後続する動詞と等位関係を成す傾向が強いということにある。そのような差異を生み出す静態動詞のペアーの意味的差異については稿を改めて考察するとし、ここでは本稿で新たに見いだされたその現象を指摘するにとどめる。

参考文献

Bisang, W., 1991, Verb serialization, grammaticalization and attractor positions in Chinese, Hmong, Vietnamese, Thai and Khmer, *Partizipation: das sprachliche Erfassen von Sachverhalten*, Tübingen: Gunter Narr, pp.509–562.

三上直光（2009）「ベトナム語動詞連続の一側面―日本語テ形接続から見る―」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 40 号、pp.259-274.

三上直光（2015）「ベトナム語動詞連続の意味的特徴について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 46 号、pp.441-456.

三上直光（2016）「ベトナム語動詞のアスペクト的意味―đang との共起関係から考える―」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 47 号、pp.241-254.

峰岸真琴（2006）「形態論と統語論」『言語基礎論の構築に向けて』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp.109-128.

[1] 但し、括弧内の「語彙的意味と自立性を有している」に関しては、扱う形式の語彙的意味により、自立性に関して濃淡の差異がありうるので、場合によっては自立性の低い形式も対象とすることを断っておく。

[2] 本稿作成に際しベトナム語母語話者としてご協力頂いたコンサルタント（27 歳、ホーチミン市出身、女性）によると、そこに挙げられた nắm tay Mai nhìn Mai（握る＋手＋マイ・見る＋マイ）「マイの手を握ってマイを見る」は、VP1 と VP2 の間に、書く際にはコンマ（,）、あるいは rồi（それから）を入れた方が自然とのことで、2 つの動詞句間の関係が薄い可能性がある。また、say rượu lái xe（酔う＋酒・運転する＋車）「酔っ払い運転する」は表現自体容認できないとのことなので、本稿ではひとまずこれら 2 例を対象からは除くこととする。

[3] 本稿では、三上（2016）に従い、ベトナム語の動詞が「動態動詞／静態動詞」に 2 分される

ものと考える。

[4] (30)c. nôn nao は VP1-VP2 の順序入れ替えができないので、第 3 節では取り上げていないが、本節ではそれらも含めて考察対象とする。chậm rãi（ゆっくり）に対し 1 音節語 chậm（ゆっくり）があるが、後者は「付帯」表現の動詞連続の中で、VP1 となることがないので対象外とする。

クメール語の動詞句の連続について

上田 広美　岡田 知子

はじめに
１　研究方法
　１．１　動詞
　１．２　動詞句の連続と接続語
　１．３　動作の主体と対象
　１．４　動詞句の連続が表す出来事の区切り
　１．５　資料
２　先行研究
　２．１　動詞句の連続の分類と動詞の配列順
　２．２　動作の主体を共有しない連続
３　動詞句の連続の分類
　３．１　継起的に生起する事象を表す連続（目的）
　　３．１．１　動作の主体と対象を共有する連続
　　３．１．２　動作の主体のみ共有する連続
　　３．１．３　動作の主体も対象も共有しない連続
　３．２　継起的に生起する事象を表す連続（結果）
　　３．２．１　動作の主体と対象を共有する連続
　　３．２．２　動作の主体のみ共有する連続
　　３．２．３　動作の主体も対象も共有しない連続
　３．３　非継起的に生起する事象を表す連続（様態）
　３．４　非継起的に生起する事象を表す連続（並列）
４　動詞句の連続の条件
　４．１　修飾語としての[V2]
　４．２　名詞句の介在
　４．３　[V2]の表す動作の主体
おわりに
参考文献
注

はじめに

クメール語[1]では、複数の動詞句が、動詞間の関係を明示する標識を介在させることなく配列される文が頻出する。先行研究中では、おおむね、文脈は考慮せず、具体的な意味をもつ動詞２語の連続[V1+V2]に限定して、どのような種類の動詞がどのような語順で配列されるか、否定辞が前項動詞[V1]と後項動詞[V2]のいずれに付加されるか、あるいは、前項動詞[V1]と後項動詞[V2]が動作の主体や対象を共有するか否かによって、分類している[2]。

しかし、実際の言語使用においては、２語の動詞が直接連続するとは限らず、動詞の間に否定辞や補語となる名詞（句）が介在することがある。さらに、同じ動詞が連続していても、前後の文脈を考慮しない限り動詞の間の意味的な関係が理解できないこともある。

[V1+V2]の連続に限定せずに収集した資料の文脈中で動詞句の連続がどのような特徴をもつかを検討すると、以下の３点の問題が生じる。まず、[V1]と[V2]が補語を共有していても、２つの動詞の間に補語である名詞（句）が介在できる場合とできない場合がある。次に、同じカテゴリーの動作を表す動詞が[V1]の位置にある場合に、語順の入れ替えが許される場合と許されない場合がある。さらに、他者の行動を促すような動作を表す動詞が[V1]の位置にある場合にも、標識として使役を表す動詞が必要となる場合とならない場合があり、[V2]が表す動作の主体が形式的な手掛かりからのみでは特定しがたいことがある。以下に具体的な例をあげて述べる。

まず、動詞が直接連続し補語が続く[V1+V2+N]と、動詞の間に補語である名詞が介在する[V1+N+V2]とを比べる。[V1]と[V2]が補語を共有していても、補語の位置は自由ではなく、以下の例（1, 2）は、それぞれ、[V1+V2+N]か[V1+N+V2]かいずれかの形でしか表せない。

(1a)	kat	ceɲcram	bɔnlae	[V1+V2+N]
	切る	刻む	野菜	
	＜野菜をみじん切りにする＞			
(1b)*	kat	bɔnlae	ceɲcram	
	切る	野菜	刻む	
(2a)*	kat	pɛ̀ək	ʔaav	
	切る	着る	服	
(2b)	kat	ʔaav	pɛ̀ək	[V1+N+V2]
	切る	服	着る	
	＜着るために服を仕立てる＞			

次に、「立つ」、「座る」という身体動作を表す同じカテゴリーの動詞が[V1]の位置にある場合に、語順の入れ替えが許される場合と許されない場合の例をあげる。例（3a, 4a）は、いずれも[V1]が飲食の際の姿勢（座っているか立っているか）を示しているように見えるが、語順を入れ替えた例（3b）では、/ʔɔŋkòj/＜座る＞を[V2]の位置に置くことはできない。

(3a)　ʔɔŋkòj　phək
座る　飲む
＜飲みながら坐っていた[3]＞　(CKK)

(3b)*　phək　ʔɔŋkòj
飲む　座る

(4a)　chɔ̀ɔ　phək
立つ　飲む
＜飲みながら立っていた＞

(4b)　phək　chɔ̀ɔ
飲む　立つ
＜立ち飲みする＞

さらに、次の例（5, 6）は、他者の行動を促す意味をもつ動詞が[V1]の位置にある場合に、標識として使役を表す動詞/ʔaoj/が必要でない場合と必要となる場合の例である。動詞句が連続する際に、[V1]と[V2]が動作の主体を共有せず、[V1]の動作の対象を表す補語が[V2]の動作の主体を表す連続については、Bisang(1991)、Haiman(2011)、Self(2014)でそれぞれその存在が指摘されている。以下の例（5, 6）では、どちらの[V1]（/prap/＜告げる＞と/bɔɲcèə/＜命令する＞）も対象者に次の動作を命じる種類の動詞であるが、例（5）では、動詞句が直接連続するのに対し、例（6）では、[V2]は使役を表す標識の/ʔaoj/が必要である。

(5)　kɔət　prap　kuulii　laan　mnɛ̀ək　lɔ̀ək　vaaliih
彼女　告げる　雑用係　車　一人　運ぶ　旅行鞄
＜彼女は鞄を運ぶようバスの係の人に言った＞　(PSP)

(6)　ʔɔŋkaa　bɔɲcèə　ʔaoj　nɛ̀ək　còmŋɯɯ　proh　tɛ̀əŋ　ʔɔh　ceɲ　pii　mɔ̀ntii　pɛ̀ɛt
組織　命令する(使役)　病人　男性　全員　出る　から　病院
＜革命組織は男性患者全員に病院から出るよう命令した＞　(NRK)

本稿では、複数の動詞句が連続する文について、文脈のある用例から考察する。以下、まず、研究対象とする動詞句の連続の特徴について概観する。次に、２つの動詞句の連続を取り上げ、継起的な事象を表すか否かによって分類した後、[V1]と[V2]が主語（動作の主体）や補語（動作の対象）を共有するか、否定辞が[V1]と[V2]のいずれに付加されるか、諾否疑問文に対する１語返答が[V1]と[V2]のいずれによって可能であるか、語順を入れ替えても文の意味が変わらないかを検討する。その上で、どのような動詞がどのような配列順で並ぶ連続が可能であるか、また、動詞句が表す２つの事象の意味関係はどのように特定されるか、例（1-6）にあげた３点を中心に検討する[4]。

1　研究方法

本章では、２章以降で述べる動詞句の連続の分析にかかわる問題点を整理する。

1．1　動詞

クメール語は形態上の特徴による品詞分類を行うことができない。本稿では、単独で用いることができ、また否定辞を付加できる動詞や名詞は実詞であると考え、付属語である助詞と区別しておく。基本的に、助詞は実詞に前置される。本稿で分析対象とする「動詞」は、Huffman（1967：164-175）の「述語」の定義を応用し、否定辞/mɯn/を直接前置できる語[5]とする。否定辞としては、文体によって/mɯn/の代わりに現れる/ʔɔt/、/pòm/も同様に扱う。否定辞/mɯn/を直接前置できない/nɯŋ/＜～するつもりだ＞[6]、/kɔmpòŋ/＜～している＞[7]は動詞句の連続の要素として扱わない。完了を表す/haəj/＜てしまう＞、/ruoc/＜終わる＞/srac/＜終わる＞や、/ʔɔh/＜尽きる＞や、可能を表す/baan/＜得る＞は不随意動詞とみなす。語彙的に組み合わせが定まっている随伴語[8]との連続は、本稿では扱わない。

先行研究中で、意志性、随意性と呼ばれる性質は、本稿では、その動詞が表わす動作が、動作の主体の意思によって制御可能なものか否かという性質であると考え、以下、随意動詞と不随意動詞と呼ぶ[9]。

1．2　動詞句の連続と接続語

本節では、動詞句の連続と接続語の介在の可能性について述べる。まず、以下に、２つの動詞から構成される例（7a, 8, 9）をあげる。

(7a)　kɔət　ʔɔŋkòj　trɔɔbaom cɔ̀ŋkɔ̀ŋ
　　彼女　座る　抱える　膝
　　＜彼女は膝を抱えて座っていた＞　(PSP)

(8)　lɔ̀k　jɔ̀ɔk　prak
　　売る　取る　金
　　＜（彼は家財や田畑を）金を手にするために売った＞　(PSP)

(9)　kjəl pjuh baok　lèc
　　嵐　叩く　沈む
　　＜（その船は）嵐にあって沈んだ＞　(PSP)

動詞間の意味的な関係としては、例（7a）では、[V2]/trɔɔbaom/＜（膝を）抱える＞は[V1]/ʔɔŋkòj/＜座る＞の様態を、例（8）では、[V2]/jɔ̀ɔk/＜手にする＞は[V1]/lɔ̀k/＜売る＞の目的を、例（9）では、[V2]/lèc/＜沈む＞は[V1]/baok/＜叩く＞の結果を表していると考えられる。

クメール語の文には、様態や手段を表す/daoj/＜で＞、目的を表す/daəmbəj/＜ために＞、接続を表す/tàəp/＜そうすると＞や/kɔɔ/＜すると＞という語が存在するが、例（7a, 8, 9）に示したように、[V1]と[V2]の間に常にそのような標識が用いられるわけではない。例（7a, 8,

9）の[V1]と[V2]の間に標識となる語を入れてみた場合、例（7a）は/daɔj/＜で＞を付加することはできない。例（8）は/daəmbəj/＜～ために＞を付加することにより[V2]が表す「金を手にすること」は単なる予定にすぎなくなり生起しない可能性が強くなる。例（9）は/tàəp/＜そうすると＞を付加することにより、[V1]と[V2]の因果関係が明示される。また、目的を明示する語と接続を表す語のどちらも介在可能な連続もある。このことから、標識のない動詞句の連続は、単に接続語が省略された文とは考えられない。

また、以下の例（10）でも接続語を入れることにより、意味が変わる。動詞を連続させた例（10a）は、「騙される可能性がある」という一般的な警告だが、接続語/kɔɔ/＜すると＞を入れた例（10b）は、「必ず騙されるという結果になる」と解釈される。

(10a) jə̀əŋ klaac ʔaeŋ tə̀v pnòm pèɲ
我々 恐れる あなた 行く (地名)
trəv kèe tvə̀ə baap
当たる 他人 作る 罪
＜あなたがプノンペンに行ってだまされるかもしれないのが心配だ＞ (SBY)

(10b) jə̀əŋ klaac ʔaeŋ tə̀v pnòm pèɲ
我々 恐れる あなた 行く (地名)
kɔɔ trəv kèe tvə̀ə baap
すると 当たる 他人 作る 罪
＜あなたがプノンペンに行くと、だまされるので心配だ＞

１．３　動作の主体と対象

動詞句が連続する際に、[V1]と[V2]の動作の主体と対象は、共有される場合とされない場合がある。[V1]が随意な動作を表さない場合には、その動詞の表す状態の「経験の主体」とする方が適切であろうが、煩雑さを避けるため、本稿では以下、「動作の主体」としておく。また、動詞の補語は、直接目的語と間接目的語をあわせて、「動作の対象」としておく。

[V1]と[V2]の動作の対象は、例（11）のように共有される場合と、例（12）のように共有されない場合がある。また、クメール語の動詞は、基本的に同時に補語を１つしかとらない[10]が、例（13）では、[V1]/kcəj/＜借りる＞の補語として、/prak/＜金＞と/baŋ/＜銀行＞の２つの名詞が現れている。

(11) tèɲ baaj cən ʔaasraj
買う 飯 中国 摂取する
＜中華料理を食べようと買った＞ (PSP)

(12) tèɲ srəv dak tuuk
買う 籾 置く 船
＜船に積もうとして籾を買った＞ (PSP)

(13) kɔət kcəj prak baŋ tèɲ srəv
彼 借りる 金 銀行 買う 籾
＜彼は籾を買うのに銀行から金を借りた＞ (PSP)

[V1]と[V2]の動作の主体は、例（11-13）および次の例（14）では共有されるが、例（15）のように共有されず、[V2]/lɯɯ/＜聞こえる＞の動作の主体は文中に現れないこともある。

(14) sdap lɯɯ lvə̀əj lvə̀əj
聴く 聞こえる かすかな
＜（旅人が船着き場で）耳を傾けてかすかに聞こえた（声だった）＞ (PSP)

(15) niijèəj lɯɯ tae knoŋ bɔmpɔ̀ŋ kɔɔ
話す 聞こえる だけ 中 喉
＜（彼は）話したが（他の人には）喉の奥でしか聞こえなかった＞ (KLP)

さらに、[V1]の動作の対象が[V2]の動作の主体となることがある。本稿で収集した用例中には、先行研究中で指摘されたものより多くの動詞の組み合わせで、[V1]の動作の対象を表す補語が[V2]の動作の主体を表していた。また、同じ動詞の組み合わせであっても、使役を表す標識/ʔaoj/を必要とする場合としない場合があった。以下に例（16）をあげる。

(16) kèe hav jə̀əŋ hoop bɔɔbɔɔ
他人 呼ぶ 我々 食べる 粥
＜彼らは我々を呼んで、粥を食べさせた＞ (NRK)

１．４　動詞句の連続が表す出来事の区切り

本稿では、複数の動詞句が連続して現れる文を考察の対象とする。個々の動詞句の表す「事象」が標識を介在させずに連続して一連の「出来事」を表し、さらに、それぞれの「出来事」がなんらかの標識によってつながることで文を構成していると考える。一連の出来事の区切りとなる標識としては、発話の際の休止、書き言葉でのスペース、接続語（/daoj/＜で＞、/daəmbəj/＜～ために＞、/tə̀əp/＜そうすると＞、/kɔɔ/＜すると＞）、節の始まりを明示する語（仮定の/baə/、疑問の/taə/、引用の/thaa/）、節の終わりを明示する指示詞や文末詞[11]を標識とみなす。以下に例を示す。

前述のように、本稿で収集した現代クメール語資料の用例では、３つ以上の動詞句が連続している例が多い。以下の例（17a）では、４つの動詞/kap/＜切りつける＞、/baan/＜得る＞、/dot/＜燃やす＞、/caol/＜捨てる＞がどのような関係にあるかを示す標識はない。

(17a) kap kèe mɯn baan dot mootoo caol
切りつける 他人 (否定) 得る 燃やす オートバイ 捨てる
＜切りつけられずオートバイを燃やした＞ (KSP)

一方で、例（17a）と同じ記事中の下記の例（17b）では、前半部分の３つの動詞の連続と、

後半部分の３つの動詞の連続の間に接続を表す/kɔɔ/＜すると＞[12]を介在させている。このことから、前半部分と後半部分は２つの出来事を表していると考える。

(17b)	deɲ	kap	kèe	mɯn	baan	kɔɔ
	追う	切りつける	他人	(否定)	得る	すると
	dot	mootoo	cheh	mɔt		tae mdɔɔŋ
	燃やす	オートバイ	燃える	なくなる		一気に

＜切りつけようと追いかけたが果たせず、オートバイを燃やした＞　(KSP)

発話の際の休止や、書き言葉でのスペースは、いずれも使用に個人差があり、否定辞や修飾句に左右されるが、本稿では、出来事の区切りの手がかりとして扱う。以下の例（18）は前後にさらに別の動詞句が続く文中の一部であり、原文中にスペースはない。しかし発話した際には、/ceɲ/＜出る＞の後と/cav cət/＜チャウチャット＞の後に休止[13]が入ることから、３つの出来事を表していると考える。

(18)	tvèə	bɔntòp	rəəbaək	cèɲ	lèc	rèəŋ kaaj	cav cət
	扉	部屋	開く	出る	現れる	身体	(人名)
	stuh	baɲ	trɔŋ		sɔmdav	tàv	lòok baalat
	速める	撃つ	まっすぐ		方向	行く	副郡長

＜部屋の扉が開き、チャウチャットの姿が現れ、副郡長目がけて突進した＞(KLP)

書き言葉でのスペースがある例として、以下の例（19）では、/mɔət/＜口＞の後と/dəj/＜地面＞、/tmɔɔ/＜石＞の後にスペース[14]がある。この文を発話すると、スペースの位置と休止はおおむね一致するが、/mɔət/＜口＞の後には休止が入らず、指示詞/nuh/＜それ＞の後に休止が入る。このことから、５つの出来事を表していると考える。

(19)	rɔ̀ɔboot	mɔət	tlèək	kluon	kpòok	dɔl	dəj	baek	snook
	抜け落ちる	口	落ちる	体	ポトリ	至る	地面	割れる	甲羅
	dooc	kèe	baok	nɯŋ	tmɔɔ	slap	nàv	vèelèə	nuh
	同じ	他人	打つ	で	石	死ぬ	に	時	それ
	khaan	sii	kaa	nuh	tàv				
	欠く	食べる	披露宴	それ	行く				

＜（そのカメは)、口をすべらせて、体が落ちて地面にぶつかり、甲羅が割れて、即死し、披露宴に出席できなかった＞　(RUA)

指示詞が入る例として、例（20）では、/pèək/＜語＞に指示詞/ponnəŋ/＜それだけ＞が付加されていることから、/sraek/＜叫ぶ＞の前で、区切りがあると考える。

(20)	soojaa	krɔən tae	lɯɯ	pèək	ponnəŋ	sraek
	(人名)	だけ	聞く	語	それだけ	叫ぶ

＜ソヤーはそう聞いて叫んだ＞　(SPT)

文末詞が入る例として、例（21）では、文末詞/phɔɔŋ/＜も＞が付加されていることから、/məəl kòo/＜牛を見る＞と、/ʔaan siəvphèv/＜本を読む＞は別々の事象を表すと考える。

(21)　nɛ̀ək　məəl　kòo　phɔɔŋ　ʔaan　siəvphèv phɔɔŋ
　　彼　見る　牛　も　読む　本　も
　　＜彼は牛を追ったり、本を読んだり（いろいろなことを）した）＞

１．５　資料

用例は、文脈を考慮するため、可能な限り作例を避け、資料中の例を利用した。本文中で用例として動詞が連続する部分のみを示す場合には、必要に応じて、和訳中に文脈の説明を付した。資料の性質、著者の文体による偏りを避けるため、資料として、複数の著者による小説、随筆、戯曲、民話、新聞記事を用いた。例の出典はその例の末尾に記す。出典とその略号の一覧を以下に記す。

- BSK10 : Krasuong qaprom (2012) *Bhasa kmaer 10.*
- CKK : Sym, Chanya (200? 出版年記載なし) *Chak kamplaeng kamnha sobha*.
- CPN : Han, Dhun Hak (1969) *Cenhcian pancam citt*.
- JSR : Lyk, Rari (1967) *Jati Sri*.
- KLP : Nok, Them (1960) *Kulap Pailin*.
- KPM : Mav, Samnan (2000) *Kamrang pka mlih*.
- KSP : *Koh Santhpheap* https://kohsantepheapdaily.com.kh/.
- KTH : Pal, Vannarirak (2007) *Ksae tuk ho*.
- LSK : Hen, Dari (2012) *Lok sri kun*.
- MDB : Di, Ci Huot　(1988) *Mekh Pat Duon Cand*.
- NKS : Pal, Vannarirak (2016) *Nau kbae seckdi slap*.
- NRK : Om, Sambatti (1999) *Muoj ban bi ray huksip pram muoy thnai knun narok*.
- PSP : Nu, Hac (1960) *Phka Srabon*.
- PTN : *Post News* https://postnews.media/other/19918.
- RFA : *Radio Free Asia* http://www.rfa.org/khmer/.
- RFI : *Radio France International* http://km.rfi.fr/.
- RPH : Pal, Vannarirak (1988) *Ronoc phot haei*.
- RUA : L'Institut Bouddhique 編 (1966) *Prajam Ryan Bren Khmaer Bhag Di 1*.
- RUB : L'Institut Bouddhique 編 (1966) *Prajam Ryan Bren Khmaer Bhag Di 2*.
- SBY : *Sabay* http://news.sabay.com.kh/.
- SPT : Rim, Kin (1965) *Suphat*.

出典の題目の記述には、LC（米国議会図書館）方式から付属記号をのぞき簡略化した転写を用いた。なお、資料の一部については、用例検索にあたり、東京外国語大学所蔵のクメール語データおよび科学研究費補助金（基盤研究Ａ）「多言語話しことばコーパスと学習

者言語コーパスに基づく言語運用の研究と教育への応用」によるデータを利用した。資料名 CKK, KPM, KTH については、科学研究費補助金（基盤研究C）「現代カンボジア文学の翻訳と研究」により入手したものである。出典が記されていないものは、ウンサー・マロム氏とバン・ソバタナ氏から得た例である。多くの時間を割いていただき、忍耐強く質問に答えていただいたことに、この場を借りて心からの感謝を捧げたい。

２　先行研究

本章では、先行研究における動詞句の連続に関する記述を概観する。

２．１　動詞句の連続の分類と動詞の配列順

動詞句の連続中の動詞間の意味については、先行研究中では、おおむね、まず動詞を分類することで、その連続も分類でき、動詞間の意味が決まるとしている。また、否定辞の入る位置によっても分類が可能であるとしている。

クメール語文法を概説した Huffman（1967：164-175）は、/mɯn/～/tee/で否定できるものを述語（predicatives）とし、/naʰ/を後置させることができる形容動詞、/nah/を後置させることができない動作動詞（他動詞と自動詞を含む）、動作動詞に前置される助動詞、動作動詞に後置される方向動詞、動作の結果や達成を表す結果動詞に分類している。さらに、結果動詞を、対となる動詞[V1]が決まっている特殊な動詞（/deek/＜寝る＞に対する/lɔ̀k/＜眠る＞、/kɯt/＜考える＞、/mə̀əl/＜見る＞、/rɔ̀ɔk/＜探す＞、/nɯk/＜思う＞に対する/khə̀əɲ/＜見える＞、/tə̀v/＜行く＞に対する/tɔən/＜間に合う＞、/sdap/＜聞く＞に対する/lɯɯ/＜聞こえる＞、/chiəh/＜避ける＞に対する/phot/＜過ぎる＞、/riən/＜学ぶ＞に対する/cɛh/＜知る＞、/hət/＜嗅ぐ＞に対する/thòm/＜臭う＞、/cak/＜刺す＞に対する/mòt/＜刺さる＞、/prɔɔlɔɔŋ/＜受験する＞に対する/cɔəp/＜合格する＞、/tlɛ̀ək/＜落ちる＞）と、対となる動詞[V1]が決まっていない一般的な動詞（/baan/＜得る＞、/kaət/＜生じる＞、/ruoc/＜終わる＞、/chòp/＜止む＞、/khaan/＜欠く＞）に分類している[15]。

クメール語の入門書である、Jacob（1968：76-77）は、移動や場所を表す動詞は、その他の動詞に後置されて、その動作が始まることを示すとしている。また、Jacob（1993：148）では、/ʔaoj/＜与える＞、/tə̀v/＜行く＞、/dəl/＜至る＞のように、他の動詞に複数が後置される語を接続要素と呼んでいる。そして、文脈や語順や音声特徴によって文の意味が明確であれば、接続要素が現れるか否かは文体の差か、正確さの差にすぎないとしている。
以下に例（22）をあげる。

(22)	jɔ̀ɔk	praʰk	pram	riəl	hoc	tə̀v	ʔaoj	koon
	とる	金	5	リエル	渡す	行く	与える	子

＜（彼はポケットに手をつっこみ）５リエルを出して子どもに渡した＞　(JSR)

Jacob（1968：76-77）があげた「移動や場所を表す動詞」としては、他に、/mɔ̀ɔk/＜来る

＞、/cool/＜入る＞、/ceŋ/＜出る＞、/coh/＜下りる＞、/laəŋ/＜上がる＞も含まれると考えられる。本稿の調査では、これらの動詞が連続する場合、発話されても休止が入ることはなかった。また、いずれかの動詞の補語が介在することはあるが、否定辞が入ることはなかった。

Huffman（1967：217-218）は、動詞句の連続構造における否定辞の位置について、動作動詞の連続の場合には、否定辞は[V1]の前に置かれるとしている。以下に例（23）をあげる。

(23a)　daə　lèeŋ
　　歩く　遊ぶ
　　＜散歩する＞　　Huffman（1967：217）[16]

(23b)　mɯn　daə　lèeŋ　tèe[17]
　　(否定)　歩く　遊ぶ　(文末)
　　＜散歩しない＞

一方で、不随意動詞が[V2]の場合には、否定辞は[V2]の前に置かれるとしている（Huffman1967：209）。以下に例（24）をあげる。

(24)　jòp məŋ　kɲom　deek　mɯn　lɔ̀k　sɔh
　　昨夜　私　寝る　(否定)　眠る　全く
　　＜昨夜は全く眠れなかった＞　　Huffman（1967：209）

連続の分類としては、Self(2014:85)は、統語的な分類として、動作の主体を共有するもの、対象を共有するもの、動作の主体と対象を共有するもの、そして[V1]の対象が[V2]の動作の主体になるもの（Pivot 構文）の４つに分類している。Bisang(1991:511)は、連接、修飾的動詞連続、従属的動詞連続の３つに分類している。

動詞の配列順がどのように決まるのかについては、峰岸（1986）が、「時間的順序に従って並べられる傾向が多い」と述べている。また、フランス語話者向けのクメール語文法書である Khin(1999:526)も、動詞の配列順は動作の順序と一致すると述べている。Haiman(2011:253)も動詞の配列順は、出来事の生起する順を反映しているとしている。上田（2001）では、［随意動詞＋随意動詞］の連続について検討し、動詞の配列順は、後続する動詞が先行する動詞を修飾するという、クメール語の語順の原則に従った統一的説明を試みた。また、連続中の各々の動詞の意味の組み合わせによって、動作の経過、目的、手段等の意味が付与されることもあり、その場合には、動詞と動詞の間に何らかの語を介在させた言い換えも可能であることを述べた。

２．２　動作の主体を共有しない連続

[V1]の動作の対象が[V2]の動作の主体となる連続については、Bisang(1991)、Haiman(2011)、

Self(2014)でそれぞれその存在が指摘されている。

Bisang(1991:521-523)は、従属的動詞連続として、[V2]が[V1]の補語である構造、pivot 構文、使役、接続動詞をあげている。まず、[V2]が[V1]の補語である構造では、[V1]には、/cɔŋ/＜欲する＞、/cool cət/＜好む＞、/trəv/＜すべき＞、/baan/＜できる＞、/kuo/＜しなければならない＞、/ʔaac/＜できる＞、/prɔɔm/＜同意する＞、/khɔm/＜一生懸命する＞、/məəl/＜試す＞、/cap/＜始める＞、/chop/＜やめる＞、/kɯt/＜考える＞、/sʔɔp/＜憎む＞、/klaac/＜恐れる＞、/riəp/＜準備する＞、/plèc/＜忘れる＞、/hèən/＜勇気がある＞が現れるとしている。以下に例（25）をあげる。

(25) kɔət cɛh tae cɔŋ cap riən
彼 知る だけ 欲する 始める 学ぶ
＜彼はいつも学び始めたがっている＞ Bisang(1991:523)

また、[V2]の動作の主体であると同時に[V1]の動作の対象である名詞をもつ構造について、クメール語ではタイ語と同様に、使役を表す/ʔaoj/が存在することから、/khèəɲ/＜見える＞、/lɯɯ/＜聞こえる＞、/ʔɔɲcèəɲ/＜招待する＞、/soom/＜頼む＞、/cuoj/＜手伝う＞といった数少ない動詞にしかこの構造が現れないとしている（Bisang 1991:524-525)。以下に例（26）をあげる。

(26) boroh nuh khèəɲ bɔndool nèəŋ saəc jaaŋ riik rèəj
男 それ 見える (人名) 笑う ように 楽しい
＜その男は、彼女が楽しそうに笑うのを目にした＞ Bisang(1991:525)

さらに、使役としては、/ʔaoj/＜与える＞と/tvèə ʔaoj/＜作る、与える＞をあげ（Bisang 1991:528-529)、接続動詞としては、使役と発話にかかわるものに限定して説明し（Bisang 1991:529-532)、/bɔɲcèə/＜命令する＞、/bɔŋkɔəp/＜命じる＞、/bɔŋkhɔm/＜強制する＞、/praə/＜使う＞、/cuol/＜雇う＞、/prap/＜告げる＞、/hav/＜呼ぶ＞、/pdam/＜言いつける＞、/soom/＜依頼する＞、/cɔŋ/＜欲する＞、/ʔɔɲcèəɲ/＜招待する＞、/baək/＜許可する＞という動詞をあげている。以下に例（27）をあげる。

(27) lòok paa nàv tae bɔŋkhɔm cət koon ʔaoj riəp kaa cèə muoj mɔ̀ɔnuh dael[18]…
父 まだ 強制する 心 子 (使役) 結婚する と 人間 (修飾)
＜お父さんはまだ私にあの人と結婚しろと強いる＞ Bisang(1991:532)

[V1]と[V2]が動作の主体を共有せず、[V1]の動作の対象を表す補語が[V2]の動作の主体を表す連続について、Haiman(2011:277-279)は、pivot 構文であるとし、主動詞の補語である名詞句が同時に連続動詞の動作の主体であると述べている。主な例として、/jɔ̀ɔk mɔ̀ɔk/＜持ってくる＞を、その他に、/nɔəm/＜連れる＞、/khèəɲ/＜見える＞、/lɯɯ/＜聞こえる＞、/cam/＜待つ＞、/tòk/＜置く＞との連続をあげている。以下に例（28）をあげる。

(28) kɔət dak lòj tàv knoŋ thɔŋ vɯŋ bat
彼 置く 金 行く 中 袋 戻す なくす
＜彼は袋に金をしまった＞ Haiman(2011:278)

また、Haiman(2011)は、VS 語順の動詞の場合や省略された場合に、主動詞の補語である名詞句は現れないこと、[V1]と[V2]の動作の主体が異なっていても、この名詞句の出現は義務的ではないことも述べている。以下に例（29, 30）をあげる。

(29) mae ʔəv vèə ʔaoj nàv kvèəl kòo
父母 彼 (使役) いる 放牧する 牛
＜彼の両親は牛追いをさせた＞ Haiman(2011:278)

(30) kèe khàəŋ mèən kot thom pii
彼 見える ある 庫裏 大きい 2
＜大きな庫裏が２棟見える＞ Haiman(2011:278)

Self(2014:85)は、Haiman(2011)の定義より狭い範囲に限定されることを付加しつつ、pivot 構文の例として、/nɔəm/＜連れる＞を用いた例をあげている。

上田（1998）では、[V2]の動作の主体は、形態上の手がかりからは特定できないこと、[V1]の表わす動作がその対象である[N2]にどのような働きかけをし、その働きかけが[V2]の表わす動作（あるいは状態）とどのような関わりを持ち得るかという意味的な関係から特定されることを述べた。

以上、先行研究中の記述を紹介した。動詞や連続の定義に差異はあるものの、動詞が表す動作が生起する時間順に配列されること、否定辞の入る位置は連続によって異なること、[V1]と[V2]が動作の主体を共有せず、[V1]の動作の対象が[V2]の動作の主体となる連続が存在することは共通している。次章では、[V1]と[V2]の２つの動詞句からなる連続の用例をあげ、それぞれの連続の特徴を整理する。

３　動詞句の連続の分類

本章では、２つの動詞句からなる連続[V1(+N1)+V2(+N2)]の用例を分類する。以下の用例には３つ以上の動詞が連続するものも含まれるが、分類のためにはそのうちの２つの動詞のみを用いた。動詞としては、２章にあげた、Huffman（1967 : 164-175）の動作動詞、方向動詞、動作の結果や達成を表す動詞を中心に扱った。まず、[V1]と[V2]が表す事象が継起的に生起しているか否かによって分類した後、以下の５点について調査した。

a. ［V1］と［V2］は、動作の主体を共有しているか。
b. ［V1］と［V2］は、動作の対象を共有しているか。
c. ［V1］と［V2］のいずれに否定辞が付加されるか。
d. ［V1］と［V2］のいずれが、諾否疑問文の１語返答として用いられるか。
e. ［V1］と［V2］の語順を入れ替えても文の意味は同じか。

５点のうち、d の諾否疑問文の１語返答の調査には問題が多かったため、分類基準としては参考にとどめた。まず、諾否疑問文がなされる発話の状況が想像しがたいため、返答も判断ができないとされた。次に、１語返答そのものが完全な文と感じられないため、望ましい発話ではないという判断がなされた。また、同じ動詞の組み合わせであっても、１語返答か可能かどうか、判断に個人差があった。

表１：動詞連続の分類基準に関する調査結果

事象	a.主体	b.対象	c.否定辞の位置	d.１語返答	e.語順の入替
3.1 継起	共有	共有	V1	V1	不可
	共有	×	V1	V1	不可
	×	×	V1	V1	不可
3.2 継起	共有	共有	V2	V2	不可
	共有	×	V2	V2	不可
	×	×	V2	V2	不可
3.3 非継起	共有	×	V1, (V2)	?	不可
3.4 非継起	共有	○/×	V1, V2	×	可

表１に示す調査結果から、以下のことがわかった。まず、[V1]と[V2]が継起的に生起する事象を表す連続は、動作の主体も対象も共有する場合としない場合がある。文の意味を変えずに[V1]と[V2]の語順を入れ替えることはできない。[V1]と[V2]との意味的な関係は、[V2]に否定辞を付加できるか否かによって、下位分類できる。共有される動作の対象を表す補語の位置は、[V1]の後と[V2]の後の可能性がある。

次に、[V1]と[V2]が非継起的に生起する事象を表す連続は、動作の主体は共有するが、対象は共有する場合としない場合がある。[V1]と[V2]との意味的な関係は、文の意味を変えずに[V1]と[V2]の語順を入れ替えることが可能か否かによって、下位分類できる。語順の入れ替えが不可能な場合は、動作の主体は共有するが、対象は共有しない。一方、語順の入れ替えが可能な場合は、動作の主体は共有するが、対象は共有する場合としない場合がある。否定辞はそれぞれの動詞に付加され、諾否疑問文の１語返答はできない。

以下、表１について、用例をあげながら説明する。

３．１　継起的に生起する事象を表す連続（目的）

本節では、「[V1]の表す動作が開始された後に[V2]の表す動作が行われる」という継起的に生起する事象を表す連続を扱う。このような連続は、[V1]も[V2]も動作の主体の意志によって行うことができる動作を表す動詞である。[V2]は[V1]の表す動作の意図や目的を表す。この種類の連続は、動作の主体と対象を共有する場合としない場合がある。動作の対象を共有する場合に、補語が[V1]に後置される連続と[V2]に後置される連続がある。文の意味を

変えずに[V1]と[V2]の語順を入れ替えることはできない。否定辞の位置は[V1]が選択される。

３．１．１　動作の主体と対象を共有する連続

動作の主体と対象を共有する連続は、補語の位置によって、[V1+N+V2]型と[V1+V2+N]型に分けられる。[V1+N+V2]型は、諾否疑問文に対して、[V1+V2]の返答ができない。[V1+V2+N]型では、諾否疑問文に対して、[V1+V2]の返答が可能である。一部の動詞の組み合わせは、[V1+N+V2]型と[V1+V2+N]型のいずれの形もとることができる。

まず、[V1]と[V2]が動作の主体も対象も共有し、[V1]の補語が現れる[V1+N+V2]の例（31a）をあげる。この例（31a）では、焼いたことはわかるが、食べたかどうかはわからない。例（31b）のように補語の位置を変えることはできない。

(31a)　ʔaŋ　trəj　sii
　　焼く　魚　食う
　　＜魚を食べようと焼いた＞

(31b)*　ʔaŋ　sii　trəj
　　焼く　食う　魚

例（31）では、否定辞は[V1]にのみ付加できる[19]。

(31c)　mɯn　ʔaŋ　trəj　sii　tèe
　　(否定)　焼く　魚　食う　(文末)
　　＜魚を食べようと焼くことをしなかった＞

(31d)*　ʔaŋ　trəj　mɯn　sii　tèe
　　焼く　魚　(否定)　食う　(文末)

例（31e-f）では、諾否疑問文の１語返答は[V1]が可能である。なお、この[V1+N+V2]の連続では、[V1+V2]の返答ができなかった。

(31e)　ʔaŋ　trəj　sii　rɯɯ　tèe
　　焼く　魚　食う　か　(文末)
　　＜魚を食べようと焼いたか＞

(31f)　ʔaŋ
　　焼く
　　＜焼いた＞

次に、[V1]と[V2]が動作の主体も対象も共有する点は同じだが、[V2]の補語が現れる[V1+V2+N]の例（32）をあげる[20]。例（32b）のように、補語の位置を変えることはできない[21]。連続する動詞の間に補語となる名詞句も、否定辞も介在されない。

(32a)　deɲ　kap　kèe
　　追う　切りつける　他人
　　＜切りつけようと追いかけた＞　(KSP)

(32b)* deɲ kèe kap
追う 他人 切りつける

例（32）では、否定辞は[V1]にのみ付加できる。

(32c) mɯn deɲ kap kèe tèe
(否定) 追う 切りつける 他人 (文末)
＜切りつけようと追いかけなかった＞

例（32d-e）では、諾否疑問文の１語返答は、[V1]が可能である。なお、この[V1+V2+N]の連続では、[V1+V2]の返答が可能であった。

(32d) deɲ kap kèe rɯɯ tèe
追う 切りつける 他人 か (文末)
＜切りつけようと追いかけたか＞

(32e) deɲ
追う
＜追いかけた＞

補語の位置について、[V1+N+V2]型と[V1+V2+N]型のどちらの位置も可能な動詞の組み合わせも存在する。２つの型の表す事象の時間的な差については、４．２で後述する。

３．１．２　動作の主体のみ共有する連続

次の例（33）では、[V1]と[V2]は動作の主体は共有するが、対象は共有しない。この例でも、火を起こしたことはわかるが、文脈がなければ、魚を焼いたかどうかはわからない。

(33) bɔŋkat plɛ̀ɛŋ ʔaŋ trəj
おこす 火 焼く 魚
＜火をおこし魚を焼いた＞ (RUB)

同様に、[V1]と[V2]は動作の主体は共有するが、対象は共有しない例で、[V1]と[V2]のいずれかの補語が現れない場合もある。例（34）では、[V1]の補語/daj/＜手＞は現れない。

(34) bɔ̀nthɯɯən luuk jɔ̀ɔk sɔmbot
(人名) 伸ばす とる 手紙
＜ブントゥアンは手紙を取ろうと（手を）伸ばした＞ (PSP)

動詞によっては２種類の補語をとることができる[22]が、補語が現れていない場合、どちらの補語でも介在できるわけではない。以下の例（35）では、[V1]/baɲ/＜撃つ＞の補語としては、/kam plɛ̀ɛŋ/＜銃＞と/kèe/＜他人＞の両方があり得るが、[V1]と[V2]の間に介在できるのは、共有されない補語である/kam plɛ̀ɛŋ/＜銃＞のみである。

(35a) baɲ sɔmlap kèe
撃つ 殺す 他人

＜人を殺そうと撃つ＞

(35b) baɲ kam plèəŋ sɔmlap (kèe)
撃つ 銃 殺す (他人)
＜（人を）殺そうと銃を撃つ＞

(35c)* baɲ kèe sɔmlap
撃つ 他人 殺す

[V1]と[V2]が動作の主体のみを共有する例（36a）のように、[V1]が/tə̀v/＜行く＞（あるいは/mɔɔk/＜来る＞）という移動動詞の連続では、[V2]が移動の目的を示す。

(36a) tə̀v baok krɔɔmaa nɯŋ ʔaav
行く 洗う 布 と 服
＜（明日持っていけるように）洗濯しに行く（から待っててね）＞ (RPH)

例（36b）では、否定辞は[V1]にのみ付加できる。

(36b) mɯn tə̀v baok krɔɔmaa nɯŋ ʔaav tèe
(否定) 行く 洗う 布 と 服 (文末)
＜洗濯しに行かない＞

例（36c-36d）では、諾否疑問文の１語返答は、[V1]である[23]。

(36c) tə̀v baok krɔɔmaa nɯŋ ʔaav rɯɯ tèe
行く 洗う 布 と 服 か (文末)
＜洗濯しに行くか＞

(36d) tə̀v
行く
＜行く＞

３．１．３　動作の主体も対象も共有しない連続

本節であげた動詞句の連続の用例はいずれも、[V1]と[V2]が動作の主体を共有する連続であったが、動作の主体を共有しない連続もある。例（37）と例（38）は、同じ動詞/cuol/＜雇う＞が[V1]であるが、[V2]の動作の主体は例（37）では共有されるが、例（38）では共有されない。

(37) cuol khèətkɔɔ pon pɔɔŋ tvèə khèət
雇う 殺し屋 企てる する 殺人
＜殺し屋を雇い、殺人を企てた＞ (RFA)

(38) cuol khèətkɔɔ praə kam plèəŋ kləj baɲ sɔmlap
雇う 殺し屋 使う 銃 短い 撃つ 殺す
＜殺し屋を雇い、（殺し屋が）短銃を使い撃ち殺そうとした[24]＞ (RFA)

この例（38）では、動詞/cuol/＜雇う＞と、それ以外の３つの動詞/praə/＜使う＞、/baɲ/＜撃つ＞、/sɔmlap/＜殺す＞の動作の主体が異なることを示す標識はない。このような連続

については、４．３で述べる。

３．２　継起的に生起する事象を表す連続（結果）

本節でも、「[V1]の表す動作が開始された後に[V2]の表す動作が行われる」という継起的に生起する事象を表す連続を扱う。[V2]は動作の主体の意志によって行うことができない動作や状態を表す不随意動詞であり、[V1]の表す動作の結果を表す。[V2]が不随意動詞である連続の場合も、動作の主体と対象を共有する場合としない場合がある。動作の対象を共有する場合に、補語が[V1]に後置される連続と[V2]に後置される連続がある。文の意味を変えずに[V1]と[V2]の語順を入れ替えることはできない。否定辞の位置も、諾否疑問文に対する１語返答も[V2]が選択される。

３．２．１　動作の主体と対象を共有する連続

動作の主体と対象を共有し、[V2]が不随意動詞である連続は、[V1+N+V2]型である。一部の動詞の組み合わせでは[V1+V2+N]型も現れることがあるが、その場合には[V2]の後に述語を含む補文が続いているのであって、３．２．２の動作の対象を共有しない連続に分類されると考えられる。

動作の主体と対象をともに共有する例（39a）を示す。

(39a)　nèəŋ　phək　tɯk　cʔaet
　　彼女　飲む　水　満腹する
　　＜彼女は水を飲み足りた＞　(SPT)

例（39b）では、否定辞は[V2]に前置される。

(39b)　nèəŋ　phək　tɯk　mɯn　cʔaet
　　彼女　飲む　水　(否定)　満腹する
　　＜彼女は水を飲み足りなかった＞

例（39c-d）では、諾否疑問文の１語返答は、[V2]である[25]。

(39c)　phək　tɯk　cʔaet　rɯɯ　tèe
　　飲む　水　満腹する　か　(文末)
　　＜水を飲み足りたか＞

(39d)　cʔaet
　　満腹する
　　＜飲み足りた＞

[V1]と[V2]が同じ動詞の組み合わせであっても、補語の位置は、[V1]の後である場合と[V2]の後である場合がある。[V1+V2+N]型の例（40a）は、「パイさんが怒ったこと」が続く補文構造であり、共有される補語である名詞句のみで文が終わるのは不自然であると判断される[26]。一方、[V1+N+V2]型の例（40b）は[V2]/khàəŋ/＜見える＞が結果を表すため、そこで文が終わっていると判断される。このことから、[V1+V2+N]型の例（40a）は、文に現

れていない[V1]の補語は共有されない補語であり、３．２．１に述べる連続だと考えられる[27]。

(40a) mɤ̀ɤl khɤ̀ɤɲ jɛ̀ɛj paj kɔɔt stuh krɔɔŋɲeeŋ krɔɔŋɲaaŋ doocnɛh
見る 見える (人名) 彼女[28] 速める 怒る そのように
＜パイさんがすぐに怒ったのが見えた＞ (PSP)

(40b) mɤ̀ɤl jɛ̀ɛj paj khɤ̀ɤɲ
見る (人名) 見える
＜パイさんが見えた＞

３．２．２　動作の主体のみ共有する連続

動作の主体のみを共有し、対象を表す補語が現れない例（41）[29]を以下に示す。

(41) naarɯn vɛ̀ɛ prɔɔlɔɔŋ cɔɔp haɛj
(人名) 彼 受験する 受かる (完了)
＜ナルンは試験に合格した＞ (SPT)

さらに、[V1]と[V2]が、対象を共有しない例（42）[30]もある。

(42) sɔmlɤŋ mɤ̀ɤl tɤ̀v lɤ̀ɤ mɛ̀ɛk khɤ̀ɤɲ pkaaj ploh
見つめる 見る 行く 上 空 見える 星 またたく
＜空を見上げると星がまたたくのが見えた＞ (PSP)

例（43）では、否定辞は[V2]に前置される。

(43) mɤ̀ɤl ʔɤj mɯn khɤ̀ɤɲ
見る 何 (否定) 見える
＜何を見ようとしても何も見えなかった＞ (NKS)

以下のように、結果を表す動詞句の連続では、[V1]が随意な動作である例も不随意な動作である例もある。また、[V1]が不随意な動作であっても否定辞は[V2]に前置される。以下に例（44-45）を示す。

(44) lòot pii lɤ̀ɤ spɛ̀ɛn ʔaakaah kbaal tnɔl mɯn slap
跳ぶ から 上 橋 空 (地名) (否定) 死ぬ
＜クバールトノル陸橋からとび降りて死ななかった＞ (PTN)

(45) tlɛ̀ɛk pii lɤ̀ɤ ʔaakɛ̀ɛ kɔmpɔ̀h bɤj cɔɔn mɯn slap
落ちる から 上 建物 高さ 3 階 (否定) 死ぬ
＜３階から落ちて死ななかった＞ (KSP)

３．２．３　動作の主体も対象も共有しない連続

動作の主体も対象も共有しない例を以下に示す。例（15）では、[V2]の動作の主体が共有

されておらず、言及もされない。

(15再掲) niijèəj　lɯɯ　tae　knoŋ　bɔmpɔ̀ŋ kɔɔ

話す　聞こえる　だけ　中　喉

＜（彼は）話したが（他の人には）喉の奥でしか聞こえなかった＞　(KLP)

この種類の連続には、[V1]の動作の対象を表す補語が[V2]の動作の主体を表す文[31]もある。以下に例（46-47）を示す。

(46)　ʔaa plooŋ　ʔaŋ　trəj　cʔən

(人名)　焼く　魚　焼ける

＜プロニュは魚を焼いて（その魚が）焼けた＞　(RUA)

(47)　jòothèə　baan　baŋ　prɔɔcèəcɔ̀n　slap

軍　得る　撃つ　人民　死ぬ

＜軍は（米を奪おうとした）人民を撃って（その人民の２人が）死んだ＞(NRK)

[V2]の動作の主体には言及されない例(9, 48)[32]もある。

(9再掲)　kjɔl pjuh baok　lèc

嵐　叩く　沈む

＜（その船は）嵐にあって沈んだ＞　(PSP)

(48)　mòk cèə krɔɔpɔ̀ə　kham　slap　mɯn　khaan

きっと　ワニ　噛む　死ぬ　(否定)　欠く

＜（私は）ワニにかまれて死ぬに違いない＞　(RUA)

例（49a）は、否定辞は、[V2]に付加する。

(49a)　rɔ̀t jɔ̀n　bok　mɯn　slap

車　ぶつかる　(否定)　死ぬ

＜車にひかれて死ななかった＞　(KSP)

例（49b-49c）では、諾否疑問文[33]の１語返答は、[V2]が選択されるが、完了を表す/haəj/が必要である。

(49b)　rɔ̀t jɔ̀n　bok　slap　rɯɯ

車　ぶつかる　死ぬ　か

＜車にひかれて死んだのか＞

(49c)　slap　haəj

死ぬ　(完了)

＜死んだ＞

３．３　非継起的に生起する事象を表す連続（様態）

本節では、[V1]の表す事象と[V2]が表す事象との間に時間的な前後関係が存在しない、非

継起的に生起する事象を表す連続について考察する。[V1]と[V2]との意味的な関係は、[V2]が[V1]の表す動作の様態を表す。[V1]も[V2]も随意性による動詞の制限はない。動作の主体を共有するが、対象は共有しない。文の意味を変えずに[V1]と[V2]の語順を入れ替えることはできない。否定辞は[V1]に前置されるが、動詞の組み合わせによっては[V2]に前置される場合もある。[V2]が不随意動詞の場合、諾否疑問文に対する１語返答は[V2]が可能である。

まず、[V2]が随意な動作を表す例（50a）をあげる。[V2]は動作の様態を表す。

(50a)　ʔəŋkòj　bɔt　cə̀əŋ

座る　折る　足

＜足を曲げて座る（横ずわりする）＞

例（50b）の否定辞は[V1]に付加される[34]。

(50b)　mɯn　ʔəŋkòj　bɔt　cə̀əŋ　tèe

(否定)　座る　折る　足　(文末)

＜足を曲げて座らない（横ずわりしない）＞

例（50c-d）では、諾否疑問文は、[V1+V2]で返答することが望ましいと判断された[35]。

(50c)　ʔəŋkòj　bɔt　cə̀əŋ　rɯɯ　tèe

座る　折る　足　か　(文末)

＜足を曲げて座る（横ずわりする）＞

(50d)　ʔəŋkòj　bɔt　cə̀əŋ

座る　折る　足

＜足を曲げて座る（横ずわりする）＞

次に、[V2]が不随意な動作を表す例を挙げる。３．２では、[V2]が不随意動詞であり[V1]の表す動作の結果を表す連続について述べたが、以下の例（51）は、＜酔って倒れている＞のではなく＜死んで倒れている＞という意味であり、[V2]は[V1]の表す動作の結果ではなく様態を表す。

(51a)　jòŋ　deek　slap　sdook sdəŋ　kɔndaal　tnɔl

(人名)　横たわる死ぬ　長く　真ん中　道

＜ヨンは道路の真ん中で死んで横たわった＞　(KPM)

否定辞は[V1]に付加される。

(51b)　mɯn　deek　slap

(否定)　横になる　死ぬ

＜死んで横たわることはなかった＞

[V2]が随意な動作を表す連続の一部は、接続語/daoj/＜で＞を用いて言い換えることもで

きる。以下に例（52）[36]をあげる。しかし、接続語/daoj/＜で＞を用いた文がすべて、動詞句の連続の形に言い換えできるわけではない。

(52a) nèəŋ ʔaan rɯəŋ prèəh lɛ̀əksənəvə̀ŋ
彼女 読む 物語 (人名)
tvə̀ə bɔt bɔɲceɲ sɔmleeŋ
作る 節 出す 声
＜彼女はレアクサナボン物語を節をつけて朗読した＞ (PSP)

(52b) nèəŋ ʔaan rɯəŋ prèəh lɛ̀əksənəvə̀ŋ
彼女 読む 物語 (人名)
daoj tvə̀ə bɔt bɔɲceɲ sɔmleeŋ
で 作る 節 出す 声
＜彼女はレアクサナボン物語を節をつけて朗読した＞

以下の例（53-54）も[V2]が随意な動作を表す文であるが、接続語/daoj/＜で＞を用いた言い換えはいずれも不可能である。[V2]が/lèeŋ/＜遊ぶ＞の連続は、[V1]の表す動作を「目的をもたず遊びで行う」場合に用いる。

(53) bɔɔŋ ʔɔŋkòj lèeŋ sən
あなた 座る 遊ぶ ちょっと
＜どうぞおかけください＞ (CPN)

(54) niijèəj lèeŋ nɯŋ bɔɔŋ
話す 遊ぶ と 私
＜私とおしゃべりする（のをやめた）＞ (SPT)

以下の例（55a）のように、[V1]の動作の対象を表す補語が現れることもある。動作の対象は共有されていないため、補語の位置は[V1]の直後のみである。[V1]が同じ動詞/lèeŋ/の連続の例（56）も可能である。

(55a) ɲam nòm lèeŋ
食べる 菓子 遊ぶ
＜菓子をつまむ＞

(55b)* ɲam lèeŋ nòm
食べる 遊ぶ 菓子

(56) lèeŋ bal tɔət lèeŋ
遊ぶ サッカー 遊ぶ
＜遊びでサッカーする＞

しかし、４．１で後述するように、「遊びですることが考えられない」場合には、このような[V2]が/lèeŋ/＜遊ぶ＞である連続は不自然だと判断される。

[V2]が不随意な動作を表す連続の一部も、例（51c）のように、接続語/daoj/＜で＞を用いて言い換えることもできる。

(51c)　slap　daoj　deek　sdook sdəŋ
死ぬ　で　横たわる　長く
＜横たわって死んだ＞

例（51d-e）では、諾否疑問文の１語返答は、[V2]である。

(51d)　jòŋ　deek　slap　sdook sdəŋ　kɔndaal　tnɔl　rɯɯ　tèe
(人名)　横たわる　死ぬ　長く　真ん中　道　か　(文末)
＜ヨンは道路の真ん中で死んで横たわったのか＞

(51e)　slap
死ぬ
＜死んだ＞

３．４　非継起的に生起する事象を表す連続（並列）

本節でも、[V1]の表す事象と[V2]が表す事象との間に時間的な前後関係が存在しない連続について考察する。[V1]と[V2]との意味的な関係は、並列である。[V1]も[V2]も随意性による動詞の制限はない。動作の主体を共有するが、対象は共有する場合としない場合がある。[V1]と[V2]の語順の入れ替えは可能である。否定辞は[V1]にも[V2]にも前置される。諾否疑問文に対する１語返答はできない[37]。

以下に例を示す。例（57）の前半の/muul kɔntèel/＜ゴザを巻く＞、/bɔt khao ʔaav/＜衣服をたたむ＞、/cɔɔŋ siəvphàv/＜本を縛る＞の３つの動詞句はそれぞれ語順を入れ替えることができる。また、後半の/sraaj mòŋ/＜蚊帳をほどく＞、/prɔɔmool knaəj/＜枕を集める＞の２つの動詞句も[38]語順を入れ替えることができる。

(57)　soophaat　kɔmpòŋ　muul　kɔntèel　bɔt　khao ʔaav　cɔɔŋ　siəvphàv
(人名)　(進行)　巻く　ゴザ　たたむ　衣服　縛る　本
naarɯn　stuh　tàv　sraaj　mòŋ　prɔɔmool knaəj
(人名)　速める　行く　ほどく　蚊帳　集める　枕
＜ソパートがゴザや衣服や本を荷造りし、ナルンは寝具を片づけた＞(SPT)

並列を表す場合、類義の動詞が連続することもある。以下に例を示す。例（58）の/ɲɔ̀ɔɲɯm saəc/＜笑う＋微笑む＞も例（59）の/sii phək/＜食う＋飲む＞もいずれも語順も入れ替えることができる[39]。

(58)　nèəŋ　kɔɔ　ɲɔ̀ɔɲɯm　saəc
彼女　すると　微笑む　笑う

＜彼女は（白い歯を見せて）微笑んだ＞ (PSP)

(59a) sii phək
食う 飲む
＜飲み食いする＞

否定辞は[V1]にも[V2]にも前置される。

(59b) mɯn sii mɯn phək
(否定) 食う (否定) 飲む
＜飲み食いしない＞

本章の分類基準に関する調査結果（表1）から、b.対象、c.否定辞の位置、e.語順の入替、の３つの基準を用いた以下の手順によって、動詞句の連続を分類することが可能であると考えられる。[V1]と[V2]の意味的な関係は、並列、結果、目的、様態に分けられる。

① 文の意味を変えずに[V1]と[V2]の語順を入れ替えることが可能な連続は、[V1]と[V2]の表す事象の並列を表す。

② [V2]を否定できる連続は、[V2]が[V1]の結果を表す。

③ [V1]と[V2]の間に補語となる名詞句が介在できる連続[V1(+N)+V2]は、[V2]が[V1]の目的を表す。

④ [V1]と[V2]の間に補語となる名詞句が介在できない連続[V1+V2(+N)]は、

ア 動作の対象を共有する場合には、[V2]が[V1]の目的を表す。

イ 動作の対象を共有しない場合には、[V2]が[V1]の様態を表す。[V1]と[V2]の間に時間的な前後関係はない。

４ 動詞句の連続の条件

本章では、動詞句の連続が許される条件について考察する。

４．１ 修飾語としての[V2]

本節では、[V1]と[V2]の統語的な関係について考察する。例（3, 4）のように、同じカテゴリーの動作を表す動詞が[V1]の位置にある場合に、語順の入れ替えが許される場合と、許されない場合がある。同じように[V1]が身体動作を表す動詞の連続であっても、/chɔ̀ɔ/＜立つ＞は例（3b）のように語順を入れ替えることができるが、例（4b）は不可能である[40]。

(3a 再掲) ʔɔŋkòj phək
座る 飲む
＜飲みながら座っていた＞ (CKK)

(3b 再掲) *phək ʔɔŋkòj
飲む 座る

(4a 再掲) chɔ̀ɔ phək
立つ 飲む

＜飲みながら立っていた＞

(4b 再掲)phək　chɔ̀ɔ

飲む　立つ

＜立ち飲みする＞

クメール語の基本語順では修飾語が後置されることから、語順を入れ替えると、修飾関係も逆になると考えられる。また、[V1]を修飾する[V2]が意味的に何を表すかは、[V1]と[V2]の組み合わせによって、目的であったり様態であったりすると考えられる。例（3a, 4a）は、「何をしようとして座っているか」という目的や意図を表す継起的な事象の連続と解釈される。

一方、例（4b）は、「飲んでから立つ」のではなく、「どのようにして飲んでいるか」という様態を表すと考えられる。しかし、カンボジアの飲食店では立ち飲みという形態が珍しいので例（4b）は可能であるが、「坐って飲む」ことは日常的に行われているため、わざわざ修飾する必要がないと判断された例（3b）は不自然だと判断された。

[V2]が不随意動詞である場合も、動作の時間的な前後関係を示す[V1]と[V2]の語順を入れ替えて、/chɯɯ/＜病む＞が/slap/＜死ぬ＞を修飾するためには、例（60b）のように、標識となる接続語/daoi/＜で＞が必要である[41]。しかし、例（60c）のように病死であるかどうか死因を尋ねられた場合には、/slap/＜死ぬ＞の後に何らかの修飾語が続くことが予想されるため、接続語/daoi/＜で＞を用いない例（61）も可能である。

(60a)　chɯɯ　slap

病む　死ぬ

＜病気になって死んだ＞

(60b)　slap　daoj　chɯɯ

死ぬ　で　病む

＜病気で死んだ＞

(60c)　slap　daoj　chɯɯ　rɯɯ

病む　で　死ぬ　か

＜病気で死んだのか＞

(61)　mɯn　mɛ̀ɛn　tɛ̀e　slap　lòot　tɯk[42]

(否定)　本当に　(文末)　死ぬ　跳ぶ　水

＜いや、投身自殺した＞

例（7a）も、[V2]は[V1]がどのような様態で行われるかを表している[43]。語順を逆にした例（7b）では、[V2]は[V1]の目的を表す継起的な事象の連続と理解される。

(7a再掲) kɔət　ʔɔŋkòj　trɔɔbaom　cɔŋkòŋ
彼女　座る　抱える　膝
＜彼女は膝を抱えて座っていた＞　(PSP)

(7b)　kɔət　trɔɔbaom　cɔŋkòŋ　ʔɔŋkòj
彼女　抱える　膝　座る
＜彼女は膝を抱えてから座った（座ろうとして膝を抱えた）＞

例（62-63）は一見、例（7a）とは逆に、[V1]が[V2]の様態を表しているようにも見える。しかし、例（62-63）の連続も同じく修飾関係にあり、「どのような状態で座っているか」という様態ではなく、「何をしようとして座っているか」という目的や意図を表す継起的な事象の連続と解釈される。

(62)　bɔɔroh　pii　nɛ̀ək　ʔɔŋkòj　phək　biijɛ̀ɛ
男　2　人　座る　飲む　ビール
＜２人の男がビールを飲みながら坐って（話していた）＞　(CKK)

(63)　ʔɔŋkòj　krɔɔŋ　pkaa　mlih
座る　編む　花　ジャスミン
＜座ってジャスミンの花輪を編んでいた＞　(KPM)

その一方で、同様に[V2]が[V1]の様態を表していても、動詞の組み合わせによっては、直接動詞を連続させることができず、接続語/daoj/＜で＞か/tɛ̀əŋ/＜ながら＞を用いる[44]必要がある。

例（64-65）はいずれも非継起に生起する事象であるが、[V1]と[V2]の語順を変えることはできない。例（64）では、/suo/＜尋ねる＞と/ɲɔ̀ɔɲɯm/＜微笑む＞の間には/tɛ̀əŋ/＜ながら＞が必要である。また、例（65）でも、/claəj/＜答える＞と/kòoròp/＜尊敬する＞の間には/daoj/＜で＞が必要である。これは、[V2]/ɲɔ̀ɔɲɯm/＜微笑む＞と/kòoròp/＜尊敬する＞が、それぞれ、[V1]/suo/＜尋ねる＞と/claəj/＜答える＞の修飾要素の選択肢だと理解されないからであると考えられる。

[V1]と[V2]の間に休止をおいて発話することができるが、その場合には、[V1]の表す動作を行い、それとは別に[V2]を行うのだと理解される。

(64)　lòok kruu suo　tɛ̀əŋ　ɲɔ̀ɔɲɯm
先生　尋ねる　ながら　微笑む
＜先生は微笑みながら尋ねた＞　(LSK)

(65)　nissət　claəj　daoj　kòoròp
生徒　答える　で　尊敬する
＜生徒は敬意をもって答えた＞

以上のことから、[V1]と[V2]の連続は、[V2]が[V1]を修飾していると考えられる。継起的に生起する事象を表す場合には[V2]は目的や意図を表し、非継起的に生起する事象を表す場合には[V2]は様態を表す。語彙的な制限や文脈上の制限により修飾関係が成り立たない動詞の組み合わせでは、[V1+V2]の語順が許されない、もしくは、[V1]と[V2]の間に接続語/daoj/＜で＞や/tɛ̀əŋ/＜ながら＞といった標識が必要となるのだと考えられる。

４．２　名詞句の介在

本節では、２つの事象を表す動詞[V1]と[V2]が直接連続する場合と、[V1]と[V2]の間に補語となる名詞（句）が介在する場合の意味の差異について考察する。

まず、[V1]と[V2]が動詞の表す動作の対象を共有する場合について述べる。３．１．１では、継起的な事象を表す連続で、動作の主体と対象を共有する場合、補語の位置によって２つの語順があることを述べた。[V1]と[V2]の間に補語となる名詞句が介在できる連続[V1(+N)+V2]でも、介在できない連続[V1+V2(+N)]でも、動作の対象を共有する場合には、[V2]が[V1]の目的を表す。

(1a 再掲)kat　ceŋcram　bɔnlae
　切る　刻む　野菜
　＜野菜をみじん切りにする＞
(1b 再掲)*kat　bɔnlae　ceŋcram
　切る　野菜　刻む
(2a 再掲)*kat　pɛ̀ək　ʔaav
　切る　着る　服
(2b 再掲)kat　ʔaav　pɛ̀ək
　切る　服　着る
　＜着るために服を仕立てる＞

例（1a）のような[V1+V2+N]型、のような例では、[V1+V2]が複合動詞とも考えられるが、例（66c）は次のように、[V2]の後にさらに別の動詞が続くことで、動詞の間に補語となる名詞句を介在させることが可能となる。

(66a)　deɲ　cap　trəj
　追う　捕まえる　魚
　＜魚を捕まえようと追った＞
(66b)*　deɲ　trəj　cap
　追う　魚　捕まえる
(66c)　deɲ　trəj　cap　lèeŋ
　追う　魚　捕まえる　遊ぶ

＜魚を追って捕まえて遊んだ＞

また、次の例（67）では、補語の位置は、[V1+V2+N]型と[V1+N+V2]型のどちらも可能である[45]。どちらの文を使ってもそれほど意味に差はないと理解されるが、例（67a）は噛むと同時に一方向に引っ張っている場合に、例（67b）は、くわえたものをいろいろな方向に引っ張る場合に用いられる。

(67a) kham tèəɲ chàəŋ khao
噛む 引っ張る 裾 ズボン
＜（犬が）ズボンの裾に噛みつき引っ張った＞

(67b) kham chàəŋ khao tèəɲ
噛む 裾 ズボン 引っ張る
＜（犬が）ズボンの裾をくわえて頭を振った＞

以上のことから、[V1+V2+N]型の[V1+V2]は、複合動詞として考えるのではなく、[V2]が[V1]の目的を表す継起的な事象の連続であるものの、[V2]の表す動作が開始される際に、[V1]の表す動作が終了している必要はない場合に用いられるのだと考えられる。

次に、[V1]と[V2]が動詞の表す動作の対象を共有しない場合について例をあげる。例(68a)では、[V1]と[V2]が直接連続しており、単独では[V2]の補語とならない名詞句/ptɛ̀əh/＜家＞が[V2]の後におかれる。地名の前に/nəv/＜で＞をつけても[46]同じ意味であると判断されたことから、動作の行われる場所を表す前置詞句から前置詞が省略されていると考えられる。

(68a) təv lèeŋ (nəv) ptɛ̀əh
行く 遊ぶ で 家
＜家に遊びに行く＞

Bisang(1991:514-515)は、/təv lèeŋ/を連接として分類した中で、[V1]と[V2]の間に地名を表す名詞が介在できるとしている。しかし、本稿の調査では、[V1]に補語を付けた例（68b）は、誰かの家を訪問するのは遊びで行うべきではないため不自然な文と判断された。

(68b)* təv ptɛ̀əh lèeŋ
行く 家 遊ぶ

例（68a）は、[V1]と[V2]の間に補語となる名詞句が介在できないことから、３．３で述べた、動作の主体のみを共有する非継起的な事象を表す連続であり、[V2]は[V2]の様態を表すと考えられる。

一方で、例（69）では[V1]の移動先を表す名詞句が[V1]と[V2]の間に介在できることから＜カードをしに家に行く＞という、３．１．２で述べた動作の主体のみを共有する継起的な事象の連続であって、[V2]は[V1]の目的を表すと理解される。また、[V1]の移動先を表す名詞句が文中に現れなくても、例（70）のように、[V2+N]が述語と補語の関係であれば、[V2]は[V1]の目的を表すと理解される。

(69)　tàv　ptɛ̀əh　lèeŋ　biə
行く　家　遊ぶ　トランプ
＜家に行ってトランプをする＞

(70)　tàv　lèeŋ　tɯk
行く　遊ぶ　水
＜水遊びをしに行く＞　(LSK)

以上のことから、[V1]と[V2]が直接連続する場合は、補語を共有しなければ、３．３で述べた、[V2]が[V1]を修飾している非継起的な事象と理解される。補語を共有する[V1+V2+N]型の連続は、３．１で述べた継起的な事象の連続ではあるが、[V2]の表す動作が開始される際に、[V1]の表す動作が終了している必要はない。[V1]と[V2]が直接連続せず、名詞句が介在する場合は、３．１で述べた継起的な事象と理解されると考えられる。同じ動詞の組み合わせであっても、[V1]と[V2]の間に補語となる名詞句が介在し得るか否かによって、動詞の間の意味的な関係が異なる。

４．３　[V2]の表す動作の主体

本節では、[V1]の対象が[V2]の動作の主体になる連続について考察する。すでに２章で述べたように、この種類の連続については、先行研究中（Bisang(1991:524-525)、Haiman(2011:277-279)、Self(2014:85)）で[V1]の位置には、/khàəɲ/＜見える＞、/lɯɯ/＜聞こえる＞、/ʔɔɲcàəɲ/＜招待する＞、/som/＜乞う＞、/cuoj/＜手伝う＞、/bɔɲcɛ̀ə/＜命令する＞、/bɔŋkɔəp/＜命じる＞、/bɔŋkhɔm/＜強制する＞、/praə/＜使う＞、/cuol/＜雇う＞、/prap/＜告げる＞、/hav/＜呼ぶ＞、/pdam/＜言いつける＞、/soom/＜依頼する＞、/cɔŋ/＜欲する＞、/baək/＜許可する＞、/nɔəm/＜連れる＞、/cam/＜待つ＞、/tòk/＜置く＞といった動詞が入ることが示されている。

これらの動詞のうち、不随意動詞である/khàəɲ/＜見える＞と/lɯɯ/＜聞こえる＞は、[V1]の動作の対象が何をしているか、あるいは、どのような状態にあるかを見たり聞いたりしているという補文構造であると考えられる。以下に例（71）を示す。

(71)　nèəŋ maanjaan　mɯm　khàəɲ　mɔ̀ɔk　sɔh　pii　bɔŋkɔ̀n
(人名)　(否定)　見える　来る　全く　から　便所
＜マンヤーンはトイレから出てくる様子がなかった＞　(SPT)[47]

また、/nɔəm/＜連れる＞は、[V1]の動作の主体も対象も共に移動している。以下に例（72）を示す。

(72)　ʔaa　nɔəm　puok　cao　mɔ̀ɔk
おまえ　連れる　集団　泥棒　来る
＜おまえが強盗団を連れてきた＞　(KLP)

この他に、３．２で述べた[V2]が[V1]の表す動作の結果を表す連続の一部も、[V1]の対象が[V2]の動作の主体になる連続である。

本節では、[V1]として上記の動詞を用いる連続のうち、[V1]と[V2]がいずれも随意な動作を表す動詞であり、[V1]の動作の対象が人間である連続について、どのような場合に動詞の連続が許され、どのような場合に使役を表す動詞が必要となるのかを考察する。

Bisang(1991:532-533)で、使役を表す/ʔaoj/を必要とする接続動詞としてあげた動詞のうち、/cuol/＜雇う＞[48]、/bɔŋkɔəp/＜命じる＞、/prap/＜告げる＞、/praə/＜使う＞、/hav/＜呼ぶ＞は、/ʔaoj/を用いることなく[49]、[V1]の表す動作の対象が[V2]の動作の主体になる例がある。以下に例（5, 73-76）を示す。

(5 再掲) kɔət prap kuulii laan mnɛ̀ək lə̀ək vaaliih
彼女 告げる 雑用係 車 一人 運ぶ 旅行鞄
＜彼女は鞄を運ぶようバスの係の人に言った＞ (PSP)

(73) kmèən prak cuol kèe mɔ̀ɔk stuuŋ srəv tèe
ない 金 雇う 他人 来る 植える 籾 (文末)
＜人を雇って田植えにこさせる金はない＞ (KSP)

(74) lòok srəj bɔŋkɔəp mɔ̀ɔnuh mnii mniə rɔ̀ɔk
夫人 命じる 人々 探す
＜夫人は人々に探させた＞ (SPT)

(75) praə kuulii mɔ̀ɔk cɔmrɛ̀əh smav
使う 雇い人 来る 刈る 草
＜雇人をよこして草を刈らせた＞ (PSP)

(76) ʔɔŋkaa hav baək ʔɔŋkɔɔ
組織 呼ぶ 受け取る 米
＜組織によばれて米を配給される（かもしれない）＞ (NRK)

[V1]の表す動作の対象が[V2]の動作の主体になる連続で、使役を表す/ʔaoj/が必要であるか否かは、Jacob(1993:148)が方向動詞について述べたように、文脈や文体に左右されるのだと考えられる。さらに例（77）に示すように、同じ著者の同じ著作であっても、同じ[V1]/hav/＜呼ぶ＞を用いる例で/ʔaoj/を入れる例（77）もある。このことから、/ʔaoj/があるとより規範的な印象があり、話し手、書き手がその文脈でいずれを選択するかにより使用に差が生じるのだと考えられる。

(77) puok pɛ̀ɛt daə hav nɛ̀ək cɔ̀mŋɯɯ ʔaoj tə̀v hoop bɔɔbɔɔ
医者 歩く 呼ぶ 病人 (使役) 行く 食べる 粥
＜医者は病人を呼び集め粥を食いに行かせた＞ (NRK)

先行研究中であげられていない動詞についても、使役を表す/ʔaoj/を用いることなく、[V1]の表す動作の対象が[V2]の動作の主体になる例がある。以下に例（78-81）を示す。[V1]はそれぞれ、例（78）では/truot/＜監督する＞、例（79）では/deɲ/＜追う＞、例（80）では/plah/＜換える＞、例（81）では/pɯŋ/＜頼る＞である。なお、例（79）と同じように[V1]が/deɲ/＜追う＞である例（17, 32, 66）では、動作の主体を共有する継起的な事象の連続を表していることから、特定の[V1]であれば常にこのような連続が可能になるわけではない。

(78) vèə tə̀v truot kèe baɲ tmɔɔ ʔae pnòm sɔmpə̀v
彼 行く 監督する 他人 撃つ 石 方 (地名)
＜彼はソンパウ山で砂利を採掘させるよう監督しに行った＞ (PSP)

(79) pouk kammaʔkɔɔ deɲ cao rə̀t
集団 労働者 追う 泥棒 走る
＜労働者たちは強盗を追い払った＞ (KLP)

(80) baan tə̀ɔtuol sɔmbot pii rèəckaa thom dael nə̀v pnòm pèɲ
得る 受け取る 手紙 から 政府 大きい (修飾) ある (地名)
plah look tə̀v tii kroŋ
換える 彼 行く 都市
＜（ある日スオンは、新しい仕事を担当するために）彼を首都に配置換えするというプノンペンの政府からの手紙を受け取った＞ (SPT)

(81) pɯŋ miiŋ nuon cuoj kaoh rɯt
頼る (人名) 手伝う 治療する
＜（彼は）ヌオンさんを頼って（妻の）治療をしてもらった＞ (RPH)

一方で、より命令の意味が強まる動詞/bɔɲcèə/＜命令する＞、/bɔŋkhɔm/＜強制する＞が[V1]である場合には、使役を表す/ʔaoj/が必要である。これらの動詞は、口語よりも公的な文体で用いられることが多く、/ʔaoj/を用いてより規範的にすることが好まれるのだと考えられる。以下に例（6, 82）を示す。

(6 再掲) ʔɔŋkaa bɔɲcèə ʔaoj nèək còmŋɯɯ proh tèəŋ ʔɔh ceɲ pii mə̀ntii pèɛt
組織 命令する (使役) 病人 男性 全員 出る から 病院
＜革命組織は男性患者全員に病院から出るよう命令した＞ (NRK)

(82) bɔŋkhɔm ʔaoj koon phək sraa
強制する (使役) 私 飲む 酒
＜（客が）私に酒を無理やり飲ませて（からやっと花を買ってくれた＞(KPM)

また、その動詞に複数の意味があり、読み手や聞き手に誤解を招くおそれがある場合には、/ʔaoj/が必要となる。次の例（83）では、[V1]の/baək/には＜許可する＞以外に＜ドアを開ける＞、＜車を運転する＞の意味があるため、この文が＜父がドアを開けて出ていく＞もしく

は＜運転して子どもをどこかに送っていく＞という意味に解釈される可能性がある。従って、使役を表す/ʔaoj/が必要と判断される。

(83)　baək　ʔaoj　tə̀v　plèəm
　　許可する　(使役)　行く　すぐ
　　＜（父は、子どもに）出かけることをすぐに許可した＞　(PSP)

以上のことから、[V1]が他者の行動を促す動作を意味する場合、[V1]の補語が[V2]の動作の主体となることができる。しかし、使役の動詞/ʔaoj/を標識とせずに動詞句の連続として表されるのは、文脈上誤解が生じないと判断された場合にのみに許されることであり、より公的な文体になるほど標識/ʔaoj/を介在させることで規範的にする表現が好まれるのだと考えられる。

おわりに

以上、本稿では、文中の接続語や指示詞、そしてスペースや休止を区切りとして、複数の事象が動詞句の連続として表される用例について考察した。

まず、２つの動詞句の連続を取り上げ、継起的な事象を表すか否かによって分類した後、[V1]と[V2]が主語（動作の主体）や補語（動作の対象）を共有するか、否定辞が[V1]と[V2]のいずれに付加されるか、諾否疑問文に対する１語返答が[V1]と[V2]のいずれによって可能であるか、語順を入れ替えても文の意味が変わらないかを調査した。その結果、以下の手順によって、動詞句の連続を分類することが可能であると考えられる。[V1]と[V2]の意味的な関係は、並列、結果、目的、様態に分けられる。

①　文の意味を変えずに[V1]と[V2]の語順を入れ替えることが可能な連続は、[V1]と[V2]の表す事象の並列を表す。

②　[V2]を否定できる連続は、[V2]が[V1]の結果を表す。

③　[V1]と[V2]の間に補語となる名詞句が介在できる連続[V1(+N)+V2]は、[V2]が[V1]の目的を表す。

④　[V1]と[V2]の間に補語となる名詞句が介在できない連続[V1+V2(+N)]は、

ア　動作の対象を共有する場合には、[V2]が[V1]の目的を表す。

イ　動作の対象を共有しない場合には、[V2]が[V1]の様態を表す。[V1]と[V2]の間に時間的な前後関係はない。

次に、動詞句が連続できる条件について、以下のことが明らかになった。

・語彙的な組み合わせや文脈上の制限によって、修飾関係が成り立たないと考えられる場合は動詞句が連続できない。

・語順によって修飾関係が表されるため、並列を表す連続以外では、語順を入れ替えられる場合でも[V1]と[V2]の意味的な関係が変わる。

・補語を共有する継起的な事象の連続は、[V2]の表す動作が開始される際に、[V1]の表す動作が終了しているか否かによって、補語の位置が異なる。
・同じ動詞を同じ語順で組み合わせた連続であっても、[V1]と[V2]の間に、[V1]の補語となる名詞（句）が介在し得るか否かによって、動詞の間の意味的な関係が異なる。
・先行研究で言及された動詞以外にも、使役を表す/ʔaoj/を用いることなく、[V1]の表す動作の対象が[V2]の動作の主体になる例がある。文脈上、誤解されるおそれがなければ、使役を表す動詞/ʔaoj/は必要とされない。
・しかし、公的な文体で用いられやすい一部の動詞は、/ʔaoj/を介在させた規範的な表現が好まれる。

本稿では、様態や手段を表す接続語/daoj/＜で＞は修飾関係を明示させる標識であると考えたが、動詞の組み合わせによっては、標識として動詞句の間に介在できる場合とできない場合があった。この/daoj/＜で＞をはじめ、それぞれの接続語の用法について考察することは、今後の課題としたい。

参考文献

- Bisang , Walter. (1991) "Verb serialization, grammaticalization and attractor positions in Chinese, Hmong, Vietnamese, Thai and Khmer", *Partizipation: das sprachliche Erfassen von Sachverhalten* ; pp. 509-562, edited by Hansjakob Seiler / Waldfried Premper, Gunter Narr Verlag Tübingen.
- Haiman, Jhon. (2011) *Cambodian Khmer.* London: Jhon Benjamins.
- Huffman, Franklin Eugene. (1967) *An outline of cambodian grammer.* Ann Arbor:University Microfilms.
- Jacob, Judith M. (1968) *Introduction to cambodian.* London:Oxford University Press.
- Jacob, Judith (1993) “Some observation on khmer verbal usages”, *Cambodian linguistics, literature and history : collected articles* ; pp. 140-148, edited by David A. Smyth, London:School of Oriental and African Studies, University of London.
- Khin, Sok (1999) *La grammaire du khmer moderne.* Paris:Éditions You-Feng.
- 三上直光（2015）「ベトナム語動詞連続の意味的特徴について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』46：pp.441-456.
- 峰岸真琴（1986）「クメール語の動詞連続における/baan/の意義について」『東京大学言語学論集'86』: pp. 45-57　東京大学文学部言語学研究室.
- 坂本恭章（1988）「クメール語」亀井孝、河野六郎、千野栄一（編）『言語学大辞典第１巻世界言語編（上）』: 1479-1505　三省堂.
- SELF, Stephen. (2014) "Another look at serial verb constructions in Khmer". *Mon-Khmer Studies* 43.1 ; pp.84-102 (ICAAL5 special issue).
- 上田広美（1998）「クメール語の動詞連続に関する一考察－第二動詞の動作者－」『慶

應義塾大学言語文化研究所紀要』30：pp. 53-69.
- 上田広美（2001）「クメール語の随意動詞の連続構造」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』33：pp. 1-19.

注

[1] 「カンボジア語」とも呼ばれる。オーストロアジア語族のモン・クメール語族に属す。カンボジア王国の公用語であり、同国の人口 1,400 万人の9割以上が母語話者である他、国外にも約 200 万人の使用人口がいると推定されている。活用や曲用等の語形変化が存在せず、類型論的には孤立語に分類される。基本語順は、［主語＋述語＋補語］、［被修飾語＋修飾語］、［付属語＋自立語］である。基本的に述語と補語との間に助詞は介在しないが、その述語に必須の補語ではない場合には、方向動詞など他の動詞が連続したり、前置詞が介在することがある。本稿の例文は音韻表記（坂本 1988 に従う）で示す。以下に音素一覧を示す。母音音素は、緊喉母音として、短母音（i, ɯ, u, e, ə, o, ɛ, a, ɔ）、長母音（ii, ɯɯ, uu, ee, əə, oo, aa, ɔɔ）、二重母音（iə, ɯə, uo, ae,ɔə, aə, ao）。弛喉母音として、短母音（ɛ̀, ə̀ ò, ɛ̀,ɔ̀）、長母音（ɛ̀e, ə̀ə̀, ò̀o, ɛ̀ɛ, ɔ̀ɔ）、二重母音（ɛ̀ə, ɛ̀ə）。子音音素として、 p, t, c, k, ʔ, b, d, m, n, ɲ, ŋ, v, j, r̥, l, h。

[2] 以後、前項動詞と後項動詞は、[V1]と[V2]として表記する。

[3] クメール語の動詞は時制を表す形態を用いないため、以下、本稿での用例の和訳の時制は、出典の文脈から判断した。

[4]本稿は、「東南アジア諸言語研究会」（慶應義塾大学言語文化研究所）の研究成果であり、同研究会での発表において、共同研究者から助言とコメントをいただいた。それとともに、共同研究者の研究対象である東南アジア大陸部諸言語の動詞に関する研究発表からも多くの示唆を受けた。ここに深く感謝したい。

[5] クメール語の否定辞は、否定する語の直前に付加する。名詞の否定は、/mɯn/を直接前置できず、/mɛ̀ɛn/＜本当に＞を必要とする。

[6] Haiman（2011:263-264）は、/nɯŋ/＜～するつもりだ＞は否定辞を前置できない唯一の助動詞であるとしている。

[7]否定辞がつく用例/ʔaameerik mɯn kɔmpòŋ sdap/＜(地名)＋(否定)＋(進行)＋聞く：アメリカが盗聴していない(RFI)＞もあるが、このような/kɔmpòŋ/の否定表現は英語やフランス語からの翻訳文に特徴的である。

[8] 坂本（1988: 1489）では、「それ自体は単独で用いることができず、他の特定の語」とともにしか用いることができず、「頭韻または脚韻などの韻をふんでいるものがほとんど」であるとされている。

[9] しかし、同じ動詞であっても、統語的環境や文脈によって随意性が定まると考えられる。文の主語によって随意性が変わる例をあげると、動詞/daə/は、＜人が歩く＞場合と＜機械が動く＞場合があり、後者の動作の主体には意志がない。

[10] /ʔaoj/与える、/bɔŋriən/＜教える＞、som/＜乞う＞、/kcəj/＜借りる＞、/còmpɛ̀ək/＜借金する＞は

2つの名詞を補語として後続させることも可能であるが、実際の用例中では、いずれかの名詞が、主題になったり、省略されたり、他の動詞の補語になったりしており、現れないことが多い。

[11] 補語に後置され得る助詞であり、句や節の末にも付加されるが、本稿では「文末詞」としておく。

[12] 接続語の位置に下線を付した。

[13] その語の後に休止が入る語に下線を付した。

[14] その語の後にスペースが入る語に下線を付した。

[15] 他にも結果動詞は以下のような例がある。/nèəŋ khɔm tòp mɯn cnèəh/＜彼女＋懸命に＋抑える＋(否定)＋勝つ:彼女は必死に抑えたが抑えきれなかった＞(PSP)

[16] 先行研究中でそれぞれの例文番号が付されているものもあったが、本稿に引用するにあたり、すべて例文番号を付け替えた。また、先行研究中の例には、それぞれの著者による独自の表記方法が採用されていたが、煩雑さを避けるため、以下、すべて坂本(1988)の音韻表記に統一した。また、逐語訳、全文訳ともに、日本語訳は本稿のために新たに付加したものである

[17] Huffman(1967)は否定辞を付加した例文はあげていない。

[18] この文は、名詞修飾節の始まりを示す/dael/で終わっており、修飾節は後略されているが、原文のまま引用した。

[19] 以下、否定辞を付加できる方の例のみを掲載する。

[20] 補語となる名詞句の長さによって、文中での位置が左右されるわけではない。例えば、/mɯn dəŋ bɔh kaak ʔɔmpàv nɯŋ sɔmbɔɔk sɔndaek dəj caol nàv ʔae naa/＜(否定)＋知る＋投げる＋かす＋さとうきび＋と＋殻＋ピーナツ＋捨てる＋に＋あたり＋どれ：どこにさとうきびのかすとピーナツの殻を捨てていいのかわからなかった＞(CKK)のような例がある。

[21] */deɲ kèe kap kbaal/＜追う＋他人＋切りつける＋頭＞として、[V2]が共有しない補語を付加しても[V1+N+V2+(N2)]の語順は許されない。/deɲ kap kbaal kèe/＜追う＋切りつける＋頭＋他人:追いかけて頭を切り付けた＞は可能である。

[22] 2つの補語が現れる場合にも、注(10)で示した動詞のように名詞が直接並ぶのではなく、方向動詞を入れて/baɲ kamplèəŋ tàv kèe/＜撃つ＋銃＋行く＋他人:銃を他人に撃つ＞とする必要がある。また、/baɲ/＜撃つ＞という動詞が一般には＜銃を撃つ＞ことを意味するため、補語としては、＜銃＞よりも＜撃つ相手＞が現れる頻度の方が高い。

[23] [V1+V2]で返答する方が望ましいと判断された。

[24]実際には、この文の前後の文脈から、殺し屋を雇った容疑者がおり、命を狙われた被害者は生き延びたことがわかる。

[25] 完了を表す/haəj/が後置される方が望ましいと判断された。

[26] 補文構造以外にも、副詞や前置詞句などの修飾語が続く場合には[V1+V2+N]の語順がそれほど不自然ではないと判断された。

[27] 他にも、[V1+N+V2]型の/rɔ̀ɔk sao khàəɲ/＜探す＋鍵＋見える:鍵を探して見つかった＞と、[V1+V2+N]型の/rɔ̀ɔk khàəɲ sao/＜探す＋見える＋鍵:何かを探していたら鍵が見つかった＞で

は、動作の対象が共有されているか否かが異なる。

28 （固有）名詞の後、代名詞で言い換える表現は多用される。同じ（人）物を指している。

29 実際には、最後の動詞/haəj/（完了）も含めた3つの動詞の連続である。

30 実際には、/màəl/＜見る＞の後の/tàv/＜行く＞も含めた3つの動詞の連続である。

31 /slap/＜死ぬ＞は、/klah slap prɔɔpɔ̀n klah slap pdəj/＜何人か＋死ぬ＋妻＋何人か＋死ぬ＋夫：妻を亡くしたものも、夫を亡くしたものもいた＞<NRK>のように、補語をとることがある。動詞句が連続する例としても、新聞記事の見出しで、/laan bok slap mɔ̀ɔnuh/＜車＋ぶつかる＋死ぬ＋人：交通事故で死者（3名、重傷2名）＞のように、[V2]の主体が補語の位置に現れる用例もある。

32 実際には、最後の動詞/khaan/＜欠く＞も含めた3つの動詞の連続である。

33 この質問は、死んだか否かを尋ねる場合と死因を尋ねる場合と両義的になり得る。

34 「横ずわりせずに座った」という意味で[V2]に否定辞を付けてもよいとする判断もあった。

35 動詞の組み合わせによっては、[V1]のみで1語返答してもよいと判断された。

36 実際には、最後の動詞句/bɔŋceŋ sɔmleeŋ/＜声を出す＞も含めた3つの動詞句の連続である。

37 動詞の組み合わせによっては、[V1]か[V2]のどちらかで答えてもよいという判断もあったが、揺れが大きく統一的な規則は見つからなかった。

38 その前の2つの動詞/stuh tàv/＜速める＋行く＞の語順は変えられない。

39 他に/plah pdoo/＜交換する＞も語順の入れ替えが可能である。

40 接続語/daoj/＜で＞を入れてもこの語順は不可能である。

41 もしくは/daoj saa/＜のせいで＞を用いることもある。

42 同じ質問の返答として、/lòot tɯk slap/＜跳ぶ＋水＋死ぬ＞の語順も可能である。

43 しかし[V2]の前に接続語/daoj/＜で＞を入れることはできない。

44 /daoj/を用いるか/tèəŋ/を用いるかは語彙的な選択であると考えられる。動詞の組み合わせによっては、/daoj/と/tèəŋ/を入れ替えることも可能である。

45 他に、/bɔh caol/＜（ごみを）投げ捨てる＞、/vèəj bɔmbaek/＜（家を）叩き壊す＞、/dɔh lèɛŋ/＜（彼を）釈放する＞、/tlèək tòmlèək/＜（猫を）蹴り落とす＞も、[V1+N+V2]型と[V1+V2+N]型のどちらも可能である。

46 また、/nəv lèeŋ nɯŋ ptèəh mdaaj miiŋ/＜いる＋遊ぶ＋と＋家＋叔母：叔母の家に遊びに来ている＞(BSK10)という前置詞/nɯŋ/を用いる例もある。/tàv lèeŋ/の後に人を表す名詞句がおかれる場合があるが、これは「家」を省略し、「その人（のところ）に遊びに行く」のだと考えられる。

47 この例は文体が古風であり、/nèəŋ maanjaan mɯm khə̀əɲ ceɲ pii bɔŋkòn sɔh/＜（人名）＋（否定）＋見える＋出る＋から＋便所＋全く＞の方が現代文らしいと判断されたが、本稿での議論にはかかわりがない。

48 [V1]の補語が人間でなければ、[V2]は動作の主体を共有する。/cuol ptèəh kèe nəv/＜雇う＋家＋他人＋いる：他人から家を借りて住む＞(MDB)

[49] 使役を表す/ʔaoj/を用いる場合、[V1]の動作の対象を表す補語の位置は、/ʔaoj/の前と後のどちらの場合もある。/prap ʔaoj kɲom sɔmraak/＜告げる＋(使役)＋私＋休む：(ラーさんは)私(と母)を(部屋で)休ませた＞(CKK)、/praṗ miiŋ nuon ʔaoj cam boorəj/＜告げる＋(人名)＋(使役)＋待つ：＜ヌオンに(ボライが助けに来るのを)待つように言った＞(RPH)

タイ語の動詞連続

峰岸真琴

1　はじめに
1.1　動詞連続とタイ語の動詞
1.1.1　タイ語動詞類に共通する特徴
1.1.2　動詞連続と動詞の叙述機能

2　運動および移動の表現と動詞の性質
2.1　動詞のタイプの分類
2.2　動作動詞と位置関係動詞との出現順と意味

3　主体的動作としての運動の表現
3.1　主体的な運動動作と位置関係の表現
☆ dəən 「歩く」【運動動作】
☆ wîŋ 「走る」【運動動作】
☆ piin 「登る」【運動動作】
☆ kradòot 「跳ぶ」【運動動作】
☆ khlaan 「這う」【運動動作】
☆ wâay 「泳ぐ」【運動動作】
☆ bin 「飛ぶ」【運動動作】
3.2　主体的な移動と後続する動作に関する表現
☆ ʔɔ̀ɔk 「出る」【位置関係】
☆ khûɯn 「上がる」【位置関係】
☆ pay「行く」【位置関係】

4　人による「他者への働きかけ行為」と位置関係
☆ khwâaŋ 「投げる」【運動動作】
☆ tèʔ 「蹴る，蹴飛ばす」【運動動作】
☆ klîŋ 「転がす：他動詞」【運動動作】

5　位置関係動詞のみを組み合わせた主体的移動の表現
☆ phàan 「過ぎる」【位置関係：経由地】
☆ ləəy 「過ぎる，越える」【位置関係：経由地】
☆ khâam 「横切る」【位置関係：経由地】
☆ khâw 「入る」【位置関係：空間的な着点】
☆ ʔɔ̀ɔk 「出る」【位置関係：起点】
☆ hàaŋ 「離れる」【位置関係】
☆ càak 「別れる，去る」【位置関係】
☆ thŭŋ 「到達する」【位置関係】
☆ tòk 「落ちる」【位置関係】
☆ loŋ 「降りる」【位置関係】

6　物の非主体的な移動・位置変化の表現
☆ klîŋ 「（物が）転がる：自動詞」【移動動詞】
☆ klîŋ 「（人が）転がる：自動詞」【移動動詞】
☆ lǎy 「流れる」【移動動詞】
☆ lûɯn 「（人が）滑る：自動詞」【移動動詞】

7　運動の表現に関わるその他の検討課題

7.1　運動あるいは移動とその様態を表す動詞連続

7.1.1　様態専用の自動詞を前置する

☆ rîip 「急ぐ」

7.1.2　様態専用の副詞を前置する

☆ khôy-khôy 「ゆっくりと」

7.1.3　動作時の「姿勢」を表す自動詞を前置する

☆ nâŋ 「座る」

☆ yɯɯn 「立つ」

☆ nɔɔn 「横たわる」

7.1.4　様態を表す他動詞句を用いる

☆ kôm 「(下を) 向く」

☆ ʔeen 「(身体を) 傾ける」

☆ lâak 「(物体を) 引きずる」

7.1.5　擬声語・擬態語を用いる

☆ kaphlòok-kaphlèek 「よろよろと」

8　同時に起こる２つの別々の動作を表す場合

8.1　移動と同時の別の動作を示す自動詞を用いる

☆ saʔùɯk 「しゃっくりする」

☆ hǎaw 「あくびする」

☆ caam 「くしゃみする」

8.2　pay 「行く」を用いた同時進行の表現

8.3　動詞の反復: pay-pay-maa-maa

9　考察および今後の課題

注

1　はじめに

本稿の目的は，タイ語の動詞連続（Verb Serialization あるいは Serial Verb Construction, Multi-Verb Construction とも呼ばれる）について，その構造と意味の分析を試みることである。タイ語の動詞連続にはさまざまな機能があるが，本稿では「運動」および「移動」に関する動詞連続をあつかう。なお本稿では，典型的には人間が自らの意志で行う運動動作による位置変化を「運動」と呼ぶ。一方，主として外力によって物体に生じる位置変化を「移動」と呼んで区別する。さらに両者を併せて「位置変化」と呼ぶことにする。

ことばによる「事象」の表現を分析する際には，事象全体のどこに着目して言語表現化したか，あるいはどのような局面を捨象して表現しなかったかという観点から考察することができるだろう。ある事象に関して着目されるものとしては，その事象に関わった一つあるいはそれ以上の参与者，参与者が事象に関与する際の「主体的，意図的，消極的」などの関わり方，事象の生じた「原因」あるいは事象の影響が及んだ「結果」，事象の生じた「様態」などが候補に挙げられよう。

本稿で扱う「運動」という事象の表現については，「運動」動作を意志的に行う「動作主体」，運動の「起点」あるいは「着点」，運動動作に関わる「身体部位」や道具，運動そのものあり方，つまり「様態」などが着目される点である。

一方，意志を持たない物体の「移動」については，人間や動物の積極的な働きかけを外力として生じた位置変化や，天体の移動，気象変化などの自然現象や，落下など物理的な法則に従った位置変化がある。外力による位置変化の場合は，人間の運動動作と同様，「起点」や「着点」，移動の「様態」に着目することができるほか，位置変化の原因となった外力を持つ主体にも着目できる。

以上の運動動作・移動を認識することは人間一般の認知活動の一環であり，汎言語的なものである。しかし，同じ事象の同じ着目点に関してであっても，何らかのことばの表現をまとめる段階では，個別の言語によって，用いられる表現のパターンは異なってくる。Talmy (1985) 他の提唱する「事象の合成」(event conflation)（あるいは抱合とも）という概念は，イベントの認知とその反映としての言語表現に関して生じる言語ごとの表現パターンの違いに着目するものである。Talmy の試みは，ある事象を単純な事象へと分解し，それぞれの事象が一定の言語形式として表しうるという前提から出発しようとする試みである。事象の合成とは，２つの事象要素が高次の事象を構成する場合に，例えばこれを単一の動詞句に圧縮し，高次の事象に一体化させることと定義される。英語については，高次の事象における主事象の種類に基づいて「移動 (to roll in)，アスペクト (to talk on)，状態変化 (to blow out)，協調 (to sing along with)，意図の達成 (to hunt down) 」などの分類を提案している。

本稿のタイ語の動詞連続の分析にあたっては，河内一博氏作成によるイベント統合パターンに関する調査票（以下，「イベント調査票」と呼ぶ）を参考にした [1]。この調査票は Talmy のいう，２つの単純な事象の合成 (event conflation) の分析のために作られたものである。調査項目として，[1]「運動」(translational motion)，[2] 状態変化 (state change)，[3] 実現（状態変化の特

殊な例)，[4] 時間的な輪郭づけ (temporal contouring)，[5] 動作の関連づけ (action correlating) に関わる例文が準備されている。このうち，タイ語で主として動詞連続で表されるのは，[1]「運動」と [2] の「状態変化」の一部である。

本稿の分析では，事象のそれぞれの着目点の分析をより詳しく行うために，調査票の例文に加えて，タイ人コンサルタントによる作例を必要に応じて補った。特に意味的に自然な表現を得るために，動作主体が人間である文と移動主体が物体であるものへと入れ替えたものが多い。また分析結果を整理して示すために，表現されている着目点ごとに例文の順序を変える必要があった。このため，本稿で掲げる例文の提示順は元の調査票のそれとは異なっていることをお断りしておく。

1.1 動詞連続とタイ語の動詞

タイ語の動詞連続の分析に入る前に，Bisang (1991) による動詞連続 (Verb Serialization) の形式的な定義をまず示しておく。

Verb Serialization "the unmarked juxtaposition of two or more verbs or verb phrases (with or without subject and/or object), each of which would also be able to form a sentence on its own."

この定義によれば，動詞連続は「２つあるいはそれ以上の動詞あるいは動詞句の並立」である。並列は形式上無標（等位接続詞あるいは従位接続詞などを含まない）であり，現れる動詞の形は「単文」との違いがない。この点で，例えば形式上「定動詞」対立するヨーロッパ諸言語の「分詞」や日本語の「動詞連用形」などの converb 類とは区別される。また動詞句とはいっても，それぞれの句には主語あるいは目的語を伴わなくともよいので，その最小の形は，２つの動詞の連続ということになる。

1.1.1 タイ語動詞類に共通する特徴

具体的な動詞連続の分析に先立って，タイ語の動詞のもつ一般的特徴に関する私見をここに述べておく。なおこれらは現時点での暫定的な考え方であり，今後さらに検討を加え，修正する必要がある。

一般に，タイ語の動詞類は名詞類と対立する。動詞類は否定辞 mây をその直前に置くことによって，直接否定できるが，名詞，前置詞，副詞詞などは直接否定できないことが区別の基準である。それぞれの主要な機能として，動詞は叙述を，名詞は指示機能を担う。

タイ語動詞類に見られる第一の特徴として，動詞類内部に動詞らしさの程度の差が認められることが挙げられる。

動詞の動詞らしさ 動詞のもつ意味内容により，その動詞らしさの程度は異なる。例えば，いわゆる「状態動詞」は「動作動詞」よりも意味的に動詞性が低い。このことはそれぞれの取り得るアスペクト形式の違いなどによって示すことができる。

動詞の機能と出現環境　動詞の機能は，主として文の「叙述機能」を担うことである。ただし，いったん動詞類として認定されたものであっても，その全ての出現環境で，同程度の叙述機能を持つわけではない。動詞それぞれの意味属性，統語的性質や出現環境によっても，動詞らしさの程度が異なるため，同じ動詞であっても，ある環境では動詞性が高く，別の環境では動詞性が低いということもあり得る。

ここで動詞らしさの程度の強弱を示す具体的な例として，運動と移動に関する maa 「来る」と càak 「～から，別れる」の例 (1) を見ておこう。

(1)　a. (khun)　maa　càak　nǎy
（あなた）　来る　～から　どこ
（あなたは）どこから来ましたか。

b. còt-mǎay　(maa)　càak　nǎy
手紙　（来る）　～から　どこから
手紙はどこから（来たの）？

c. khlûɯn　maa　lɛ́ɛw
（津波の）波　来る　完了
（津波の）波がやって来た。

d. chǎn　ca　mây　càak　phîi　pay　nǎy
私　未然　否定辞　別れる　あなた　行く　どこ
私はあなたと別れてどこへも行かないわよ。

(1) a では， maa 「来る」が叙述機能を担う動詞であり，後続する càak 「～から」には疑問詞 nǎy 「どこ」が後続することから，これを前置詞と見なすことができる。

(1) b は，maa を用いる場合と用いない場合がある。maa を用いると， (1) a と同様の分析ができそうに見えるが，実際は「手紙」は無生物であり，自力で運動することができない。それでもこの表現が許容されるのは「手紙は配達人が配達して届くものである」という常識が共有されているためである。手紙が届く場合，誰から誰に宛てての手紙か，いつ着いたかなどが話し手と聞き手の関心事であり，実際に郵便物を持ってきた配達人が誰かが関心を惹くことは普通ない。このため，(1) b への返事は，例えば「チェンマイから来た」などの場所だけでなく「母から，友人から，会社から」といった差出し人であることもある。

(1) b であって maa を用いずに càak のみを用いる場合， càak 自体が「手紙の位置変化を示す」という，動詞並みの叙述機能を担っているとも考えられる。このような文は，「手紙が来た」という状況を前提として，それが「どこから来たか」，あるいは「差出人が誰か」に関心を寄せている場合に用いられる。

(1) c では，無生物主語 khlûɯn 「（津波の）波」が迫ってきた場合に用いられるが，津波のような自然災害については，災害が及ぶ範囲に関心が集中し，その原因については（自然科学的な常識としては地震であろうが）普通話題に上らない。このように自然現象，災害などの影響が及ぶ場合には，それが maa の主語として現れる。

さらに (1) d では，càak は動作主を主語にとる動詞「別れる・離れる」という意味で使われ，かつ否定辞が前置されており，「別れようとはしない」という意志を表現している。このような場合，càak の動詞性が高いと考えることは自然であろう。

以上から，同じ形式 càak がその出現環境により，叙述機能を担っている動詞 maa 「来る」と共起している (1) a および (1) b の場合は「前置詞」として機能している。(1) b であっても maa が現れない場合は，叙述動詞に近い機能を持つ。さらに「未然・意志」を表す文法標識 ca および否定辞 mây に後続する (1) d の場合，動詞性が高く，それ自体が叙述機能を担っているといえよう。

1.1.2　動詞連続と動詞の叙述機能

タイ語動詞類に見られる第二の特徴として，動詞類に属する形式が２つ以上共起して動詞連続を形成することが挙げられる。ただしその場合，必ずしも最初の動詞が主動詞として叙述機能を中心的に担うとは限らず，最後の動詞が主動詞と考えられる場合があることが挙げられる。

次の動作動詞 wîŋ 「走る」および状態動詞 rew 「速い」の２つの動詞と，否定辞 mây とからなる例 (2) を見てみよう。

(2)　a. kháw　mây　wîŋ　rew
　　彼　否定辞　走る　速い
　　彼は（わざと）速くは走らない。
　　b. kháw　wîŋ　mây　rew
　　彼　走る　否定辞　速い
　　彼は（懸命に）走っても速くはない。

(2) a では動作動詞「走る」が否定されている。この場合，「速く走ること」全体が否定されていることになるため，「速く走ろうという気がなく，わざと速く走らないようにしている」という意味を表すことになる。一方，(2) b では状態動詞「速い」が否定されている。この場合，走った結果として「速くない」こと，つまり「速く走ろうとしたが，それが達成できない」ことを表すことになる。

ここで，ある動詞連続において，潜在的に否定詞を前置させることのできる動詞を，その動詞連続における**中核動詞 (core verb)** と呼ぶことにすると，「タイ語の中核動詞は動詞連続中の最初の動詞である」というように，位置のみにもとづいて定義することはできないことになる。このことは，音韻レベルでいう**固定アクセント**と**自由アクセント**の違いと対比できるかもしれない。

以上，本稿で前提とするタイ語の動詞および動詞連続についての基本的な見方を示した。以下では，特に運動と移動の表現に表れる動詞について分析を行う。

2　運動および移動の表現と動詞の性質

一般に，「言語表現」とは「ある事象をひとつのまとまった「出来事」(event) として捉え，それを個別言語の形式の組合せからなる「枠組み」の中に落とし込んだものと考えることが出来よう。タイ語の運動および移動の表現にどのような動詞が現れるかには，一定の傾向が認められる。

2.1　動詞のタイプの分類

イベント調査票を参考に作られたタイ語の「運動，移動」などの「位置変化」および「位置関係」を表す例文に出現した動詞類を，それぞれの意味に基づいて整理したものを表 1 に示す。

タイプ	含まれる意味	具体性	動詞の例
位置変化動詞	運動	高い	dəən（歩く）wîŋ（走る）piin（登る） kradòot（跳ぶ）khlaan（這う） wâay（泳ぐ）bin（飛ぶ）
	移動	高い	klîŋ（転がる）lŭɯn（滑る）lǎy（流れる）
位置関係動詞	（変化の）方向	低い	khŭn（昇る）tòk（落ちる）loŋ（下る） phàan（通る）ləəy（過ぎる）khâam（横切る） khâw（入る）ʔɔ̀ɔk（出る）taam（従う） klàp（帰る）hàaŋ（離れる） càak（別れる）thŭŋ（至る）
	ダイクシス		pay（行く）maa（来る）

表 1 ：運動あるいは移動と位置関係を表す動詞と意味の具体性

表 1 の動詞類は，まず「位置変化動詞」と「位置関係動詞」の 2 つのタイプに大別される。「位置変化動詞」は「運動動詞」および「移動動詞」とに分けられる。運動動詞は主に人や動物などの有情物が意図的に行う運動を表し，移動動詞は物体に生じる非意図的な位置の変化を表す。

タイ語の運動動詞は，主に人や動物の行う動作であるため，その意味に手足など動作に関わる身体部位あるいは移動の様態を含んでいる。ただし，運動動詞であっても物を主語にとる場合も存在する。例えば，dəən「歩く」は，一般に人が歩くという意図的動作を表すが，モーターなどの機械類を主語にとって「動く」を表すこともある。

移動動詞も動作動詞と同様に，非意図的な移動を表す動詞であるが，その意味に移動の様態を含んでいる。例えば，位置変化の主体が人や動物であっても「転がる」「滑る」などは運動動作ではなく，非意図的な位置変化，つまり移動であり，その様態描写が動詞の意味に含まれている。

一方，「位置関係動詞」は，2 つ以上の対象の占める「空間上の動的，あるいは静的な位置関係」を表す。すなわち，動的位置変化の過程を軌跡として線的にとらえたり，位置変化の結果としての静的な位置の関係に注目して表現する動詞であって，位置変化を生じる対象が意志を

持つ主体的な人間であるか，あるいは物体であるかには関与しない。従って，これらの動詞それ自体は主語として人および物のどちらも取ることができる。

位置関係動詞は，位置変化の「動き」そのものに注目する表現であるため，人の運動動作および物の移動に伴う具体的な様態を特定することはない。位置関係動詞としては，khûɯn「昇る」，tòk「落ちる」，loŋ「下る」など，従来「方向動詞」と分類されてきたもののほか，phàan「通る」など，何らかの地点を基準にとって，移動する物体の基準地点から見た相対的な位置の移動，あるいは位置変化の結果である新しい静的な位置関係を意味する動詞が含まれている。位置関係動詞のうち，特に pay「行く」，maa「来る」は，話し手あるいは聞き手とのダイクシス関係を表す点で特別なものである。

2.2 動作動詞と位置関係動詞との出現順と意味

動作動詞と位置関係動詞とが共起する場合，両者の組み合わされる語順によってその意味が異なる。

1. **運動動詞＋位置関係動詞の場合**　運動動詞が運動動作に関わる様態・身体部位を示し，位置関係動詞が運動による位置関係の変化を表す。この場合，運動動作と位置変化とはひとつのまとまった出来事としてとらえられている。
2. **位置関係動詞＋動作動詞の場合**　移動の様態に関わらず，まずは移動して，その移動先で別の動作を行うという２つの継起的な出来事をまとめて表す。

3 主体的動作としての運動の表現

運動動詞は，主に「人間あるいは動物による主体的かつ自律的な運動動作」を表す。以下の§3.1 に示すのは，運動とそれに関わる位置関係を同時に示す表現である。このような表現の参与者は，運動動作に関わる動作主体であるが，「運動・移動」の認識には，空間的な「場所」が参与者同様に重要である。運動表現における「場所」は単なる背景ではなく，存在の場であったり，移動の到着点，起点，経由地点などとして，運動の表現に関わる。

運動の表現では，先行する運動動詞が動作に関わる様態・身体部位を示し，それに続く位置関係動詞が運動に伴う位置関係の変化を表す。この場合，運動動作と位置変化とはひとつのまとまった出来事としてとらえられている。

3.1 主体的な運動動作と位置関係の表現

以下の例文では，四角括弧［A/B］でくくられた形式 A および B のうち，どちらか 1 つは選択しなければならないことを，丸括弧（　）でくくられた形式 (A) は，要素 A が随意的な要素であることをそれぞれ示すことにする。

☆ dəən「歩く」【運動動作】

(3) lɔ̀n　dəən　pay　thaaŋ　kháw
彼女　歩く　行く　方向　彼
彼女は彼の方に歩いた。【運動とその方向に言及】

dəən 「歩く」は「脚を使って」という運動の様態をその意味に含んでいる。ここでは dəən 「歩く」が運動の様態を，pay 「行く」が話し手の視点からのダイクシス的意味を示している。pay 「行く」はその補語として「場所」を必要とするが，「彼」は場所ではないので直接 pay の補語にすることはできない。「彼の方」というのは「場所，方向」なので，pay の補語にすることができる。

以下の例は，それぞれ dəən 「歩く」運動動作とその「到達場所」，「起点」，「経路」を表す例である。

(4) lɔ̀n　dəən　khâw　bâan
彼女　歩く　入る　家
彼女は家の中に歩いて入った。【運動した結果として到達した場所に言及】

(5) lɔ̀n　dəən　ʔɔ̀ɔk　(pay)　càak　(nay)　bâan
彼女　歩く　出る　（行く）　～から　（中）　家
彼女は家（の中）から歩き出た。【運動とその起点に言及】

(6) kháw　dəən　[pay/maa]　taam　thanŏn
彼　歩く　[行く／来る]　従う　道
彼はその道に沿って歩いて [行く／来る]。【運動とその経路に言及】

ただし，dəən pay taam N は「N に沿って歩く」を意味するが，pay/maa を用いずに dəən taam N とすると，「N のあたりを歩く」という，別の意味を持つことになる。taam N の taam は，前置詞として「～のあたり」という広い意味を持ち，線状に「～に沿って」という意味ではなくなるためである。

☆ wîŋ 「走る」【運動動作】

(7) mûa-waan　phûu-yǐŋ　khon-nán　wîŋ　[pay/maa]　talàat
昨日　女　類別–その　走る　[行く／来る]　市場
その女性は昨日市場に走っ（て行っ／て来）た。【運動とその着点に言及】

wîŋ「走る」は，その意味に「脚を使って」という動作の様態を含んでいる。上記の例は，この運動動作とダイクシスを表す pay 「行く」あるいは maa 「来る」を伴う例である。

(8) lɔ̀n　wîŋ　ʔɔ̀ɔk　[pay/maa]　càak　bâan
彼女　走る　出る　[行く／来る]　～から　家
彼女は家から走って出て［行っ／来］た。【運動とその起点に言及】
wîŋ「走る」が中核動詞。

☆ piin 「登る」【運動動作】

piin「登る，よじ登る」は，その意味に「手でつかまりながら（場合によっては脚も使って），落ちたり，転んだりしないように」という動作の様態を含んでいる。

(9) lɔ̀n piin phuu-khǎw lûuk-nán (khûɯn pay) thŭŋ yɔ̂ɔt
彼女 登る 山 類別–その （上る 行く） 至る 頂上
彼女はその山の頂上に登り着いた。【運動とその着点に言及】

piin 「登る」は険しい道のりを努力して「登る」あるいは「降りる」ことを意味する。「降りる」場合は方向動詞 loŋ 「下る」を伴い，piin loŋ 「下りる」として用いる。

☆ kradòot 「跳ぶ」【運動動作】

kradòot 「跳ぶ」は，「脚を使って」という動作の様態をその意味に含んでいる。

(10) lɔ̀n kradòot khâam hǐn
彼女 跳ぶ 横切る 岩
彼女は岩を跳び越えた。

☆ khlaan 「這う」【運動動作】

khlaan 「這う」は「人が腹這いで」という動作様態を意味に含んでいる。

(11) lɔ̀n khlaan pay thaaŋ tôn-máay tôn-nán
彼女 這う 行く 方向 木 類別–その
彼女はその木の方に腹這いで進んだ。【方向に言及】

「木」は場所ではないので，そのままでは pay の補語になることができないが，thaaŋ 「方向」を伴えば「木の方」という場所の意味を持つので， pay の補語になることができる。

(12) lɔ̀n khlaan khâw pay nay bâan
彼女 這う 入る 行く 中 家
彼女は家の中に腹這いで入った。【運動とその着点に言及】

(13) a. lɔ̀n khlaan ʔɔ̀ɔk (pay) càak (nay) bâan
彼女 這う 出る （行く） ～から （中） 家
彼女は家の中から腹這いで出た。【運動とその起点に言及】
b. × lɔ̀n khlaan ʔɔ̀ɔk pay (*hàaŋ) càak (nay) bâan
彼女 這う 出る 行く （離れる） ～から （中） 家
× 彼女は家の中から腹這いで（ *離れて）出た。【運動とその起点に言及】

【注意：上記の場合， hàaŋ 「離れる」を用いて “ʔɔ̀ɔk pay hàaŋ càak” とすると不適格な文となる。その理由は先行する ʔɔ̀ɔk pay 「出て行く」がすでに「ある場所から離れる」ことを含意しているので，意味が重複してしまうためと考えられる。pay を用いずに，ʔɔ̀ɔk hàaŋ càak と

してもよい。】

☆ wâay 「泳ぐ」【運動動作】

wâay 「泳ぐ」は「水の中を手足を使って」という動作の様態をその意味に含んでいる。

(14) lɔ̀n　wâay　maa　tʰaaŋ　kʰáw
彼女　泳ぐ　来る　方向　彼
彼女は彼の方に泳いで来た。【方向に言及】

(15) lɔ̀n　wâay　kʰâw　(pay　nay)　bâan
彼女　泳ぐ　入る　（行く　中）　家
彼女は家（の中）に泳ぎ込んだ。【到着点に言及】

(16) lɔ̀n　wâay　(hàaŋ)　ʔɔ̀ɔk　(pay　càak)　bâan
彼女　泳ぐ　（離れる）　出る　（行く　～から）　家
彼女は家の中から泳いで出た。【起点に言及】

☆ bin 「飛ぶ」【運動動作】

bin 「飛ぶ」は，「（鳥が）翼を使って羽ばたく」という動作の様態をその意味に含んでいる。ただし，飛行機が飛ぶ場合にも用いることができる。

(17) nók　tua-nán　bin　ʔɔ̀ɔk　(pay/maa)　càak　raŋ
鳥　類別＋その　飛ぶ　出る　（行く／来る）　～から　巣
その鳥は巣から飛び出し（て行っ／て来）た。【起点に言及】

3.2　主体的な移動と後続する動作に関する表現

動詞連続には，位置関係動詞が先行し，動作動詞が後続する場合もある。この場合，先行する位置関係動詞が移動による位置変化を表し，後続する動作動詞がその移動先で行われる別の動作を表す。両者は２つの継起的な出来事である。

２つの出来事であるとは言え，これを１つの表現にまとめているのは，「移動」とそれに続く「動作」とを単に継起的な二つの別々の出来事としてではなく，後続する動作が先行する移動の目的であると捉えているためである。言いかえれば，移動表現の背景に存在する意志的な移動動作を行う前提として，その動作の行為者が次に何を行うのかを，予め移動の目的として決めていると考えられるためである。

☆ ʔɔ̀ɔk 「出る」【位置関係】

(18) lɔ̀n　ʔɔ̀ɔk　thîaw
彼女　出る　遊ぶ
彼女は遊びに出て行った。【「家を出る」＋「遊ぶ」が継起】

☆ khûn 「上がる」【位置関係】

(19) lɔ̀n　khûn　phûut
　　彼女　上がる　話す
　　彼女は（壇上に）上がって話した。【「上がる」＋「話す」が継起】

☆ pay「行く」【位置関係】

(20) lɔ̀n　pay　rian
　　彼女　行く　学ぶ
　　彼女は勉強に（学校に）行った。【「行く」＋「学ぶ」が継起】

なお，上に挙げたそれぞれの例において，先行する位置関係動詞が想定する移動の到着点「家」「壇上」「学校」は，先行文脈から理解可能なものであるため，例文には明示されていない。場所の例としては典型的な例を挙げてある。

このように，位置関係動詞が先行し，動作動詞が後続する場合は，まずは移動して，その移動先で何らかの意図的動作を行うことを表す。その際，移動は「手段」であり，移動先での動作は，一般に移動の「目的」である。

4　人による「他者への働きかけ行為」と位置関係

一般に他動詞には２者の参与者が想定されるが，タイ語では先行文脈により動作主体あるいは動作の対象が了解可能な場合，一方あるいは両者が言語形式として談話に現れないことが多い。

以下は，第１の参与者による「第２の参与者への働きかけ行為」を表す他動詞が先行し，その結果として第２の参与者に生じた位置関係の変化を表す表現である。

☆ khwâaŋ 「投げる」【運動動作】

khwâaŋ 「投げる」は，「人間が手を使って」という意味を含んでいる。（もちろん，動作主体は人間に類する動作が可能な「猿」であってもよい。）

(21) a. lɔ̀n　khwâaŋ　lûuk–bɔɔn　khâw　(nay)　bâan　kháw
　　彼女　投げる　ボール　入る　（中）　家　彼
　　彼女はボールを彼の家に投げ込んだ。
　　b. lɔ̀n　khwâaŋ　lûuk–bɔɔn　khâw　[pay/maa]　nay　bâan　kháw
　　彼女　投げる　ボール　入る　［行く／来る］　中　家　彼
　　彼女はボールを彼の家に投げ込んだ。

☆ tè? 「蹴る，蹴飛ばす」【運動動作】

tè? 「蹴る，蹴飛ばす」は，「人間が足を使って」という意味を含んでいる。（その他，動作主

体は人間に類する動作が可能な「象」であってもよい。）

(22) lɔ̀n tèʔ lûuk–bɔɔn lûuk-nán khâam sanǎam-kiilaa (pay/maa)
彼女 蹴る ボール 類別–その 横切る 運動場 （行く／来る）
(nùŋ khráŋ / lǎay khráŋ)
（一度／何度も）
彼女はそのボールを（1 回／何度も）運動場越しに蹴った。
【注意：この例は，まだボールは運動場の中に留まっていても使うことができる表現である。】

上記の (21)「投げる」および (22)「蹴る」の場合，両者とも人間の動作を表す他動詞であり，自動詞として用いることはできない。一方，以下の klîŋ「転がす」は，他動詞として用いられるだけでなく，§6 の (38) に示すように，動く物体を主語にとる自動詞としても用いられる点で上記の動詞とは異なっている。

☆ klîŋ「転がす：他動詞」【運動動作】

(23) a. kháw klîŋ pàak–kaa khâam tóʔ [pay/maa] thaaŋ lɔ̀n
彼 転がす ペン 横切る 机 ［行く／来る］ 方向 彼女
彼はペンを机越しに彼女の方に転がした。【「彼女」が目標地点】
b. kháw klîŋ pàak–kaa khâam tóʔ lɔ̀n
彼 転がす ペン 横切る 机 彼女
彼はペンを彼女の机に転がした。
【「彼女の机」なので，その場に彼女がいなくても良い。】

5 位置関係動詞のみを組み合わせた主体的移動の表現

動作動詞を含まず，位置関係動詞のみを 2 つ以上組み合わせて動詞連続を形成することも可能である。この場合，話し手は移動動作の様態そのものには関心がなく，「位置の変化あるいはその結果としての相対的な位置関係」のみに着目した表現となっている。

このような場合，さらに意図的な動作を表す動作動詞を加えるとすれば，その動詞は以下の例文の（　）内の位置，つまり，位置関係動詞に先行する位置に置かれる。

☆ phàan「過ぎる」【位置関係：経由地】

(24) kháw (dəən) phàan tôn-máay tôn-nán pay
彼 （歩く） 過ぎる 木 類別–その 行く
彼はその木を過ぎて（歩いて）行った。

自力で運動する機械などの物体の表現も，人の場合と同様の表現をとる。

(25) rót-fay (wîŋ) phàan mùubâan hɛ̀ŋ-nán pay
汽車 （走る） 過ぎる 村 類別–その 行く
汽車はその村を（走り）過ぎた。

☆ ləəy 「過ぎる，越える」【位置関係：経由地】

(26) kháw (dəən) ləəy tôn-máay tôn-nán pay
彼 （歩く） 過ぎる 木 類別–その 行く
彼はその木を（歩いて）過ぎた。

☆ khâam 「横切る」【位置関係：経由地】

(27) a. lɔ̀n (dəən) khâam sanǎam-kiilaa-nán [pay/maa]
彼女 （歩く） 横切る 運動場–その 行く／来る
彼女はその運動場を（歩いて）横切って［行った／来た］。
b. lɔ̀n (dəən) [pay/maa] khâam sanǎam-kiilaa-nán
彼女 （歩く） 行く／来る 横切る 運動場–その
彼女はその運動場を横切るために歩いて［行った／来た］。

上掲の (27) a よりも (27) b のほうが，「横切る」が移動動作の目的であるという意味が強い表現である。

☆ khâw 「入る」【位置関係：空間的な着点】

(28) kháw khâw (pay nay) hɔ̂ŋ mɛ̂ɛ
彼 入る （行く 中） 家 母
彼は母の部屋（の中）へと入った。

☆ ʔɔ̀ɔk 「出る」【位置関係：起点】

(29) lɔ̀n (rîip) (wîŋ) ʔɔ̀ɔk (pay) càak (nay) bâan
彼女 （急ぐ） （走る） 出る （行く） ～から （中） 家
彼女は家の中から急いで（走って）出た。【起点に言及】

☆ hàaŋ 「離れる」【位置関係】

(30) lɔ̀n (dəən) hàaŋ ʔɔ̀ɔk (pay/maa) càak bâan
彼女 （歩く） 離れる 出る （行く／来る） ～から 家
彼女は家から（歩いて）離れた。【起点に言及】

(31) a. lɔ̀n (yùu) mây hàaŋ càak bâan thâwrày
彼女 （いる） 【否定辞】 離れる ～から 家 いくらも

彼女は家からいくらも離れてはいない。【起点に言及】

b. sathǎanii (yùu) mây hàaŋ càak bâan sàk-thâwrày
駅 （ある）【否定辞】 離れる ～から 家 いくらも
駅は家からそんなに離れていない。【起点に言及】

上記 (31)b のように，hàaŋ は否定辞で直接否定できるため，【基準点との】相対的な位置関係を示す動詞とも考えられる。

(32) a. kháw̄ (dəən̄) ʔɔ̀ɔk hàaŋ càak sunák tua-nán
彼 （歩く） 出る 離れる ～から 犬 類別–その
その犬から（歩いて）離れて行った。【起点に言及】

b. kháw phayaayaam [ʔɔ̀ɔk / yùu] hàaŋ càak lɛ̀ŋ-chumchon
彼 努める ［出る／居る］ 離れる ～から 人の集まる所
彼は人の集まる所から［離れる／離れている］ようにと努めた。【起点に言及】

(33) lɔ̀n (khlaan) hàaŋ (ʔɔ̀ɔk) càak tôn-máay tôn-nán
彼女 （這う） 離れる （出る） ～から 木 類別–その
彼女はその木から（腹這いで）離れた。【起点に言及】

☆ càak 「別れる，去る」【位置関係】

(34) kháw càak pay lɛ́ɛw
彼 別れる 行く 完了
彼は去った。

☆ thŭŋ 「到達する」【位置関係】

(35) kháw (piin/pay) mây thŭŋ yɔ̂ɔt-phuu-khǎw
彼 （登る／行く） 否定 到達する 山頂
彼は（山に登ったが／行ったが）山頂まで到達しなかった。

☆ tòk 「落ちる」【位置関係】

(36) dèk tòk (loŋ) pay nay lŭm
子供 落ちる （下がる） 行く 中 穴
子供が穴の中に落ちた。

☆ loŋ 「降りる」【位置関係】

(37) kháw loŋ pay thîi chán-nŭŋ
彼 降りる 行く 所 1 階
彼は 1 階に降りた。

6　物の非主体的な移動・位置変化の表現

物体には外力により非自立的運動・位置変化が生じることがある。そのような場合，移動動詞に位置変化動詞を一つ以上後続させて動詞連続を形成することで表現できる。

☆ klîŋ 「(物が) 転がる：自動詞」【移動動詞】

移動動詞 klîŋ は物を主語に取る一項の自動詞として用いるだけでなく，(23) で見たように，人を主語に取る他動詞としても用いることができる。以下は自動詞の例である。

(38) a. lûuk-bɔɔn　lûuk-nán　klîŋ　tòk
　　ボール　類別＋その　転がる　落ちる
　　そのボールは転がり落ちた。
　　b. lûuk-bɔɔn　lûuk-nán　klîŋ　tòk　loŋ　(pay/maa)　(càak　nəən-khǎw)
　　ボール　類別＋その　転がる　落ちる　下る　（行く／来る）（～から　丘）
　　そのボールは（丘から）転がり落ち（て行っ／て来）た。【起点に言及】

(39) a. lûuk-bɔɔn　lûuk-nán　klîŋ　khâw　(nay)　bâan
　　ボール　類別＋その　転がる　入る　（中）　家
　　そのボールは家（の中）へと転がった。【着点に言及】
　　b. lûuk-bɔɔn　lûuk-nán　klîŋ　khâw　(pay/maa)　nay　bâan
　　ボール　類別＋その　転がる　入る　（行く／来る）　中　家
　　そのボールは家（の中）に転がって入っ（て行っ／て来）た。【着点に言及】

☆ klîŋ 「(人が) 転がる：自動詞」【移動動詞】

自律的に動作・運動する人間あるいは動物であっても，以下の例のように，不可抗力により「物体」と同様の不作為の移動・位置変化を生じることはありうる。また，「けがをしないための柔道の技として」などといった文脈情報を加えれば，不可抗力でなく，意識的に「転がる」という場合も表すことができる。

(40) a. kháw　klîŋ　tòk
　　彼　転がる　落ちる
　　彼は転がり落ちた。
　　b. kháw　klîŋ　tòk　loŋ　(pay/maa)　(càak　nəən-khǎw)
　　彼　転がる　落ちる　下る　（行く／来る）（～から　丘）
　　彼は（丘から）転がり落ち（て行っ／て来）た。【起点に言及】

☆ lǎy 「流れる」【移動動詞】

以下の例に見るように，物体が川などの流れにより流される場合に，移動動詞 lǎy「流れる」を用いて表すが，この動詞は，流れが急なために人が流される場合にも用いることができる。文脈によっては「わざと流れに身を任せて流れる」という意味も表すことができる。

(41) a. khùat bay-nán lǎy khâw (pay nay) thâm
瓶 類別–その 流れる 入る （行く 中に） 洞窟
その瓶は洞窟に（の中へと）流れ込んだ。
b. khon nán lǎy ʔɔ̀ɔk pay càak t hâm
人 その 流れる 出る 行く ～から 洞窟
その人は洞窟から流れ出た。

☆ lʉ̂ʉn 「（人が）滑る：自動詞」【移動動詞】

lʉ̂ʉn 「滑る」は本来，誤って不可抗力で「滑る」ことを示す移動動詞である。ただし，スキー，スケートなどで自律的に「滑る」ような場合，運動動詞としても使うことができる。従って以下の場合，「滑る」が不可抗力による移動か，それとも自律的運動かは文脈によって決まる。

(42) lɔ̀n lʉ̂ʉn pay t haaŋ kháw
彼女 滑る 行く 方向 彼
彼女は彼の方へと滑った。

7 運動の表現に関わるその他の検討課題

ここまで人の「運動」および物の「移動」を表す動詞連続を中心として分析を進めてきたが，以下ではこれと関連して，「様態」の表現および「同時に行われる別の動作」の表現について補った作例について検討を行う。

7.1 運動あるいは移動とその様態を表す動詞連続

タイ語では，以下のような方法を用いて運動の様態を表すことができる。

動詞そのものに含まれる意味 「走る，跳ぶ，泳ぐ」などの身体的な運動を表す動作動詞は「動作に関わる身体部位や動作の様態」を動詞そのものの意味に含むものが多い。

主として様態を表す動詞 「急ぐ」などの様態を表す動詞は，述語として用いられるだけでなく，他の具体的動作動詞とともに，その様態を表すことができる。

姿勢を表す自動詞 「座って，立って，横たわって」などの姿勢を表す動詞を用いることで，動作の様態を副次的に表すことができる。

様態を表す他動詞句 「脚を引きずる」などの「他動詞＋目的語」という構成の動詞句を用いることで，動作の様態を副次的に表すことができる。

擬声語・擬態語 擬声語，擬態語（expressive と呼ばれることがある）を動作動詞の前後に置いて，動作の様態を表すことができる。

これらのうち，動作の基本的な様態を動詞に含む「動作動詞」については既に述べたので，以下ではそれ以外の場合について述べる。

7.1.1　様態専用の自動詞を前置する

タイ語には rîip「急ぐ」のように，さまざまな動作動詞と共存する，「様態」のみを表す自動詞がある。これらは副詞と同様の意味を持つが，否定辞 mây を前置して否定できるため，動詞と見なされる。「書く」，「する」，「行く」など，具体的な「急ぎ方」は共起する動詞によって異なる点で，「急ぐ」それ自体は動作としての具体性を表さない。これら「様態」の自動詞は，運動動詞や位置変化動詞の前に置かれる。

☆ rîip「急ぐ」

(43) lɔ̀n　rîip　(wîŋ)　pay　thaaŋ　tôn-máay　tôn-nán
彼女　急ぐ　（走る）　行く　方向　木　類別–その
彼女はその木の方に（急いだ／急いで走った）。

上記のように，rîip「急ぐ」は運動動詞「走る」に前置され，具体的な動作の様態を表す。以下は位置関係動詞に前置されて「急いで移動する」ことを表す。

(44) a. lɔ̀n　rîip　khâw　pay　nay　bâan
彼女　急ぐ　入る　行く　中に　家
彼女は急いで家の中に入った。

(45) lɔ̀n　rîip　ʔɔ̀ɔk　hàaŋ　càak　tôn-máay　tôn-nán
彼女　急ぐ　出る　離れる　別れる　木　類別–その
彼女はその木から急いで離れた。【起点に言及】

7.1.2　様態専用の副詞を前置する

以下の khɔ̂y-khɔ̂y「ゆっくりと」は，それ自体を mây で打ち消すことができない，様態を表す副詞である。

☆ khɔ̂y-khɔ̂y「ゆっくりと」

(46) b. lɔ̀n　khɔ̂y-khɔ̂y　dəən　khâw　pay　nay　bâan
彼女　ゆっくりと　歩く　入る　行く　中に　家
彼女はゆっくりと家の中に歩いて入った。

7.1.3　動作時の「姿勢」を表す自動詞を前置する

移動動作そのものではなく，「動作に伴う姿勢」あるいは「動作と同時に行う動作」も，広い意味では「動作の様態」と考えることが出来る。「姿勢」を表す自動詞は，移動動作よりも前に置かれるが，これは現実の動作の行われる順序，例えば「まず座って，それから行く」に対応

していると考えられる。

☆ nâŋ 「座る」　「座る」＋「バス」は「バスに乗る」を表す。実際は「バスに乗る」ことまでを意味しており，車中で実際に座ったか，立っていたかは特定しない。

(47) [nâŋ/ khûn] rót-thua pay
座る 上る 長距離バス 行く
長距離バスに乗って行く。

☆ yɯɯn 「立つ」

(48) a. ○ yɯɯn pay chiaŋ-mày
立つ 行く チェンマイ
立ったままチェンマイに行く
【バンコクからチェンマイへだと遠すぎて想像しづらいが，例えばチェンマイ近郊のランプーンからならＯＫ】
b. ○ yɯɯn klàp bâan
立つ 帰る 家
立ったまま家に帰る【通勤の帰宅時などの場合】

(49) a. yɯɯn pay nay rót-fay
立つ 行く 中 電車
立ったままで電車に乗って行く
b. yɯɯn nay rót-fay pay
立つ 中 電車 行く
立ったままで電車に乗って行く

(50) yɯɯn ʔàan náŋsǔɯ
立つ 読む 本
立ったままで本を読む

☆ nɔɔn 「横たわる」
yɯɯn を用いて，「立ったまま～する」は，さまざまな動作の様態を表すことができるが，nɔɔn 「横たわる」は，その姿勢で何らかの動作を行うことが少ないため，当然ながら共起できる動作の自由度が低い。ただし，タイでは夜間に長距離をバス車内の寝台で移動する「寝台バス」のサービスが発達しているため，タイ語でも「横たわって～に行く」という表現は，移動手段を表す際にしばしば用いられる。

(51) nɔɔn nay rót-thua pay
横たわる 中 長距離バス 行く
寝台バスで横になって行く

(52) a. nɔɔn　pay　nay　rót-thua
　横たわる　行く　中　長距離バス
長距離バスで横になって行く。【姿勢＋移動】
b. ？pay　nɔɔn　nay　rót-thua
　行く　横たわる　中　長距離バス
△？長距離バスで横になって行く【移動＋姿勢】

(52) b は「バスで横たわるために行く」という「目的」を表す表現のようになってしまうので，やや不自然な表現となる。

(53) a. nɔɔn　pay　chiaŋ-mày
　横たわる　行く　チェンマイ
長距離バスでチェンマイに行く
b. nɔɔn　nay　rót-thua　pay　chiaŋ-mày
　横たわる　中　長距離バス　行く　チェンマイ
長距離バスでチェンマイに行く
c. × nɔɔn　pay　chiaŋ-mày　(nay　rót-thua)
　横たわる　行く　チェンマイ　（中　長距離バス）
× 長距離バスでチェンマイに行く

(53) a の場合，寝台バス（長距離バス）あるいは寝台列車でチェンマイに行くという「手段」と「目的」を同時に表す表現である。「横たわって行く」が移動手段を表すため，(53) c のように「長距離バスの中で」という具体的な空間位置を表す表現を加えると「重複」あるいは蛇足となるため，不適格な文となる。

7.1.4　様態を表す他動詞句を用いる

様態を表す他動詞句は，原則的には移動動詞の前にも後にも置くことができる。（例外もある。）

☆ kôm「（下を）向く」

(54) a. kháw　kôm　nâa　(dəən)　pay
　彼　うつむく　顔　（歩く）　行く
彼は下を向いて，【それから】行った。【下を向いた後，顔を上げたかどうかは文脈による。】
b. kháw　dəən　kôm　nâa　pay
　彼　歩く　うつむく　顔　行く
彼は下の方を見ながら行った。【下を向いた状態が続いている。】

☆ ʔeen「（身体を）傾ける」

(55) a. kháw dəən ʔeen tua pay
彼 歩く 傾ける 身体 行く
彼は体を片側に傾かせて行った。
b. kháw ʔeen tua dəən pay
彼 傾ける 身体 歩く 行く
彼は体を片側に傾かせて行った。

☆ lâak 「(物体を) 引きずる」

(56) a. lɔ̀n (dəən) lâak khǎa hàaŋ ʔɔ̀ɔk (pay/maa) càak tôn-máay
彼女 歩く 引きずる 足 離れる 出る (行く／来る) 別れる 木
tôn-nán
類別–その
彼女は足を引きずりながらその木から歩いて離れて行った。【dəən はなくとも OK！】
b. ? lɔ̀n lâak khǎa dəən hàaŋ ʔɔ̀ɔk (pay/maa) càak tôn-máay
彼女 引きずる 足 歩く 離れる 出る (行く／来る) 別れる 木
tôn-nán
類別–その
彼女は【(切断された) 他人の？あるいは自分自身の】足を引きずりながらその木から歩いて離れて行った。【「足を引きずる」を前に置くと，先行動作と誤解されるため，例外的に移動動詞の前に置けない。】

7.1.5 擬声語・擬態語を用いる

擬声語・擬態語は，それ自体を否定辞 mây で否定することができないため，動詞とは見なさない。「様態」を表す擬声・擬態語は，原則的には動作動詞の前にも後にも置くことができる。ただし，語彙的な意味により，後ろにしか置けないものもあるが，その詳細についてはなお検討を要する。

☆ kaphlòok-kaphlèek 「よろよろと」

(57) a. lɔ̀n dəən kaphlòok-kaphlèek pay thaaŋ tôn-máay tôn-nán
彼女 歩く よろよろと 行く 方向 木 類別–その
彼女はその木の方によろめきながら歩いた。
b. lɔ̀n kaphlòok-kaphlèek dəən pay thaaŋ tôn-máay tôn-nán
彼女 よろよろと 歩く 行く 方向 木 類別–その
彼女はその木の方によろめきながら歩いた。

8　同時に起こる２つの別々の動作を表す場合

同時に起こる２つの別々の動作を表す場合，それぞれの動作を別々の動詞で示すが，これを動詞連続で表すことはできず，接続詞を用いる。これは両者に意味的な関係が認められないためと考えられる。

8.1　移動と同時の別の動作を示す自動詞を用いる

以下の「しゃっくりする」や「くしゃみする」は，たまたま他の移動動作と同時に起きていた状態であり，移動動作との関連は薄い。このため，接続詞（名詞＋関係詞）を使って表現することもできる。

☆ saʔùk 「しゃっくりする」

(58) a. lɔ̀n　saʔùk　(khanàʔ　thî i)　khâw　maa
　　彼女　しゃっくりする　（時　関係詞）　入る　来る
　　彼女はしゃっくりをしながら入ってきた。
　b. lɔ̀n　(dəən)　saʔùk　maa　ləəy
　　彼女　（歩く）　しゃっくりする　来る　過ぎる
　　彼女はしゃっくりをしながら（歩いて）きた。
　c. ×　lɔ̀n　saʔùk　dəən　maa
　　彼女　しゃっくりする　歩く　来る
　　× 彼女はしゃっくりをしながら歩いてきた。

(8. 1)a は動作動詞 khâw「入る」と共起する場合である。一方，(8.1) b はダイクシス maa「来る」が後続する場合である。この場合，ダイクシスとの間に接続詞があってはならない。また，(8. 1)c のように，「しゃっくりする」を様態の副詞並みに動詞「歩く」の前に置くことはできない。

☆ hǎaw 「あくびする」

hǎaw 「あくびする」の場合は，「しゃっくりする」のと同様である。

(59) kháw　hǎaw　khâw　maa
　　彼　あくびする　入る　来る
　　彼はあくびしながら入ってきた。

☆ caam 「くしゃみする」

caam 「くしゃみする」の場合も，上述の「しゃっくりする」と同様である。

(60) a. lɔ̀n　caam　[khanàʔ / rawàaŋ]　thîi　thaan　ʔaahǎan
　　彼女　くしゃみする　時／間　関係詞　食べる　食事

食事をしながら，彼女はくしゃみをした。

b. lɔ̀n　caam　maa　lɤɤy
彼女　くしゃみする　来る　過ぎる
彼女はくしゃみながらやってきた。

8.2　pay「行く」を用いた同時進行の表現

同時進行していても，一方が主動作，他方が様態を表すというような関係にない場合がある。このような場合，それぞれの動詞の後に機能語化した pay「行く」を後続させ（V1 pay V2 pay），同時進行の動作「～ながら～する」であることを表現する。

このような同時進行の表現では，V1 と V2 の順番を入れ替えることができる。

(61) lɔ̀n　dɤɤn　pay　rɔ́ɔŋ-hây　pay
彼女　歩く　行く【同時並行】　泣く　行く【同時並行】
彼女は泣きながら歩いている。

(62) lɔ̀n　dɤɤn　pay　cháy　thoorasàp　pay
彼女　歩く　行く【同時並行】　使う　【携帯】電話　行く【同時並行】
彼女はスマホを見ながら歩いている。

同時進行ではないが，pay「行く」と maa「来る」とを組み合わせて，それぞれ他の動詞の後に置くことにより，ダイクシスの対照を表す表現を形成することができる。

例：thoo「電話する」を用いて， thoo pay thoo maa「こちらから電話をかけたり，相手から電話がかかったりする」bɔ̀ɔk「告げる」を用いて，bɔ̀ɔk pay bɔ̀ɔk maa「こちらから言ったり，相手から言われたりする」のような例が挙げられる。

8.3　動詞の反復: pay-pay-maa-maa

タイ語では dam「黒い」を反復した dam-dam「黒っぽい」のように，状態性の動詞を反復すると，「およそ，だいたい」のような漠然とした意味を持つ。

同様に考えると，pay「行く」，maa「来る」をそれぞれ反復した pay-pay maa-maa「行ったり来たりする」なども，特定の移動の出来事を表現せずに，「回数を限定しない往復移動」を表すと考えられるかもしれない。

類例として，kin「食べる」と nɔɔn「横たわる」を組み合わせた kin-kin-nɔɔn-nɔɔn が挙げられる。この場合，意味も熟語化していて「(なまけて）ぶらぶらしている」という意味になる。これらは動詞連続というより，まとまって語彙化していると考えるべきであろう。

一方，以下の例で，hàaŋ「離れる」が反復されているのは，hàaŋ「離れる」という位置関係動詞が表す「離れる範囲，あるいは様態」がどの程度離れるか特定せず，「漠然と近寄らずに」という「非限定」を表すためと考えられるかもしれない。

(63) (yùu) hàaŋ–hàaŋ càak sunák tua-nán (náʔ)
（いる） 離れる（反復） 別れる 犬 類別–その （終助詞）
その犬から離れて（いなさい）ね！【指示】

動詞の反復についてはまだ十分な資料を収集していないため，今後「指示，示唆，依頼，命令（rew!「急いでったら！」など）の表現」とともに別に分析を進める必要がある。

9 考察および今後の課題

本稿ではタイ語の動詞連続の分析のうち，特に「位置変化」に関わるものを中心として分析を試みた。位置変化を表す動詞は，人の意志的な「運動」動作を表す動詞と物体の「移動」を表す動詞とに大別される。位置変化を表す動詞のほかに，位置関係を表す一連の動詞が存在する。本稿では位置関係を表す動詞を「位置関係動詞」と呼んで，位置変化動詞と区別した。

位置変化動詞（運動動詞および移動動詞）は，それぞれの意味に動作の「様態」を含んでいる点で，具体性が高い動詞である。

一方，位置関係動詞は，動作の方向，ダイクシス，対象物と基準点との相対的位置関係を表すだけで，様態を動詞の意味に含まないという特徴を持っている点で，具体性が低い。

本稿で分析を試みた運動・位置関係の変化を表すタイ語の動詞連続の特徴をまとめておく。

運動および位置関係を表す動詞連続では，運動動詞が先行する場合と，運動動詞を用いずに位置関係動詞だけを用いる場合がある。

「人あるいは動物の自律的運動」を表す動詞連続では，動詞の意味の具体性の高い動作動詞が先行し，具体性の低い位置関係動詞が後続する。

意味の具体性の低い位置関係動詞が先行し，その後に「動作動詞」一般が置かれる場合，まずは別の場所に移動し，移動先で移動の目的である「動作動詞」の意味する動作を行うことを意味する。

このほか，本稿で考察できなかった検討課題を以下に挙げることにする。

まず，「位置関係とその変化」を表す動詞連続について，方向動詞，ダイクシス動詞，純粋に位置関係を表す動詞あるいは前置詞というように，それぞれの意味・機能とその出現位置に基づいて，さらに分類可能かどうかという問題については，本稿では議論できなかった。

もう一つの検討課題は，「文法化」(grammaticalization) に関するものである。孤立語的なタイ語では，例えば「使役」標識 hây や「受動」標識 thùuk は，それぞれ「与える」，「当たる」という本来の動詞としても常用されており，「文法化」の結果として動詞の意味・機能を失っているわけではない。本稿で扱ういわゆる「方向動詞」pay 「行く」， maa 「来る」も同様である。従って，文法化された動詞類を非原型的な動詞連続として，原型的なものと別個に扱うという方法論は説得的とはいえない[2]。

さらなる検討課題としては，動詞連続の中に現れる動詞の意味関係に関するものがある。動詞連続は，一般に「継起」「同時」「動作と目的」といった意味を表すとされるが，他にはどのような意味関係がありうるのだろうか。

例えば状態動詞である dii 「良い」は，動作動詞句に後置されて「～するほうが良い」とい

う意味を表すと分析できるが，これは先行動詞句の表す行為事象についての「話し手の主観的評価」であり，従ってモダリティーの表現の一種であると分析することも可能である。あるいはまた，「タイ語の動詞あるいは動詞連続は，それ自体名詞と同様に動作概念そのものを表す」と考えれば，これらは名詞的な動詞（連続）に関して dii 「良い」が叙述を行っているとも分析できよう。そう考えれば，この例は動詞連続と見なす必要がなくなる。

このほか，タイ語の動詞連続は「可能・不可能」を表すこともできる。「可能・不可能」は，ある事象が成立するか，しないかに関する話し手のモダリティー的な判断を含んでおり，事象の合成という観点からは扱えない，特殊な場合と考えることができる。同様に，「動作とその結果に関する評価」は，ある事象が成立したとして，それに関する話し手の「そうしてもよい【許可・可能性】，そうしてはいけない【禁止・不可能】そうしただろうか【蓋然性】」といった判断を含む。

こうした表現が，これまでの「動詞連続」の考察や認知言語学的な「事象の合成」の調査対象項目として取り上げられてこなかったこと，つまり汎言語学な「認知言語学の観点」が及ばなかったことは，「可能・不可能」や「動作とその結果に何する評価」が，英語をはじめとする多くの近代西洋語で「法助動詞」で表現されることを考え合わせると，かえって興味深いのではないだろうか。

注

1 【謝辞】本稿の執筆のために使用した「イベント調査票」は，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で 2012 年度から 2014 年度にかけて実施された，共同研究課題「アフリカ諸語のイベントの統合のパターンに関する研究」のために，同課題の研究代表者である河内一博氏が英文で作成したものであり，その日本語訳は澤田英夫氏によるものである。タイ語母語話者のコンサルタントとして，スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン氏（Dr. Ms. Sunisa Wittayapanyanon, 東京外国語大学特任准教授，1969 年チュムポーン県生まれ，カセサート大学人文学部卒業，慶應義塾大学博士号［文学］取得）のご協力をいただいた。ここに記して深く感謝する。

2 例えば Filbeck (1975:127) は 11 の動詞が連続する実例を挙げているが，これらは構文標識化されたものを含んでいる。なお下線は本稿の筆者によるもので，翻字は本稿のものに改めてある。

prɯɯdaa khìi rót aw máay ɔ̀ɔk càak pàa klàp khûm pay sâaŋ bâan wáy pen ráan hây sùk.

‘Prida riding a truck took wood out of the forest and returned back up to build a house for a store for Sook.’

参照文献

Aikhenvald Alexandra Y.and R.M.W. Dixon (eds.) 2006. *Serial verb constructions : a cross-linguistic typology.* Oxford : Oxford University Press.

Bisang, Walter 1991. Verb serialization, grammaticalization and attractor positions in Chinese, Hmong, Vietnamese, Thai and Khmer. In Seiler H, Premper W, (eds.) *Partizipation: Das sprachliche Erfassen von Sachverhalten.* Tübingen: Narr. pp. 509–62.

Enfield, N. J. 2008. Verbs and multi-verb constructions in Lao. In Diller, Anthony V. N., Jerold A. Edmondson, and Yongxian Luo (eds.) The Tai-Kadai Languages. (Routledge language family series), 83-183. Abingdon, Oxon: Routledge.

Filbeck, David. 1975. A grammar of verb serialization in Thai. In Harris, Jimmy G. and Japes R. Chamberiain (eds) *Studies in Tai Linguistics in Honor of William J. Gedney.* pp.112-129. Bangkok: Central Institute of English Language, Office of State Universities.

Iwasaki, Shoichi and Preeya Ingkaphirom. 2005. *A Reference Grammar of Thai.* New York: Cambridge University Press.

Noss, Richard B. 1964. *Thai Reference Grammar.* Washington: Foreign Service Institute, Department of State, United States Government.

Talmy 1985. Lexicalization patterns: semantic structure in lexical forms. In Shopen, T. (ed), *Language Typology and Semantic Description. (Vol.3). Grammatical Categories and the Lexicon.* Cambridge Univ. Press. 57-149.

Thepkanjana, Kingkarn. 1986. Serial verb constructions in Thai. Ann Arbor: University of Michigan dissertation.

Thepkanjana, Kingkarn. 2006. nɯ̀ɤay-sâaŋ kariyaa-riaŋ tôn-bɛ̀ɛp nay phaasǎa thay [Prototypical serial verb constructions in Thai]. In Prasithrathsint, Amara (ed.) nɯ̀ɤay-sâaŋ thîi mii khɔ̂ɔ-khàt-yɛ́ɛŋ nay wayyaakɔɔn thay *[Controversial Constructions in Thai Grammar]* (in Thai). Bangkok: Chulalongkorn University Press.

ラオ語の二動詞連続型について

鈴木玲子

１．はじめに
　１．１．目的
　１．２．検討範囲
２．動詞連続型の分類
　２．１．先行研究
　２．２．「動詞」について
　２．３．動詞句相互間の意味関係
　２．４．動詞連続１：継起グループ
　２．５．動詞連続２：非継起グループ
３．各動詞連続型に見る特徴
　３．１．継起グループの特徴
　３．２．非継起グループの特徴
４．ラオ語における動詞連続
　４．１．意味的特徴
　４．２．構文的特徴
５．まとめ

１．はじめに

１．１．目的

ラオ語における「動詞」は、文における不可欠成分であり、叙述部分の文の中核を担う最も重要な部分である。「動詞句連続(以下、動詞連続)」とは、このような文の核を成す動詞（あるいは動詞句）が、何の機能的成分をも介在させることなく連続している形のことである。動詞の分類にもつながる「動詞連続」の検討は、東南アジアの諸言語においてさまざまな研究報告があるが、本稿では、ラオ語の動詞連続はどのような基準で使用されるか、ということについて動詞句間の意味構造より記述することを目的としたい。

１．２．検討範囲

検討に先立ち、本稿で述べる動詞連続型の範囲などについて述べておく。

まず、本稿で扱う「動詞連続型」は、動詞句は二つ、そして二つの動詞は同一動作主体の叙述に限ることとする。二つの動詞句で表される内容が独立した事象であることの他に、第二動詞が第一動詞と緊密に結合して同一主体を叙述する場合を含む。また、本稿では動詞の分類には立ち入らないことを前提とするが、動詞連続の型によっては、動詞の種類に言及しなければならないものもあ

る。ラオ語の「動詞」は補語をゼロか一つしかとらないが、その有無の対立により、補語を必要とする「他動詞」と、必要としない「自動詞」に分けられる。

第一動詞句の動詞をV1、その補語をN1、第二動詞句の動詞をV2、その補語をN2、自動詞をV、他動詞をV'とすると、本稿で扱う動詞連続の型は、「V1+V2」「V'1(+N1)+V2」「V1+V'2(+N2)」「V'1(+N1)+V'2(+N2)」[1]と書き表すことができる。

なお、「補語」とは、他動詞の後続成分で、動詞の直後に置き、動詞の意味を補う不可欠成分である（上述の型のN部分）。もちろん、場面によって既知情報であるがゆえに省略されることもある。

例文は現代小説や映画の台本から抽出した他、東南アジア諸言語研究会（慶応義塾大学言語文化研究所・三上直光先生主宰）で配布された諸資料をもとにインフォーマント調査したものを使用した。インフォーマントは、ラオス人民民主共和国ビエンチャン県出身、1984年生まれの女性で、2000年にビエンチャン都に移住し、2015年4月から東京に在住している。父は赤タイ族、母はラオ族である。例文作成の他に、さまざまなテストに対する文の使用許容度等の判断を仰いだ。

ラオ語の表記は鈴木(2013)に従う。

2．動詞連続型の分類

本章では、まず、先行研究に言及しながら本稿における「動詞」について述べる。そして、統語的テストにより動詞句間の意味関係を検討し、動詞連続型の分類を行う。

2．1．先行研究

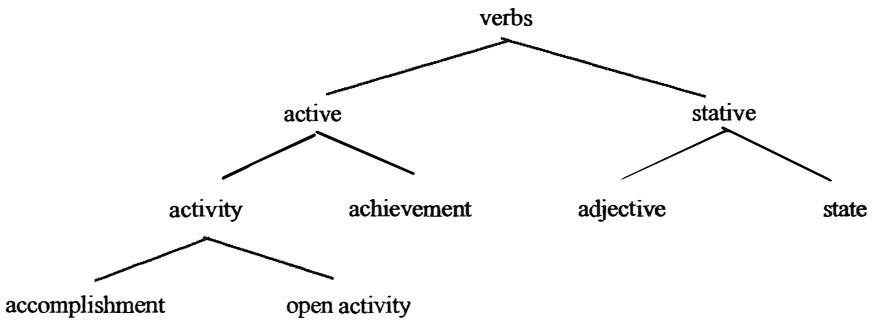
Enfield,N.J.(2008)は、「V1+V2」の組み合わせに見られるさまざまな構造を記述した。まず、動詞そのものの下位分類を意味的なテストにより分類し、次に動詞の項構造に着眼し、構成素と情報構造や個々の動詞を単位とした動詞連続の内部構造上の特徴を示した。本稿は、内部構造の細かな組み合わせではなく、1.1.で述べたように、ラオ語における動詞句間の意味関係と動詞連続がどのような基準で使用されるか、ということについて記述することに主眼を置く。

2．2．「動詞」について

Enfield, N.J.(2008)、Prasithrathsint, Amara(2010)にならって[2]、次の①～④にあてはまるものを「動詞」と認定する。

① 否定辞/bɔɔ/を前に置いて否定表現にすることができる
② 文末に疑問辞/bɔ́ɔ/を置いて諾否疑問文となる。そして肯定は「動詞」、否定は「/bɔɔ/+動詞」と諾否疑問文に対する応答文として用いることができる。
③ 動詞は/thii/による関係節における主要部を担い、名詞修飾句として機能する。
④ 後ろに直接、擬態語・擬声語を付けられる。

また、必要に応じてラオ語の動詞類を意味の観点から Enfield(2004)の下記分類基準にしたがって記述することもある。



(Enfield(2004)pp.32'FIGURE 2')

動詞を意味と統語的振る舞いの違いから大別して「動態動詞(active verb)」と「静態動詞(stative verb)」に分けている。

「動態動詞」は、動詞の意味するところの移動性、動作性を有し、行為や変化の対象を必要とし、物理的変化を伴う。その結果、出来上がったものを後続要素として述べる必要があるものもある。一方の「静態動詞」は、移動性、動作性はなく、そのためその場での変化と結果、あるいは感情移入がある動詞である。

「活動動詞(open activity)」は動作、あるいは過程だけを捉える動詞で、結果を含まず、完了的ではなく、終点の存在は必然的ではない。時間幅があり、その幅内では同一の性質を持っている。「帰結動詞(accomplishment)」は持続的・完了的な出来事で、過程を捉えると同時にその過程の結果を捉える。自然的な終結点があり、結果は状態変化を伴い、持続的である。自他交代可能動詞が含まれ、他動詞構文では継続相を表すアスペクト辞と共起して動作の進行や動作継続を表し、自動詞構文では、結果継続を表す。「達成動詞(achievement)」は動作が行われる時間幅がなく、瞬間的変化による新しい結果の状態を表す動詞である。開始点と終結点は瞬間的であるので、非持続的である。このため進行相、持続相が付加できない。「状態動詞(state)」は状態を表しており、時間的構成がない。一時的な状態として考えることが可能な感情を表すものもこの状態動詞に含まれる。「形容詞(adjective)」も時間的構成がなく、アスペクト的な捉え方もできない。比較表現を作ることができ、モダリティ表現/yuu/(居る・在る)と共起する際、「まあまあ～」の意味合いを帯びる。

２．３．動詞句相互間の意味関係

動詞連続の形には、動詞句 VP1 と動詞句 VP2 の間に両者の関係解釈が容易な何らかの意味的な関連があるからこそ、何の要素も介在させることない連続型を文法的に許容すると考える。したがって、否定辞の位置や動詞句と動詞句の間にどのような接続詞を入れることができるか、諾否疑問

文の応答文として動詞単独型が使えるかどうか等、下記①から⑥の統語的テストによる共起制限を明示し、動詞句相互間の意味関係を検討していく。

① 否定辞/bɔɔ/が入る場所はどこか
　a) bɔɔ-V1　b) bɔɔ-V2　c)/tɛɛ/(しかし)＋bɔɔ-V2
② VP1 と VP2 の間に/lɛ̂ɛw/ (それから)を置くことができる
③ VP1 と VP2 の間に/phɯa/ (ために)を置くことができる
④ 進行相/kǎmláŋ/(～しているところ)を VP1 の前に置いたとき、VP2 は
　a) 進行中である　b)進行中ではない　c)どちらでもよい・両方あり得る
⑤ VP2 の後に完了相/lɛ̂ɛw/(もう～た)を置いたとき、VP2 は
　a) 完了している　b)完了していない＝現時点でも続いている　c)どちらでもよい[3]
⑥ 文末に疑問辞/bɔ́ɔ/を置いて諾否疑問文ができる、そして動詞単独型の応答文を許す場合、その答え方はどれか
　a)V1 のみ　b)V2 のみ　c)V1+V2　d)VP1+VP2[4]

ここで⑥の諾否疑問文の応答文について考えを示しておく。

どのような形で応えるかは、使用場面において、どの部分に焦点（話し手がもっとも言いたいこと＝ここではもっとも聞きたいこと）があるかに依拠するものである。したがって、場面によって、V1 単独型、あるいは V2 単独型であったり、V1＋V2 であったり、VP1+VP2 全体を「正しい」と判断する応え方であったりと、焦点の位置によって、同じ諾否疑問文でも情報伝達の観点から応え方が異なるのは当然である。したがって、動詞単独型を許容してもそれがもっとも適切な応答文であるとは限らない。ここで見たいのは、動詞単独型も許容するかどうか、である。もし許容できる場合は、その動詞が文の主動詞として認定できると考えるからである。

上述の共起制限と VP1 と VP2 の意味関係は下表 1 のとおりである。

表 1 ：意味と共起制限の関係

VP1 と VP2 の意味関係		①	②	③	④	⑤	⑥
継起	単純連続	a,c	○	△	b	a	a, b
	VP2 が目的	a,b	○	○	b	a	a,
(擬継起)	因果関係	b,c	△	×	c	b	b,
非継起	付帯状況	a	×	×	?a	c	b, c
	並列・同時進行	a	×	×	a	a	d
	その他	a	×	×	?	c	c

（○：可能　×：不可能　△：○も×もある）

大別して「継起グループ」と「非継起グループ」に分けられる。その根拠は、「それから」という接続詞を VP1 と VP2 の間に挿入が可能か否か、ということに拠る。可能であれば「継起」、不可能であれば「非継起」である。「因果関係」は VP1「原因」と VP2「結果」の内容に時間的な背景があるかどうかによって、「それから」の挿入の可否が分かれるので、暫定的に継起グループに入れるが「(擬継起)」としたのはその由に拠る。

次節より表１により得られた動詞連続における動詞句相互間の意味関係を整理する。

２．４．動詞連続１：継起グループ

本グループに属するものとして、2.4.1.単純継起　2.4.2 目的　2.4.3.因果関係　を挙げる。

「単純継起」および「目的」は、VP1 と VP2 の生起が時間的な連続性の中での生起に基づくものである。ただし、「単純継起」は VP1 が生起した後、すぐ連続して VP2 が生起するのに対し、「目的」は VP1 が生起した後、すぐ連続して VP2 が生起するとは限らず、しばらく時間がたってから発生する場合もあれば、生起しない場合もあり得る、という点で両者は異なる。後者の「目的」は、VP1 と VP2 の間に「/phɯa/(ために)」を置くことができるので、VP2 が VP1 の目的を表すと捉えられる。次に「因果関係」は、VP1 が原因を表し、VP2 が VP1 の結果を表すと捉えられるのは、VP1 と VP2 の間に授与結果を表すマーカーである/cɯŋ/を入れて「VP1、そのゆえ VP2」と換言できるからである。「因果関係」のときは VP2 の前に「/bɔɔ/〔否定辞〕」を置くことができる点も他と異なる。また、「因果関係」は、VP1 と VP2 は必ずしも内容に時間的な背景があるとは限らないので、進行相を VP1 の前に置くと、うしろの VP2 は時間的な事象とは関係のない部分の場合、VP2 を述べるのはおかしいとなる。ただし、「単純継起」も「目的」も「因果関係」も生起するかは別として、いずれも VP2 の出現は VP1 のあとである、という点では同じであるので「継起グループ」に属するとする。このことは、本グループに属する動詞連続は、V2 が既に起こっているか否かは重要ではないが、時系列順・発生順に並べる、ということを示している。

以下に表１の結果について例文を挙げながら詳述していく。

2.4.1.単純継起

VP1 と VP2 が「単純継起」関係であると言える動詞連続には次のような特徴がある。

・否定辞が入る位置は原則として V1 の前。
・V1 と V2 の間に否定辞を置くことができない。間に/tɛɛ/(しかし)を入れれば V2 の前に否定辞を置くことができる。
・V1 と V2 の間に/lêɛw/(それから)を置くことができる。
・V1 と V2 の間に/phɯa/(ために)をほとんどの場合は置くことができない。ただし、V1 と V2 の組み合わせによって意味的に矛盾がなければ置いてもよいものもある。
・進行相/kǎmláŋ/(～しているところ)を V1 の前に置いたとき、V2 はまだ起こっていない。

・諾否疑問文の応答に V1 単独型を許す。V2 単独型も許す。

以上の特徴から次のようなことが言える。

VP1 と VP2 の間に/lêɛw/(それから)を置くことができるということは、VP1 が必ず先に生起し、その後に VP2 が生起することを示す。日本語の「V1 て V2」に相当する。VP1 と VP2 は時系列順、発生順に並んでいるおり、「V1 と V2 が連続継起する」という意味関係であるということができる。このとき、VP1 、VP2 のイベントは等価値である。なぜなら情報量の価値判断となる場面を設定しない応え方を聞くと、諾否疑問文の応え方として、V1 単独型、V2 単独型を許すからである。例えば、例(1)は VP1「手を洗う」に連続して VP2「ご飯を食べる」事象が生起するということを表している。否定辞の挿入について、VP1 と VP2 の間に何も介さずに入れるにはおかしい、となるのも、この形を許すときというのは、VP1 と VP2 が連続して生起することが大前提なので、一般には VP2 を否定するという連続は考えられない、ということに起因する。[5]

(1) **dǎm lâaŋ múɯ kǐn khàw**
ダム　洗う　手　食べる ご飯
ダムは手を洗ってご飯を食べる

2. 4.2. 目的

VP2 が VP1 の「目的」であると言える動詞連続には次のような特徴がある。

・V1 と V2 の間に否定辞を置くことができない。
・V1 と V2 の間に/phɯa/(ために)を置くことができる。/lêɛw/(それから)を置くことができる場合もある。
・進行相/kǎmláŋ/(～しているところ)を V1 の前に置いたとき、V2 はまだ起こっていない。
・諾否疑問文の応答に V1 単独型を許す。V2 単独型は許さない。

以上の特徴から次のようなことが言える。

VP1 と VP2 の間に/phɯa/(ために)を置くことができるということは、V2 は V1 の目的であることを示す。VP1 と VP2 の間に場面によっては/lêɛw/(それから)を置くことができないのは、VP2 が VP1 の後に生起するという順序については確実だが、必ずしも生起しているとは限らないためである。日本語の「V2 のために V1」に相当する。即ち、「V2 は V1 の目的を表す」という意味関係である。このとき、諾否疑問文の応え方として、V1 単独型のみを許すことから VP1 、VP2 のイベントは統語的に等価値ではなく、この型における主動詞は V1 であるということができる。例えば、例(2)は、VP1「市場へ行く」目的は VP2「物を買う」であるということを表している。

（2）**dăm pǎy talàat sûɯ khɯaŋ**

ダム　行く 市場　買う　物

ダムは市場へ買い物に行く

2.4.3.因果関係

VP1 と VP2 が「因果関係」にあると言える動詞連続には次のような特徴がある。

・V2 の前、即ち VP1 と VP2 の間に否定辞を入れることができる。
・V1 と V2 の間に時間継起的な背景があれば/lɛ̂ɛw/(それから)を置くことができる。なければ置くことはできない。
・V1 と V2 の間に/phɯa/(ために)を置くことはできない。
・進行相/kǎmláŋ/(～しているところ)を VP1 の前に置いたとき、VP2 がすでに起こっている場合とそうではない場合がある。
・諾否疑問文の答えには V2 単独型が使える。あるいは V1V2 型でもよい。

以上の特徴から次のようなことが言える。

先の「単純継起」や「目的」と大きく異なる点として、まず、諾否疑問文の応答文は V1 単独型を許さず、V2 単独型を許すという点がある。次に進行相/kǎmláŋ/(～しているところ)を VP1 の前に置いたとき、VP2 がすでに起こっている場合とそうではない場合がある、という点である。そしてこの型のみ、授与結果を表す/cɯŋ/(それゆえ)を V2 の前に入れられる、ということから VP1 が原因を表し、VP2 がその結果で全体は、「V1 の結果 V2」という意味関係であるということができる。即ちこの型は「因果関係」を表す。V2 の前に否定辞を入れられることや諾否疑問文は VP2 の結果のみか、VP1VP2 全体を聞いている、と捉えられ、応答文として V2 単独型と V1V2 型が適格とされる。例えば、

（3）**dăm kǐn khàw ʔiim**[6]

ダム　食べる ご飯 満腹だ

ダムはおなか一杯食べた

２．５．動詞連続２：非継起グループ

本グループに属するものとして、2.4.1.付帯状況　2.4.2.並列・同時進行　2.4.3.その他　を挙げる。

「付帯状況」「並列・同時進行」「その他」は、いずれも VP1 と VP2 の間に/lɛ̂ɛw/(それから)を置くことができないものである。換言すれば、VP1 と VP2 の生起が時間的に重複することなく連続して生起するのではない事象同士の動詞連続型である。この場合、VP2 の生起が VP1 の生起と時

間的に重なっていて一つの統合事象を表している場合か、互いが同時発生的であるかが考えられる。前者が「付帯状況」で、後者が「並列・同時進行」である。また、時間的な生起とは無関係で、V2 が V1 の変化を付記している場合もある。この場合を「その他」とする。つまり本グループに属する動詞連続は、V1 と V2 が既に起こっているか否かは重要ではない。時間的経緯に基づいて並べている事象の叙述でもない。

また、諾否疑問文の応え方として V1 型あるいは V2 型単独型を許容せず、V1 と V2 の両方を述べなければならない、ということも本グループの特徴である。この場合、V1 と V2 は統語的に緊密性が高く、V1 か V2 のどちらか一方が主動詞で、どちらか一方が副動詞であったり、V1 と V2 は動詞二つではなく、実は一つの複合動詞である、など、さまざまな統語関係が考えられる。

2.5.1.付帯状況

VP2 が VP1 の「付帯状況」であると言える動詞連続には次のような特徴がある。

・否定辞が入る位置は V1 の前。つまり、V1 と V2 の間に否定辞を入れることは原則としてできない。
・V1 と V2 の間に/lɛ̂ɛw/(それから)も/phɯa/(ために)も置くことができない。
・進行相を V1 に置いたとき、V2 も起こっている
・諾否疑問文の答えには、V1V2 型か「正しい」型を使う。

以上の特徴から次のようなことが言える。

VP1 が VP2 の「付帯状況」を表している場合、VP1 が条件・様態を表し、VP2 はその条件・様態によって達成される具体的なことを示している。即ち、「VP1 という条件・様態で VP2」という意味関係であると言うことができる。一見、先の「2.4.3.因果関係」と同じようであるが、V1 と V2 の間に/lɛ̂ɛw/(それから)が入れられないことから VP1 と VP2 の生起時間が完全に分離しているとは言えない点が異なる。また、/phɯa/(ために)も置くことができない、進行相を V1 の前につけると V2 も起こっている、諾否疑問文の答えには、V1V2 型を使う、という点でも「因果関係」とは異なる。

「付帯状況」に分類される動詞連続には二つのタイプがある。

一つは、自立的な V1 を使い、具体的動作である VP2 の条件、様態を V1 が表している場合である。例えば、例(4)の V1 は「シンをはく」という条件のうちに V2「踊る」ということを表している。例(5)の V1 は「飛び上がる」という様態で V2「犬の糞を横切る」ということを表している。

(4) nuŋ sìn fɔ̀ɔn
はく シン 踊る
シンをはいて踊る　　(シン；ラオス風巻きスカート)

（5）**dòot khàam khìi mǎa**

飛び上がる 横切る 糞 犬

犬の糞を飛び越える

もう一つは、単独では使用できず、常にうしろに V2 を伴う V1 タイプである。例えば、例(6)の V1 は「盗む＝こっそり行う」という所作のうちに VP2「カムディーのお菓子を食べる」ということを表しており、VP1「盗む＝こっそり行う」が VP2「カムディーのお菓子を食べる」の様態を表している。例(7)の V1 は「急ぐ」という所作のうちに VP2「病院に行く」ということを表しており、V1 は「急ぐ」が VP2「病院に行く」の様態を表している。

（6）**láaw lak kǐn khanǒm khɔ̌ɔŋ khámdǔi**

彼 盗む 食べる 菓子 [所有]カムディー

彼はこっそりカムディーのお菓子を食べた

（7）**láaw fâaw pǎy hóoŋmɔ̌ɔ**

彼 急ぐ 行く 病院

彼は急いで病院に行った

2.5.2.動作の並列・同時進行

VP1 と VP2 が「同時進行・並列」であると言える動詞連続には次のような特徴がある。

・否定辞を V2 の前に置くことができない。
・VP1 と VP2 の間に/lêɛw/(それから)も/phɯa/(ために)も置くことができない。
・進行相を V1 に置いたとき、V2 も起こっている。
・諾否疑問文の答えは VP1+VP2 型を使う。

以上の特徴から次のようなことが言える。

V1 と V2 が「並列・同時進行」という場合、「V1 と同時に V2 する」あるいは「V1 しながら V2 する」と換言できる。諾否疑問文の応答の型が VP1+VP2 型であること[7]から、VP2 は非自立的で、VP1 と合わせて一つの意味のまとまりであると捉えられる。このとき、単純に同時発生的な事象もあり得るが、VP1 と VP2 で一つの事象を表している場合もあると言えるであろう。例文調査では、この型に属するものはむしろ例(8)、例(9)のように V1 と V2 が全く切り離されず二つの動作をもって初めて成立する一つの事象を表しているものが多かった[8]。また、例(10)に示すように、単純な同時発生的な事象の場合、インフォーマントによれば、実はあまり動詞連続型を使わず(10a)、/**tháŋ**～(**pǎynám**), **tháŋ**～**pǎynám**/、/～**pǎynám**,～**pǎynám**/（～ながら～）を使う(10b,10c)ことが多いそうである。

（8）**sây bík khǐan**

使う ペン 書く

ペンで書く

（9）**ʔǎw khanǒm hày**

とる　菓子　与える

お菓子をあげる

（10a）**fáŋ withaɲuʔ hían nǎŋsǔɯ**

聴く ラジオ　勉強する 文字

ラジオを聴きながら勉強する

（10b）**tháŋ fáŋ withaɲuʔ (pǎynám), tháŋ hían nǎŋsǔɯ pǎynám**

～も 聴く ラジオ　（～ながら）～も 勉強する 文字 ～ながら

ラジオを聴きながら勉強する

（10c）**fáŋ withaɲuʔ pǎynám hían nǎŋsǔɯ pǎynám**

聴く ラジオ ～ながら 勉強する 文字 ～ながら

ラジオを聴きながら勉強する

2.5.3.その他

本節に分類できる型には次のような特徴がある。

・否定辞を V2 の前に置くことができない。
・VP1 と VP2 の間に/lɛ̂ɛw/(それから)も/phɯa/(ために)も置くことができない。
・進行相を V1 に置いたとき、V2 も起こっているかどうかということについての判定は「？」である。
・諾否疑問文の答えは V1+V2 型を使う。

以上の特徴から次のようなことが言える。

諾否疑問文の応え方として V1 型あるいは V2 型単独型を許容せず、V1 と V2 を二つ述べなければならないことから、V1 と V2 は統語的に緊密性が高く、V1 が主動詞で、V2 が副動詞という関係であったり、V2 は動詞ではなく、V1 に文法的機能を付加する機能語[9]として働いているなど、さまざまな統語関係が考えられるが、V2 が V1 の動作主体の動作に関与しているものの、V1 と同価値に直接的に動作を表しているとは言い難い型である。このような場合を「その他」とする。V1

の付属語的な性格であるため、進行相を V1 に置いたときに V2 のみについてそれが進行中であるか否かの判定自体が不明（表 1 では「？」）となるのである。このような V2 の V1 への意味役割を検討すると、V2 が V1 の変化を付記していると言える。その「変化」には、主に V1 の空間的移動方向や程度の変化を付加する場合と時間軸上の変化を付加する場合の二つがある[10]。さらにはいずれにも属さない副動詞や前置詞のような機能語的なものもある。つまり、方向や程度の変化という「物理的変化」と「時間的変化」、さらにはいずれにも属さないという三つのグループに下位分類することができる。以下にそれぞれについて述べる。

2.5.3.1.物理的変化

「V1+V2」の意味は、「V1 が V2 方向へ変化・移動する」である。VP2 によって、VP1 の動態変化・移動変化を具体的に表している。V2 に属する動詞には/pǎy/(行く)、/máa/(来る)、 /khùm/(上昇する)、 /lóŋ/(下降する)、 /khàw/(入る)、/ʔɔ̀ɔk/(出る、/ʔǎw/(要る)、/say/(入れる)等がある。V1 には移動を含意する動詞が多く含まれる。

（11）**láaw káp pǎy hɔ̀ŋ**
　　彼　戻る 行く 部屋
　　彼は部屋に戻って行った

（12）**het　kɛ̌ɛŋ　ʔǎw**
　　作る スープ　要る
　　スープを作る

（13）**ɲat khanǒm say**
　　詰める 菓子 入れる
　　お菓子を詰め込む

2.5.3.2.時間的変化

「V1+V2」の意味は、「V1 が V2 のような時間的な変化をする」である。VP2 によって、VP1 の時間的な動態変化事象を具体的に表している。即ち、V2 は一般に時間軸の変化を示し、変化値を有し得るアスペクト表現を担う語である。その中でも変化値がゼロを有する場合は V1 の継続を示すと言え、状態結果の継続を表すものもここに含める。これらには /mót/(尽きる)、 /cóp/(終える)、/tɔɔ/(続ける)、/yuu/(居る・在る)、 /kǐam/(準備する)などがある。

（14）**ʔaan mót**
　　読む　尽きる
　　読み終わった

(15) **kǐam hɔ̂ɔŋ phéeŋ**

準備する　歌う　歌

歌を歌おうとした

2.5.3.3.その他

上記のいずれにも属さない副動詞的なものを挙げておく。広い意味での「様態」である。**bəŋ**(見る), /wây/(置く)などがある。

(16) **cɯɯ khámdǐi wây**

覚える カムディー 置く

カムディーを覚えておく

(17) **sǐim bəŋ**

味見する 見る

味見してみる

３．各動詞連続型に見る特徴

第２章で分類した各動詞連続型にみる特徴を動詞の意味特徴や言語外事実に着眼しながら詳細に検討する。

３．１．継起グループの特徴

3.1.1.単純継起

まず、「VP1 の後に連続して VP2 が生起する」という単純継起についてみていく。

例(18a)から(18d)はいずれも V'1+N1+V'2+N2 の形で、VP1/**pə̀ət patǔu**/(ドアを開ける)、あるいは/**pə̀ət phàakâŋ**/(カーテンを開ける) と VP2/**khàw hɔ̀ŋ**/(部屋に入る)、あるいは/**ʔaan nǎŋsǔɯphím**/(新聞を読む)の連続継起を述べたものであるが、a)から d)にいくほど、動詞連続型は不自然で、VP1 と VP2 の間に接続詞/lɛ̂ɛw/(それから)を入れる必要度が上がる。

(18a) **dǎm pə̀ət patǔu khàw hɔ̀ŋ**

ダム 開ける ドア 入る 部屋

ダムはドアを開けて部屋に入る

(18b) **dǎm pə̀ət phàakâŋ ʔaan nǎŋsǔɯphím**

ダム 開ける カーテン 読む 新聞

ダムはカーテンを開けて新聞を読む

(18c) ?dăm pə̀ət patŭu ʔaan năŋsŭɯphím

ダム 開ける ドア　読む　新聞

ダムはドアを開けて新聞を読む

(18d) ??dăm pə̀ət phàakâŋ khàw hɔ̀ŋ

ダム 開ける カーテン 入る 部屋

ダムはカーテンを開けて部屋に入る

上から順に a)「ドアを開けて部屋に入る」b)「カーテンを開けて新聞を読む」c)「ドアを開けて新聞を読む」d)「カーテンを開けて部屋に入る」は同じような動作を表す動態他動詞句の連続表現であり、統語的な誤りはない。しかし、後者であればあるほど、二つのイベントが連続して起こる確率は低い。それに呼応するように VP1 と VP2 の間に「それから」という接続詞を入れる必要度が上がる。これは、必然的に連続して発生するイベントなのかどうか、という語用論的知識によって動詞連続型の許容度に差が生じるものだということ意外に差異が生じる要因がない。次の例(19)も同様で、(19a)「手を洗って」→「ご飯を食べる」は連続イベントとして当然のごとく容認できるが、(19b)「顔を洗って」→「ご飯を食べる」は連続イベントとして当然のこととは容認しにくいがゆえに(19b)の使用許容度が「？」となる。また、一般には「手を洗ってからご飯を食べる」ものであるが、ラオスの主食はもち米で、指先で小さく握って食べ、食後手を洗うことが習慣とされている文化的背景から、(19c)「ご飯を食べて」→「手を洗う」はかなり使用許容度が低いが、(19d)「もち米を食べて」→「手を洗う」は使用を許容するという結果となっている[11]。なお、(19c)の文に「それから」を入れた(19e)は問題なく使用できる文となる。

(19a) dăm lâaŋ mɯ́ɯ kĭn khàw

ダム 洗う　手　食べる ご飯

ダムは手を洗ってご飯を食べる

(19b) ?dăm lâaŋ nàa kĭn khàw

ダム 洗う　顔 食べる ご飯

ダムは顔を洗って手を洗う

(19c) ?dăm kĭn khàw lâaŋ mɯ́ɯ

ダム 食べる ご飯 洗う 手

ダムはご飯を食べて手を洗う

(19d) **dǎm kǐn khàwnǐaw lâaŋ múɯ**

ダム 食べる もち米　洗う 手

ダムはもち米を食べて手を洗う

(19e) **dǎm kǐn khàw lêɛw lâaŋ múɯ**

ダム 食べる ご飯[それから]洗う 手

ダムはご飯を食べてから手を洗う

VP1 と VP2 の生起に移動がある場合の例(20)も(18) (19)に同じである。(20a)「家に帰る」→「食事する」は日常的な行動パターンとして自然な流れだが、(20b)「食事する」→「家に帰る」は日常的な行動パターンとは捉えにくく、接続詞/lêɛw/(それから)を挿入すべきとされる(20c)。

(20a) **dǎm kápmúa húan kǐn khàw**

ダム　帰る　　家　食べる ご飯

ダムは家に帰ってご飯を食べる

(20b) ***dǎm kǐn khàw kápmúa húan**[12]

ダム 食べる ご飯　帰る　　家

(20c) **dǎm kǐn khàw lêɛw kápmúa húan**

ダム 食べる ご飯[それから]帰る 家

ダムはご飯を食べてから家に帰る

これらの例から VP1 の後は、容易に日常的な行動パターンとして認識できる事象ではない場合は VP2 を VP1 のあとに直接置くことはできないということが言える。このことは、例(21a)のように、「ゴザを敷いたら本を読む」ことは連続生起しにくく、(21b)「ゴザを敷いたあと、その上に座って本を読む」のように、「ゴザを敷く」と「本を読む」の間に「座る」を入れると動詞連続型が許容されることや(21c)「ゴザを敷く、その後寝る」は連続生起し得るので動詞連続型が許容されることからも明らかである。換言すれば、非日常的なパターンであるなど、文脈がない限り、

動作の継起時間が連続していないことが明白な場合は動詞連続型を許容しないのである。また、このことは、接続詞などを介在させないで動詞連続型を使用するときは、一つのまとまった統合事象として捉えて叙述している、ということを示しているとも言える。

(21a) **?dǎm pǔu sàat ?aan pûm**

ダム　敷くゴザ 読む 本

ダムはゴザを敷いて本を読む

（21b）dăm pŭu sàat naŋ ʔaan pûm

ダム　敷くゴザ　座る 読む　本

ダムはゴザを敷いて座って本を読む

（21c）dăm pŭu sàat nɔ́ɔn

ダム　敷くゴザ　寝る

ダムはゴザを敷いて寝る

以上のことから動詞連続型許容度が高まる環境を整理すると、VP1 と VP2 で表される事象が時間的連続性・物理的な整合性が高ければ高いほど、動詞連続型を許容すると言える。換言すれば、連続する事象を一つの統合事象として捉えているからこそ、単純に動詞句間を連続して置くという無標の型を使用するのである。

3.1.2.目的

次の例(22a)は、VP2 が VP1 の目的を表していると解釈できる例である。なぜなら、「それから」を入れると非文(22b)だが、「ために」を入れて VP2 を述べ、その後に VP2 のみが不成立だという文は言える(22c)からである。

（22a）dăm pǎy talàat sûɯ màakmây

ダム 行く 市場　買う　果物

ダムは市場へ行って果物を買う

（22b）*dăm pǎy talàat lɛ̂ɛw sûɯ màakmây tɛɛ bɔɔ sûɯ

ダム　行く 市場 [それから]買う　果物 [しかし][否]買う

ダムは市場へ行ってから果物を買おうとしたが、買わなかった

（22c）dăm pǎy talàat phɯa sûɯ màakmây tɛɛ bɔɔ sûɯ

ダム　行く 市場 [ために] 買う　果物 [しかし][否] 買う

果物を買うために市場へ行ったが、買わなかった

ところが次の(23a)～(26a)は「それから」(23b～26b)も「ために」(23c～26c)も挿入ができるので、一見、目的なのか、単純継起なのかが曖昧である。

（23a）tôm kay kĭn

煮る 鶏　食べる

鶏を煮込んで食べる

(23b) **tôm kay lɛ̂ɛw kǐn**

煮る 鶏 〔それから〕 食べる

鶏を煮込んで食べる

(23c) **tôm kay phɯa kǐn**

煮る 鶏 〔ために〕 食べる

鶏を煮込んで食べる

(24a) **dăm pǎy hóoŋhían phop ʔǎacǎan**

ダム 行く 学校 会う 先生

ダムは学校に行って先生に会った

(24b) **dăm pǎy hóoŋhían lɛ̂ɛw phop ʔǎacǎan**

ダム 行く 学校 〔それから〕 会う 先生

ダムは学校に行ってから先生に会った

(24c) **dăm pǎy hóoŋhían phɯa phop ʔǎacǎan**

ダム 行く 学校 〔ために〕 会う 先生

ダムは先生に会うために学校に行った

(25a) **dăm het màakbĕŋ khǎay dɔ̀ɔkmây**

ダム 作る 花器 売る 花

ダムは花器を作って花を売る

(25b) **dăm het màakbĕŋ lɛ̂ɛw khǎay dɔ̀ɔkmây**

ダム 作る 花器 〔それから〕 売る 花

ダムは花器を作ってから花を売る

(25c) **dăm het màakbĕŋ phɯa khǎay dɔ̀ɔkmây**

ダム 作る 花器 〔ために〕 売る 花

ダムは花を売るために花器を作る

(26a) **dăm het wîak caay khaahían**

ダム する 仕事 払う 授業料

ダムは仕事をして授業料を払う

(26b) **dǎm het wîak lêɛw caay khaahían**

ダム する 仕事〔それから〕払う 授業料

ダムは仕事をしてから授業料を払う

(26c) **dǎm het wîak phɯa caay khaahían**

ダム する 仕事〔ために〕払う 授業料

ダムは授業料を払うために仕事をした

一方の(27a)は単純継起に捉えやすいケースである。それゆえ、(27b)のように、(27a)の後に「しかし食べなかった」と述べるのは不自然で、もし、「食べようとしたが、食べなかった」と/kǐn/(食べる)の前に未出現相の/siʔ/を入れれば自然な文となる(27c)。また、場面によっては VP2 部分が目的であると捉えられるが、その場合も VP2 の前に/phɯa/(ために)を入れて、VP1 の目的であることを明示してから VP2 を否定する必要がある(27d)。このことは、先の「3.1.1.単純継起」の場合と同様に「目的」でも VP1 と VP2 事象は何のマーカーも介在していない場合は、一つの統合事象として述べていることを表していると言える。換言すれば、一つの統合事象として捉えていないと無標の動詞連続型は使用できないのである。

(27a) **dǎm kápmúa húan kǐn khàw**

ダム　帰る　　家　食べる ご飯

ダムは家に帰ってご飯を食べた

(27b) ***dǎm kápmúa húan kǐn khàw tɛɛ bɔɔ kǐn**

ダム　帰る　　家　食べる ご飯 〔しかし〕〔否〕食べる

ダムは家に帰ってご飯を食べようとしたが、食べなかった

(27c) **dǎm kápmúa húan siʔ kǐn khàw tɛɛ bɔɔ kǐn**

ダム　帰る　　家　[未出現相]食べる ご飯〔しかし〕〔否〕食べる

ダムは家に帰ってご飯を食べようとしたが、食べなかった

(27d) **dǎm kápmúa húan phɯa kǐn khàw tɛɛ bɔɔ kǐn**

ダム　帰る　　家　〔ために〕食べる ご飯〔しかし〕〔否〕食べる

ダムはご飯を食べるために家に帰ったが、食べなかった

次の例「ドアを開けて部屋に入る」に進行相/kǎmláŋ/を入れてみる(28)と、動作が進行している

のは VP1 の「ドアを開ける」だけであり、VP2「部屋に入る」はまだ生起していないと解釈される。つまり/kǎmláŋ/は「ドア開ける」のみにかかっている。このようなときは「単純連続継起」ではなく、「目的」と解釈されるようである。これらことから「単純連続継起」も「目的」も VP1 と VP2 は時系列に沿って並べるが、進行相/kǎmláŋ/を入れたときに後続の VP2 が発生していないのが「目的」である、と言ってよさそうである。

一方、ほとんど同じ構文である(29a)が「？」という判定であるのは、「家に帰る」という移動中を表しているのにも関わらず時間的物理的空間を隔てた「着いたあとのこと＝ご飯を食べる」を連続するかのように言うのはおかしい、ということに起因する。もし、間に「ために」が入っていれば、VP2 が目的を表すことが明示され、進行相は「家に帰る」のみにかかっていることが明白となり、(29b)のように矛盾なく言えることになる。

(28) dǎm kǎmláŋ pɔ̀ɔt patŭu khàw hɔ̀ŋ
ダム [進行相]開ける ドア 入る 部屋
ダムはドアを開けて部屋に入るところだ

(29a) ?dǎm kǎmláŋ kápmúa húan kǐn khàw
ダム [進行相] 帰る 家 食べる ご飯
ダムはご飯を食べに家に帰るところだ

(29b) dǎm kǎmláŋ kápmúa húan phɯa kǐn khàw
ダム [進行相] 帰る 家 [ために] 食べる ご飯
ダムはご飯を食べに家に帰るところだ

また、両者の比較を通じていえることは、意味的に生起の時間のずれはあるが、続けて継起しにくいものは目的に捉えやすい。その理由は、先の例(27)のところでも述べたように VP1 と VP2 が何のマーカーも介在していない場合は、「VP1＋VP2」を一つの統合事象として捉えているからである。もちろん、実際の使用場面では、どの事象に焦点があるかわかっているので、「継続」なのか「目的」なのか、曖昧な文とはなり得ない。

3.1.3.因果関係

「因果関係」は、VP1 と VP2 がそれぞれ原因と結果という内容で関連付けられている型である。原因と結果は、「ある事象が生起した結果としてある事象が生起する」と換言できるので、広域にみて継起事象と捉えることができるであろう。ただし、動詞の意味によっては時間的、物理的流れと捉えられない、即ち時間軸には関係ないものもあり、その場合は継起事象と考えられにくいこともある。

「因果関係」のV1とV2の組み合わせを見ると、V2は結果部分であるので、その多くは帰結動詞や達成動詞であることが多い。先に2.4.3.で進行相/kǎmláŋ/をVP1の前に置いたとき、VP2がすでに起こっている場合とそうではない場合があり、これは、V2 個々の動詞の意味に依拠していると思われると述べた。ここでこのことを詳細に検討するため、動詞の組み合わせをいろいろ変えて考えてみる。その結果、帰結動詞は時間幅を有する意味を持つので、/kǎmláŋ/と共起できるが、達成動詞は時間幅を有さないのが一般的であるので、/kǎmláŋ/と共起することは不可能であるとなる。また、静態動詞の状態動詞や形容詞は、そもそも一定の状態を述べた時空とは無関係の表現であるため、進行相/kǎmláŋ/を入れにくい、ということがわかった。

① V2が帰結動詞

(30a) **kǐn khàw ʔiim**

食べる ご飯 満腹だ

ご飯を食べて満腹になる

(30b) **kǎmláŋ kǐn khàw ʔiim**

[進行相] 食べる ご飯 満腹だ

ご飯を食べて満腹になっている

(31a) **kǐn làw máw**

飲む お酒 酔う

お酒を飲んで酔う

(31b) **kǎmláŋ kǐn làw máw**

[進行相]飲む お酒 酔う

お酒を飲んで酔っている

② V2が達成動詞

(32a) **patŭu lôm pháŋ**

ドア 倒れる 壊れる

ドアが倒れて壊れる

(32b) ***patŭu kǎmláŋ lôm pháŋ**

ドア [進行相] 倒れる 壊れる

(33a) **cɔ̀ɔk tók tèɛk**

コップ 落ちる 割れる

コップが落ちて割れる

(33b) ***cɔ̀ɔk kǎmláŋ tók tèɛk**

コップ [進行相]落ちる 割れる

③ V2が状態動詞

(34a) **sɔ̂ɔk hěn**

捜す 見える

見つける

(34b) ***kǎmláŋ sɔ̂ɔk hěn**

[進行相] 捜す 見える

④ V2が形容詞

(35a) **？kǐn sǐin tûy**

食べる 肉 太る

(35b) *** kǎmláŋ kǐn sǐin tûy**

[進行相]食べる 肉 太る

「因果関係」の場合もVP1とVP2が非日常的な原因と結果事象である場合は、動詞連続型を許さない。次の例(36)の「仕事をたくさんする」は「死ぬ」に対する自然な働きかけ度が低いので、授与結果を表すマーカーである/cɯŋ/（それゆえ）が必要だが、例(37)の「肉を食べる」は「太る」に対する自然な働きかけ度が高いので、/cɯŋ/（それゆえ）がなくてもよい、となる。ただし、このとき、「太る」の後ろに/khùm/(上がる)をつけて「太った」と変化を表す表現にしなければならない。

(36) **het wîak lǎay cɯŋ tǎay**

する　仕事　多い【接】死ぬ

仕事をたくさんして死んだ

(37) **kǐn sǐin tûy khùm**

食べる 肉 太る 上がる

肉を食べて太った

例えば、次の例(38a,b)は「原因：マラリアにかかる」ことによって、その結果「結果：死ぬ(38a)」は動詞連続型を許すが、「結果：病院へ行く(38b)」は直接的な働きかけを受けている動詞句とはならないため、動詞連続型は不自然だとされる。この場合は、間に/cɯŋ/(それゆえ)を入れるとよいとなる。換言すれば、/pěn khàyɲúŋ/(マラリアにかかる)は「死ぬ」に対する働きかけ度が高く、後続部分で結果を述べるのはなんら不自然ではない。一方、「病院にいく」に対する働きかけ度は低いので、動詞連続型は不自然で、間に両者の意味的関係を示す適切な接続詞が必要となる。進行相/kǎmláŋ/を VP1 の前に置くこともできない。

(38a) **dǎm pěn khàyɲúŋ tǎay**
ダムなるマラリア死ぬ
ダムはマラリアにかかって死ぬ

(38b) ***pěn khàyɲúŋ pǎy hóoŋmɔ̌ɔ**
マラリアにかかって病院へ行く

これらのことから、VP1 の VP2 への働きかけ度が高く、自然と VP2 の結果を伴うような日常的な事象、即ち先の「単純継起」や「目的」と同様に、一つの統合された事象であると認識できる場合に「因果関係」の動詞連続型を許すと言える。

３．２．非継起グループの特徴

3.2.1.付帯状況

広域にみて、VP1 が様態、手段や条件を表し、VP2 が VP1 による具体的な動作を表す、という内容で関連付けられる型である。先述の継起グループと大きく異なるのは、VP1 と VP2 の生起に時間的にずれがなく、生起時間帯が重なっている、ということである。ただし、重なっていると言っても単純に V1 と V2 が入れ替えできるわけではない。事象成立の必要条件として遂行順序があるものについては入れ替えができなし、前置される V1 として「姿勢・着脱・具体的動作を引き起こす方法や手段」等を表す動詞が挙げられることから V2 によって初めて具体的動作が示されるわけで、そういう意味で入れ替えは不可能であると言える。従って V1 が一つの単事象を表しているかどうか、それ自体が疑問であり、このようなことからも継起グループではないのである。

(39) **nop　mɯ́ɯ wày ʔǎacǎan**
合掌する 手 拝む 先生
手を合わせて先生に挨拶する

(40) **láaw lak kǐn khànǒm khɔ̌ɔŋ khámdii̦**

彼 盗む 食べる 菓子 [所有] カムディー

彼はこっそりカムディーのお菓子を食べた

(41) **láaw fâaw pǎy hóoŋmɔ̌ɔ**

彼 急ぐ 行く 病院

彼は急いで病院へ行った

(42) **láaw fàw bəŋ hǎy khàw**

彼 見張る 見る 壺 米

彼はじっと米びつを見張っている

ここで「目的」か「付帯状況」か、例文だけではわかりにくいものを挙げて両者を検討したい。例(43)(44)はVP1がVP2成立のための条件ともとれるし、VP2はVP1の目的ともとれるものである。つまり、「VP2のためにVP1」、とも「VP1という手段・条件でVP2」とも解釈できる。このように「目的」と「付帯状況」の区別は難しいものがあるが、進行相を入れることによって、その違いが明らかになる。実際の使用場面によってこれらのV1の前に進行相を入れたとき、「目的」の場合は、V2は未生起事象なので、V1のみが進行中である。一方の「付帯状況」のときはV1とVP2は同時発生的なので、V2も進行中であるという違いが生じる。

(43) **dăm bòok mɯ́ɯ ʔɔ̂ən khɔ̀y**

ダム 振る 手 呼ぶ 私

ダムは手を振って私を呼んだ

(44) **dăm nop mɯ́ɯ khɔ̌ɔthôot khɔ̀y**

ダム 合掌する 手 謝る 私

ダムは手を合わせて私に謝る

一方の(45)(46)は、「歩くことなくしては家に帰れない」し、「テレビを見ることなくしては英語の勉強ができない（テレビ学習のこと）」なので、「付帯状況」と解されるが、厳密にはVP1とVP2の生起開始時点については時間的なずれがあると考えられる。

(45) **ɲaan kápmɯ́a hɯ́an**

歩く 帰る 家

歩いて家に帰る

（46） **bəŋ thóolathat hían　pháasǎa ʔǎŋkít**

見る　テレビ　勉強する　英語

テレビを見て英語を勉強する（テレビ学習のこと）

次例(47)(48)の VP1 は VP2 の着脱を表しており、VP2 成立のための手段である。この場合も生起開始時点は VP1 の方が VP2 よりも前である。ただし、その後 VP2 も生起して、VP1 と VP2 が重複して生起しており、「付帯状況」と分類する。

（47） **nuŋ sìn fɔ̀ɔn**

はく シン 踊る

シンをはいて踊る

（48） **say mùak kiaw khàw**

かぶる 帽子 刈る 稲

帽子をかぶって稲を刈る

次例(49)(50)(51)の VP1 は VP2 の姿勢を表しており、これもまた VP2 成立のための手段である。これらの VP2 はいずれも VP1 の具体的動作であり、付帯状況である。

（49） **lɛɛn khùun khàndǎy**

走る 上がる 階段

走って階段を上がる

（50） **{naŋ/yŭɯn/nɔ́ɔn} ʔaan nǎŋsŭɯphím**

座る・立つ・寝る　読む　新聞

{座って/立って/寝て}新聞を読む

（51） **ʔɨ̌iŋ　fǎa yŭɯn**

もたれる 壁 立つ

壁にもたれて立つ

つまり、付帯状況とは、V1 は具体的動作に欠けるもので、V2 を伴うことにより初めて具体的な叙述として成立する叙述のことである。

いわゆる様態と分類できる V1 の中には V2 の前動作とは言いにくいものがあり、V1 と V2 あわせてはじめて意味をなす連動詞と捉えられるものが殆どである。これらは/coŋ/(～しなさい)を V1 単独の形の直前において、命令文が作れないことからもそれだけでは、叙述にならないもの、不完

全な叙述であるもの、ということがわかる。このような場合のV1にはどのようなものがあるかはさらなる実例収集と検討が必要であろう。本稿ではいくつか例と例文を挙げるにとどめる[13]。

1)様態：pháa(連行する), lɔ́ɔŋ(試す), suay(助ける), phaɲaɲáam(努力する), kâa(勇敢だ), fâaw(急ぐ),等
2)ムード的：yàak(欲する), tɔ̂ŋ(義務である) ,等
3)アスペクト的：lɔ̂ɔm(始める), lɔ̂ɔk(終える) ,等

(52) **dăm phaɲaɲáam hían pháasăa láaw**
ダム 努力する　勉強する 言語 ラオス
ダムは一生懸命ラオスを勉強した

(53) **dăm yàak hían pháasăa láaw**
ダム 欲する 勉強する 言語 ラオス
ダムはラオスを勉強したい

3.2.2.並列・同時進行

次の例(54)では「目を閉じる」と「音楽を聴く」が同時に行われている。

(54) **láp tăa fáŋ dŏntĭi**
閉じる目聞く音楽
目を閉じて音楽を聞く

並列・同時進行のとき、例(55)(56)のようにV1とV2が全く切り離されず一つの事象を表しているものもあれば、例(57)～(60)のようにV1とV2が個別事象として解釈でき、二つの事象が同時に生起していることを表しているものもある。前者の場合、一つの複合動詞として捉えることも可能かもしれない[14]。また、後者の場合、同時進行であればV1とV2の入れ替えが可能であると考えられるが、そのような同時発生的事象は本当にあるのか、V1とV2を入れ替えた場合、それは他の事象とならないのか、という疑問もある。しかもこの場合、実はあまり動詞連続型(57a～60a)を使わず、tháŋ～(pǎynám), tháŋ～pǎynám、～pǎynám, ～pǎynám（～ながら～）を使うこと(57b～60b)が多いし、その方が自然であるとのインフォーマントの意見であった。

(55) **ʔǎw khànŏm hày**
とる　お菓子　与える
お菓子をあげる

(56) **ŋúk hŭa phaɲak nàa**

かしげる 頭 うなづく 顔

うなづく

(57a) **?ɲûm tɔ̀ɔp khɔ̀y**

微笑む 答える 私

微笑みながら私に返事する

(57b) **tháŋ ɲûm, tháŋ tɔ̀ɔp khɔ̀y pǎy nám**

微笑む 答える 私

微笑みながら私に返事する

(58a) **?ɲûm kháp lot**

微笑む 運転する 車

微笑みながら車を運転する

(58b) **ɲûm pǎy nám, kháp lot pǎy nám**

微笑む 運転する 車

微笑みながら車を運転する

(59a) **?fɔ̀ɔn hɔ̂ɔŋ phéeŋ**

踊る 歌う 歌

踊りながら歌う

(59b) **tháŋ fɔ̀ɔn, tháŋ hɔ̂ɔŋ phéeŋ pǎy nám**

踊る 歌う 歌

踊りながら歌う

(60a) **?{maw làw/ŋǎw nɔ́ɔn} khap lot**

酔う お酒 気配がする 寝る 運転する 車

{お酒に酔って/こっくりしながら}車を運転する

(60b) **tháŋ {maw làw/ŋǎw nɔ́ɔn}, tháŋ khap lot pǎy nám**

酔う お酒 足りない 寝る 運転する 車

{お酒に酔って/こっくりしながら}車を運転する

例(61a)は同時進行して生起するかどうかは互いの関連付けが低いので、動詞連続型では同時進行と解釈するのは難しく、一般には連続継起の意味に解釈される。同時進行の場合は上の例と同様に、tháŋ～(pǎynám), tháŋ～pǎynám という慣用句を活用すべきであるとされる。以上のことから、並列・同時進行は、VP1 と VP2 に意味的な関連付けが構築できなければ、無標の動詞連続型は使えず、並列や同時進行であることを表す慣用句や副詞句を使って表すと言える。

(61a) cáp múɯ bəŋ nàa wán
握る 手 見る 顔 ワン
(ワンの)手を握ってワンを見る

(61b) tháŋ cáp múɯ tháŋ bəŋ nàa wán pǎynám
握る 手 見る 顔 ワン
(ワンの)手を握りながらワンを見る

次の例(62)～(64)は並列であるが、VP1 と VP2 の順序を入れ替えることはできない。これは慣用的な固定した言い方である。

(62a) cɔɔy sǔuŋ
痩せている 高い
痩せていて背が高い

(62b) *sǔuŋ cɔɔy
高い 痩せている

(63a) tûy tam
太っている 低い
太っていて背が低い

(63b) *tam tûy
低い 太っている

(64a) hǔa dǐicǎy
笑う 嬉しい
嬉しくて笑う

（64b）*dăm dɯ̃cǎy hǔa
嬉しい 笑う

次の例(65)～(66)では、並列表現の場合、連動動作として基盤になる方、主となる方を VP1 の位置に置く、ということを示している。

（65a）kǐn khàw kǐn làw
食べる ご飯 飲む 酒
お酒を飲みながらご飯を食べる

（65b）?kǐn làw kǐn khàw
飲む 酒 食べる ご飯
ご飯を食べながらお酒を飲む

（66a） kǐn khàw ?aan nǎŋsɯ̌ɯphím
食べる ご飯 読む 新聞
新聞を読みながらご飯を食べる

（66b）??aan nǎŋsɯ̌ɯphím kǐn khàw
読む 新聞 食べる ご飯
ご飯を食べながら新聞を読む

例(67)では認知あるいは認識のずれで V1 と V2 の順序が決まる例である。

（67a）lâak khǎa ɲaaŋ
引きずる 脚 歩く
脚を引きずりながら歩く（引きずって歩く）

（67b）ɲaaŋ lâak khǎa
引きずる 脚 歩く
脚を引きずりながら歩く（歩くのに脚を引きずっている）

3. 2. 3.その他

V2 が動作の主体者の動作そのものを表しているとはとらえにいが、VP1 の事象成立に V2 が同時的に関与して動作主体の叙述をなしている動詞連続型を「その他」として分類する。本グループは大別してさらに方向や程度の変化を表す「物理的変化」と時間軸の中での「時間的変化」といずれにも属さない三グループに下位分類することができる。

3. 2. 3. 1.物理的変化

V2 に属する動詞は一般に方向を示し、V1 に移動方向や状態に変化値を与えるものである。どのようなものがあるかは既に 2. 5. 3. 1.で述べたが、こに再掲すると、/pǎy/(行く)、/máa/(来る)、/khùm/(上昇する)、 /loŋ/(下降する)、 /khàw/(入る)、/ʔɔ̀ɔk/(出る、/ʔǎw/(要る)、/say/(入れる)等である。例えば、

(68) **láaw káp pǎy hɔ̀ŋ**

彼　戻る 行く 部屋

部屋に戻っていった

(69) **dŭŋ sûak ʔǎw**

引く　綱　とる

紐を引っ張る（手前に引き込む）

(70) **láaw ŋáam khùm**

彼女　美しい 上がる

彼女はきれいになった

これらはいずれも VP2 は VP1 の方向や程度の変化を表している。

3. 2. 3. 時間的変化

V2 に属する動詞は V1 に時間的な変化値を与えるものである。2. 5. 3. 2.で/mót/(尽きる)、/cóp/(終える)、/tɔɔ/(続ける)、/yuu/(居る・在る)、 /kiam/(準備する) など、具体的な語彙を挙げたが、これらは純粋なアスペクト辞とは言えないものが多く、語彙の意味から V1 に後置して語彙的なアスペクト表現として働いている。例えば、

(71) **láaw kǐn mót**

彼　食べる　尽きる

彼は（全部）食べてしまった（食べ尽くした）

3. 2. 3. 1では、/pǎy//máa/は、V1 にそれぞれ「離脱」「接近」という方向値を付け加えている役割を果たしているが、3. 2. 3. 2.では､それぞれ「完了」「継続」という時間値を付け加えている。例えば、例(72)の/pǎy/は「家を売ってしまった」と「売る」ことが「完了した」ことを表している。例(73)の/máa/は「保存する」ということを「継続してきた」ことを表している。

(72) **láaw khǎay hŭan pǎy**
彼　売る　家　行く
彼は家を売ってしまった

(72) **láaw haksǎa ʔǎnnûi máa**
彼　保存する　これ　来る
彼はこれを保存してきた

いずれにしても本グループに属する動詞 V2 は、本来の動詞としての意味合いが弱まり、V1 に文機能的な意味を付加する語となっている。本来の語義を保っているものもあれば、もはや動詞とは別の副詞、さらには前置詞など、機能語としてのみの語義のみを有すると考えられるものもある。

４．ラオ語における動詞連続

４．1．意味的特徴

第２章と第３章で同一主体の二動詞連続型の VP1 と VP2 の意味関係について検討した。その結果、二動詞連続型の意味的な特徴は次のようにまとめることができる。

二動詞連続型は【１】継起グループと【２】非継起グループに分かれる。

【１】 継起グループについては次のとおりである。

1. 1) VP1 と VP2 がどのような事象を表しているかという点からまとめると、継起グループの第一動詞句は「事象の様態・姿勢・条件」を、第二動詞句は「単純連続・目的」のときは「帰結」を、「因果関係」のときは「達成」を表しているということができる。さらに一歩進めて、第一動詞句は「事象の様態・姿勢・条件」を、第二動詞句は「事象の結果」を表しているということができる。

1. 2) 第一動詞句と第二動詞句は時間的連続（時系列・発生順）に沿って述べる。話し手は一つの統合的事象として認識している事象のときに無標の動詞連続型を使う。ただし語用論的に連続発生率が高いものに使い、非日常的ない行動パターンは無標の連続型表現は使えない。純然たる「動詞連続」はこの型のみである[15]。

1. 3) 第一動詞句が第二動詞句の働きかけと捉えられる場合をとくに「因果関係」とみる。この場合も語用論的に日常的な原因と結果の事象であること、即ち働きかけとその結果が自然発生的であればあるほど、動詞連続型を使用する許容度が上がる。

【２】非継起グループについては次のとおりである。
2.1) VP1 と VP2 がどのような事象を表しているかという点からまとめると、第一動詞句は「事象の前提条件・様態」を、第二動詞句は「付帯状況」や「並列・同時進行」のときは「状況・具体的内容」を、「その他」のときは「物理的・時間的変化」を表しているということができる。さらに一歩進めて、第一動詞句は「事象の前提条件・様態」を、第二動詞句は「事象が発生する環境・状況」を表しているということができる。
2.2)第一動詞句の内容は、第二動詞句によって具体的に叙述される。即ち、第一動詞句の動詞が主動詞で、第二動詞は第一動詞を叙述する情報量の高い補語（叙述部分)、あるいは副動詞であるということができる。第二動詞句は常に第一動詞句に依存、即ち修飾する役割をもって生起する。
したがって「動詞連続型」というよりは「複合動詞型」と言った方が正しいかもしれない。

４．２．構文的特徴

本稿では動詞句間の意味関係について検討し、動詞連続型の構造的な点については論じなかったので、第２章、第３章の検討を通して見えてきた構文的な知見について若干触れておくにとどめる。

一つの文における主動詞はあくまで一つであると考えられるので、二つの動詞の構文的な関係は、第一動詞が文の主動詞で、第二動詞は動詞だけではなく、さまざまな統語的役割を担う。なぜなら否定辞の位置と諾否疑問文に対する応答文を見た場合、同じ動詞でも動詞連続型の中における位置によって、動詞性が異なるという様相を呈した。そしてその際、文の左に位置すればするほど、動詞性が強く、右に位置すればするほど、動詞性が弱まるということが言えそうであった。詳細な検討は今度の課題としたい。

５．まとめ

ラオ語について、動作主が同一で、動詞句が二つ連続する型について、第一動詞句と第二動詞句の意味関係に着眼して分類を試みた。その結果、
１）日常の生起事象で時の流れに沿って生起することが自然であり、日常的で連続的であるもの
２）話し手にとって一つの統合的事象に捉えられるもの
が動詞連続型を使う大原則であることがわかった。

また、「動詞連続」といっても、純粋な動詞連続型は継起グループのみであり、非継起グループは複合動詞型と言ってよいと考えられる。

注

1)（　）は省略可能であることを表す。

2) Enfield, N.J.(2008)、Prasithrathsint, Amara(2010)は他にも「/khuwáam/あるいは/kǎan/を動詞直前において名詞となる」「動詞は直接アスペクト辞・モダリティ辞を付けられる。」「動詞は thii による関係節における主要部を担い、名詞修飾句を継続させることができる」「比較表現において、「もっとも～」である/thii sút/を後ろつけることができる」などがあるが、いずれも動詞句の下位分類に関与することであり、ここでは立ち入らない。

3)動詞の意味によって異なる、という場合を含む

4)諾否疑問文であるので、「はい」「いいえ」のみを述べれば答えとして十分なので、/câw/(はい)あるいは/bɔɔ/(いいえ)のどちらかを使う応え方や/mɛɛn/(正しい)あるいは/bɔɔ mɛɛn/(正しくはない) を使って応えることもできるが、動詞の使用の可否を検討するので、ここでは挙げないでおく。

5)逆接の「tɛɛ(しかし)」を VP2 の前に入れれば使用できる。

6)/ʔiim ʔiim/と 2 回繰り返す方がよい。

7)他に/mɛɛn/(正しい)型もよいとされる。

8) /námpháa/(率いる＋連行する→導く)、/phophěn /(会う＋見える→見つける)などは、第一動詞と第二動詞には別々の意味があり、単独で使用することもあるが、このように二つ連続した形になると、分離することができない。このような場合、現時点では、従来は別々の自立的な動詞であったものが結合して一語の動詞となった形と考えるが、詳細な検討は今後の課題とする。

9)「機能語」とは、文法的機能を持ち、単独では意味をなさず、文中においてはじめて意味をなす付属語的成分のことである。例えば「前置詞」などがこれに相当する。

10)V2 が/bəŋ(見る)/のように、いずれにも属さないものがあるが、便宜上「その他」に入れる。

例）ʔaan bəŋ　（読む＋見る）→　「読んでみる」

11)使用許容度が低いと判定された c)も VP1 と VP2 の間に/lêɛw/(それから)という接続詞を入れると使用できる。

12)*は非文の意味。

13)/hày/(与える)を使った使役構文もここに属するものとして考えられるが、使役・受身構文については今回は検討しない。

14)本稿では厳密に二動詞連続と複合動詞の両者を別個のものとしてその違いを記述するまでに至らなかった。今後の課題である。

15) V1 と V2 が限定的な組み合わせもあり、V1+/lêɛw/(それから) + V2 と/lêɛw/を介在させることができる V1V2 とそれができない限定的な組み合わせ V1V2 があるはずである。このことについては稿を改めて検討したい。

参考文献

Enfield, N.J.(2004)"Adjectives in Lao" in Adjective classes:a cross-linguistic typology, edited by R.M.W.Dixon and A.Y.Aikhenvald, Oxford University Press, pp.323-347

Enfield, N.J.(2008)"Verbs and multi-verb constructions in Lao" in The Tai-Kadai Languages, edited by Anthony V.N.Diller and others, Routledge, pp.83-183

Enfield,N.J. (2007) "Lao separation verbs and the logic of Linguistic event categorization" Cognitive Linguistics, 18(2), pp.287-296

Enfield,N.J. (2007) "A grammar of Lao" Mouton de Gruyter

Prasitharathsint, Amara(2010) "*chanit khoang kham nay phaasaa Thai*" (in Thai), Chulalongkorn University Press, Bangkok

影山太郎編(2013)「複合動詞研究の最先端　ー謎の解明に向けて」ひつじ書房

沈　力(2000)「中国語とタイ語の動詞連続構文における文法範疇ー中タイ領言語には方向範疇があるのか」『言語文化』3-2, pp.113-144, 同志社大学言語文化学会

鈴木玲子(2013)「ラオ語の動詞句」『東南アジア大陸部諸言語の動詞句』pp.184-242, 東南アジア諸言語研究会編　慶應義塾大学言語文化研究所

三上直光(2015)「ベトナム語動詞連続の意味的特徴について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 46 号:pp.441-456 慶應義塾大学言語文化研究所

峰岸真琴(2006)「動詞連続と言語理論の諸前提」東ユーラシア言語研究会編『東ユーラシア言語研究』第 1 集 pp.191-211, 好文出版

ビルマ語の動詞連続

～動作的な動詞を中心に～

岡野賢二

目次

1. はじめに
2. ビルマ語の動詞
    2.1 動詞の定義
    2.2 複合的な構造を持つ動詞
        2.2.1 NV 型動詞
        2.2.2 複合動詞
    2.3 助動詞
3. 本稿におけるビルマ語動詞連続の定義
4. 動詞連続(1) 動詞連続内の動詞がいずれも語彙的な意味をある程度保持している場合
    4. 1 意味的な特徴
    4.2 統語的な特徴
5. 動詞連続(2) 語彙的な意味が薄まった後接動詞（V_2）＝補助動詞
    5.1 補助動詞概観
    5.2 補助動詞 *ṯwá* と *là*
6. 動詞連続(3) 語彙的な意味が薄まった前接動詞（V_2）＝副詞的動詞
    6.1 副詞的動詞概観
    6.2 副詞的動詞として用いられる移動動詞の意味
7. 動詞連続(4) 使役を表す *pé-*「与える」
8. まとめ

Appendix: Okell and Allott (2000) の Pre-Verb、藪(1992) の挿入動詞、岡野(2007) の副詞的動詞
注
参考文献

1. はじめに [i) ii)]

ビルマ語で動詞要素が統語的に 2 つ以上連続して一つの節の述部として現れる現象である。このような現象についての報告はかなり多くなされており（Okell 1969、澤田 1988、藪 1992 など）、かなり解明されてきていると行ってよいであろう。本稿はビルマ語の動詞連続について先行研究で指摘されていなかったいくつかの現象を報告し、動詞連続の外観をすることを目的としている。対象とする動詞は、基本的に元々動作的な意味内容を持つもののみに限定することにする。

一つの節の中に 2 つ以上の動詞要素が連続する例を見てみよう。

(1) a. *ʔămèrîkàɴ=nàiɴgàɴ=hmà* ***ṯwá-yauʔ-nè-tʰàiɴ-ʔălouʔ-louʔ****-pí* *pyìɴɲà* *ṯìɴcá=ḳʰɛ̂=ṭɛ̀.*

America=country=LOC go-arrive-stay-sit-job-work=~*and* education learn=AUX=VS:RLS

アメリカに行って（そこに）滞在して仕事をしながら勉学に取り組んだ。

b. ***hyíɴ-líɴ-tìɴ-pyâ****=ḳʰɛ̂=ṗà=ṭɛ̀.*

clear-bright-load-show=AUX=PLT=VS.RLS

説明し提示した。

a.では少なくとも見た目上は *ṯwá-*「行く」、*yauʔ-*「至る」、*nè-*「住む」、*tʰàiɴ-*「座る」、*(ʔălouʔ)louʔ-*「仕事をする」という 5 つの動詞が、b.では *hyíɴ-*「はっきりしている」、*líɴ-*「明るい」、*tìɴ-*「積む」、*pyâ-*「示す」という 4 つの動詞が一つの述部の中の動詞の位置に現れている。

このように動詞形態が、それを結び付ける明示的な形式なしに一つの節の述語内に連続して現れるケースはビルマ語ではしばしば観察されるが、一方で二つの動詞形態素が結合してできる複合動詞は単独の形態素として見なされるしかるべき理由がある。

ビルマ語は述語末尾型言語であり、東アジアから東南アジア大陸部言語に多い VO 型言語の動詞連続では動詞句（VO）が連続する形式が一般的だが、ビルマ語の場合 O を伴う連続「O_1 V_1 -O_2 V_2」はほとんど見られない。特に O が特定性や個別性の高い名詞句の場合はそれが起こらないと考えてよいであろう。

本稿の構成は以下の通り。第 2 節では「ビルマ語の動詞」について定義する。これは主に岡野（2010）に基づくが、新しい議論もある。第 3 節では本稿におけるビルマ語の動詞連続をどのように定義するかについて議論する。第 4 節は内容語が連続するタイプ、第 5 節、6 節では動詞連続に現れる一方の動詞要素が、それに対応する行為や事態が可能世界にない

---

i) 本稿は東京外国語大学大学院博士後期課程の Thuzar Hlaing 氏（ヤンゴン出身、女性）および、補助的にヤンゴン大学国文学科 3 年（当時）で東京外国語大学に留学をしていた Phu Ngon Kyaw Myint さん（パテイン出身、女性）、Eaint La Pyae Win さん（ヤンゴン出身、女性）、Hanni Soe さん（ヤンゴン出身、女性）、ダゴン大学英語学科講師で東京外国語大学大学院の研究生 Thwe Hnin Yi Hlaing 氏（ヤンゴン出身、女性）にご協力いただいた。ここに感謝の意を表します。なお本稿のビルマ語例文、およびその記述や分析の責任の一切は筆者にある。

ii) 本稿の音声表記は岡野（2010）に従った。また略号については基本的に Leipzig Glossing Rules に従う。これに含まれない略号として VVD がある。これは藪（1992）の用語「活写法 vividitive」である。

タイプ、言い換えると一方の動詞要素が「文法化」タイプを扱う。第 5 節はそれが内容語より後ろに現れる場合、第 6 節では内容語より前に現れる場合を見る。第 7 節では補足的な記述、第 8 節でまとめをする。

2. ビルマ語の動詞

2.1 動詞の定義

ビルマ語は形態変化に極めて乏しい言語であり、語類の分類にはある特定の語との共起の有無、あるいは分布がほぼ唯一の基準と言ってよい。動詞も同様である。

ビルマ語の語はおおざっぱに自立語（語）と付属語（辞）に分かれる[1]。自立語には少なくとも名詞（N）と動詞（V）が認められる[2]。名詞と動詞は開いたクラスである。

動詞は以下のような分布的特徴を持っている。

(2) 動詞の分布的特徴

A. 法標識（mood marker）が後接する

B. 否定辞が前接する

C. 従属節標識（dependent claus emarker）が後接する

D. 名詞化（副詞化を含む）の派生接辞[3]が付加される

A. 法標識には動詞文標識（verb s entencemarker）、限定節標識（attributive claus emarker）、名詞節標識（nominal claus emarker）の 3 種類がある[4,5]。主な法標識は以下の通りである。

(3) ビルマ語の法標識

		非現実		現実			
		発話行為	情報交換				
		要求	叙想	叙実	思慮	瞬間[6]	活写
VS.	肯定	-φ	-mɛ̀	-tɛ̀	-yɛ̂	-yɔ́	
	否定	-nɛ̂	-pʰú				-pì
NC.	肯定／否定		-hmà	-tà			
AC.	肯定／否定		-mɛ̂	-tɛ̂			

以上のうち VS.と NC.は文述語となり得る。NC.はさらに名詞節の主要部として埋め込み文となることがある。AC.は基本的に主節たり得ない。

B. 否定の接頭辞 *mă-*が結合し得るのは動詞のみ、というよりも、*mă-*が結合するものを動詞と見なす[7]。

名詞形態と動詞形態からなる複合的な構造を持つ動詞、いわゆる NV 動詞（次項参照）がビルマ語には数多くある。形態素としては二つだが、語義素としては全体で一つである。このような NV 動詞が否定される場合、動詞要素の前に否定の接頭辞 *mă-*が付くのが本来正しい用法である。しかしいくつかの NV 動詞は NV 全体の前に否定辞が現れるケースがある。このような用法ではもはや NV 動詞の内部構造は意識されなくなり、全体として一

形態素の動詞になっていると見なすのがよいであろう。

e.g. nálè-「理解する」< *ná*「耳」＋ *lè-*「回る」

⇒ *ná+**mǎ**-lè-*（NV 動詞） *vs.* ***mǎ**-nálè-*（一動詞形態素）

このほか、臨時動詞については岡野（2010）を参照のこと。

C. 従属節標識は動詞に接続する[8]。主な従属節は以下の通り。

(4) ビルマ語の従属節標識

形式	意味	極性		法		名詞(節)の接続
		肯定	否定	現実	非現実	
-pí	継起「～て」	○	×	○	○	×
-lô	単純接続「～て」	○	×	○	△	×
	理由「～ので」	○	○	○	△	×
-pèmê(lô)	逆接「たが」	○	○	○	△	○
-hmâ	必要十分条件「～てはじめて」	○	○	×	○	△
-yìɴ	仮定・条件「～ならば」	○	○	×	○	×
-tɔ̂	場面設定「～ると」	○	×	×	○	×
	条件「～ると」	○	○	×	○	×
-ʔaùɴ(lô)	目標「～するよう」	○	○	○	△	×
-pʰé(nê)	非付随「～せず(に)」	×	○	○	○	×
繰り返し[9]	譲歩「～しようと」	○	○	×	○	×

このうち動詞連続を考える上で重要なのは*-pí*〈継起〉と*-lô*〈単純接続〉である。*-pí*〈継起〉については次節以降で触れることにする[10]。

D. 名詞化（副詞化を含む）には派生接辞によるものと畳語形式 reduplication 等がある。

派生接辞には接頭辞*ʔǎ-*、接尾辞*-cʰíɴ*、*-pʰô*[11]等がある[12]。接頭辞*ʔǎ-*は動名詞 gerund を派生し、接尾辞*-cʰíɴ* は出来事名詞、接尾辞*-pʰô* は未確定の出来事名詞やモノ名詞を派生する。畳語形式は統語的に副詞的要素として現れるか、もしくは名詞の直後に現れる同格名詞要素として現れる形式である（藪 1992:580）。

e.g. *mǒhíngá* ***káuɴgáuɴ*** *cʰɛʔ=taʔ=tɛ̀.* モヒンガーを<u>上手に</u>作ることができる。
mohinga good«REDUP» cook=able=VS:RLS

mǒhíngá ***káuɴgáuɴ*** *sá=ç̀ʰìɴ=ʈɛ̀.* <u>美味しい</u>モヒンガーを食べたい。[13]
mohinga good«REDUP» eat=want=VS:RLS

畳語形式が派生されるのは属性を表す動詞がほとんどであるが、動的な意味を持つ動詞も派生されることがある。ただし動的な意味を持つ動詞の場合、必ず 2 音節形式でなければならない。

e.g. * ***sázá***「(食べつつ)」 *vs.* *t̪auʔ**ʈauʔsázá***「食べつつ」
eat«REDUP» eat«REDUP»

以上述べた A.～D.の特徴を全てを持ち合わせていないケースもあると考えられるが、ほとんどの場合は全てが当てはまると言ってよいであろう。

2.2 複合的な構造を持つ動詞

ビルマ語の動詞は一つの動詞形態素からなるものばかりでなく、二つ以上の形態素からなる複合的な構造を持つ動詞も数多くある。このうち名詞形態素と動詞形態素が（程度の差こそあれ）結び付いてできている動詞を NV 動詞、二つの動詞形態素が結合してできている動詞を複合動詞と呼ぶことにする。

2.2.1 NV 動詞

NV 動詞は動詞要素のみでは意味的に成り立たない、あるいは少なくとも完全とは言えない組み合わせである。名詞要素と動詞要素とが、全体の意味に対して構成的である場合もあれば、そうでない場合もある。

(5) a. *ʔălouʔ+myá-*「①仕事が多い、②忙しい」＜ *ʔălouʔ*「仕事」＋*myá-*「多い」

* *mă-ʔălouʔ+myá-* vs. *ʔălouʔ+mă-myá-*

NEG-busy job+NEG-many

b. *paiʔsʰàɴ+hyà-*「①お金を探す、②稼ぐ」＜ *paiʔsʰàɴ*「お金」＋*hyà-*「探す」

* *mă-paiʔsʰàɴ+hyà-* vs. *paiʔsʰàɴ+mă-hyà-*

NEG-earn money+NEG-search

c. *zé+t̪wá-*「①市場へ行く、②買い物に行く」＜ *zé*「市場」＋*t̪wá-*「行く」

* *mă-zé+t̪wá-* vs. *zé+mă-t̪wá-*

NEG-go.shoping market+NEG-go

d. *yóuɴ+sʰíɴ-*「①事務所から帰る、②退庁する」＜ *yóuɴ*「事務所」＋*sʰíɴ-*「降りる」

* *mă-yóuɴ+sʰíɴ-* vs. *yóuɴ+mă-sʰíɴ-*

NEG-leave.office office+NEG-decsend

上記のそれぞれの例で①の意味であれば構成的であり、②の意味であれば NV 動詞と言える。名詞が具体的な指示対象を持っている場合は構成的であり、NV 動詞であれば指示性は極めて低く、具体的な指示対象を持たない。ただし構成的であろうとなかろうと、名詞に否定の接頭辞 *mă-*は決して付くことは基本的にない[14]。

2.2.2 複合動詞

複合動詞の多くは二つの動詞形態素が結合したものである。全体で一つの動詞となっているため、統語的な操作により二つを分離することができない。前項で述べたように否定の接頭辞 *mă-*は動詞要素にのみ付加され得る。二音節以上の動詞でも同じである。複合動詞かどうかは否定の接頭辞 *mă-*の現れる位置で確かめることができる[15]。

(6) a. *tótɛʔ-*「発展する」＜ *tó-*「増える」＋*tɛʔ-*「登る」

mă-tótɛʔ- vs. * *tó-mă-tɛʔ-*

NEG-develop increase-NEG-climb

b.　*pyêzòuN-*「満たされている」＜ *pyê -*「満ちる」＋*sòuN-*「揃う」

mǎ -pyê zòuN　　vs.　　* *pyê -mǎ-sòuN-*

NEG-adequate　　filled-NEG-sufficient

ちなみに上記の例でいずれも二音節目の頭子音が有声化可能な子音[16]であるが、a.は有声化が起こっておらず、b.は有声化している。ビルマ語では一般に有声化の有無は要素間の結び付きが強さを表していると考えられるが、複合語の場合、必ずしもそうとは言えないこともある。

2.3 助動詞

助動詞と補助動詞（後述）は述部構造の中で、(主)動詞の後ろで法標識よりも前に現れる要素である[17]。このような要素の中には明らかに動詞起源のものもあり、肯定の形式では見た目上それが動詞連続や複合動詞との区別が付かない。

(7)　a.　*-kʰáiN*「～させる」＜ *kʰáiN-*「指示する」

mǎ -V-kʰáiN　　vs.　　*? *V-mǎ -ʦɛʔ-*

NEG-V-order　　V-NEG-order

b.　*-káuN*「～するのがよい」＜ *káuN-*「よい」

mǎ -V-káuN　　vs.　　* *V-mǎ -káuN-* [18,19]

NEG-V-good　　V-NEG-good

こういった要素をどのように分類するのか、これまで様々な分類法が示されてきた。本稿では澤田（1988）に基本的に従い、基準を単純化して、否定辞 *mǎ -*が前接し得るか、という点を最も重要な基準とすることにする[20]。上記の例であれば、a.、b.の後置要素はいずれも否定辞 *mǎ -*が前接し得ないため、これらは動詞ではなく、非自立的な助動詞と見なす。後に見るように、後置要素である補助動詞の中には否定辞 *mǎ-*が前接する場合もある（前項要素に否定辞 *mǎ-*が前接することも許容する）。そのため

ここまでをまとめると、(少なくとも表面的に動詞要素が連続する) V_1V_2 という形式は否定形式が *mǎ -*V_1V_2 となる場合、V_2 は自立性が著しく低い助動詞、もしくは複合動詞の後項要素のいずれかである、ということである。

3. 本稿におけるビルマ語動詞連続の定義

前節で見たように、V_1V_2 という連続において後項要素である V_2 の統語的自立性が高いことが動詞連続であるか否かを判断する。このとき V_2 が「完全な」動詞であるかどうか、によって動詞連続であるか、そうでないかを判断する。「完全な」動詞、というのは、語彙的な意味内容を保持しているかどうか、とは直接的には関係しない。あくまで統語的に自立性が高いか、ということのみである。

これは前節で述べたように V_1V_2 という形式の否定で V_1 *mǎ -*V_2 という形式をとり得る、ということである。誤解のないように言うと *mǎ -*V_1V_2 となり得るかどうか、ではない。た

とえ *mǎ*-V_1V_2 という形式をとり得たとしても V_1 *mǎ*-V_2 もあり得るのであれば、V_2 は自立性の高い動詞であり、V_1V_2 は動詞連続であると考える。ただし *mǎ*-V_1V_2 と V_1 *mǎ*-V_2 との表す意味が全く違う場合、これらは別物として扱われ、*mǎ*-V_1V_2 は動詞連続から除外する。

V_2 が動詞の語彙内容を相当程度保っている場合、接続助詞-*pí*《継起》（数は多くないが-*lô*《単純接続》も）によって二つの動詞要素を切り離すことが可能である。ただこのような形式、V_1=*pí* V_2 や V_1=*lô* V_2 となる場合、厳密にいうならそれらは単一の節とは言いがたい。後述するように、V_1V_2 と V_1=*pí* V_2 との意味が相当に異なるケースもあり得る。

以下、いずれの動詞要素も自立性がある程度高い動詞が連続する場合、後項要素の表す意味内容が元々の語彙的な意味と異なっている場合、そして前項要素の表す意味内容が元々の語彙的な意味と異なっている場合について記述する。

4. 動詞連続(1) 動詞連続内の動詞がいずれも語彙的な意味をある程度保持している場合

4.1 意味的な特徴

語彙的意味を（ほぼ）完全に有している動詞が連続するのは一般的に動的な動詞に限られると考えてよいだろう。「継起」の意味を表すと言われる。

主語は必ずしも人間でなくてもよい。

(8) a. *tǎkʰûgû* ***câ=kwɛ́=t̪wá=tɛ̀.***
something fall=break(*i.*)=go=VS:RLS
何か落ちて割れ（てしまっ）た。

b. *pʰàɴgwɛʔ(=kò)* ***cʰâ=kʰwɛ́=laiʔ=tɛ̀.***
cup(=ACC) drop=break(*t.*)=AUX=VS:RLS
ガラスのコップを落として割った。《意図的に、という解釈のみ》

このようなタイプの連続は前項要素 V_1 が表す事態に続いて後項要素 V_2 が表す事態が起きる、とされる。ただ両事態の時間的な関係は必ずしも一様ではない。

(9) a. *tʰǎmíɴ* ***cʰɛʔ=sá=t̪wá=t̪ɛ̀.***
rice cook=eat=VS:RLS
ご飯を作って食べた。

b. ***tʰàiɴ=sá=t̪ɛ̀.***
sit.down=eat=VS:RLS
座って食べる。／遊んで暮らす。

c. *ká* ***hŋa=sí=là=t̪ɛ̀.***
car lend=ride=come=VS:RLS
タクシー（を借りて、それに）に乗ってきた。

(9)a では V_1 の事態「（ご飯を）作る」が終了したのちに V_2 の事態「（作ったご飯を）食べる」が生起していることは間違いない。これに対し、(9)b では V_1 の事態「座る」と V_2 の事態

「食べる」とは、ほぼ同時進行である。(9)b においても V_1 の事態「(クルマを)借りる」と V_2 の事態「(借りたクルマに)乗る」とはある意味、同時進行である。

これらの事実からはっきりしているのは V_1 の生起以降に V_2 が起こっている、あるいは V_2 の生起が V_1 に先行しない、ということであろう。より正確には V_2 が生起するまさにそのときには V_1 が生起していなければならない[21]。また V_2 が生起するときに V_1 が終了している必要はない。

興味深いのはこれは接続助詞-*pí*で分離されていてもこの点は変わらないことである。

(10) a. *tǎkʰûgû* ***câ=pí*** ***kwɛ́=ṭ̪wá=tɛ̀.***
something fall=~*and* break(*i.*)=go=VS:RLS
何か落ちて割れ(てしまっ)た。

b. *pʰàŋgwɛʔ(=kó)* ***cʰâ=pí*** ***kʰwɛ́=laiʔ=tɛ̀.***
cup(=ACC) drop=~*and* break(*t.*)=AUX=VS:RLS
ガラスのコップを落として割った。《意図的に、という解釈のみ》

(11) a. *tʰǎmíɴ* ***cʰɛʔ=pí*** ***sá=ṭ̪wá=ṭ̪ɛ̀.***
rice cook=~*and* eat=VS:RLS
ご飯を作って食べた。

b. ***tʰàiɴ=pí*** ***sá=ṭ̪ɛ̀.***
sit.down=~*and* eat=VS:RLS
座って食べる。[22]

c. *ká* ***hŋa=pí*** ***sí=là=ṭ̪ɛ̀.***
car lend=~*and* ride=come=VS:RLS
タクシー(を借りて、それに)に乗ってきた。

V_1 が V_2 の手段や行為の様態を表すような場合、V_1 の表す行為や事態は V_2 の表す行為や事態とほとんど同時に発生している、あるいは同時並行的に生起していることは当然である。特に V_2 が移動を表す動詞の場合はほぼそうであると考えられる。

ただ接続助詞-*pí*によって切り離された場合、V_1 の表す行為や事態の終了後に V_2 の表す行為や事態が起こる、という解釈を許すことになる。ただしそれは接続助詞-*pí*の出現によってもたらされる意味であるため、これは動詞連続と同じように見なすわけにはいかないであろう。

(12) a. *sɛʔbéiɴ* *níɴ=ṭ̪wá=tɛ̀.*
bicycle step.on=go=VS:RLS
自転車を漕いで行った。

b. *sɛʔbéiɴ* *níɴ=pí* *ṭ̪wá=tɛ̀.*
bicycle step.on=~*and* go=VS:RLS
自転車を漕いで行った。／自転車を漕いでから行った。

動詞連続が否定になる場合、V_1V_2 全体が否定されていると考えられる。

(13) a. ***câ***(*=pí*) *mă-**kwɛ́**=ɒ̨ʰú.*

fall(=~*and*) NEG-break(*i.*)=go=VS:NEG

落ちて割れなかった。(「落ちて割れる」全体の否定)

b. *pʰàɴgwɛʔ*(*=kó*) ***cʰâ***(*=pí*) *mă-**kʰwɛ́**=ɒ̨ʰú.*

cup(=ACC) drop=~*and* NEG-break(*t.*)=AUX=VS:NEG

ガラスのコップを落として割らなかった。(「落として割る」全体の否定)

(14) a. *tʰămíɴ* ***cʰɛʔ***(*=pí*) *mă-**sá**=ɒ̨ʰú.*

rice cook=~*and* NEG-eat=VS:NEG

ご飯を作って食べなかった。(「作って食べる」全体の否定)

b. ***tʰàíɴ***(*=pí*) *mă-**sá**=ɒ̨ʰú.*

sit.down=~*and* NEG-eat=VS:NEG

座って食べる。(「座って食べる」全体の否定)

形式的に否定辞 *mă-*は V_2 に付くが、否定は V_1V_2 全体にかかる。ただし否定の焦点については、文脈的に V_1 となることが多い。

(15) a. *ʔèɪɴ=hmà* *cʰɛʔ*(*=pí*) *mă-sá=ɒ̨ʰú,* *wɛ̀*(*=pí*) *sá=ʈɛ̀.*

house=LOC cook(=~*and*) NEG-eat=VS:NEG buy(=~*and*) eat=VS:RLS

家で(ご飯を)作って食べない、買って食べる。

b. *sɛʔbéɪɴ* *níɴ=pí* *mă-ʈ̪wá=ɒ̨ʰú.*

bicycle step.on=~*and* NEG-go=VS: NEG

自転車を漕いで行かなかった。/自転車を漕いで、(しかし)行かなかった。

上記の a で、文全体としては「ご飯を作って食べる」ことはしなかった、という意味であるが、それに続き「買って食べる」が続いていることから、文脈的に否定されているのは否定辞 *mă-*の付く V_2 ではなく V_1 であることが分かる。

これに対して接続助詞-*pí*で V_1 と V_2 が切り離される、すなわち別の節になる b では V_1 が否定の焦点になる場合と V_2 がなる場合とがある。V_1 の表す行為や事態の終了後に V_2 の表す行為や事態が起こる、という解釈を取る場合、これはやはり動詞連続(と強い関係のある構文)と見なすことには無理がある、といえる。

4.2 統語的な特徴

動詞連続は、一般には主語項、可能であれば内項を動詞連続を構成する動詞が共有しているのが普通である(澤田 1988: 87)。下に挙げる例文は主語を共有しているが、それだけでなく、(直接)目的語も共有している。V_1 と V_2 とが同様の項構造を持つ他動詞の場合、通常は目的語も共有していると考えていいだろう。

(16) a. *tʰǎmíɴ* *cʰɛʔ=sá=ʈɛ̀.*

cooked.rice cook=eat=VS:RLS

ご飯を作って食べた。

b. *tʰǎmíɴ* *cʰɛʔ=tɛ̀.* *tʰǎmíɴ* *sá=ʈɛ̀.*

cooked.rice cook=VS:RLS cooked.rice eat=VS:RLS

ご飯を作った。ご飯を食べた。

(17) a. *ʈ̪û=ʂò* *tʰǎmíɴ* *cʰɛʔ=cwé=ʈɛ̀.*

3SG:OBL=ACC cooked.rice cook=eat=serve=VS:RLS

彼/彼女にご飯を作って食べさせた。

b. *tʰǎmíɴ* *cʰɛʔ=tɛ̀.* *ʈ̪û=ʂò* *tʰǎmíɴ* *cwé=ʈɛ̀.*

cooked.rice cook=VS:RLS 3SG:OBL=ACC cooked.rice server=VS:RLS

ご飯を作った。彼/彼女にご飯を食べさせた。

(16)の V_1（*cʰɛʔ-*）、V_2（*sá-*）はともに 2 項他動詞、(17)の V_1（*cʰɛʔ-*）は 2 項他動詞、V_2（*cwé-*）は 3 項他動詞である。(16)では V_1、V_2 の唯一の目的語を共有している。(17 では V_1、V_2 に共通する直接目的語を共有し、V_2 のもう一つの間接目的語も動詞連続構文内に現れている。V_1 の唯一の目的語と V_2 の間接目的語が共有されることも可能である。

(18) a. *ʈ̪û=ʂò* *ɲâzà* *pʰeiʔ=cwé=ʈɛ̀.*

3SG:OBL=ACC dinner invite=serve=VS:RLS

彼/彼女を招いて夕食をごちそうした。

b. *ʈ̪û=ʂò* *pʰeiʔ=tɛ̀.* *ʈ̪û=ʂò* *ɲâzà* *cwé=ʈɛ̀.*

3SG:OBL=ACC invite=VS:RLS 3SG:OBL=ACC dinner server=VS:RLS

彼/彼女を招いた。彼/彼女にご飯をごちそうした。

ただ、3 つの項構造の異なる動詞を連続させ(、かつすべての項を明示す)るのは難しいかもしれない。以下の文はかなり不自然である。

(19) ??? *ʈ̪û=ʂò* *ɲâzà* *kʰɔ̀=cʰɛʔ=cwé=ʈɛ̀.*

3SG:OBL=ACC diner call=eat=serve=VS:RLS

彼/彼女を呼んで夕食を作ってをごちそうした。

V_1 または V_2 が移動の動詞の場合、移動先の項は明示されないことが多い。

(20) a. *ʔèiɴ=hmà* *tʰǎmíɴ* *la/ʈ̪wá=sá=ʈɛ̀.*

house=LOC cooked.rice come/go=eat=VS:RLS

家に来て/行ってご飯を食べた。→家にご飯を食べに来た/行った。

b. *ʔèiɴ=ʂò* *tʰǎmíɴ* *la/ʈ̪wá =sá=ʈɛ̀.*

house=ALL cooked.rice come/go=eat(=go)=VS:RLS

家に（わざわざ）来て/行ってご飯を食べた。→家にご飯を食べに来た/行った。

(21) a. *ʔèɪɴ=hmà* *tʰǎmíɴ* *sá=la/t̪wá=t̪ɛ̀.*
house=LOC/=ABL cooked.rice eat=come/go=VS:RLS
家でご飯を食べて（から）行った。

b. *ʔèɪɴ=k̚â* *tʰǎmíɴ* *sá=la/t̪wá=t̪ɛ̀.*
house=ABL cooked.rice eat=come/go=VS:RLS
家でご飯を食べて来た/行った。

(20)は移動動詞である V_1 *là-*「来る」の着点と、V_2 *sá-*「食べる」が生起する場所とが同じであるが、通常は a.のように V_2 の項として現れ、移動動詞の着点として現れることはあまりない。ただ b.のような発話も文脈による支えがあれば、十分に容認可能である。文脈の支え、とは、ここでは「（わざわざ）」と意味を記したように、移動についての情報的価値が相対的に高い場合といえる。

(21)では V_2 が移動動詞となっている。この場合、移動の着点が節内に現れることはできない。a.では V_1 の *sá-*「食べる」が生起する場所は処格助詞*=hmà* によって標示される。これに対し b.では移動動詞の V_2 の起点である名詞句が奪格助詞*=k̚â* によって標示される[23]。

NV 動詞の中には N と V との結び付きが強いとき、NV がまとまって現れることがある。

(22) a. *ʔèɪɴ=hmà* *tʰǎmíɴ* *la/t̪wá=sá=t̪ɛ̀.*
house=LOC/=ABL cooked.rice come/go=eat=VS:RLS
家にご飯を食べてに来た/行った。

b. *ʔèɪɴ=hmà* *la/t̪wá=tʰǎmíɴ+sá=t̪ɛ̀.*
house=LOC/=ABL come/go=cooked.rice+eat=VS:RLS
（同上）

特に NV 動詞が一つの意義素となっているようなケースでは NV が V_2 として連続していなければ容認できないこともある。

(23) a. * *ʔèɪɴ=hmà* *t̪ǎcʰíɴ* *ná+la/t̪wá=tʰàuɴ=t̪ɛ̀.*
house=LOC/=ABL music ear+come/go=stand=VS:RLS
（家に来て/行って音楽を聴いた。）

b. *ʔèɪɴ=hmà* *t̪ǎcʰíɴ* *la/t̪wá=ná+tʰàuɴ=t̪ɛ̀.*
house=LOC/=ABL music come/go=listen=VS:RLS
家に来て/行って音楽を聴いた。

5. 動詞連続(2) 語彙的な意味が薄まった後接動詞（V_2）＝補助動詞

5.1 補助動詞概観

動詞連続における V_2 要素のうち、特定のいくつかの動詞はその語彙的な内容が薄まり（または失い）、補助的な意味を持つようになっている。本稿ではこれらを補助動詞と呼ぶこと

にする。多くは日本語の動詞の補助的な用法と語彙やその意味が非常によく似ている。

ここに分類されるのは *cî-*「～見る＜見る」《試行》、*nè-*「～ている＜居る」《進行》、*tʰá-*「～ておく、～てある＜置く」《結果残存》、*pé-*「～てあげる＜与える」《恩恵的》、*pí-*「～終わる＜終わる」《完了》、*ʈwá-*「～ていく、～てしまう＜行く」、*là-*「～てくる＜来る」である。最後の二つは次節で取り扱うので、それ以外のものを以下にそれぞれの例を挙げる。

(24) a. *sʰǎyàmâ=ʄò* *mé=**cî**=mɛ̀.*
teacher=ACC ask=**look**=VS:IRR
先生に訊いてみます。

b. *sʰǎyàmâ=ʄò* *mé=mǎ-**cî**=yâ=ʈé=pʰú.*
teacher=ACC ask=NEG-**look**=*inevitable*=*still*=VS:IRR
先生にまだ聞いてみることができていない。

b'. ? *sʰǎyàmâ=ʄò* *mǎ-mé=**cî**=yâ=ʈé=pʰú.*
teacher=ACC NEG-ask=**look**=*inevitable*=*still*=VS:IRR
（同上）

(25) a. *ʔǎkʰû* *ɖǎdínzá* *pʰaʔ=**nè**=ʈɛ̀.*
now newspaper read=**stay**=VS:RLS
今、新聞を読んでいる。

b. *nêdáin* *ɖǎdínzá* *pʰaʔ=**nè**=ʈɛ̀.*
everyday newspaper read=**stay**=VS:RLS
毎日、新聞を読んでいる。

cf. *nêdáin* *ɖǎdínzá* *pʰaʔ=ʈɛ̀.*
everyday newspaper read=VS:RLS
毎日、新聞を読む。

b.?? *nêdáin* *ɖǎdínzá* *pʰaʔ=mǎ-**nè**=pʰú.*
everyday newspaper read=NEG-**stay**=VS:NEG
毎日、新聞を読んでいない。

cf. *nêdáin* *ɖǎdínzá* *mǎ-pʰaʔ=pʰú.*
everyday newspaper NEG-read=VS:NEG
毎日、新聞を読まない。

c. *bǎzaʔ=kâ* *hâ=**nè**=ʈɛ̀.*
mouth open=**look**=VS:RLS
口（唇）が割れている。

d. *ʔɛ́dì=lò* *pyɔ́=mǎ-**nè**=nɛ̂.*
that=ESS speak=NEG-**stay**=VS:PROH
そんな風に言ったりしているな。

d'. ? *ʔɛ́dì=lò* *mǎ-pyɔ́=**nè**=nɛ̂.*

that=ESS NEG-speak=stay=VS:PROH

（同上）

cf. *ʔédì=lò* *mă-pyɔ́=nê.*

that=ESS NEG-speak=VS:PROH

そんな風に言うな。

(26) a. *tʰămíɴ* *sá=**tʰá**=ʈè.*

rice eat=**put.on**=VS:RLS

ご飯を食べておいた／食べておく。

b. *mó* *ywà=**tʰá**=ʈè.* [iii)]

rain(*n.*) rain(*v.*)=**put.on**=VS:RLS

雨が（知らぬ間に）降ってたんだ。※外に出たときに地面などが濡れているのを見て。

c. *ʔíɴgălei̯ʔ=lò* *yé=mă-**tʰá**=ʐʰú.*

English=ESS write=NEG-**put.on**=VS:NEG

英語で書いていない。

c'. *ʔíɴgălei̯ʔ=lò* *mă-yé=**tʰá**=ʐʰú.*

English=ESS NEG-write= *put.on*=VS:NEG

（同上）

(27) a. *cănɔ̀* *ʨû=ʨò* *pé=**pé**=mè.*

1SG*m* 3SG:OBL=ACC give=**give**=VS:IRR

私が彼に渡してあげます。

b. *bădù=hmă* *louʔ=mă-**pé**=ʐʰú.*

who=only do=NEG-**give**=VS:NEG

誰もやってくれない。

b'. *bădù=hmă* *mă-louʔ=**pé**=ʐʰú.*

who=only NEG-do=**give**=VS:NEG

（同上）

c. *jăpàɴ-zăgá* *ʨíɴ=**pé**=ʈè.*

Japan-language study=**give**=VS:RLS

日本語を教えている。

cf. *jăpàɴ-zăgá* *ʨíɴ=ʈè.*

Japan-language study=VS:RLS

日本語を教えている／教わっている。

iii) この例文およびその意味記述は大阪大学の加藤昌彦氏の指摘によるものである。

d. *ṭ̪ă mí =kò* *jă pàɴwuʔsòuɴ* *wuʔ =**pé**=ʈ̪è.*

daughter=ACC Japan-cloth wear=**give**=VS:RLS

娘に和服を着せてやった。（手伝って、の意味）

(28) a. *tʰă míɴ* *sá =**pí**=pì.*

cooked.rice eat=**finish**=VS:VVD

ご飯を食べ終えた。

b. *sàdáɴ* *yé =lô* *mă **pí** =tépʲú.*

thesis write=~*and* NEG-**finish**=*still*=VS:NEG

論文をまだ書き終えていない。

これらの形式が表す意味や用法について若干補足的な説明をする。例文(25) *nè* -「～ている＜居る」《進行》は a.のように、一回性のイベントのいわゆる進行相を表す場合を表すが、b.のように「毎日」などの句が現れた場合は多回性の習慣的イベントをも表す。*cf.*にあるように *nè*-が現れない場合も多回性の習慣的イベントを表すが、*nè* -が現れる場合は「一時的な習慣」を表す。*nè*-が現れない場合、一時的であるか、それともそのような時間的な制約が付かないか、については無標である。ちなみにこの *nè* -がついた述語は、情報交換のモードでほとんど否定にはならない（b'）。発話行為のモードでの否定（d.）は一般的にみられる。また発話行為のモードにおける *nè* のつく否定と *nè* -のつかない否定（d *cf.*）では、前者が習慣的多回性のイベントに対する禁止、後者は一回性のイベントに対する禁止を意味している。また c.のように無意志動詞にもつく。

例文(26) *tʰá*-「～ておく、～てある＜置く」《結果残存》は a.は一回性のイベントにも多回性の習慣的なイベントにも使われる。自らコントロールできるイベントである場合、「何らかの準備のために前もって行う」という意味である。b.や c.のように自らがコントロールできないイベントの場合、そのイベントの結果が発話時点において残存している、という意味を表す。特に b.は「そのイベントが起こっていたことを直接的に体験していないが、（今）その証拠、あるいは結果を目撃している」ことを含意する。

例文(27) *pé* -「～てあげる＜与える」《恩恵的》は a.のようにある行為が誰かにとっての益となることを含意する。「誰か」とはその行為の受け手である場合もあれば、そうでない場合もある。しばしば-*ʔătwɛʔ*「～のため」や-*ʔăsá*「～の代理で」を伴う句が同一節内に現れ、その行為の恩恵の受け手が示される。この意味では受益態の一種と言える。なお藪（1992:571*r*）は補助動詞の *pé* -の意味について「『～てやる，～てあげる（動作が，他に及ぶ意味を表わす）』」と記述していているが、具体例がないので詳細は分からない。c、d の例では受益態というほどの恩恵感はない。つまりは動詞 *pé* の意味がより希薄化している。c.の動詞 *ṭ̪iɴ* -「学ぶ；習う」は、単独では主語が教える主体であるのか、学ぶ側なのかが決まらないが、補助動詞 *pé*-を付けることで、主体が教える側であることが明白になる。このようなあるイベントのどちらの参与者であるのかが決まっていない動詞は *ṭ̪iɴ*-の他に貸借の動詞 *hŋá*-「借りる；貸す（同一物返却）」と *cʰí*- 「借りる；貸す（等価物返却）」[24]、そしてこ

の二つが結合した複合動詞 *cʰíhŋá-*しかない。これは単に動作の方向を明確にする、という機能のみを有するということである。これに対し d.では明らかに項が一つ増えている。これは c.とは異なる。このような例は *wuʔ=pé-*「着せてやる」の他に *sí=pé-*「履かせてやる」しかない。また NV 動詞の *meiʔ+sʰɛʔ-*「(自分自身を、事物を他者に) 紹介する」は補助動詞 *pé-*を伴うと「(二人の人物を) 引き合わせる、紹介する」の意味になる。

(29) a. *(kôkòkò)* *meiʔ+sʰɛʔ=pǎyâzè= ϕ.*
by.oneself introduce=*hortative*=VS:IMP
自己紹介させてください。[25]

b. *kʰǎlé=ʈwè=kò* *jǎpàN-ʔǎcáuN* *meiʔ+sʰɛʔ=tɛ̀.*
child=PL=ACC Japan-situation introduce=VS:RLS
子供たちに日本事情を紹介した。

c. *kʰǎmyá=kò* *sʰǎyà-jí=nɛ̂* *meiʔ+sʰɛʔ=**pé**=mɛ̀.*
2SG$_m$=ACC teacher-AUG=COM introduce=**give**=VS:IRR
あなたを先生に紹介しましょう。

ただ c、d および上記の例は動詞との分布が極めて限定的で、単一の意義素になっているとさえ言えそうではあるが、ただ否定では *mǎ-*が補助動詞 *pé-*に前接し得るため、複合動詞になっているとは言えない。

澤田（1988）が指摘するように、上記の形式は *pí-*「～終わる」《完了》を除き *-pí/-lô*による切り離しができないが、否定で否定辞 *mǎ-*が前接し得るので、自立性の高い要素であると見なしてよい。ただし藪（1992）の言うように V_1 に否定辞 *mǎ-*が前接することが容認されることもある[26]。これはこれらの形式が自立語としての性質を失い、いわば助動詞化しつつある、と考えられる。特に *tʰá-*「～ておく」《結果残存》についてはかなり「助動詞化」が進んでいるといえる。ただし有声化は今のところ観察されない。

助動詞化については既にほぼ完全に助動詞化したと考えられる *-kʰáiN*「～させる、～するように言う」《使役化》などと比べると、*tʰá-*「～ておく」は補助動詞と助動詞の中間的な文法特徴を示していることが分かる[27]。

(30)

	pí	*cî*	*tʰá*	*kʰáiN*	*sè*
本動詞としての用法	＋	＋	＋	＋	?
否定辞 *mǎ-*の前接	＋	＋	±	－	－
*-pí/-lô*による切り離し	＋	－	－	－	－
頭子音の有声化	－	－	－	－	＋

この表を見れば左側の形式が動詞としての自立性を強く保っているのに対し、右側に行くとよりその自立性を失っていることが分かる。なお *sè*《使役化》は共時的には完全に助動

詞で、動詞としての単独の用法はほぼないと言える。ただ ***sèhluʔ-***「遣わす」、***sèkʰáiɴ-***「使役する、酷使する」、***sèzá-***「こき使う」など、複合動詞の一部をなすことがある[28]。

5.2 補助動詞 *ṯwá* と *là*

移動動詞 *ṯwá*「行く」と *là*「来る」について述べておきたい。岡野（2007）に記したように、V_2 としてのこの二つの形式の意味は多様である。

まず移動に関わる表現について述べる。移動を表す動詞や移動の手段の使用を表す動詞、あるいは移動の動作を表す動詞に *ṯwá*「行く」と *là*「来る」が後接すると、視点が置かれた位置に関わる移動の方向を表す。*ṯwá*「行く」と *là*「来る」は本動詞として用いられるとき、前者は直示の中心からの離脱方向への移動、後者は直示の中心への接近移動を表すが、補助動詞としては *ṯwá*「行く」と *là*「来る」が現れない場合は移動における直示の中心との関係は示されず、単に移動のみを表す。

(31) a. *ʔăpyíɴ(=ḳò)* *tʰɛʔ(=**ṯwá/=là**)=ṭɛ̀.*
outside(=ALL) go/come.out(=*go/come*)=VS:RLS
外に出（ていっ/てき）た。

b. *ʔauʔ(=ḳò)* *sʰìɴ(=**ṯwá/=là**)=ṭɛ̀.*
underneath(=ALL) descend(=*go/come*)=VS:RLS
下に降り（ていっ/てき）た。

(32) a. *sɛʔbéiɴ(=ḳò)* *sí(=**ṯwá/=là**)=ṭɛ̀.*
bicycle(=ACC) ride(=*go/come*)=VS:RLS
自転車に乗っ（ていっ/てき）た。

b. *sɛʔbéiɴ(=ḳò)* *níɴ(=**ṯwá/=là**)=ṭɛ̀.*
bicycle(=ACC) step(=*go/come*)=VS:RLS
自転車を漕い（でいっ/でき）た。

(33) a. *láɴ+hyauʔ(=**ṯwá/=là**)=ṭɛ̀.*
walk(=*go/come*)=VS:RLS
歩い（ていっ/てき）た。

b. *pyé(=**ṯwá/=là**)=ṭɛ̀.*
run(=*go/come*)=VS:RLS
走っ（ていっ/でき）た。

接続助詞-*pí*による切り離しが可能であることから、ここに現れる *ṯwá-/là-*は内容語であると考えるべきであろう。4.1 節で述べたように、V_1 によって全体の表す意味が異なるようだ。接続助詞-*pí*が介在してもほとんど意味が変わらない場合もあるが、V_1 の後に更に（別の）移動が起こったという解釈しかできない場合もある。

(34) a. *baʔsǎká* *sí=pí* *ṯwá/là=ṭɛ̀.*
bus ride=~*and* *go*=come=VS.RLS
○バスに乗って、(それから)行った/来た。○バスに乗って行った/来た。

b. *ʔǎpyìN(=ḳò)* *tʰwɛʔ=pí* *ṯwá/là=ṭɛ̀.*
outside(=ALL) go/come.out=~*and* *go/come*=VS.RLS
○外に出て、(それから)行った/来た。×外に出て行った/出て来た。

cf. *tʰwɛʔ=pí=**ṯwá/*là**=ṭì.* 出終えた。[29]
go/come.out=finish=*go/come*=VS.VVD

なぜこのような違いが生じるのか、その原因はよくわからない。*tʰwɛʔ-*「出る」、*wìN-*「入る」などプロセスを表さない到達動詞（achievement verb）の場合に接続助詞-*pí*による切り離しが不可になっている可能性が考えられる[30]。*tɛʔ-*「のぼる」、*sʰíN-*「おりる」などプロセスを表す動詞の場合は接続助詞-*pí*による切り離しが可能であるようだ。

ただしプロセスを表す動詞であれば「V_1しながら行く/来る」に必ずなるかというと、そういうわけではない。移動に関連する動詞でなければならない。「V_1しながら行く/来る」という意味を表すのであれば、接続助詞-*pí*ではなく接続助詞-*yíN*《並行する事態》「～しながら」を用いる。ただし主動詞が *ṯwá*「行く」と *là*「来る」のみであるのはあまり自然とはいえないだろう。

(35) a. *pàuNmôuN* *sá=pí* *ṯwá/là=ṭɛ̀.*
bread eat=finish go/come=VS.RLS
○パンを食べて、(それから)行った/来た。×パンを食べながら行った/来た。

b. *pàuNmôuN* *sá=ṯwá/là=ṭɛ̀.*
bread eat=go/come=VS.RLS
○パンを食べて、(それから)行った/来た。×パンを食べながら行った/来た。

cf. *pàuNmôuN* *sá=yíN* *ṯwá/là=ṭɛ̀.*
bread eat=*while* go/come=VS.RLS
パンを食べながら行った/来た。

次に出現と消失を表す動詞との共起について述べる。出現を表す動詞は *là*「来る」と、消失を表す動詞は *ṯwá*「行く」との共起がほぼ義務的といえる。このように組み合わせが決まっているのは出現を表す動詞が直示の中心への接近、消失が直示の中心からの離脱というアナロジーからであろう。

(36)

出現	*pɔ̀(bauʔ)-*「現れる」、*mwé-*「生まれる」、*wâ-*「太る」
消失	*pyauʔ(sʰóuN)-*「消える」、*ṯè(sʰóuN)-*「死ぬ」、*sʰóuN-*「亡くなる」、*pèi N-*「痩せる」

ただ上記の動詞のうち、*wâ-*「太る」と *pèiɴ-*「痩せる」は近年では逆の組み合わせ、すなわち *wâ=ṭwá-*「太っていく/てしまう」や *pèiɴ=là-*「痩せてくる」が使われるようになってきている。

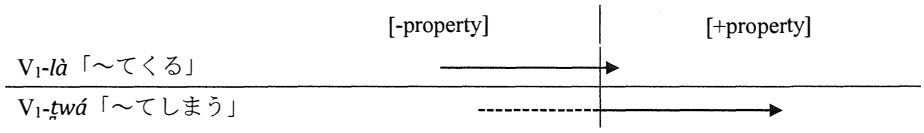
性質や属性などを表す動詞に後接する場合、変化の段階を表す。

(37) a. *yàn̪ìʔûdû* *ʔé=**là**=p̬ì.*
weather cold=**come**=VS.VVD
寒くなってきた。

b. *ʔǎyáuɴʔǎwè* *ʔé=**ṭwá**=p̬ì.*
trading cold=**go**=VS.VVD
売り買いがすっかり落ち着いた。

là「来る」が後接すると、動詞 V_1 の表す性質や属性を帯びるようになるのに対し、*ṭwá*「行く」が後接すると性質や属性を完全に帯びていることを表す。図式化すると以下のようになるであろう。

(38)



なお *là*「来る」は話し手にとって好ましい方向への変化、*ṭwá*「行く」は好ましくない方向への変化もしくは話し手には関係のない変化を表すといえるかも知れない。

なお *là*「来る」には、言語活動に関連する動詞に後接する場合、発言などの方向が直示の中心に向かうことを表す。このとき一般に言われている内容は非難を含むことが多く、かつ受け手は迷惑感、不快感を帯びることが多いようである。

(39) a. *wèbàɴ=**là**=ṭ̬è.*
critisize=**come**=VS.RLS
批判してきた。

b. *sà=nê* *mé=**là**=ṭ̬è.*
letter ask=**come**=VS.RLS
手紙で質問してきた。

pyɔ́=là「話してくる」、*mé(myáɴ)=là*「質問してくる」、*yé(ṭá)=là*「書いてくる、書いてよこす」、*wèbàɴ=là*「非難してくる」、*hyôuɴcʰâ=là*「こき下ろしてくる」、*meiɪʔ+sʰɛʔ=là*「紹介してくる」、*síɴzá=là*「」、*tàiɴ(cá)=là*「訴えてくる」、*sʰɛʔṭwè=là*「連絡してくる」、*ʔǎcáuɴ+cá=là*「知らせてくる」、*ʔǎṭî+pé=là*「通知してくる」等があるようだ。否定辞の位置からこれも動詞連続 V_2 と考えられる。

最後に澤田（1998）で指摘された《現在までの継続》*là-*「～てくる」と《将来への継続》*t̪wá*「～ていく」がある。これについては*-pí/-lô*による切り離しができないのはもちろん、否定で用いられることがほとんどないため、否定辞 *mǎ-*の位置も確かめることができない。そのためこれらが動詞連続動詞連続 V_2 と見なしてよいか、については判断が不能である。そのようなわけでここに記述するのが適切かどうかは分からないが、便宜的にここに分類しておく。

(40) a. *luʔlaʔyé=ʔǎtwɛʔ* *cózá=**là**=t̪ɛ̀.*
independence=*sake* strive=**come**=VS.RLS
独立のために努力してきた。（澤田 1988:85）

b. *luʔlaʔyé=ʔǎtwɛʔ* *cózá=**t̪wá**=mɛ̀.*
independence=*sake* strive=**go**=VS.IRR
独立のために努力していこう。（ibid）

là-「～てくる」は現在までの継続であるから、基本的に現実の法標識とのみ共起し[31]、逆に *t̪wá*「～ていく」は勝敗への継続であるので、基本的に非現実の法標識のみと共起する。

6. 動詞連続(3) 語彙的な意味が薄まった前接動詞（V_1）＝副詞的動詞

6.1 副詞的動詞概観

動詞連続の V_1 の語彙的な意味が薄まったタイプは非常に多様で、Okell and Allott (2000:294)は 35 の common pre- verbを挙げている（Appendix を参照）。pre- verbとは Okell (1969: 25)の分類で、接続助詞*-pí* によって切り離すことができる compound verb の一種であり、本稿でいうところの V_1 にあたる[32]。ただし Okell は意味には言及せず、あくまで接続助詞*-pí* によって切り離すことができる V_1V_2 の V_1 全てを pre- verb としており、4. 動詞連続(1)で扱った、語彙的意味を保持している V_1 もここに含まれる。語彙的な意味が薄まったタイプは common pre- verbとしてリストアップされているが、common pre- verbはあくまでよく用いられる、という基準による分類であり、語彙的な意味について分類しているわけではない。

澤田（1988:82- 3）は V_1 と V_2 を接続助詞*-pí*によってのみ分離可能なタイプとして以下のように記述している。

ア．V1 の意味が単独の用法と異なるもの
①V2 の表す事象の時間的な性質を表す。
②V2 の表す事象に対して、相対的・絶対的な程度の多さを表す。
イ．V1・V2 とも単独の用法と異ならないもの
③V2 が *t̪wá-*「行く」か *là-*「来る」であるもの
④V1 が *t̪wá-/là-*「来る」であるもの

このうち①、②、④が本稿における前接動詞にあたる。

藪（1992:575）は前接動詞を「挿入動詞（I v)」と呼んでいる[33]（同じく Appendix 参照）。

藪の説明によれば挿入動詞は統語構造には影響を与えないもの、ということであるため、藪自身も述べているように、厳密には Okell の pre-verb と重ならない部分が若干ある。

岡野（2007:119-122）は意味が薄れた V_2 を「副詞的動詞[34]」と呼び、意味的な特徴から①量に関するもの（ibid:119）、②時間（アスペクト）に関するもの（ibid:119-120）、③様態に関するもの（ibid:121）、④移動に関するもの（ibid:122）の 4 つに分類している（やはり動詞リストは Appendix 参照）。ここではこの「副詞的動詞」を採用することにする。

澤田（1988）の分類と岡野の分類はほぼ一致する。岡野の③様態に関する前接動詞が挙げられていないのは、接続助詞-*pí*による切り離しが不可能だからだと考えられる（とはいえ、それに当たる記述も他に見当たらない）。

Okell and Allott の挙げている common pre-verb のうち、副詞的動詞に分類され得るものは岡野（2007）の 4 分類の中に分類することが可能であるため、本稿でもこれを踏襲する。ただし「①量に関するもの」は「①量や程度に関するもの」と変更したい。

以下、主なものを 4 分類別に挙げる。なお④移動に関するものについては 4. 動詞連続(1)で既に例を挙げているのと、そこで扱われなかったものは次節で詳述するので、ここでは省略する。

(41) ①量や程度に関するもの

a. *cʰèríbáɴ* ***ṭeiʔ***=*hlâ*=*ṭè*=*nɔ̀.*

cherry.blossams **very**=beautiful=VS.RLS=TQ

桜の花が**とても**きれいだねぇ。 (岡野 2007: 119)

b. *bè*=*hà* ***pò***=*caiʔ*=*ṭă*=*lɛ́.* (Okell and Allott 2000: 123)

which=thing **exceed**=like=VS:RLS=Q

どちらがより好きか？

(42) ②時間（アスペクト）に関するもの

a. *ʔíɴgăleiʔ*=*kʰiʔ*=*kâ* ***sâ***(=*pí*) *pɔ̀*=*tà.* (Okell and Allott 2000: 46)

English=era=ABL **begin**(=~and) appear=NC:RLS

英領時代から現れ**始めた/初めて**現れたのだ。

cf. *ʔɛ́dì*=*páɴjàɴ*=*ḳâ*=*nè* ***sâ***(***tìɴ***)=*cʰítɛʔ*=*sʰàɴdâ*+*pyâ*=*ṭè.*

that=park=ABL=stay **begin**=march=demonstrate=VS:RLS

その公園からデモ行進をし**始めた**。

b. *nauʔ*=*lɛ́* ***sʰɛʔ***=*cózá*=*ṗâ*=*mè.*

back=*also* **connect**=make.efforts=POL:OBL=VS:IRR

今後も努力し**続け**ます/**引き続き**努力します。

c. *ṭû*=*ḳò* ***tʰaʔ***+*pyɔ́*=*mè.*

3SG:OBL=ACC **stack**=speak=VS:IRR

彼/彼女に**もう一度**言う/**重ねて**言う。

d. ***pyàɴ**=pyɔ́=pà=* ϕ.

return=speak=POL=VS:IMP

もう一度言ってください。

cf. *mîbâ=ḳò* ***pyàɴ**=mă-**pyɔ́=y**â=p^{h}ú.*

parents=ACC **return**=NEG-speak=*inevitable*=VS:NEG

両親に言い**返し**てはいけない。

d. *dì=s^{h}áuɴbá=kò* ***cò**=p^{h}aʔ=t^{h}á=yâ=mè*

this=article=ACC **in.advance**=read=put.on=*inevitable*=VS:IRR

この記事を予め/**前以て**読んでおかねばならない。

(43) ③様態に関するもの

a. *cănɔ̀ lèzeiʔ=ʔăt^{h}î ká=nê* ***laiʔ**=pô=pé=mè.*

1SG*m* airport=till car=INS **follow**=send=give=VS.IRR

私が空港までクルマで送ってあげます。 (岡野 2007: 121)

a'. *myô=ṭ^{h}é=hmà* ***laiʔ**=hyà=yâ=ṭè.*

town=inside=LOC **follow**=search=*inevitable*=VS.RLS

街中で**片っ端から**探した。

b. *cănɔ̀ **wáiɴ**=s^{h}wɛ́=pé=pà=mè.*

1SG*m* **surround**=pull=give=POL:OBL=VS.IRR

私が一緒に持っていってあげます。[iv)]

c. *ʔătáɴ=ṭ^{h}é=hmà kàtúɴsàʔouʔ* ***k^{h}ó**=p^{h}aʔ=nè=ṭè.*

class=inside=LOC cartoon.book **steal**=read=stay=VS.RLS

授業中に漫画の本を**こっそり**読んでいる。 (岡野 2007: 121)

d. ***ceiʔ**=pí s^{h}û+táuɴ=nè=mî=yâ=tɔ̂=tà=pà=pɛ́.* (Okell and Allott 2000: 16)

secretly=~*and* pray=stay=unconsciously=inevitably=anymore=NC:RLS=PLT=FOC

心の中で密かに祈ることができたのであった。

e. *mídàuɴ* ***t^{h}â**=pauʔ=tè.*

volcano **stand**=explode=VS.RLS

火山が**いきなり/突然**噴火した。

f. *măhouʔkâhouʔkâ* ***hyauʔ**=pyɔ́=mă-nè=nê.*

something.silly **walk**=speak=NEG-stay=VS.PROH

やたらにでたらめなことを言うな。 (岡野 2007: 121)

上記以外の副詞的動詞の例や個々の詳しい意味記述については、Okell and Allott (2000)や岡野(2007)を参照されたい。ここでは若干の記述に止める。

---

iv) 東京外国語大学言語モジュール・ビルマ・語会話「01: 挨拶する」
http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/my/dmod/class/ja_01.html

(41)「①量や程度に関するもの」に分類される他の形式については Appendix を見られたい。そこには“very much”と意味記述されたものがたくさん含まれる。ネイティブの中には、いくつかの表現は標準的とは言えず、方言ではないか、と意見を述べたものもいた。詳細は不明である。いわゆる「強調」を表す表現は、新語がすぐに作られやすい傾向がある、という事情があるのかも知れない。

なお a.の *ṭ̪eiʔ-*「とても（原義は「詰まっている」）」は動詞という意識が低くなり、副詞的名詞のような振る舞いをすることがある。

(42)「②時間（アスペクト）に関するもの」のうち、*sâ-*「始める」は単なる時間的な意味だけでなく、空間的な意味においても用いられる（a.およびその *cf.*）。よって時間というよりはアスペクト的な意味と捉えるべきかも知れない。

tʰaʔ-「重ねる」と *pyàɴ-*「返す；戻る」はいずれも「もう一度、再び」といったよく似た意味を表すが、若干意味が異なる。*tʰaʔ-*「重ねる」は繰り返し行うことによって、その行為の効果がより強くなる、という意味であるのに対し、*pyàɴ-*「返す；戻る」は単に同じことを繰り返すだけである。なお *pyàɴ-*「返す；戻る」の *cf.*の例はアスペクトとは関係なく、「③様態に関するもの」に分類されるべき用例である。これはある動作 *x* の反対方向の動作 *x'*を（反応として）行うときに現れる。動作 *x* と動作 *x'*とは同じ動詞で表される行為である必要はない。

(43)「③様態に関するもの」は実に多様である。しかも元々の動詞の意味からは想像しにくいものも少なくない。*laiʔ-*「従う」は a.では語彙的な意味内容「一緒について行く」を保持していると見てよいが、*cf.*では語彙的な意味内容が明瞭ではない。

b. *wáiɴ-*「囲む」は本当に取り囲むという意味でも用いられるが、ここで挙げた例 b.のように「一緒に手伝う」という意味でも使う。このとき「囲む」の意味はもやはない。b.は協力する人間は一人である場合でも用いられる。

c. *kʰó-*「盗む」と d. *ceiʔ-*「？」とはいずれも「人に知られぬよう、こっそり、人に隠れて」という意味であるが、やはりこれも若干の意味の違いがある。*kʰó-*「盗む」は基本的に「良くない行い」の場合に使われるが、*ceiʔ-*「？」は必ずしもそうでなくてもよい。なお *ceiʔ-*「？」は統語的には明らかに動詞である（上記例では接続助詞-*pí* に接続する）が、元々の動詞の意味が不明である。

e. *tʰâ-*「立つ」は、先行研究には見当たらない。次節で扱う *pyé-*「走る」と同様に「突然、不意に、いきなり」と行った意味を表すが、*tʰâ-*「立つ」は有情物が動作主体である場合しか使われないようだ。

6.2 副詞的動詞として用いられる移動動詞の意味

次に挙げる副詞的動詞の用法については、これまでほとんど指摘されたことがない[35]。

(44) a. *cáuɴḍábăwâ=ṭ̪óuɴgâ=ʔăcáuɴ=ḳò* ***ṭ̪wá/pyé=ḍ̪ădî+yâ=ṭ̪ɛ̀.***
school.days=while=situation=ACC **go/run**=recall=VS.RLS

学生時代のことを（不意に、突然）思い出した。

b. *dì=kʰǎlé* *ṭ̪û=ʔǎpʰè=nê* ***ṭ̪wá/là=tù=ʈ̪è.***

this=child 3SG:OBL=father=COM **go/come**=similar=VS.RLS

この子供は（意外なことに）父親に似ている。

(45) a. *bǎḍ̪û=ḳò* ***ṭ̪wá=mé=mǎ=lô=lé.***

who:OBL=ACC **go**=ask=VS.IRR=QUOT=Q

（いったい）誰に訊こうってんだ？

b. *ŋâ=ḳò* ***là=mǎ+yáin=nê.***

1SG:OBL=ACC **come**=NEG-rude=VS.PROH

私に対して失礼なことをするな。

(41)はいずれも主体移動を伴わない。a.で *ṭ̪wá-*「行く」や *pyé-*「走る」が現れようと現れなかろうと、論理的な意味は変わらない。ただこれらの副詞的前接動詞が現れることによって「何らかのニュアンス」が加わるようだ。そこから感じ取るニュアンスはネイティブによってかなり異なるため、意味を正確に記述することは難しい。ここではいくつかを列挙する。「心が学生時代に飛んで行くニュアンス」、「突然、あるいは、いきなり」、「何かを見かけたことをきっかけとして思い出すのだが、*ṭ̪wá-*『行く』ならその何かに対する親近感がさほどないが、*pyé-*『走る』だと極めて強い親近感を覚える感じがする」、「*ṭ̪wá-*『行く』でも *pyé-*『走る』でもあまり変わらない」等々。なお Okell and Allott (2000)では *ṭ̪wá-*「行く」について「心がそこへ行って My mind (“goes and”) remembers our school days」(ibid.: 248)、*pyé-*「走る」については「突然 suddenly」(ibid.: 134)と説明している。

(41)b では *ṭ̪wá-*「行く」が付くと「意外さ」を感じるようである。ここの例に即して言うなら「母親に似ていると思っていたけど、よくよく見ると（意外にも）父親似だった」ということになる。*là-*「来る」の場合のニュアンスについてはよく分からなかった。何らかの意味で意外性を表すのかも知れない。

(42)は主体移動の意味を含む場合もあり得るが、主体移動がなくても構わない。先に主体移動を表す V_1 の情報的価値が相対的に上がる場合に「わざわざ」といったニュアンスを持つ、と指摘したが（例文(21)）、それと関係があるかも知れない。ただ(42)では着点を表す句が顕在化しない。また(42)のニュアンスは V_2 の表す行為を話し手は快く思っておらず、それにもかかわらず聞き手がそれを半ば強行しようとすることに不快感を示している、ということであろう。

移動動詞が様態を表す副詞的動詞として用いられて何らかのニュアンスを表す、という現象は大変興味深い。mirativity に近い現象なのかも知れない。ここには挙げていないが、*hyauʔ-*「歩く＞でたらめに」も移動を表す動詞であり、心情的に不快なニュアンスを伴う、と考えることもできよう。ただ十分な意味記述をするには、更なる調査が必要である。

7. 動詞連続(4) 使役を表す *pé-*「与える」

V_1として現れる動詞 *pé-*「与える」は、*pé-* V で「V させる」という意味を表す（加藤 1998、Okell and Allott 2000、Okano 2005）。

(46) a. *kălɔ́=ḳò* *mănɛʔ* *ʔăsɔ́jí* *yauʔ=tà* hotel=*gâ* ***pé=wìɴ=ṭè.*** [v)]
PN=ALL morning early arrive=NC.RLS hotel=NOM **give**=enter=VS:RLS
カローに早朝に着いたのだが、ホテルが入れてくれた。

b. *fóuɴ=tàuɴ* *s^{h}èdáɴ* *yauʔ=lô* ***pé=mă-kàiɴ=ṭɔ̂=ḳ^{h}ú.*** [vi)]
telephone=even 10th.grade reach=*because* **give**=NEG-grab=*anymore*=VS:NEG
［携帯］電話さえ 10 年生になったので、もう持つ/使うことは許さない。

Okell and Allott が指摘するように、この形式は《許可》を表す V-*k^{h}wîɴ+pyû-*「V する許可をする」や許容的な使役を表す V- *sè*-「V させる」[36]と非常に近い意味を表す。V- *sè*-「V させる」は現代語においてその使用が非常に少なくなってきていて、それに *pé-* V が置き換わっている状況があると考えられる（Okell and Allott 2000: 120- 1）。

この前項要素である *pé-*については Okano (2005)で詳しく分析しているのでそちらを参照していただきたい。そこで既に指摘している通り、Okell のいう pre- verb ではない。それは一語応答（one- wordans wer）において V ではなく *pé-*が現れる（ただし、*pé-*のみで応答するのは自然ではない）から明白であろう。これは *pé-*が文全体の統語構造を決めているのだから、それが明示されなければならないのは当然である。

(47) *n̤û=ḳò* ***pé=n̤wá=ṭɔ̰ă=lá.*** --- ***pé***(=*n̤wá*)=*ṭɔ̀.*/*(***pé***=)*n̤wá=ṭɔ̀.*
3SG:OBL=ACC **give**=go=VS:RLS=Q **give**(=go)=VS:RLS/ (**give**=)go=VS:RLS
彼/彼女を行かせたのか？---行かせた。/（行った。）

また統語構造に明らかに変更が生じるので、藪の挿入動詞とも異なる。よって「副詞的動詞」とは異なる別のカテゴリーの動詞とみなければならないであろう。いわゆる結合価変化（valency changing）に関わる統語的な手続きとして、この位置に現れるものはビルマ語にはほとんどなく、またこれが極めて新しい形式であることから、「純粋なビルマ語ではない」という印象を、特に年配者は持っている。ただし世代が下ると極めてよく用いられる。

もう一点、この *pé-* V で「V させる」には他には見られない特徴がある。それは使役化された「V させる」の意味に加え、さらに元々の「与える」の語彙的意味を保持している例が少なからず見つかることである。

v) https://www.facebook.com/TrekkingInformationCenterMyanmar/posts/1028837603890429, 2017/02/20 最終閲覧

vi) https://www.google.co.jp/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=3&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwjFrIW19q3SAhXF2LwKHdHxA4UQFggrMAI&url=https%3A%2F%2Fwww.facebook.com%2FNewsWatchJournal%2Fphotos%2Fa.343944972309977.69916.343551955682612%2F916152868422515%2F&usg=AFQjCNHhFXKuiwTkw2WNOtKOQCAuqJlOBA&sig2=WrvNymBoItmcmXKfA7zURA&bvm=bv.148073327,d.dGc, 2017/02/26 最終閲覧

(48) a. *lùjímîbâ=kò=lɛ́ ʔɛ́dì=sʰáuɴbá* ***pɛ́***=*pʰaʔ=laiʔ=pà=* ϕ.

parents=ACC=*also* that=article **give**=read=AUX=PLT=VS:IMP

両親にもこの記事を**渡して**読ませなさい。

b. *mîbâ=ʈwè=hà ʈù=ʈô=yɛ̂ kʰǎlé=ʈwè=ɟò ʔèiɴ=hmà* tablet ***pɛ́***=*gǎzá=ɕâ=pí, ...* [vii]

parents=PL=TOP 3sg=PL=GEN child=PL=ACC house=LOC *tablet* **give**=play=MUT=~*and*

両親たちは自分の子供たちに家でタブレットを**与えて**遊ばせ、…

c. *ʔǎpíʈaʔfàiɴ=ɟò ʔǎcʰɔ́ mǎ-ʈɛ́iɴ=hmì, louʔpʰɔ̀kàiɴbɛʔ*

completed.sound.file=ACC finished NEG-keep=before colleague

tǎʔúʔú=kò ***pɛ́***=*ná+tʰàuɴ=cî=ɕà=* ϕ. [viii]

someone=ACC **give**=listen=look=POL=VS.IMP

［編集し］終えた音声ファイルを最終版として保存する前に、仲間の誰か一人に（そのファイルを**渡して**）聞かせてみなさい。

上記の例は明らかに使役の意味を持つ。いずれも対格標識-*kò* で標示された項は V_2 の項ではなく、*pɛ́*-の項、すなわち被使役者（causee）であることから明らかである（なお c.には対格標識-*kò* で標示された項が 2 つあるが、*ʔǎpíʈaʔfàiɴ=ɟò*「［編集し］終えた音声ファイルを」は *pɛ́*-「与える」と V_2 である *ná+tʰàuɴ*-「聞く」が共有する項である）。ところが、この被使役者（causee）に対して使役内容を行うに当たって必要な「何か」を渡す、ということが前提となっている。そのような前提があるからであろうが、「与える」という意味を持つ使役形式 *pɛ́*-V は許可、許容といった意味を帯びない。つまり *pɛ́*-V には 2 種類の使役の意味を持つ、ということである。

(49) *pɛ́*-V《使役》

a. 被使役者に V させる、V する許可をする、V することを許す

b. 被使役者に N を（渡して/与えて）V_1 させる

なお助動詞-*kʰáiɴ* を用いた使役の場合、*pɛ́*-V の *pɛ́*-は使役の意味を持たなくなる。

(50) *lùjímîbâ=kò=lɛ́ ʔɛ́dì=sʰáuɴbá* ***pɛ́***=*pʰaʔ*=***kʰáiɴ***=*laiʔ=pà=* ϕ.

parents=ACC=*also* that=article **give**=read=**order**=AUX=PLT=VS:IMP

両親にもこの記事を渡して読ませなさい。

pɛ́-V は否定辞の位置からみて動詞連続をなす要素であることは間違いない。しかし副詞的動詞とは異なる統語的振る舞いをすることから、これらとは別のカテゴリーでをなす（今

[vii] https://ict.com.mm/2013/08/30/want-to-access-textbooks-on-tablets/, 2017/02/25 最終閲覧

[viii] https://www.google.co.jp/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=1&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwjwxsmL7KzSAhXEjJQKHf_IAK8QFggcMAA&url=http%3A%2F%2Fwww.bbc.co.uk%2Facademy%2Fburmese%2Farticle%2Fart20131104112322605&usg=AFQjCNFCygmcLPPo8TZCDkP_8nGhRsatpQ&sig2=Q0MRwd5B2VKWLjhQGvi5Lg, 2017/02/25 最終閲覧

のところそのメンバーは *pé-*のみであるが）と見なしたい。

8. まとめ

本稿はビルマ語の動詞連続のうち、動作的な意味内容を持つ動詞の連続について概観し、これまで言及されたことのないいくつかの現象を併せて記述した。これまで指摘されなかったこととして、V_2が移動動詞でV_1がその手段なり様子なりを表す動詞の場合、V_1の動詞の性質によって接続助詞*-pí*によって切り離した時に意味が異なることがあること、V_1として現れる語彙的意味が薄まった動詞、すなわち補助動詞を4つに分類できること、そのうち様態を表す副詞的動詞として用いられる移動動詞は主体の移動を表すのではなく、何らかの心情的なニュアンスを付加していること、V_1の位置に現れる、使役を表す動詞 *pé-*「与える」が、副詞的動詞とは異なるカテゴリーである可能性があること、またその表す意味には許可的な使役の他に、*pé-*「与える」の語彙的意味を保持しながら、かつ使役の機能語としても働いているものがあること、などを新たに主張した。

澤田（1988）で扱われた、動詞的な意味を持たないV_2については本稿では扱わなかった。詳細は述べないが、筆者はこれらを動詞連続をなすものととは見なさないからである。これらの多くは名詞*-p^{h}ô* によって V_1と切り離され、V_2が V_1*-p^{h}ô* を補語とすることができる。一見して「V_1V_2≒V_1*-p^{h}ô* V_2」と見えなくもない。これは「V_1V_2≒V_1*-pí/lô* V_2」と並行的であるように見えて、全く異なる、というのが筆者の考えである。後者は動詞連続であるが、前者の V_1V_2は統語的な複合を起こしている、と見るからである。

いずれにせよこれらの調査研究、記述も必要であり、今後、別稿としてまとめたい。

Appendix: Okell and Allott (2000)の Pre-Verb、藪(1992)の挿入動詞、岡野(2007)の副詞的動詞

Okell and Allott で挙げられている形式に岡野の分類（①量に関するもの、②時間（アスペクト）に関するもの、③様態に関するもの、④移動に関するもの）を付した。なおいずれにも分類できないものは「語彙的な意味内容を失っていない」形式としてしか用いられないものであり、これは⓪とした。

また Okano (2005)の内容及び本稿で新たに付け加えた意味記述についてはゴシック体で「岡野」の欄に記入してある。

形式	分類	Okell and Allott	藪	岡野
kù(ɲì)-	③	"help"		
kauʔ(yù)-	⓪	"pick up"		
ceiʔ-	③	"secretly"		
cò(tìɴ)-	②	"in advance"		「前もって～する」
cî-	③	"at discretion"		
kʰó-	③	"furtively"		「こっそり～する；不正に～する」
kʰwé-	⓪	"split up"		
sâ(tìɴ)-	②	"start"	「～しはじめる、はじめて」（始まる、始める）	「～し始める；初めて～する」
sʰɛʔ(lɛʔ)-	②	"continue"	*shɛʔ-*「～しつづける、つづけて」（続く、続ける）	「～し続ける；続けて～する」
sʰîɴ-	②	"repeat"		
táɴ-	③	"directly"		
tè-	①	"very much"		《多さ・甚だしさ・夥しさ》「とても；（否定で）それほど」
túɴ-	①	"very much"		
tʰaʔ(màɴ)-	②	"over again"	「ふたたび、かさねて」（重ねる）	「重ねて～する；再び～する」
níɴ(kàɴ)-	①	"very much"		
pé-	—†	"allow"		**「～することを許す；渡して～させる」**
pò(mò)-	①	"more"	「もっと」（余っている）	《比較》「一層」
pyé-	③, ④	"run"		**「？意外にも～、突然～」**
pyàɴ(lè)-	②, ④	"over again"	「また、ふたたび」（返る、返す）	「再び～する；～し返す」
pyàɴ(pyáuɴ)-	②, ④	"over again"		

pʰî-	①	"very much"		
yàuɴ-	③	"absently"		
yɔ́(hnɔ́)-	⓪	"jo'in in"		
là(yauʔ)-	③, ④	"come"	「来る」	「来る」**「？意外にも～、突然～」**
laiʔ(làɴ)-	③	"follow, accompany"	「従う、あとにつく」	「連れ立って～する：片っ端から～する」
louʔ-	③	"fabricate"		
hlê-	⓪	"turn"		
hláɴ-	③	"reach out"	「離れたところから～する」(手を伸ばす、足を踏みだす)	「遠くから～する」
hyauʔ-	③	"go straight on"	「やたらと、むやみに」(歩く)	「でたらめに～する」
hluʔ-	①	"very much"		
wìɴ(yauʔ)-	③, ④	"enter"	「入る、割り込む」	「入る」‡
wáiɴ(wúɴ)-	③	"gather round"		「みんなで（協力して）～する；こぞって～する」
t̪à-	①	"more"		《比較》「一層」
t̪eiʔ-	①	"very much"	「大変」（詰め込む）	《多さ・甚だしさ・夥しさ》「とても；(否定で) それほど」
t̪wá(yauʔ)-	③, ④	"go"	「行く」	「行く」**「？意外にも～、突然～」**

† 本稿では副詞的動詞に分類しないため、空欄とした。

なおこのリストに挙がっていないものとして以下のものも付け加えておきたい。

sáɴ-	③	「試しに～する」※単独の動詞としての意味は「試す」。通常、補助動詞として *-cî*「(試しに)～してみる」を伴う。
tʰâ-	③	「突然、いきなり」※単独の動詞の意味は「立つ、起きる」

注

[1] 藪（1992）など。

[2] これらの他に副詞（adv.）を認めることができるかも知れない。

[3] ビルマ語の名詞化はほとんどの場合、節の名詞化（名詞節化）との区別が曖昧である。

[4] 口語の動詞文標識 *tè*、*mè*が下降調化した形式が限定節標識 *tê*、*mê*であり、限定節標識が形式名詞 *hà*「もの」と融合した形式が名詞節標識 *tà*、*hmà*である。

[5] 文語の法標識は動詞文標識及び名詞節標識が同一の形式、すなわち *t̪ì*、*myì*となり、それが下降調化して限定節標識 *t̪î*、*myî*が形成される。

[6] 動詞文標識 *yɔ́*は澤田（1998:29）によれば「出来事の瞬間的な描写」を表すという。

[7] *ná*「耳」+*lè*-「回る」＝「理解する」など名詞と動詞とからなる動詞は基本的に後ろの動詞要素の前に否定辞が現れるが、近年は名詞要素の前に現れることがある。これは元々の内部構造が意識されなくなり、*nálè*-全体で一つの動詞になったと考えるべきである。つまり「否定辞 *mă*-は動詞にのみ前接する」というより「否定辞 *mă*-が前接する形式は動詞」と言うべきであろう。あるいは動詞でないものが動詞として扱われる臨時動詞で、動詞以外の語類が動詞として扱われる場合がある。岡野(2010)を参照されたい。

[8] *-mô*〈理由〉や*-pèmê*〈逆接〉、*-hmâ*〈必要十分条件〉等は動詞に接続するほか、非動詞述語文の述語名詞、stand-alone (event) nominalization clause である名詞節、および照応用法の指示名詞に後接して従属節を形成する。

[9] 「繰り返し」repetition（Okell 1969 他）は次項の「畳語」reduplication とは異なる。repetition は法標識を除く動詞述語を繰り返すことによって形成される。繰り返される部分は（動詞単独しか繰り返す形式がない場合もあるが）以下のように NV 動詞や助動詞を伴う場合はそれ全体が繰り返される。

e.g. *ná+tʰàuɴ-* ***ná+tʰauà*** 「聞いていようと」　　*sá=ç̊ʰìɴ-****sá=ç̊ʰìɴ*** 「食べたかろうと」
ear+stand-*repetition*　　eat=want-*repetition*

これに対し、「畳語」reduplication は形態的に動詞の部分が繰り返される。X と Y の 2 つの音節からなる動詞の場合、XXYY となる。NV 動詞の N が繰り返されたりすることはなく、助動詞が畳語の中に入ることはない。

またこのとき二つ目の X もしくは Y の頭子音が有声化可能であれば有声化する傾向が強い。「繰り返し」repetition の場合は頭子音は決して有声化しない。

e.g. *káuɴ****gáuɴ****mùɴ****mùɴ*** 「うまく」　　＞ *káuɴmùɴ-*「よい」
good«REDUP»

cf. *káuɴmùɴ-* ***káuɴmùɴ*** 「よかろうと」　＞ *káuɴmùɴ-*「よい」
good-*repetition*

[10] *-pí*《継起》と*-lô*《単純接続》との違いは、やはりその語源にある程度見ることができるのではないかと思われる。*-pí*《継起》は動詞 *pí*-「終わる」を起源とし、補助動詞 *pí*-「～し終わる」としても用いられる。

一方、*-lô*《単純接続》の語源ははっきりとしない。少なくとも動詞的な要素ではない。

[11] 藪（1992:579, 580）によれば、この*-cʰìɴ* は名詞*ʔăcʰìɴ*「様子，特徴」であるという。

[12] このほかに*-sǎỳà*「～すべきこと/もの」、*-pʰô*「～するため(のこと/もの)」などがある。後者は名詞にも後接する。

[13] 前の名詞と同格の位置に立つ名詞は、文の中ではむしろそれが主要部であると考えられるかも知れない。

e.g. (*mŏhí ɴgá*)　*káuɴgáuɴ- lé*　(*t̪ă- p̪wɛ́=lauʔ*)　*sá=ç̊ʰìɴ=t̪ɛ̀.*
(mohinga)　good «REDUP»-DIM　(one-CLS=about)　eat=want=VS:RLS
(モヒンガーの)美味しいのを(ちょっと一杯)食べたい。

[14] まれに NV 動詞の全体の前に否定辞 *mǎ-*が付くことがある。例えば *ná+lè-*「理解する」は名詞 *ná*「耳」と動詞 *lè-*「回る」からなる NV 動詞であり、標準的、あるいは規範的な否定は動詞要素の前に否定辞が現れて *ná*+mǎ-*lè-*となる。しかし実際の使用において、その頻度は多くないものの意義素全体に対して否定辞が付く ***mǎ-ná+lè-***という形が観察されることがある。ただし NV 動詞全体の前に否定辞が現れるのはいくつかの語（*ná+lè-*「理解する」、*ná+tʰàuɴ-*「聞く」、*hnouʔ+sʰɛʔ-*「挨拶する」、*meiʔ+sʰɛʔ-*「紹介する」など）に限られるようだ。

[15] 複合動詞の中で、否定の形式の使用が実際にはあまり見られないものもある。正反対の意味の動詞の組み合わせの場合（*e.g. yáuɴ-wè*「売買する」、*t̪wá-là*「行き来する」etc.）によく見られるようだ。

[16] ビルマ語における「有声化可能な子音」とは無声阻害音の p, pʰ（> b）、t̪ （> d̪）、t, tʰ（> d）、s, sʰ（> z）、c, cʰ（> j）、k, kʰ（> g）である。

[17] 例外的に-*t̪é*/-*ʔouɴ*「まだ」と-*tɔ̂*「やっと」の二つの助動詞は命令の法助詞と現れる場合に法助詞よりも後ろに現れる。

[18] 助動詞 *káuɴ-*は否定の文脈でしかほとんど用いられない。

[19] 同じ動詞 *káuɴ-*「よい」を起源とする補助動詞 *káuɴ-*「(～した結果) よい」もある。この場合、否定辞は *káuɴ-*の前に現れる。

[20] 澤田（1988）これ以外に後項要素の頭子音が有声化するか、という基準を補助的に挙げている。これは藪（1992）においても同様である。

[21] 恐らく V_1 と V_2 との順序は究極的には現実にそのような順序で起こっているかどうか、というより「話し手の認識の順序」と言うことになるであろう。

[22] 動詞連続 *tʰàiɴ=sá-* [sit.down=eat-]「座って食べる」はイディオムとして「遊んで暮らす＝仕事をしないで暮らす」という意味になることがあるが、接続助詞-*pí* によって切り離されると、その意味で用いることは難しくなるようだ。

[23] インフォーマントの直観としては、処格助詞-*hmà* で標示されようと、奪格助詞-*kâ* で標示されようと V_1 の生起する場所を表していると感じるようだ。ただ V_2 に移動動詞が表れないと奪格標示は容認されにくいため、ここでは移動動詞 V_2 の項と見なした。

[24] 同一物返却とは本など借りた物そのものを返却すること、等価物返却とはお金や米など、同一価値のものを返却すること。前者は同一物を返さねば意味がなく、後者は原理的に同一物を返却することが困難、もしくは不可能な貸借関係になる。ビルマ語ではこの区別は厳密にされる。

[25] *kôkò kò*「自分自身を」の最後の *kò* が対格標識である可能性がある。ただしネイティブの直観に非常に揺れがあるため、ここでは全体で一つのグロスを付けるに止めた。

[26] 近年 *cî-*は *mǎ-*V=*cî-*という形が見られるようになっており、助動詞化が進んでいると言えるかもしれない。なと *pí-*に関しては *mǎ-*V=*pí-*は未だ見られないようだ。

[27] ただ近年では *mǎ-*V_1V_2 が多くの補助動詞でかなり容認されやすくなっているようだ。ただ、これらは今のところ「正しくない」用法とされている。

[28] この他に名詞として*ʔǎsègàɴ*「召使い」がある。

[29] この文における-*pí*は接続助詞ではなく補助動詞である。

[30] ただ到達動詞であっても *yauʔ-*「到着する、至る」の場合は接続助詞-*pí* によって分離されてもほとんど意味が変わらない。

[31] ただし仮定節内や推量の場合などでは次のような例がある。

e.g.	*cózá=là=mè*	*sʰò=yìɴ*	...	努力してきたというなら…
	strive=*come*=VS:IRR	say=COND		
e.g.	*cózá=çʰìɴ*	*cózá=là=mè*	...	努力してきたかもしれない。
	strive=*want*	strive=*come*=VS:IRR		

[32] Some compounds also occur in a different from: with the particle ပီး *pì* 'and' suffixed to the first member; *e.g.* besides သွားဝယ် *thwàwe* and သာဆိုး *thahsoù* above, one also finds the forms သွားပီးဝယ် *thwàpì we* and သာပီးဆိုး *thapì hsoù*, which have just the same meanings. Compounds which have alternateiv forms with ပီး *pì* in this way are 'pre-verb compounds', and the member to which ပီး *pì* may be suffixed is a 'pre-verb member', or simply a 'pre-verb'. (ibid: 25)

[33] 6)挿入動詞　次に，主動詞 V（head verb）の前に現われる挿入動詞 Iv について述べよう．挿入動詞は，それ自身は自立性をもった動詞であるが，主動詞の前に現われたとき，主動詞の表わす動作，状態に一定の意味を補うはたらきをする．また，動詞文の中で，全体の文脈に影響を及ぼさず，あたかも，文の中に挿入されたような孤立した位置を占める．

[34] 「副詞的動詞」は澤田（1998）の用語。

[35] 鍵山桂奈「現代口語ビルマ語における主動詞に前接する Twa:の意味」（2015、東京外国語大学 2014 年度卒業論文）が、これを扱ったほぼ唯一のものである。

[36] 使役態 V-*sè*-は許容的な意味を表す場合と強制的な意味を表す場合とがある。*pé*-V-と意味が重なるのは許容的な意味を表す場合である。

参考文献

鍵山桂奈

2015　「現代口語ビルマ語における主動詞に前接する Twa:の意味」，東京外国語大学 2014 年度卒業論文.

加藤昌彦

1998　『エクスプレスビルマ語』，白水社.

Myanmar Language Commission

1990　Myanmar-English Dictionary, Yangon.

大野徹

1983　『現代ビルマ語入門』　泰流社，東京.

2000　『ビルマ（ミャンマー）語辞典』　大学書林，東京.

岡野賢二

2003　「現代口語ビルマ語の『行く・来る』」，東南アジア諸言語研究会編『東南アジア大陸部諸言語の「行く・来る」』，289-336，慶應義塾大学言語文化研究所.

2005　'The Verb 'give' as a Causativizer in Colloquial Burmese', Justin Watkins (ed.) "Studies in Burmese linguistics", 97-104, The Australian National University.

2007　『現代ビルマ（ミャンマー）語文法』，国際語学社.

2010a　「ビルマ語の動詞について」，『東京外大東南アジア学』15 巻, 83-99.

2010b　「ビルマ語の格標示」, 澤田英夫（編）『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1：格とその周辺』，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Okell, John

1969　"A Reference Grammar of Colloquial Burmese", Oxford University Press: London.

Okell, John and Allott, Anna

2000　"A Burmese/Myanmar Dictionary of Grammatical Forms", Curzon Press.

澤田英夫

1988　「現代ビルマ語における動詞配列の類型について」，『言語学研究』7: 73-110，京都大学.

1998　『ビルマ語文法(2 年次)』（1999 年補訂） http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/burtexts/burgram2.pdf

1999　『ビルマ語文法(1 年次)』http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/burtexts/burgram1.pdf

藪司郎

1992　「ビルマ語」，『言語学大辞典』第 3 巻，567-610，三省堂.

ロンウォー語の複動詞構造

澤田 英夫

1　はじめに

2　言語および調査の概要

3　ロンウォー語の動詞述部

4　先行記述・研究

5　複動詞構造 V_1V_2 の分類基準

6　複動詞構造の分類

7　分類基準として用いなかった文法現象

8　複動詞構造における項の調整

9　複動詞構造の「語らしさ」

10 おわりに

注

略号

&･･･動詞連結子 [1]、ACC･･･格標識：対格、ALL･･･格標識：向格、ATTR･･･名詞修飾標識、CLF･･･類別名詞、COM･･･格標識：共格、CONJ･･･従属節標識：単純接続、COORD･･･等位接続標識、COP･･･コピュラ、DET･･･名詞限定形、DIST･･･遠称、$_H$･･･「定位置」への直示的移動、HS･･･伝聞、IMP･･･文標識：命令、INTERJ･･･間投詞、LOC･･･格標識：位格、NEG･･･文標識：情報授受：現実法否定、NMLZ･･･名詞化子、PL･･･名詞の複数表示、PN･･･固有名詞、Q･･･発話行為表示：疑問、QUOT･･･引用標識、RA･･･名詞修飾節における明示的な繋辞 linker／現実法肯定の情報授受文の文末助詞、RECIP･･･相互、RLS･･･文標識：情報授受：現実法、RLZN･･･助動詞：事象が生起したことを認識すると同時にそのことを発話する、SEQ･･･従属節標識：継起、TOP･･･話題表示、VT･･･他動詞

1　はじめに

本稿の目的は、ロンウォー語で複数個の動詞を含み、動詞文の述部として用いられる構造を概観することである。このような構造は verb concatenation、serial verb construction、multi-verb construction など様々な術語で呼ばれる。本稿では、このうち Enfield (2008) で用いられている multi-verb construction を採用し、その和訳として「複動詞構造」を用いる。

本稿の構成は下記の通りである。§2 では、ロンウォー人およびロンウォー語の概況、音韻論、調査の概要について記す。§3 では、ロンウォー語の動詞述部の構成と機能を概観する。§4 では、ロンウォー語の先行研究における複動詞構造の取り扱いや、本研究の参考にした他言語に関する研究について述べる。§5 では、2 つの動詞からなる複動詞構造を分類する基準として、並位節化 (Parat)、一語肯定回答

(Ans1, Ans2)、話題表示辞を伴った V_2 のコピー (Copy2) の 3 つを挙げる。§6 では、主として並位節化の基準に基づいてロンウォー語の複動詞構造を並位的複動詞構造と非並位的複動詞構造に大きく分類し、他の 2 つの基準を用いてそれぞれをさらに下位分類し、各類の構造を記述する。§7 では、分類基準として用いなかった 3 つの文法現象、V_1 の連位節化 (Cosub1)、V_2 への否定辞の前接 (Neg2)、それに V_1 への話題表示辞の付加 (Top1) がどのような複動詞構造に起こるかを観察する。§8 では、複数の動詞が単一の述部を構成する複動詞構造につきものの問題である、項の調整について記述する。§9 では、複動詞構造の語らしさ、言い換えれば、複動詞構造が単一の語からなるのか、それとも複数の語を含むのかという問題を考察する。§10 は、まとめと残された問題点の指摘である。

2 言語および調査の概要

2.1 話し手と言語の概況

ロンウォー Lhaovo /*lo̱ŋ*^{F}*vo*^{F}/ はミャンマー連邦共和国（旧ビルマ）のカチン州・シャン州北部および中華人民共和国雲南省徳宏傣族景頗族自治州に居住する民族である。近隣に居住するジンポー Jinghpaw・ラチッ Lacid（ラシ Lashi）・ツァイワ Zaiwa（アツィ Atsi）などの民族などと共に、「カチン」と呼ばれる文化的集団の成員をなす [2]。人口は、中国に約 5600 人 (戴 2005, p.3)、ミャンマーに約 10 万人であるという (Lhaovo Littero-Cultural Committee, p.1)。なお「ロンウォー」は自称であり、ビルマ語・ジンポー語による名称はマル Maru である。

ロンウォー語はチベット=ビルマ Tibeto-Burman 語派ロロ=ビルマ Lolo-Burmese 語支ビルマ Burmish 語群北部ビルマ Northern Burmish 下位語群に属す。

ロンウォー人としてのアイデンティティを持つ人々の話す言語には、地域的な変異がみられる。本稿で「ロンウォー語」と呼ぶのは、カチン州ソーロー Sawlaw 郡、エーヤーワディー川の二大支流の一つンマイ Nmai 川とそのさらに支流のンゴーチャン Ngochang 川に挟まれたダゴッ /tăko?^{H}/ 丘陵で話される変種で、これがロンウォー人の話す標準的な言語とみなされる。この他にも、ソーロー郡ンマイ川西岸のワツェー Wase 村 [3]・ワミッ Wamyit 村 [4] を中心に居住するギャンノッ（自称ギェンノッ）と呼ばれる分派は標準ロンウォー語とは異なる変種を話し、またソーロー郡ンマイ川東岸のラキン Lakin 村 [5] ではラキン（自称ラケー）変種が、トッラン Htawlang 村 [6] とその周辺ではトッラン（自称タッロー）変種が話される。さらに、スムプラブム Sumprabum 郡のマリ Mali 川とンマイ川に挟まれた通称「三角地帯」Trigan (Triangle) の中部にあるンカイ Inhkai 村落群 [7] 一帯には、ランスーと呼ばれる変種を話す分派が住む。ランスーがロンウォーとは独立した言語であることは明らかだが、それ以外の変種がロンウォー語の方言なのか、あるいは別言語なのか、今のところははっきりしない。

2.2 ロンウォー語の音韻論

音節構造: C(C)V(C)/QT

C(子音): */m*, n*, ñ, ŋ*; p*, ph, t*, th, k*, kh, ʔ*; ts, tsh, c, ch; f, v, s, š, x, ɣ, ɦ; l, r, y**/*

（* は頭子音・末子音となるもの。 ** は頭子音・介子音・末子音となるもの。）

V(母音): */a, au, o, ø, e, u, i/* （/*au*/ は単母音音素として扱う。）

Q(緊喉性特徴):

[−creaky] (V) 声帯の緊張を伴わない。時に息混じりの音。

[+creaky] (V̲) 声帯の緊張を伴う。きしんだ音。頭子音 */ph, th, kh, tsh, ch, s, š, f, ɦ, ʔ/* と共起し

ない。

T(声調):

下降調 (*F*)　デフォルトの調値…21
　　L に後続する場合…31

低平調 (*L*)　デフォルトの調値…22–33
　　語頭にあって *F* が後続する場合…22（33 になることはない）
　　語頭にあって *L* が後続する場合…末尾がやや上がる
　　（Sawada 2010 の “upward-curling”）

高平調 (*H*)　音節が /*-p, -t, -k, -ʔ*/ で終わる場合…42
　　それ以外の場合…句末で 442, それ以外で 44–34

弱音節:

- 固有の声調を失った音節のこと。本来弱音節であるものと、もとは固有の声調を持っていた音節が複合（接辞付加を含む）の結果弱音節となったものの両方がある。
- *L* 音節がもう一つの *L* 音節の前で弱化するとき、後続する音節よりもやや高いピッチを取る。これは、前述した upward-curling の効果が弱化後にも残存しているためと考えられる。
- 本来の弱音節の母音を V̆ と表記し、弱化した音節の母音を $\breve{V}^{X}$（X は *F, L, H* のいずれか）と表記する。

2.3　調査の概要とデータ

本稿の執筆に当たって協力を仰いだコンサルタントは、Lamaung: Khao Hhao” /lǎmauŋ^{L} khoŋ^{F} xoŋ^{H}/ 氏である [8]。Khao Hhao”氏は 1936 年カチン州チープウェー Chipwe 郡パラー Hpala 村 [9] 生れの男性で、現在はカチン州の州都ミッチーナーに在住している。

本稿で用いられるデータのうち出典のないものは、原則としてミッチーナーで 2013 年 12 月–2014 年 1 月、2014 年 12 月–2015 年 1 月、2015 年 12 月–2016 年 1 月の 3 回にわたって行った、エリシテーションを主とした対面調査によって得られたものである。また出典のあるものは、『ロンウォー語初頭教本』から引いた (132a) 以外、過去の調査で前述の Lamaung: Khao” Hhao” 氏や Zakhaung: Khao Je: /tsǎkhauŋ^{L} khoŋ^{F} ce^{L}/ 氏（故人）に語っていただいたテキストから引用したものである。

3　ロンウォー語の動詞述部

3.1　動詞述部のふるまい

ロンウォー語の動詞述部は、単独で、あるいは補語（動詞が要求する項と、そうでない随意的補語の両方を含む）や従属節などを取って動詞句を形成する。動詞句は文標識に伴われて文を形成し、また従属節標識に伴われて従属節を形成する。

(1)　[$_{S}$ [$_{VP}$ (CMPL*) ··· VPRED(-AUX*)]-SM]
　　[$_{SC}$ [$_{VP}$ (CMPL*) ··· VPRED(-AUX*)]-SCM]
　　# CMPL: 補語、VPRED: 動詞述部、AUX: 助動詞、SM: 文標識、SCM: 主節標識
　　( ) 内は随意的。*は複数個の生起を許す。VPRED(-AUX*)-SM/SCM は形態論的単位を成す。

(2) は、ロンウォー語の文標識の体系を示したものである。文標識は、発話行為のタイプによって情報授受・命令・勧奨・祈願の 4 つに大別され、このうち情報授受は現実法 vs. 非現実法の認識論的法の対立を示し、さらに現実法では動詞に否定辞 *mă-* が前接されるか否かによって異なる形式を取る。

(2) 文標識

発話行為タイプ	文標識の形式		否定前接辞
情報授受	現実法	肯定 *-TA* / 否定 *-∅*	*mă-*
	非現実法	*-neŋ*^{H}	
命令		*-∅*	*tă-*
勧奨		*-laŋ*^{L}	*mă-*
祈願		*-šoŋ*^{L}	

否定前接辞は命令で *tă-*、それ以外で *mă-* である。情報授受・現実法否定の文標識と命令の文標識は共に*-∅* であるが、両者がそれぞれ異なる否定前接辞と共起するため、否定の情報授受・現実法の文と否定の命令文の間で曖昧性が生じることはない。

情報授受・現実法肯定の文にも分節的な標識は現れないが、動詞述部の最終音節の声調が高平調 *(H)* である場合を除いて、動詞述部の最終音節の声調が他の文タイプの場合と異なる。

	情報授受・非現実法	情報授受・現実法否定	情報授受・現実法肯定
na^{F}「居る」	*na*^{F}*-neŋ*^{H}	*mă-na*^{F}	***na***^{L}
tso^{L}「食べる」	*tso*^{L}*-neŋ*^{H}	*mă-tso*^{L}	***tso***^{H}
ta^{H}「話す」	*ta*^{H}*-neŋ*^{H}	*mă-ta*^{H}	***ta***^{H}

このため、声調交替 *F→L ; L→H ; H→H* を引き起こす抽象的な要素 *-TA* を仮定し、*-TA* が情報授受・現実法肯定の文標識であると分析する。

	情報授受・非現実法	情報授受・現実法否定	情報授受・現実法肯定
na^{F}「居る」	*na*^{F}*-neŋ*^{H}	*mă-na*^{F}*-∅*	***na***^{F}***-TA***
tso^{L}「食べる」	*tso*^{L}*-neŋ*^{H}	*mă-tso*^{L}*-∅*	***tso***^{L}***-TA***
ta^{H}「話す」	*ta*^{H}*-neŋ*^{H}	*mă-ta*^{H}*-∅*	***ta***^{H}***-TA***

従属節標識の種類はさほど多くない。

(3) 従属節標識

-yaŋ^{L} [単純接続]、*-muŋ*^{L} [継起] 、*-loŋ*^{H}「…時」、*-ɣăre*^{L} [逆接]、*-tso*^{H}*re*^{H} [同時]「…しながら」、*-šoʔ*^{H}「…ように」、*-lo*^{L} [否定の付帯状況]（否定前接辞 *mă-* と共に）

動詞述部と文標識・従属節標識の間に生起する要素を「助動詞」と呼ぶ。

(4) 助動詞

ko^{H}《主語の複数性》（現実法の文標識と共に）、*keʔ*^{F}《主語の複数性》（現実法以外の文標識と共に）、*va*^{H}《事象が成立・開始したという話者の認識》、*ši*^{L}「まだ」、*lo*^{L}「もう」

助動詞は動詞述部を伴わずに単独で現れず、また否定前接辞を取ることもないが、対比肯定の前接辞 *ʔă*^{L}*-*[10] を取ることができるので、拘束形式とは考えにくい。

3.2 述語動詞の組成

3.2.1 単純動詞

単純動詞は、動詞形態素 1 つからなる動詞である。動詞形態素の大多数は単音節である。

(5) *coʔ*^{F}「ある」、 *møʔ*^{L}「空腹だ」、 *šauk*^{H}「飲む」

ただし、かつては複数の動詞形態素からなっていたと思われる複音節動詞の中には、各要素の単独用法が失われ、全体で一つの動詞形態素をなすとみなさなければならないものもある。また、ジンポー語やビルマ語から借用された複音節動詞も、一動詞形態素とみなされる。

(6) *ʔauk*^{H}*ʔo*^{L}「迷う」; *šăraŋ*^{H}「堪える」< Jing. ;
tauŋ^{H}*pan*^{L}「詫びる」< Jing. < Shan < Bur. /tauN^{H} paN^{L}/ ဓောင်းပံ {tong':paM} ;
khyam^{H}*sa*^{F}「病気が治る」< Jing. < Shan < Bur. /chaN^{H} ta^{L}/ ချမ်းသာ {khyam':saa}

3.2.2 N+V 熟語動詞

N+V 熟語動詞は、1 つあるいは 2 つの動詞形態素からなる動詞部分と、それに先行する名詞部分からなる。

(7) *kye*^{F}*+kheʔ*^{H}「戦う」(< 敵＋逐う) ; *nak*^{H}*+šit*^{F}「満足する」(< 心＋落ち着く) ;
tsho^{L}*+kho*^{L}「ひどく塩辛い」(< 塩＋苦い) ; *ăkham*^{H}*+kham*^{H}「囲う」(< 周囲＋囲う) ;
ɣit^{F}*-ɣeʔ*^{H}*+ɣeʔ*^{H}「泳ぐ」(< ［水-泳ぎ］＋泳ぐ) ;
yap^{F}*-moʔ*^{F}*+moʔ*^{F}「夢を見る」(< ［眠る-夢見］＋見る)

少なくとも一部の N+V 熟語動詞については、その項構造が動詞部分単独の項構造と別個のものであることは明らかである。例えば、 *kye*^{F}*+kheʔ*^{H} の動詞部分 *kheʔ*^{H} は、単独で「逐う」の意味で用いられる場合は動作主の A 項と被動者の P 項を取り、*kye*^{F}*+kheʔ*^{H} 全体でもやはり動作主の A 項と被動者の P 項を取る。また、 *nak*^{H}*+šit*^{F}「満足する」の動詞部分 *šit*^{F} は、単独で「死ぬ、落ち着く」の意味で用いられる場合は主題（つまり変化の主体）の S 項のみを取るが、*nak*^{H}*+šit*^{F} 全体では経験者の A 項と主題の P 項を取る。

以上のことから、一部の N+V 熟語動詞については、名詞部分はそれ自体補語でないが動詞部分と合わさって項構造を決定する要素であることがわかる。

動詞形態素の直前に置かれる格標識を伴わない名詞が、N+V 熟語動詞の名詞部分か、それとも修飾要素を伴わない名詞句の主要部で特定の動詞との共起頻度が高いものかは、往々にして紛らわしい。一般に N+V イディオムの名詞部分には次のような特徴がある。

- 特定 specific の指示を持たない。
- 他の要素による限定・修飾・量化を受けない。
- 格標識を伴わない。
- 動詞との間に補語の介在を許さない。

N+V 熟語動詞が否定になる時、否定辞は必ず動詞部分に前接される。

(8) a. na̲k^{H} +mă- šit^{F} -∅
heart **+not-** die -NEG
満足しない。

b.*mă- na̲k^{H} +šit^{F} -∅
not- heart +die -NEG

3.2.3 複動詞構造

複動詞構造は、前述した単純動詞および N+V 熟語動詞の列からなる構造である。一つの複動詞構造は、語彙的意味を表す動詞を複数含むか、あるいは、語彙的意味を表す動詞以外に語彙的意味を表さない動詞要素を含む。上記の両方を満たす場合もある。この他に、多くの複動詞構造では (9) に見られるように、動詞間に動詞連結子 *TA* が介在する。*TA* は現実法の文標識と同様に、先行する動詞に起こる声調交替として実現する。

複動詞構造は、単一の単純動詞や N+V 熟語動詞と同様、動詞述部として動詞句の主要部となることができる。つまり、複動詞構造全体として、同一意味役割を担う項を 2 つ以上取ることはない。このことは、複動詞構造の構成要素の間で項の調整が行われることを意味する。

否定辞は、通常、複動詞構造の最初の動詞的要素に前接される。

(9) a. thaŋ^{L} kauk^{F} -*TA* -voʔ^{F} -*TA* (-ra^{H}).
firewood gather -& -shoulder -RLS (-RA)
薪を集めて担いだ。

b. thaŋ^{L} mă- kauk^{F} -*TA* -voʔ^{F} -∅
firewood **not-** gather -& -shoulder -NEG
薪を集めて担がなかった。

4 先行記述・研究

4.1 戴 (2005)

ロンウォー語（中国語では浪速 Langsu 語と呼ばれる）に関する現時点で唯一の文法書である戴 (2005) では、複動詞構造は統一的に扱われておらず、複動詞構造やその中に現れる動詞要素についての言及は様々な箇所に分かれて見られる。

助動詞 (p.69–71) 動詞の前後に置かれ、動作行為のモダリティー[11]、アスペクト、方向などを表す語類として定義される。

動詞の前に置かれるもの

vɛ̃^{55}「敢」（和訳「…する勇気がある」）；*nuk*^{55}「願望、想」（和訳「…したい」）[12]；

pa^{31}「会」（和訳「習得して…できる）；*ɣo*^{55}「能」（和訳「状況によって…できる」）；

mjɔ̃^{31}「得」（和訳「…なければならない」）[13]

動詞の後に置かれるもの

na^{31}（動作行為がまさに進行していることを表す）；

lɔ^{55}（動作行為が開始したことを表す）；*to̲*^{35}（動作行為の持続を表す）；

la̲m^{55}（動作行為が相互に行われることを表す）[14] など

副詞 (p.71–73) 程度、範囲、時間、否定、状態、語気などの意味を表す語類として定義される。

程度を表す副詞として *tʃɛ*^{35}「最」（和訳「最も」）が、

範囲を表す副詞として *tʃhum*^{55}「一起、共同」（和訳「共に」）が、

時間を表す副詞として *tam*$^{35/31}$「又」（和訳「再び」）が、それぞれ挙がっている。

※　この語類は自立語、句要素、後接語、前接辞など形態論的にみて雑多な要素からなり、その点で語類設定のしかたに大いに問題があることを指摘しておく。

連動詞組 (p.99–100)　同一主語が行う異なる動作行為（を表す動詞）からなる句。

nɔ̃^{31} *jɛ*^{35} *ju*^{31} *lɔ*^{31} *aʔ*^{31}!　　你去拿回来吧!（行って取ってきなさい！）

你　去　拿　回（助）

kjɔ̃$^{35/55}$ *nak*^{55}*mjan*^{31} *ʒa*^{55}!　　听了同情。（聞いて同情した。）　など

听　同情　（助）

4.2　Lustig (2010)

Lustig (2010) は、ロンウォー語と同じく「カチン」の成員によって話され、ビルマ語群北部下位語群に属するツァイワ Zaiwa 語の文法書 (vol.1) および辞書 (vol.2) である。ツァイワ語にもロンウォー語と同様、決まったパターンで声調が交替する形態統語的現象である声調切り替え tone switching が存在する。Lustig によると、この声調切り替えはいくつかの限られた形態素によってその直前の語の最終音節に引き起こされる。そして、声調切り替えを引き起こす形態素の中には、声調のみからなる形態素すなわち声調形態素 tonal morpheme（本稿の *TA* に相当する）が含まれる。（vol.1, pp.10–11. 以下全て vol.1.）

ある動詞に先行する動詞に声調交替が起こる場合には、先行の動詞に声調形態素の一種である不完了標識 imperfective marker が後続する。不完了標識は単に動詞を接合する要素ではなく [15]、それが付加される動詞の表す状況がある時点で結果状態 “state of effect” にあるか、あるいは、何らかの過程の一部であることを表す。(p.95)[16] 言い換えれば、不完了標識は文脈を規定する助けとなる背景情報を描写するという機能を果たす。

不完了標識を付加された動詞 V_1 とそれに後続する V_2 は、V_1 が動的な状況を表す場合には ‘while performing V_1, V_2 occurs’ または ‘having performed V1, V2 occurs’ という解釈を受ける。(pp.95–96) さらに、ある場合には V_2 が V_1 を修飾する補助動詞 auxiliary verb として機能し (pp.97–100)、ある場合には V_1 が V_2 を修飾する副詞 adverb として機能する。(pp.107–111)

Lustig が補助動詞に分類する形式の中には、ある事態が現実に起こったことを強調する *am*^{55} (p.602) や、ある事態が激しく行われたことを表す *dam*^{54} (p.616–617) など、主動詞として用いられないものもあるが、これらも動詞のステータスを持つことを Lustig は認めている。この点は本稿と変わらない。

しかしながら副詞については、Lustig はこれを、統語要素の線形配列において動詞に先行し、主動詞の意味を修飾する要素として定義し (p.707)、また、ある副詞は動詞としても用いられ、ある副詞は名詞や代名詞としても用いられ、またある副詞は動詞・名詞いずれとしても用いられないとする。最後の部類の中には独立した語だけでなく、否定の前接辞 *a*^{1}- や禁止の前接辞 *ke*^{5} ~ *he*^{5} も含めている。(p.707) この点で、Lustig の副詞の取り扱いは、§4.1 で見た戴 (2005) のそれと変わらないと言える。

4.3　Aikhenvald (2006)

本稿で取り扱う構造を射程内に収めた類型論的研究のうち最も多様な言語を扱ったものは、管見の限りでは Aikhenvald (2006) であろう。

Aikhenvald は、連続動詞構造 serial verb construction (SVC)（本稿の「複動詞構造」に相当）を次のように定義している。

> A serial verb construction (SVC) is a sequence of verbs which act together as a single predicate, without any overt marker of coordination, subordination, or syntactic dependency of any other sort.[17] (p.1)

西アフリカ、東南アジア、アマゾン、オセアニア、ニューギニアなどの範囲にわたって広くみられる SVC の多様な形式の特徴を類型論的にとらえるため、Aikhenvald は下記のような基準を設定した。

A. 構成 Composition　2 要素からなる SVC について
　非対称的 asymmetrical SVC: 一方の要素が比較的大きな、開いた open、あるいは無制限の類に属し、もう一方の要素が意味的あるいは文法的に制限された、または閉じた closed 類に属する。
　対称的 symmetrical SVC: 2 つの要素が共に無制限の類に属する。(p.21)

B. 接触性 Contiguity　SVC を構成する動詞の間に、他の要素が介在できるかどうか。
　接触的 contiguous SVC: 動詞は隣り合っていなければならず、他の要素の介在を許さない。
　非接触的 non-contiguous SVC: 動詞の間に他の要素の介在を許す。(p.37)

C. 構成要素の「語らしさ」Wordhood of components　SVC を構成する動詞が、独立した文法的・音韻的語をなすかどうか。
　一語的 single-word SVC: SVC 全体で 1 語を成す。
　多語的 multi-word SVC: 構成要素のそれぞれが 1 語を成す。(p.37)

D. 文法範疇の標示 Marking of grammatical categories　人称・TAM・認証・否定・結合価変更・品詞転換などの文法範疇が SVC を構成する動詞ごとに標示されるかどうか。
　単標示 single marking: 当該文法範疇が SVC 全体で一度だけ標示される。
　協標示 concordant marking: 当該文法範疇が SVC を構成する各動詞に標示される。(pp.39–40)

本稿では、A. の対称的 vs. 非対称的に似た分類として、並位節化 (§5.1) の基準に基づく並位型 vs. 非並位型の分類を導入する。ロンウォー語における両分類のずれについては §6.1 で述べる。また、C. の構成要素の「語らしさ」については §9 で考察する。

残る 2 つの基準のうち、B. についてはロンウォー語は N+V 熟語動詞を含むものの一部以外は接触的である。また、D. についてはロンウォー語は単標示のみを示す。

4.4 Enfield (2008)

様々な形式的テストを用いて、表層的には複数の動詞の連続である複動詞構造の基底にある広範多様な構造を記述した研究の例として、ラオ語の複動詞構造を扱った Enfield (2008) が挙げられる。

Enfield はまず、形態的特徴に乏しいラオ語の動詞を定義する特性の観察と動詞の意味的下位クラスについて述べ (§4.2, pp.85–86)、続いて動詞の項構造と、項の表層的実現にかかわる、情報構造によって条件づけられた項の省略および移動の問題を取り扱い、あわせて動詞の結合価と他動性、結合価を変更するしくみについても議論した (§4.3, pp.86–104)。本論部分では、主動詞の持つ文法的特徴を挙げ、複動詞構造のどの要素が主動詞であるかを見極めるための構成素性テストを設定し、それを用いて複動詞構造各類の特徴づけを行った。(§4.4, pp.104–176)

Enfield が設定したテストは、次のようなものである。

- Clause separability: 節連結子 *lè ka*^{0} 'and then' を動詞の間に挿入することができるかどうか。従属関係にある動詞の組は clause-separable でない。(§4.4.1.2, pp.105–106)
- Yes-answer: 複動詞構造 V1-V2 を含む極性疑問文に対する肯定回答として、V1 あるいは V2 を用いることができるか。主動詞らしさ main-verbhood を検証するためのテスト。(§4.4.1.3, pp.106–109)
- Ellipsibility in relative clauses: 関係節内で V1 あるいは V2 を省略できるかどうか。省略できない方の動詞を主動詞とみなす。(§4.4.1.4.2, pp.110–112)
- Insertability of left aspect-modality marking: V2 の左に *bò*^{0}《否定》や *si*^{0}《非現実》といったアスペクト・モダリティ標示を置けるか。 *bò*^{0} の V2 直前への配置 medial negation が可能かどうかがテストとして用いられる。(§4.4.1.5, p.112)
- Insertability of focus particle *ka*^{0}: 大きな意味の変化を生じることなく焦点小辞 *ka*^{0} を V1 と V2 の間に挿入できるか。*ka*^{0} は主文の主語と動詞句の間のスロットを占めるため、これを V1 と V2 の間に置ける場合、V1 と V2 は主述の関係にあるとみることができる。(§4.4.1.6, pp.113–115)

動詞－目的語の語順を持つラオ語と、動詞が節の末位に立つロンウォー語の間には、文法構造上大きな違いがあるが、それでもなお Enfield の方法論はロンウォー語の複動詞構造を記述するための視点を定める上で示唆に富むものである。[18]

5 複動詞構造 V_1V_2 の分類基準

この節では、2 つの動詞からなる複動詞構造を分類するための基準を提案する。3 つ以上の動詞を含む複動詞構造は、いずれも 2 動詞からなる構造の拡張、あるいは組み合わせとして解釈することができるからである。

本稿で提案する複動詞構造の分類基準は次の 3 つである。

- 並位節化 (Parat)
- 一語肯定回答 (Ans1, Ans2)
- 話題表示辞 *-ɦa*^{F} にかかわる操作

5.1 並位節化 (Parat)

ロンウォー語の情報授受・現実法肯定の文の標識は、声調交替を引き起こす抽象的要素 *-TA* であるが、その後に小辞 *-ra*^{H} が現れることがある。共時的には、*-ra*^{H} は名詞修飾節と被修飾名詞の間に現れる明示的なリンカーが文末の助詞に転用されたものである[19]。

2 つの動詞からなる複動詞構造 V_1V_2 のあるものは、意味を大きく変えることなく次のようなパラフレーズが可能である。

(10) a. thaŋ^L **kauk**^{F} *-TA* **-voʔ**^{F} *-TA* (-ra^H).
firewood **gather** -& **-shoulder** -RLS (-RA)
薪を集めて担いだ。

b. thaŋ^L **kauk**^{F} *-TA* (-ra^H), **voʔ**^{F} *-TA* (-ra^H).
firewood **gather** -RLS (-RA) **shoulder** -RLS (-RA)

薪を集めた。担いだ。

(10b) は動詞と現実法肯定の文標識からなる 2 つの形態論的動詞単位 (*cf.* (1)) が並列されたものとみなすことができる。ロンウォー語を含むビルマ語群の言語では、談話的な条件によって、末位に立つ形態論的動詞単位に先行する全ての要素が省略可能であるが、形態論的動詞単位だけは省略することができず、ゆえにそれが最小の節を構成するとみなすことができる。それで、(10a)→(10b) の操作を並位節化と呼ぶことにする。

並位節化は単に V_1V_2 を別々の単位に分ける操作ではない可能性がある。なぜなら、V_1, V_2 のいずれか一方が単独で用いられることのない形式だったり、単独では V_1V_2 の意味とかけ離れた意味を表す形式だったりする場合でも、このパラフレーズを許す例が見られるからである。

複動詞構造 V_1V_2 のうちあるものは、V_1, V_2 のうちいずれか一方が、他の動詞の前あるいは後という特定の位置に依存した意味を持つ。このような複動詞構造を並位節化すると、特定の位置に依存した意味を持つ動詞が、その「特定の位置」を失うために、もとの複動詞構造における意味を保つことができない。

別の V_1V_2 においては、いずれか一方が他方を支配する。これらを並位節化すると、支配の関係そのものが失われ、加えて支配されていた動詞が複動詞構造内と異なり現実法を担うようになる。この場合にも、構造とそれに伴う意味が変わってしまうのである。

ゆえに、並位節化が可能な複動詞構造 V_1V_2 は上述した以外のものに限られる。これら並位節化が可能な複動詞構造において、V_1 と V_2 は構造的に対等である。

上記のような観察に基づき、複動詞構造の分類基準として、並位節化を採用する。

(11) 並位節化 (Parat)：次のパラフレーズを行うことが可能かどうか。

V_1 -V_2 -*TA* -ra^{H}. → V_1 -*TA* -ra^{H}, V_2 -*TA* -ra^{H}.

-RLS -RA　　-RLS -RA　　-RLS -RA

5.2 一語肯定回答 (Ans1, Ans2)

複動詞構造を述部とする諾否疑問文に肯定の回答をする場合、V_1V_2 全体を用いて回答するのが普通である。

(12) thaŋ^{L}　**kauk**^{F} -*TA* **-vo?**^{F}　-*TA* (-ra^{H}) -ʔi^{H}.

firewood　**gather** -&　**-shoulder** -RLS (-RA) -Q

— ʔeŋ^{F}　**kauk**^{F} -*TA* **-vo?**^{F}　-*TA* (-ra^{H}).

INTERJ　**gather** -&　**-shoulder** -RLS (-RA)

薪を集めて担いだか — うん、担いだ。

しかし、複動詞構造によっては、V_1 のみを述部とする文、V_2 のみを述部とする文、あるいはその両方で回答することが可能である。(*cf.* Enfield (2008) の Yes-answer の基準)

(13) **poŋ**^{H} **-thauk**^{H} -*TA* -ʔi^{H}.　助けたか？

help **-help**　-RLS -Q

— ʔeŋ^{F},　**poŋ**^{H} **-thauk**^{H} -*TA* -ra^{H} / **poŋ**^{H} -*TA* -ra^{H} / **thauk**^{H} -*TA* -ra^{H}.

INTERJ　**help** **-help**　-RLS -RA　**help** -RLS -RA　**help**　-RLS -RA

— うん、助けた。

非並位型複動詞構造では、一語肯定回答が可能だとすればいずれか一方の動詞だけである。一般に、V_1 が特定の位置に依存した意味を持つ場合、およびもう一方の動詞に従属する場合、V_1 による一語肯定回答はできない。V_2 についても同様である。

並位型複動詞構造では、V_1, V_2 いずれによる一語肯定回答も不可能なものが多いが、あくまでも傾向にすぎず、いずれかあるいは両方の一語肯定回答が可能なものも見られる。

上記のように並位型複動詞構造については有効性に限りがあるものの、一語肯定回答の可能性を複動詞構造の分類基準として採用する。

(14) 一語肯定回答 (Ans1, Ans2)

V_1 -V_2 -*TA* (-ra^H) -ʔi^H.　に対する肯定の回答として
-RLS (-RA) -Q

V_1 -*TA* -ra^H. (Ans1)　あるいは　V_2 -*TA* -ra^H. (Ans2)　が可能かどうか。
-RLS -RA　　-RLS -RA

5.3 話題表示辞 -*ɦa*^{F} にかかわる操作

ロンウォー語には、補語や従属節などの統語単位に後続して、その統語単位が談話中でどのような役を果たすかを表示する一連の小辞がある。これらを総称して談話役割表示辞と呼ぶ。

(15) ロンウォー語の談話役割表示辞

-*ɦa*^{F}[話題・対比]；-*re*^{L}[添加]；-*(khyă)loŋ*^{H}[最低限]「…さえ；だけでも」；-*tsa*^{L}[限定]「…だけ」

(16) kăneŋ^H　lăkha^L **-ɦa^F**　khyuk^F　yauk^F -*TA* -ka^H.
past　dog **-TOP**　horn　grow.in -RLS -HS

昔々、犬には角があったとさ。

chat^{H}peʔ^F **-ɦa^F**　khyuk^F　mă- yauk^F -∅ -ka^H.
goat **-TOP**　horn　not- grow.in -NEG -HS

山羊には角がなかったとさ。(「犬と山羊」)

(17) myit^F -meŋ^F **-ɦa^F**　vŏ^{F}ɣu^L　mă- kay^F -*TA* -myi^H -ʔaŋ^F -∅.
earth -LOC **-TOP**　bird.name　not- good -&　-caught -ought -NEG

地面（の罠）にはヴォグー鳥が掛かるはずがない。

muk^L -meŋ^F **-re^L**　šŏ^{L}chit^H　mă- kay^F -*TA* -myi^H -ʔaŋ^F -∅.
heaven -LOC **-also**　deer　not- good -&　-caught -ought -NEG

高所（の罠）に鹿が掛かるはずもない。(「孤児の若者」)

(18) moŋ^{L}pyoʔ^L -ɦa^F　tă-　xin^F -ši^L -∅　tă-　xin^F -ši^L -∅ -ŋ^L **-tsa^L**
PN **-TOP**　not.IMP- hurry -still -IMP　not.IMP- hurry -still -IMP -QUOT **-only**

ta^H -*TA* -na^F -*TA* -ka^H.
speak -&　-stay -RLS -HS

モンピョッは「まだまだ、急がない急がない」とだけ言っていたとさ。(「孤児の若者」)

動詞文の文末に立つ、主動詞(+助動詞)+文標識からなる形態論的単位には、談話役割表示辞を付加することはできない。この場合、以下のような方策を取る。

N+V 熟語動詞が主動詞となる場合、談話役割表示辞は名詞部分に付加される。

(19) a. na̲k^{H} **-ɦia^{F}** šit^{F} -*TA* -ra^{H}.
heart **-TOP** die -RLS -RA
満足はした。(けれども...)

b. na̲k^{H} **-re^{L}** šit^{F} -*TA* -ra^{H}.
heart **-also** die -RLS -RA
満足もした。

単純動詞が主動詞となる場合、主動詞の前に談話役割表示辞を後接した単純動詞が置かれる。この構造は Ozerov and Daudey (to appear) がコピー動詞構造 copy verb construction と呼ぶものに当たる[20]。

(20) a. tso^{L} **-ɦia^{F}** tso^{L} -*TA* -ra^{H}.
eat **-TOP** eat -RLS -RA
食べはした。(けれども...)

b. tso^{L} **-re^{L}** tso^{L} -*TA* -ra^{H}.
eat **-also** eat -RLS -RA
食べもした。

複動詞構造 V_1V_2 が主動詞となる場合、複数通りの形式がある。

(21) a. V_1-DRI V_1V_2- (DRI は談話役割表示辞の略号)
kauk^{F} -ɦia^{F} **kauk^{F}** -*TA* -voʔ^{F} -*TA* (-ra^{H}).
gather -TOP **gather** -& -shoulder -RLS (-RA)
集めて担ぎはした。(けれども...)

b. V_2-DRI V_1V_2-
voʔ^{F} -ɦia^{F} kauk^{F} -*TA* **-voʔ^{F}** -*TA* (-ra^{H}).
shoulder -TOP gather -& **-shoulder** -RLS (-RA)
(同上)

c. V_1-DRI V_2-
kauk^{F} -ɦia^{F} **voʔ^{F}** -*TA* (-ra^{H}).
gather -TOP **shoulder** -RLS (-RA)
(同上)

d.***kauk^{F} -*TA* -voʔ^{F}** -ɦia^{F} **kauk^{F} -*TA* -voʔ^{F}** -*TA* (-ra^{H}).
gather -& -shoulder -TOP **gather -& -shoulder** -RLS (-RA)

(21a) は談話役割表示辞によって引き起こされた V_1 のコピー、(21b) は同じく談話役割表示辞によって引き起こされた V_2 のコピーである。(21a) において、V_1 と V_2 の間に動詞連結子 *TA* が介在する場合でも、コピーされた V_1 が声調交替を起こさない点に注目されたい。(21a) は確認した V_1V_2 の実質上全てで可能であるため、分類基準の役割を果たさない。一方、(21b) は V_2 が語彙的な意味を保持している場合に可能である。

(21c) では (21b) と同様、コピーされた V_1 が声調交替を起こさない。このことから、単に V_1 に談話役割表示辞が後続したのではなく、複動詞構造から V_1 が抜き出されたか、あるいは V_1 のコピーの後でもとの V_1 が削除されたかのどちらかであると考えられる。(21a,b) の場合と異なり、(21c) がどのような場合に可能なのかは未だよくわかっていない。この操作については、§7.3 で再び取り扱う。

なお、(21d) のように V_1V_2 全体をコピーすることはできない。

談話役割表示辞の中でも使用頻度の高い話題表示辞を伴った V_2 のコピーの可能性を、複動詞構造の分類基準として採用する。

(22) 話題表示辞を伴った V_2 のコピー (Copy2)

V_1 -V_2- を V_2 -ɦa^{F} V_1 -V_2- にできるかどうか。
-TOP

6 複動詞構造の分類

本節では、前節で取り上げた 3 つの基準に基づいてロンウォー語の複動詞構造の分類を試みる。

6.1 並位節化による分類：並位型 vs. 非並位型

ロンウォー語の複動詞構造は、並位節化のパラフレーズ (Parat) が可能かどうかによって 2 類に大別される。

Parat が可能なもの (23)–(30) のような複動詞構造は、並位節化してもその意味が大きく変化しない。

(23) a. **ɣo̱^{F} -*TA* -ɣu̱k^{H}** -*TA* -ra^{H}.
search -& -find -RLS -RA
探して見つけた。

b. **ɣo̱^{F}** -*TA* -ra^{H}, **ɣu̱k^{H}** -*TA* -ra^{H}.
search -RLS -RA **find** -RLS -RA
探した、見つけた。

(24) a. **li^{H} -*TA* -ka̱t^{H}** -*TA* -ra^{H}.
come -& -make -RLS -RA
来て作った。

b. **li^{H}** -*TA* -ra^{H}, **ka̱t^{H}** -*TA* -ra^{H}.
come -RLS -RA **make** -RLS -RA
来た、作った。

(25) a. **tso^{L} -šauk^{H}** -*TA* -ra^{H}.
eat -drink -RLS -RA
飲み食いした。

b. **tso^{L}** -*TA* -ra^{H}, **šauk^{H}** -*TA* -ra^{H}.
eat -RLS -RA **drink** -RLS -RA
食べた、飲んだ。

(26) a. **pap^{F} -*TA* -ɣøm^{H}** -*TA* -ra^{H}.
rot -& -decay -RLS -RA
朽ちた。

b. **pap^{F}** -*TA* -ra^{H}, **ɣøm^{H}** -*TA* -ra^{H}.
rot -RLS -RA **decay** -RLS -RA
朽ちた。

(27) a. **ɣa̱m^{F} -phaung^{F}** -*TA* -ra^{H}.
assemble -band -RLS -RA
集まった。

b. **ɣa̱m^{F}** -*TA* -ra^{H}, **phaung^{F}** -*TA* -ra^{H}.
assemble -RLS -RA **band** -RLS -RA
集まった。

(28) a. **poŋ^{F} -*TA* -thuk^{H}** -*TA* -ra^{H}.
shine -& -exit -RLS -RA
光り出した。

b. **poŋ^{F}** -*TA* -ra^{H}, **thuk^{H}** -*TA* -ra^{H}.
shine -RLS -RA **exit** -RLS -RA
光り出した。

(29) a. **cap^{F} -pyaŋ^{H}** -*TA* -ra^{H}.
sufficient -full -RLS -RA
完備している。

b. **cap^{F}** -*TA* -ra^{H}, **pyaŋ^{H}** -*TA* -ra^{H}.
sufficient -RLS -RA **full** -RLS -RA
完備している。

(30) a. **tsauŋ^{F} -*TA* -ʔauŋ^{L}** -*TA* -ra^{H}.
sit -& -sell -RLS -RA
座って売った。

b. **tsauŋ^{L}** -*TA* -ra^{H}, **ʔauŋ^{L}** -*TA* -ra^{H}.
sit -RLS -RA **sell** -RLS -RA
座って売った。

Parat が不可能なもの　一方で、並位節化のパラフレーズが不可能な複動詞構造もある。並位節化するとその意味が大きく変化し、場合によってはそれが意味をなすために特殊な文脈を用意する必要が生じることもある。

(31) a. **tso^{L} -*TA* -ɣu^{H}** -*TA* -ra^{H}.
eat -& -look.at -RLS -RA
食べたことがある[21]。

b. **tso^{L}** -*TA* -ra^{H}, **ɣu^{H}** -*TA* -ra^{H}.
eat -RLS -RA **look.at** -RLS -RA
食べた、視た。

(32) a. **veŋ^{F} -*TA* -ta̲^{H}** -*TA* -ra^{H}.
dare -& -speak -RLS -RA
話す勇気がある。

b. **veŋ^{F}** -*TA* -ra^{H}, **ta̲^{H}** -*TA* -ra^{H}.
dare -RLS -RA **speak** -RLS -RA
勇敢だ、話した。

(33) a. **choŋ^{H} -*TA* -toʔ^{F}** -*TA* -ra^{H}.
follow -& -ascend -RLS -RA
一緒に上った。

b. **choŋ^{H}** -*TA* -ra^{H}, **toʔ^{F}** -*TA* -ra^{H}.
follow -RLS -RA **ascend** -RLS -RA
追った、上った。

(34) a. **ka̲t^{H} -ɣo^{F}** -*TA* -ra^{H}.
make -necessary -RLS -RA
作る必要がある。

b. **ka̲t^{H}** -*TA* -ra^{H}, **ɣo^{F}** -*TA* -ra^{H}.
make -RLS -RA **necessary** -RLS -RA
作った、必要だ。

(35) a. **tso^{L} -ke̲ʔ^{H}** -*TA* -ra^{H}.
eat -put.in -RLS -RA
（よいタイミングで）食べてやった。

b. **tso^{L}** -*TA* -ra^{H}, **ke̲ʔ^{H}** -*TA* -ra^{H}.
eat -RLS -RA **put.in** -RLS -RA
食べた、入れた。

(36) a. **kyauk^{F} -no̲ŋ^{F}** -*TA* -ra^{H}.
be.scared -send.sb -RLS -RA
怖がらせた。

b. **kyauk^{F}** -*TA* -ra^{H}, **no̲ŋ^{F}** -*TA* -ra^{H}.
be.scared -RLS -RA **send.sb** -RLS -RA
怖がった、遣わした。

(37) a. **tsay^{H} -*TA* -phyauk^{H}** -*TA* -ra^{H}.
do.sth -& -lose.VT -RLS -RA
あれこれしていて失くした。

b. **tsay^{H}** -*TA* -ra^{H}, **phyauk^{H}** -*TA* -ra^{H}.
do.sth -RLS -RA **lose.VT** -RLS -RA
仕舞い込んだ、失くした。[22]

(38) a. **pa**^{F} **-*TA* -t<u>a</u>**^{H} -*TA* -ra^{H}.
know -& **-speak** -RLS -RA
話すことができる。

b. **pa**^{F} -*TA* -ra^{H}, **t<u>a</u>**^{H} -*TA* -ra^{H}.
know -RLS -RA **speak** -RLS -RA
知っている、話した。

§5.1 で、並位節化が可能な複動詞構造 V_1V_2 において V_1 と V_2 は構造的に対等であると述べた。そのような複動詞構造を**並位型**、Parat を許さず V_1 と V_2 が構造的に対等でないものを**非並位型**と名付けることにする。

実はこの基準には若干の例外がある。*ñ<u>a</u>m*^{F}*-TA-khyo*^{H}「低く下げる」と *t<u>o</u>*^{L}*-TA-my<u>i</u>t*^{H}「忘れる」の 2 つについてコンサルタントは並位節化のパラフレーズができないと判断したが、これらは並位型複動詞構造である。前者の V_1 である *ñ<u>a</u>m*^{F} は単独および複動詞構造で「低い」あるいは「低くする」の意味で用いられ、V_2 である *khyo*^{H} も単独及び複動詞構造で「下ろす・落とす」およびそこから派生した「(罠を) 仕掛ける」「(命令を) 下す」「(数を) 定める」などの意味を表す。複動詞構造 *ny<u>a</u>m*^{F}*-TA-khyo*^{H} においてはいずれの動詞もその基本的な語彙的意味を表している。後者の V_1 である *t<u>o</u>*^{L} はこの例を除いて一貫して語彙的意味「置く」を表し、V_2 である *my<u>i</u>t*^{H} は、ほとんど複動詞構造 *t<u>o</u>*^{L}*-TA-my<u>i</u>t*^{H} および *yap*^{F}*-TA-my<u>i</u>t*^{H}「眠りこける」のみに現れ、通常は単独で述部を形成しない [23]。

前者が並位節化のパラフレーズを許さないのは、V_1 が自他両用動詞 ambitransitive verb であり、単独では自動詞としての用法の方が使用頻度が高く、並位節化の結果それが自動詞と解釈されるためであろうと考えられる。後者については未だ原因を特定することができない [24]。

以上のような少数の例外はあるものの、並位節化を複動詞構造が並位型か非並位型かを判定する基準として用いて差し支えない。

6.1.1 Aikhenvald (2006) の「対称的 vs. 非対称的」対立とのずれ

本稿の並位型 vs. 非並位型の対立は、Aikhenvald (2006) の基準 A. すなわち、「対称的 vs. 非対称的」の対立を思い起こさせるものである。しかしながら、両者が完全に一致するわけではない。

本稿で取り上げる複動詞構造のうち、Aikhenvald の対称的 SVC、すなわち、開いた動詞類の要素 2 つからなるものは、基本的に並位節化を許す。

一方、Aikhenvald の非対称的 SVC、すなわち、開いた（無制限の）動詞類からの要素 1 つと、意味的・文法的に制限された（閉じた）動詞類からの要素 1 つからなるもののほとんどは並位節化を許さないが、少なくとも次のものが並位節化を許すことがわかっている。

1. V_1 が直示的移動を表す動詞で、発話場所への移動、あるいは発話場所から離れる移動の後で V_2 の表す動作が行われることを表す複動詞構造。
   li^{H}*-TA*-V「来て V する」(< 来る)
   lo^{F}*-TA*-V「定位置に戻って来て V する」(< 来る$_{H}$)
   ye^{L}*-TA*-V「行って V する」(< 行く)
   lo^{H}*-TA*-V「定位置に戻って行って V する」(< 行く$_{H}$)
   これらの V_1 は直示的移動動詞という閉じた類を成し、実質上全ての動作動詞と共起するので、Aikhenvald の非対称的 SVC に分類されると言ってよいであろう。しかしながら、これらの V_1 を含む複動詞構造は並位節化を許す。
2. V_1 が V_2 の表す動作の様態を表す複動詞構造のうち、V_1 が脱意味化を起こしていないもの。
   tsauŋ^{F}*-TA-ʔauŋ*^{L}「座って売る」(< 座る＋売る)

ye?^{F}*-TA-?auŋ*^{L}「立って売る」(< 立つ+売る)

tsauŋ^{F} も *ye?*^{F} も身体動作を表す動詞である。上記いずれの複動詞構造においても、V_1 が表す身体動作の結果としての身体的位置づけは V_2 の動作が行われる際にも保持されており、ゆえに V_1 は V_2 の表す動作の様態を表すものとみなすことができる。以上のことからこれらの複動詞構造は Aikhenvald の非対称的 SVC に分類されると考えられるのであるが、やはり並位節化を許す。

6.2 並位型複動詞構造の下位分類

残る 2 つの形式的基準のうち、Copy2 は調査した全ての並位型複動詞構造について可能であった。

(39) **ɣu̲k**^{H} -ɦa^{F} ɣo̲^{F} -*TA* **-ɣu̲k**^{H} -*TA* -ra^{H}. 探して見つけはした。
find -TOP search -& **-find** -RLS -RA

(40) **ka̲t**^{H} -ɦa^{F} li^{H} -*TA* **-ka̲t**^{H} -*TA* -ra^{H}. 来て作りはした。
make -TOP come -& **-make** -RLS -RA

(41) **šauk**^{H} -ɦa^{F} tso^{L} **-šauk**^{H} -*TA* -ra^{H}. 飲み食いはした。
drink -TOP eat **-drink** -RLS -RA

(42) **ɣøm**^{H} -ɦa^{F} pap^{F} -*TA* **-ɣøm**^{H} -*TA* -ra^{H}. 朽ちはした。
decay -TOP rot -& **-decay** -RLS -RA

(43) **phaung**^{F} -ɦa^{F} ɣa̲m^{F} **-phaung**^{F} -*TA* -ra^{H}. 集まりはした。
band -TOP assemble **-band** -RLS -RA

(44) **thuk**^{H} -ɦa^{F} poŋ^{F} -*TA* **-thuk**^{H} -*TA* -ra^{H}. 光り出しはした。
exit -TOP shine -& **-exit** -RLS -RA

(45) **pyaŋ**^{H} -ɦa^{F} cap^{F} **-pyaŋ**^{H} -*TA* -ra^{H}. 完備はしている。
full -TOP sufficient **-full** -RLS -RA

(46) **?auŋ**^{L} -ɦa^{F} tsauŋ^{F} -*TA* **-?auŋ**^{L} -*TA* -ra^{H}. 座って売りはした。
sell -TOP sit -& **-sell** -RLS -RA

一語肯定回答のふるまいに関しては、全てのパターンが観察された。このうち、Ans1, Ans2 両方とも不可能なものが一番多かった。

Ans1, Ans2 の両方とも不可

(47) **ɣo̲**^{F} **-*TA* -ɣu̲k**^{H} -*TA* -?i^{H}. 探して見つけたか?
search -& -find -RLS -Q

— ?eŋ^{F}, **ɣo̲**^{F} **-*TA* -ɣu̲k**^{H} -*TA* -ra^{H} / *ɣo̲^{F} -*TA* -ra^{H} / *ɣu̲k^{H} -*TA* -ra^{H}.
INTERJ **search -& -find** -RLS -RA search -RLS -RA find -RLS -RA

— うん、探して見つけた。

(48) **li**^{H} **-*TA* -kat**^{H} -*TA* -ʔi^{H}. 来て作ったか？
come -& -make -RLS -Q

— ʔeŋ^{F}, **li**^{H} **-*TA* -kat**^{H} -*TA* -ra^{H} / *li^{H} -*TA* -ra^{H} / *kat^{H} -*TA* -ra^{H}.
INTERJ **come -& -make** -RLS -RA come -RLS -RA make -RLS -RA

— うん、来て作った。

(49) **tso**^{L} **-šauk**^{H} -*TA* -ʔi^{H}. 飲み食いしたか？
eat -drink -RLS -Q

— ʔeŋ^{F}, **tso**^{L} **-šauk**^{H} -*TA* -ra^{H} / *tso^{L} -*TA* -ra^{H} / *šauk^{H} -*TA* -ra^{H}.
INTERJ **eat -drink** -RLS -RA eat -RLS -RA drink -RLS -RA

— うん、飲み食いした。

Ans1, Ans2 の両方とも可

(50) **ɣam**^{F} **-phaung**^{F} -*TA* -ʔi^{H}. 集まったか？
assemble -band -RLS -Q

— ʔeŋ^{F}, **ɣam**^{F} **-phaung**^{F} -*TA* -ra^{H} / **ɣam**^{F} -*TA* -ra^{H} / **phaung**^{F} -*TA* -ra^{H}.
INTERJ **assemble -band** -RLS -RA **assemble** -RLS -RA **band** -RLS -RA

— うん、集まった。/（同前）/（同前）

(51) **poŋ**^{H} **-thauk**^{H} -*TA* -ʔi^{H}. 助けたか？
help -help -RLS -Q

— ʔeŋ^{F}, **poŋ**^{H} **-thauk**^{H} -*TA* -ra^{H} / **poŋ**^{H} -*TA* -ra^{H} / **thauk**^{H} -*TA* -ra^{H}.
INTERJ **help -help** -RLS -RA **help** -RLS -RA **help** -RLS -RA

— うん、助けた。/（同前）/（同前）

Ans1 のみ可

(52) **poŋ**^{F} **-*TA* -thuk**^{H} -*TA* -ʔi^{H}. 光り出したか？
shine -& -exit -RLS -Q

— ʔeŋ^{F}, **poŋ**^{F} **-*TA* -thuk**^{H} -*TA* -ra^{H} / **poŋ**^{F} -*TA* -ra^{H} / *thuk^{H} -*TA* -ra^{H}.
INTERJ **shine -& -exit** -RLS -RA **shine** -RLS -RA exit -RLS -RA

— うん、光り出した。/光った。/ —

(53) **cap**^{F} **-pyaŋ**^{H} -*TA* -ʔi^{H}. 完備しているか？
sufficient -full -RLS -Q

— ʔeŋ^{F} **cap**^{F} **-pyaŋ**^{H} -*TA* -ra^{H} / **cap**^{F} -*TA* -ra^{H} / *pyaŋ^{H} -*TA* -ra^{H}.
INTERJ **sufficient -full** -RLS -RA **sufficient** -RLS -RA full -RLS -RA

— うん、完備している。/揃っている。/ —

Ans2 のみ可

(54) **tsauŋ^{F} -*TA* -ʔauŋ^{L}** - *TA*- ʔi^{H}.　　座って売ったか？
sit　-&　-sell　-RLS　-Q

— ʔeŋ^{F} ,　**tsauŋ^{F} -*TA* -ʔauŋ^{L}** - *TA*-ra^{H} / *tsauŋ^{L} - *TA*- ra^{H} /**ʔauŋ^{L}** - *TA*-ra^{H}.
INTERJ　**sit　-&　-sell　-RLS　-RA**　sit　-RLS　-RA　**sell　-RLS　-RA**

— うん、座って売った。/ — /売った。

6.2.1　Ans1, Ans2 の両方とも不可能な並位型複動詞構造

並位型複動詞構造 V_1V_2 の中で多数を占めるのは、継起する事象を表す 2 つの動詞からなるものである。そして、その多くで Ans1, Ans2 のいずれもが不可能である。

(55) *ɣam^{F}- TA- phyit^{H}*「決定する」（< 話し合う＋断つ）
ɣo^{F}- TA- myoŋ^{F}「探して見つける」（< 探す＋見つける）
ɣoʔ^{F}- TA- ɣu^{H}「織って見せる」（< 織る＋見せる）
cin^{F}- TA- yeʔ^{F}「列を作る」（< 並ぶ＋立つ）
kau^{L}- TA-teʔ^{F}「渡る」（< 渡る＋付く）
kauk^{F}- TA- voʔ^{F}「集めて担ぐ」（< 集める＋担ぐ）
keŋ^{F}- TA-pyo^{F}「分配する」（< 分ける＋配る）
køm^{F}- TA- seʔ^{H}「突いて殺す」（< （槍で）突く＋殺す）
kyo^{L}- TA- ŋaŋ^{H}「聞くのが煩わしい」（< 聞く＋嫌う）
peʔ^{F}- TA- khoʔ^{H}「叩き割る」（< 叩く＋割る）
phoŋ^{F}- TA- toŋ^{L}「逃げ去る」（< 逃げる＋走る）
taŋ^{L}- TA- myak^{F}「束にして縛る」（< 束にする＋縛る）
tha^{L}- TA- tauy^{L}「替えて結わえる」（< 替える＋結わえる）
tso^{L}- TA- kyʔ^{H}「食べて満腹する」（< 食べる＋満腹する）
*li^{H}- TA-*V「来て V する」（< 来る）/ *lo^{F}-TA-*V「定位置に戻って来て V する」（< 来る$_{H}$）
*ye^{L}-TA-*V「行って V する」（< 行く）/ *lo^{H}- TA-*V「定位置に戻って行って V する」（< 行く$_{H}$）

2 つの動詞が表す事象の間には様々な意味的関係を読み込むこともできるが、それは必須ではない。これらの複動詞構造が Ans1 も Ans2 も許さないのは、2 つの事象が対等の重みを持ち、どちらか一方だけで両方を代表させることができないことの証左と受け取れる。構造的には、V_1 と V_2 は等位関係にあると考えてよい。

継起する事象を表す 2 つの動詞からなる複動詞構造では、基本声調が *F* か *L* である V_1 は声調交替を起こす。上記の例で V_1 と V_2 の間に声調交替を引き起こす要素 *-TA* を介在させているのはこのためである。基本声調が *H* である V_1 については、声調の交替から *- TA* の有無を直接確認することはできないが、この場合だけ *F* や *L* の場合と異なる構造を取ると考えるのも不自然なので、これらにならって *- TA* が介在しているものとする。

(56) *kat^{H}-TA- ch^{F}*「作って使う」（< 作る＋使う）
poŋ^{H}- TA- voʔ^{F}「助けて抱える」（< 助ける＋抱える）

yauŋ^{H}*-TA-tso*^{L}「調理して食べる」（< 調理する＋食べる）
kyo^{H}*- TA-šit*^{F}「落ちて死ぬ」（< 落ちる＋死ぬ）
pa^{H}*- TA-chauŋ*^{L}「礼拝する」（< 跪く＋讃える）
chat^{H}*-TA-keŋ*^{F}「割いて分ける」（< 割く＋分ける）
to^{H}*- TA-ye?*^{F}「立ち上がる」（< 起きる＋立つ）
li^{H}*- TA-*V「来て V する」（< 来る）/ *lo*^{F}*- TA-* V「定位置に戻って来て V する」（< 来る$_{H}$）
ye^{L}*- TA-* V「行って V する」（< 行く）/ *lo*^{H}*- TA-*V「定位置に戻って行って V する」（< 行く$_{H}$）

少数ではあるが、V_1 と V_2 が継起する事象を表さないものが存在する。

(57) 同義・類義の事象を表す 2 つの動詞からなるもの
pap^{F}*- TA- ɣøm*^{H}「朽ちる」（< 腐る＋朽ちる）
pyo?^{F}*- TA-pauy*^{F}「滅びる」（< 壊れる＋霧散する）
ɣi^{L}*(- TA)-ɣaŋ*^{F}「大きい」（< 大きい＋長い）
kaŋ^{L}*-t aŋ*^{F}「堅固だ」（< 長持ちする＋揺らがない）
ŋauy^{F}*-pau*^{L}「喜ぶ」（< 好む＋喜ぶ）
laŋ^{H}*- ?- kham*^{H}「取り囲む」（< 巡る＋囲む）
nau^{H}*- ?- neŋ*^{H}「優しい」（< 柔かい＋柔かい）

これらは類義の 2 つの動詞からなり、2 つの事象は継起しない。*kaŋ*^{L}*-taŋ*^{F}「堅固だ」と *ŋauy*^{F}*-pau*^{L}「喜ぶ」の V_1 に声調交替が起こらないのは、事象の継起を表すものでないということを反映しているものと思われるが、*ɣi*^{L}*(- TA)-ɣaŋ*^{F}「大きい」 では声調交替が起こる形式と、起こらない形式の両方が確認された。両者の間に意味の違いがあるかどうかについては確認していない。なお、V_1 の基本声調が *H* である場合、*TA* が存在するかどうかは確定できない。表記 -?- はこのことを表すものである。

(58) 対置された 2 つの事象からなるもの
tso^{L}*-šauk*^{H}「飲み食いする」〔< 食べる＋飲む〕
chauŋ^{L}*-ŋauy*^{H}「讃えて歌う」（< 讃える＋歌う）

tso^{L}*-šauk*^{H}「飲み食いする」は対置された事象を表す 2 つの動詞からなるものだが、この場合も 2 つの事象は継起しない（食べた後で飲むという意味ではない）。ここでも、V_1 に声調交替が起こらないのは事象の継起を表さないことの反映と受け取れる。

6.2.2 Ans1, Ans2 の両方とも可能な並位型複動詞構造

Ans1, Ans2 の両方とも可能な並位型複動詞構造 V_1V_2 は、いずれも同義・類義の 2 つの動詞からなる。同義あるいはそれに準ずる意味関係を持つがゆえに、Ans1, Ans2 の両方が可能なのであろう。

(59) *ɣam*^{F}*- phauŋ*^{F}「集合する」（< 集まる＋合わさる）
poŋ^{H}*-?-t hauk*^{H}「助ける」（< 助ける＋助ける）
t sam^{H}*-?- khuk*^{F}「付き合う」（< 付き合う＋付き合う）

V_1 の声調交替に関しては、例が少ないこともあって、確実に起こっていると言えるものは確認できなかった。

6.2.3 Ans1 のみ可能

Ans1 のみ可能な並位型複動詞構造 V_1V_2 には、さまざまなケースが見られる。

(60) V_1 が他動詞であり、V_2 がその結果の意味を表す自動詞であるもの [25]

tau^F*-TA-to*^{H}「立たせる」(< 立てる＋起きる)

leʔ^H*-TA-kyauk*^{H}「日干しする」(< 日干しする＋乾く)

cit^H*-TA-teʔ*^{F}「愛する」(< 愛する＋付く)

tau^F*-TA-to*^{H}「立たせる」の V_1 である *tau*^{F} はそれぞれ動作者と主題の意味役割を担う 2 つの項を取る。一方、V_2 である *to*^{H} は主題の意味役割を表す 1 つの項を取り、それは V_1 の主題項と同一指示である。*cit*^{H}*-TA-teʔ*^{F}「愛する」についても同様のことが当てはまる。このような場合に Ans1 が可能で Ans2 が不可能なのは、V_2 が V_1 に付随する事象とみなされ、意味的に V_2 よりも V_1 の方により重きが置かれるためであろうと考える。ただし、意味的な重みは違っても、構造的には動詞の等位接続であると考えたい。

(61) 比較的広い意味を持つ V_2 が、当該複動詞構造の中で V_1 の意味に合わせた読みを与えられるもの

継起：*poŋ*^{F}*-TA-thuk*^{H}「光り出す」(< 光る＋出る)

同義・類義：*cap*^{F}*(-TA)-pyaŋ*^{H}「充足する」(< 揃う＋満ちる)

ko^H*-ʔ-nan*^{H}「踊る」(< 踊る＋身体を揺らす)

thuk^H「出る」は単独では具体物が閉じた領域から外部に移動するという意味を表すが、*poŋ*^{F}*-TA-thuk*^{H}「光り出す」においては、*poŋ*^{F}「光る」の意味に合わせて、発光体から光線が発している意を表す。コンサルタントが Ans2 を不可としたのは、V_2 を単独の場合の意味で解釈したためである。

pyaŋ^H「満ちる」が単独で用いられた場合には、物質があるスペースを満たすという意味に受け取られる。*cap*^{F}*(-TA)-pyaŋ*^{H}「充足する」においては、*pyaŋ*^{H} は *cap*^{F}「揃う」の意味に合わせて、備えるべきものや要件が完全に備わっている意を表す。コンサルタントが Ans2 を不可とした理由は、V_2 が単独の場合の意味に解されて「何が一杯になっているのかわからないから」というものであった。

ko^H*-ʔ-nan*^{H}「踊る」の *nan*^{H}「揺らす」は、ここでは踊りの動作として体を揺らす意を表す。単独では踊りの動作という限定的な意味には受け取られない。

前述の (60) の場合と意味関係は違うものの、この場合にも意味的に V_1 により重きが置かれるために Ans1 が可能となり Ans2 が不可能となるものと考えられる。

V_1V_2 の問いに対する答えとしてでさえ、コンサルタントが Ans2 を不可とした点に注意されたい。V_2 が V_1V_2 内で持つような意味を表すには、直近の先行文脈で V_1V_2 と言う形式が与えられているだけでは不十分なのである。

(62) V_1 と V_2 が同義・類義だが、V_2 が単独で使用されない、あるいはされにくいもの

ɣoŋ^H*-ʔ-tsin*^{H}「健康だ」(< 熱する＋熱する)

kyi^L*-TA-khyak*^{H}「苦しむ」(< 苦しむ＋憐れだ)

šauŋ^F*(-TA)-yauŋ*^{H}「装飾する」(< 飾る＋飾る)

ɣoŋ^H*-ʔ-tsin*^{H}「健康だ」の *tsin*^{H} は単独で用いられない形式である。*kyi*^{L}*-TA-khyak*^{H}「苦しむ」の *khyak*^{H} もほとんど名詞 *nak*^{H}「心」との N+V 熟語動詞の中でのみ用いられる。

また、*šauŋ*^{F} と *yauŋ*^{H} は同義だが、*yauŋ*^{H} には「煮る」という読み（あるいは同音異義語かもしれない）があり、単独で用いられた場合、その読みが優先される[26]。

これらの複動詞構造で、V_1 と V_2 の間に意味的な重みの差があるかどうかは定かでない。しかし、単独での形態的自立性の観点から見れば V_2 は明らかに V_1 より軽い。

(60)–(62) の考察から、Ans1 が可能で Ans2 が不可能なのは、意味的ないしは形態的自立性の観点から V_2 より V_1 に重みが置かれる場合である、とまとめることができる。

6.2.4 Ans2 のみ可能

Ans2 のみ可能な並位型複動詞構造 V_1V_2 の多くは、意味的に V_2 に重きが置かれるものである。

(63) 比較的広い意味を持つ V_1 が、当該複動詞構造の中で V_2 の意味に合わせた読みを与えられるもの
同義・類義：*pak*^{F}*(-TA)-poŋ*^{F}「光る」（< 射る＋光る）

pak^F*(-TA)-poŋ*^{F}「光る」 の V_1 である *pak*^{F} は、ここでは光線が対象物を照らすという意味に解釈される。単独では投擲・射出武器で獲物を仕留めるという解釈が優先されるため、Ans1 が不可能であると判断された。

(64) V_1 が V_2 の表す事象の様態を表すもの
tsauŋ^F*-TA-ʔauŋ*^{L}「座って売る」（< 座る＋売る）
yeʔ^F*-TA-ʔauŋ*^{L}「立って売る」（< 立つ＋売る）

前述のとおり、V_2 が表す動作の様態を表す V_1 を含む複動詞構造の全てが並位型であるわけではない。*khuk*^{H}*-TA*-V「こっそり V」や *choŋ*^{H}*-TA*-V「一緒に V」など、V_1 が脱意味化を起こしているものは、後述する非並位型の A 類 (§6.3.1) に属する。

(65) V_1 が他動詞であり、V_2 がその結果の意味を表す自動詞であるもの
tso^L*-TA-kan*^{F}「食べつくす」（< 食べる＋尽きる）

同様に原因－結果の意味関係を表しながらも Ans1 を許し Ans2 を許さないものと異なり、*tso*^{L}*-TA-kan*^{F}「食べつくす」では「食べる」という動作よりも、それによって「食べる」の被動者である食物がなくなったことの方に重きが置かれていると考えられる。

(66) V_2 が V_1 によって表される事象に関する判断を表すもの
kat^H*-TA-šat*^{H}「し誤る」（< する＋誤る）

この複動詞構造は、主語が何かの行為を行い、その行為に関して誤っていることを表す。これが Ans2 のみを許し Ans1 を許さないのは、意味的な重点が V_2 が表す判断「誤っている」にあるからであろうと考えられる。

形態論的自立性の観点から V_1 より V_2 に重きが置かれる複動詞構造もある。

(67) *pǒ*^{F}*-TA-løm*^{F}「参加する」（< 含まれる＋含まれる）

この例では V_1 と V_2 は同義であるが、V_1 が弱化を起こして形態的に V_2 に依存している。この例で Ans1 が不可能なのはこの V_1 の形態的非自立性によるものと思われる。ちなみに、V_1 が弱化しなくても Ans1 は不可能である。

(68) **pǒ**^{F} **-*TA* -løm**^{F} -*TA* -ʔi^{H}. 参加するか？
included -& **-included** -RLS -Q

— ʔeŋ^{F}, **pǒ**^{F} **-*TA* -løm**^{F} -*TA* -ra^{H} / *pǒ^{F} -*TA* -ra^{H} / *po^{F} -*TA* -ra^{H} /
INTERJ **included -&** **-included** -RLS -RA included -RLS -RA included -RLS -RA

løm^{F} -*TA* -ra^{H}. — うん、参加する。/ — / — /参加する。
included -RLS -RA

6.2.5 並位型複動詞構造のまとめ

本節では一語肯定回答のふるまいに基づいて、ロンウォー語の並位型複動詞構造を観察してきた。並位型複動詞構造 V_1V_2 は、V_1 と V_2 の意味的関係から、次の 3 つに分けられる。

1. V_1 と V_2 が継起する 2 つの事象を表すもの
   （通常、Ans1, Ans2 とも不可、V_1 に声調交替が起こる。）
2. V_1 と V_2 が継起しないが対置された 2 つの事象を表すもの
   （通常、Ans1, Ans2 とも不可、V_1 に声調交替が起こらない。）
3. V_1 と V_2 が同義・類義の 2 つの事象を表すもの
   （Ans1, Ans2 の両方不可または両方可、V_1 に声調交替が起こる場合も起こらない場合もある。）

ただし、意味的および形態論的自立性の観点から V_1 により重きが置かれた場合 Ans1 が可能になり、V_2 により重きが置かれた場合 Ans2 が可能になる。

6.3 非並位型複動詞構造の下位分類

次に、非並位型の複動詞構造のふるまいを観察する。非並位型の複動詞構造は、肯定一語回答 (Ans1, Ans2) に関して、次の 3 通りのふるまいを示す。

Ans2 のみ可

(69) **choŋ**^{H} **-*TA* -toʔ**^{F} -*TA* -ʔi^{H}. 一緒に上ったか？
follow -& **-ascend** -RLS -Q

— ʔeŋ^{F}, **choŋ**^{H} **-*TA* -toʔ**^{F} -*TA* -ra^{H} / *choŋ^{H} -*TA* -ra^{H} / **toʔ**^{F} -*TA* -ra^{H}.
INTERJ **follow -&** **-ascend** -RLS -RA follow -RLS -RA **ascend** -RLS -RA

— うん、一緒に上った。/ — / 上った。

(70) **kat**^{H} **-ɣo**^{F} -*TA* -ʔi^{H}. 作る必要があるか？
make -necessary -RLS -Q

— ʔeŋ^{F}, **kat**^{H} **-ɣo**^{F} -*TA* -ra^{H} / *kat^{H} -*TA* -ra^{H} / **ɣo**^{F} -*TA* -ra^{H}.
INTERJ **make -necessary** -RLS -RA make -RLS -RA **necessary** -RLS -RA

— うん、作る必要がある。/ — / 必要だ。

Ans1 のみ可

(71) tso^{L} -*TA* -ɣu^{H} -*TA* -ʔi^{H}. 食べたことがあるか？
eat -& -look.at -RLS -Q

— ʔeŋ^{F}, tso^{L} -*TA* -ɣu^{H} -*TA* -ra^{H} / tso^{L} -*TA* -ra^{H} / *ɣu^{H} -*TA* -ra^{H}.
INTERJ **eat -& -look.at** -RLS -RA **eat** -RLS -RA look.at -RLS -RA

— 食べたことがある。/食べた。/ —

(72) veŋ^{F} -*TA* -ta^{H} -*TA* -ʔi^{H}. 話す勇気があるか？
dare -& -speak -RLS -Q

— ʔeŋ^{F}, veŋ^{F} -*TA* -ta^{H} -*TA* -ra^{H} / veŋ^{F} -*TA* -ra^{H} / *ta^{H} -*TA* -ra^{H}.
INTERJ **dare -& -speak** -RLS -RA **dare** -RLS -RA speak -RLS -RA

— うん、話す勇気がある。/勇気がある。/ —

どちらも不可

(73) tso^{L} -*TA* -ke̱ʔ^{H} -*TA* -ʔi^{H}. 食べてやったか？
eat -& -put.in -RLS -Q

— ʔeŋ^{F}, tso^{L} -*TA* -ke̱ʔ^{H} -*TA* -ra^{H} / *tso^{L} -*TA* -ra^{H} / *ke̱ʔ^{H} -*TA* -ra^{H}.
INTERJ **eat -& -put.in** -RLS -RA eat -RLS -RA put.in -RLS -RA

— うん、食べてやった。/ — / —

(74) kyauk^{F} -noŋ^{F} -*TA* -ʔi^{H}. 怖がらせたか？
be.scared -send.sb -RLS -Q

— ʔeŋ^{F}, kyauk^{F} -noŋ^{F} -*TA* -ra^{H} / *kyauk^{F} -*TA* -ra^{H} / *noŋ^{F} -*TA* -ra^{H}.
INTERJ **be.scared -send.sb** -RLS -RA be.scared -RLS -RA send.sb -RLS -RA

— うん、怖がらせた。/ — / —

(75) tsay^{H} -*TA* -phyauk^{H} -*TA* -ʔi^{H}. あれこれしていて失くしたのか？
do.sth -& -lose.VT -RLS -Q

— ʔeŋ^{F}, tsay^{H} -*TA* -phyauk^{H} -*TA* -ra^{H} / *tsay^{H} -*TA* -ra^{H} / *phyauk^{H} -*TA* -ra^{H}.
INTERJ **do.sth -& -lose.VT** -RLS -RA do.sth -RLS -RA lose.VT -RLS -RA

— うん、あれこれしていて失くした。/ — / —

(76) pa^{F} -*TA* -ta^{H} -*TA* -ʔi^{H}.
know -& -speak -RLS -Q

話すことができるか？（ある言語を習得している、という意味で）
— ʔeŋ^{F}, pa^{F} -*TA* -ta^{H} -*TA* -ra^{H} / *pa^{F} -*TA* -ra^{H} / *ta^{H} -*TA* -ra^{H}.
INTERJ **know -& -speak** -RLS -RA know -RLS -RA speak -RLS -RA

— うん、話すことができる。/ — / —

また、話題表示辞を伴った V2 のコピー (Copy2) に関しては、できないものとできるものとがある。

Copy2 が可能なもの

(77) **toʔ**^{F} -ɦia^{F} choŋ^{H} -*TA* **-toʔ**^{F} -*TA* -ra^{H}.
ascend -TOP follow -& **-ascend** -RLS -RA

一緒に上りはしたんだけど...

(78) **ɣo**^{F} -ɦia^{F} kat̲^{H} **-ɣo**^{F} -*TA* -ra^{H}.
necessary -TOP make **-necessary** -RLS -RA

作る必要はあるんだけど...

(79) **ta̲**^{H} -ɦia^{F} veŋ^{F} -*TA* **-ta̲**^{H} -*TA* -ra^{H}.
speak -TOP dare -& **-speak** -RLS -RA

話す勇気はあるんだけど...

(80) **ta̲**^{H} -ɦia^{F} pa^{F} **-ta̲**^{H} -*TA* -ra^{H}.
speak -TOP know **-speak** -RLS -RA

話すことはできるんだけど...

(81) **phyauk**^{H} -ɦia^{F} tsay^{H} -*TA* **-phyauk**^{H} -*TA* -ra^{H}.
lose.VT -TOP do.sth -& **-lose.VT** -RLS -RA

あれこれしていて失くしはしたんだけど...

Copy2 が不可能なもの

(82) ***no̲ŋ**^{F} -ɦia^{F} kyauk^{F} **-no̲ŋ**^{F} -*TA* -ra^{H}.
send.sb -TOP be.scared **-send.sb** -RLS -RA

(83) ***ɣu**^{H} -ɦia^{F} tso^{L} -*TA* **-ɣu**^{H} -*TA* -ra^{H}.
look.at -TOP eat -& **-look.at** -RLS -RA

(84) ***ke̲ʔ**^{H} -ɦia^{F} tso^{L} -*TA* **-ke̲ʔ**^{H} -*TA* -ra^{H}.
put.in -TOP eat -& **-put.in** -RLS -RA

上記 2 つの基準に基づいて、非並位型複動詞構造を大きく 4 類に分類することができる。

ただし、非並位型複動詞構造の中には、形式的に主要部を見分ける基準となる一語肯定回答を許さないものがいくつかある。これらについては、主要 4 類のうち類似点の多いものの特殊例とみなす。

(85) 非並位型複動詞構造の分類

		話題表示辞を伴った V_2 のコピー			
		Copy2 可=V_2 が語彙的意味を表す		Copy2 不可=V_2 が語彙的意味を表さない	
一語肯定回答	Ans2 のみ可 =V_2 が主動詞	**A. 修飾動詞－主動詞** ex. *choŋ*^{H}-*TA*-V 「一緒に V」 (69),(77)	**B. 補動詞－主動詞** ex. V-*ɣo*^{F} 「V する必要がある」 (70),(78)		
	どちらも不可	D'. 主動詞－補動詞 ex. *pa*^{F}-*TA*-V 《習得した能力》 (76),(80)	A'. 修飾動詞－主動詞 ex. *tsay*^{H}-*ʔ*-*V*「他のことをしていて V してしまう」(75),(81)	B'. 補動詞－主動詞 ex. V-*nɔŋ*^{F} 《使役》 (74),(82)	C'. 主動詞－修飾動詞 ex. V-*TA*-*ke*^{H} 《効果的遂行》 (73),(84)
	Ans1 のみ可 =V_1 が主動詞	**D. 主動詞－補動詞** ex. *veŋ*^{H}-*TA*-V 「V する勇気がある」 (72),(79)			**C. 主動詞－修飾動詞** ex. *V-TA-ɣu*^{H} 《経験》,《試行》 (71),(83)

以下で、各類の特徴を見ていく。

6.3.1 A 類

A 類では一語肯定回答のうち Ans2 のみが可能であり、このことは開いた類に属する V_2 が主動詞であることを示す。また Copy2 が可能であり、このことは V_2 が語彙的意味を表すことを示す。固定された V_1 は語彙的な意味を表すものでなく、主動詞 V_2 の意味に修飾を加える要素として働く。このような要素を修飾動詞 modifier verb と名付ける。

(86) *ce*^{F}-*TA*-V《優勢比較》(< 余る)
lam^F-*TA*-V「離れた所から V；待ち構えて V」(—)
tsaŋ^F-*TA*-V《個別》「各々が/を/に V」(< 集まる)
ɣuk^H-*TA*-V《不可避；無意識》(< 会う)
choŋ^H-*TA*-V「一緒に V」(< 追う、同行する)
khuk^H-*TA*-V「こっそり V」(< 盗む)
lauŋ^H-*TA*-V「習慣的に V」(< 閉じ込める?)
sauŋ^H-*TA*-V「過度に V」(—)
tauŋ^H-*TA*-V「過度に V」(—)
tam^F-*TA*-V「再び V」(—)
theʔ^H-*TA*-V《不注意；無意識》(< 得る)
tsam^H-*TA*-V「連れだって V」(< 付き合う)
tshoʔ^H-*TA*-V「続けて V」(< つなげる)

この類の V_1 には、単独で述部として用いられないものがいくつかある。上記リストで(—)を付したものがこれに当たる。これらを動詞とみなすのは、否定辞がこれらに前接されるという事実があるからである。N+V 熟語動詞において名詞部分が全体の意味の成立に不可欠であるにもかかわらず、否定辞が名詞部分ではなく動詞部分に前接されるということを思い起こせば、これらの V_1 を動詞とみなすことには十分な根拠があると言えるだろう。

6.3.2 B 類

B 類も A 類同様、一語肯定回答のうち Ans2 のみが可能であり、また Copy2 が可能である。B 類と異なるのは、語彙的意味を表す主動詞 V_2 が固定された要素であり、V_1 が開いた類に属するという点である。

(87) V-*ɣo*^{F}「V する必要がある」(< 必要だ)
V-*cha*^{L}「V する必要がある」(< 必要だ)
V-*nuk*^{F}《願望》「V したい」(< 欲する)
V-*ɣuk*^{L}「V しにくい」(< 難しい)
V-*lauy*^{F}「V しやすい」(< 易しい)

B 類の複動詞構造が述部となる情報授受文において、現実 vs. 非現実の法の対立は V_2 についての判断を示す。

(88) a.*ne?^{F}mo^{H}pa^F ta̲^{H} -*TA*-ra^H.
tomorrow speak -RLS -RA

b. ne?^{F}mo^{H}pa^F ta̲^{H} **-nuk^F** -*TA*-ra^H. 明日話したい。
tomorrow speak **-want** -RLS -RA

(88a) が不適格と判断されるのは、*ne?^{F}mo^{H}pa^F*「明日」が未来時を表す時間名詞であり、現実法と両立しないためである。(88b) が適格と判断されるのは、「(主語が指示する人が) 話す」という活動とは独立した「(主語が指示する人が) 明日話すことを望む」という心理的状態が発話時点で成立しているからである [27]。もしも *ne?^{F}mo^{H}pa^F* が *nuk^F* を修飾するのであれば、(88b) は不適格になるはずである。

以上のことから、この類の複動詞構造の内部で主たる要素は V_2 であり、V_1 は V_2 の「補語」相当であると考えるのが妥当である。ゆえにこれら V_1 を (述部内の) 補動詞 (predicate internal) complement verb と名付ける。

なお、B 類の V_1 は声調交替を起こさないことに注意されたい。

6.3.3 C 類

C 類では一語肯定回答のうち Ans1 のみが可能であり、Copy2 は不可能である。このことは開いた類に属する V_1 が主動詞であり、固定された要素である V_2 が語彙的意味を表さないことを示す。V_1, V_2 の両方が語彙的意味を表さないことはあり得ないので、必然的に主動詞である V_1 が語彙的意味を表すということになる。V_2 の働きは V_1 の表す事象に修飾を加えることである。ゆえに A 類の V_1 同様、修飾動詞とみなす。表す意味に違いはあるが、A 類と鏡像の関係にあると言ってよい。

V_2 の表す意味としては、下記のようなものがある。

(89) 移動そのものの方向・動作の後の移動の方向にかかわるもの
V-*TA-li*^{H}「V して来る」(< 来る)
V-*TA-lo*^{F}「V して定位置に戻って来る」(< 来る$_H$)
V-*TA-ye*^{L}「V して行く」(< 行く)
V-*TA-lo*^{H}「V して定位置に戻って行く」(< 行く$_H$)

(90) 事象の局相にかかわるもの

V-*TA-coʔ*^{F}《結果の持続》（< 在る）

V-*TA-ɣ̱it*^{F}「最初に V；V し始める」（< 始まる）

V-*TA-ɣu*^{H}《経験》「V したことがある」（< 見る）

V-*TA-na*^{F}《進行》「V している」（< 居る）

V-*TA-li*^{H}《突然の変化》（< 来る）

V-*TA-lo*^{F}《漸進；現在までの持続》（< 来る$_{H}$）

V-*TA-ye*^{L}《現在以降の持続》（< 行く）

V-*TA-lo*^{H}《変化の完了》（<行く$_{H}$）

(91) 事象の様態にかかわるもの

V-*TA-ɣu*^{H}《試行》「V してみる」（< 見る）

V-*TA-pyauk*^{F}《変化の完了》（< 消え去る）

V-*TA-to*^{L}《準備》「V しておく」（< 置く）

V-*TA-yu*^{F}《取得》「V して取る」（< 取る）

V-*pyit*^{L}《授益》「V してやる」（< 与える）

V-*choʔ*^{H}《結果の残存》（—）

6.3.4 D 類

D 類では、一語肯定回答のうち Ans1 が可能であり、Copy2 も可能である。これは固定された要素である V_1 が主動詞であり、開いた類に属する V_2 が語彙的意味を表すことを示している。

(92) *nuk*^{F}-*TA*-V《願望》「V したい」（< 欲する）

ɣo^{H}-*TA*-V《状況による可能；許可》（< 得る）

kay^{F}-*TA*-V《潜在的可能性；先天的能力》（< 良い）

pin^{F}-*TA*-V《完了》「V し終わる」（< 終わる）

veŋ^{H}-*TA*-V「V する勇気がある」（< 勇敢だ）

nuk^{F}「欲する」は B 類の V_2 としても現れる要素で、(93) は (88) と同じ意味を表す。

(93) neʔ^{F}mo^{H}pa^{F} **nuk**^{F} - *TA* -ta^{H} -*TA* -ra^{H}.

tomorrow **want** -& -speak -RLS -RA

明日話したい。

ということは、(93) においては文標識の表す現実法が V_1 についての判断を示すということである。そうでなければ、(93) の適格性が説明されない。

また、(88) で V_1 が V_2 の補動詞であることから、それと同じ意味を表す (93) では V_2 が V_1 の補動詞であると考えられる。動詞がその補語に後続するのが基本語順であるロンウォー語において、これはかなり特異なことである。

D 類の *nuk*^{F} と同様の扱いができるものとしては他に、*ɣo*^{H}-*TA*-V《状況による可能；許可》がある。ただし、*nuk*^{F} の場合と比べて、単独で述部となる場合との意味の違いが大きい。

(94) ne$ʔ^{F}$mo^{H}pa^{F} **ɣo^{H}** -*TA* -ta^{H} -*TA* -ra^{H}.
tomorrow **get** -& -speak -RLS -RA

明日話すことができる。(状況がそれを許す)

kay^{F}-*TA*-V《潜在的可能性；先天的能力》においても V_1 を V_2 の補動詞とみなし得る。*nuk^{F}*-*TA*-V《願望》「V したい」の場合と同様に、現実法の文の解釈が V_1 が主要部であるという見方を支持する。

(95) ne$ʔ^{F}$mo^{H}pa^{F} **kay^{F}** -*TA* -ta^{H} -*TA* -ra^{H}.
tomorrow **good** -& -speak -RLS -RA

明日話すことができる。(主語の自由意志によって)

veŋ^{H}-*TA*-V「V する勇気がある」については、V_2 は V_1 にとって必須の要素ではなく、随意的な補語である。ここでも現実法の文の解釈によって V_1 が主要部であるという見方が支持される。

(96) ne$ʔ^{F}$mo^{H}pa^{F} **veŋ^{H}** -*TA* -ta^{H} -*TA* -ra^{H}.
tomorrow **brave** -& -speak -RLS -RA

明日話す勇気がある。

pin^{F}-*TA*-V《完了》「V し終わる」については、その表す事象が現実と判断されれば V_2 単独で表す事象もやはり現実と判断されることになるので、現実法の文を V_1 が主要部であることの根拠に使うことはできない。V_1 単独では出来事を表す名詞句の主語を取る自動詞であるため、V_1 を主要部として認める。

V_1 の基本声調が *F* であるものについては、明らかに声調交替が起こっている。V_1 の基本声調が *H* であるものについても、これに準じておく。

6.3.5 B' 類

(97) V-*pa^{F}*《習得した能力；傾向》(< 知る)
V-*noŋ^{F}*《使役》(< 遣わす)

これら 2 つの複動詞構造は、V_1 が開いた類に属し V_2 が固定された要素である点、および V_1 が声調交替を起こさないという点で B 類と共通する。しかし、一語肯定回答は不可能であり、Copy2 も許さない。その原因は、主動詞である V_2 の意味と、それが単独で述部となる場合の意味との間にかなりの開きがあり、本来の語彙的意味を表さなくなっていることに帰することができるだろう。

6.3.6 C' 類

(98) V-*TA*-*ke^{H}*《効果的遂行》(< 入れる)
V-*TA*-*pye^{H}*《完遂》「V しきる」(< 抛る)

これら 2 つの複動詞構造は、V_1 が開いた類に属し V_2 が固定された要素である点、Copy2 が不可能であり従って V_2 が語彙的な意味を表さない点、および、V_1 が声調交替を起こす点で C 類の大多数と共通する。これらが一語肯定回答を許さない理由はよくわからないが、少なくとも B' 類の場合のように、V_2 としての意味と単独で述部となる場合の意味の間の隔たりに帰することはできない。なぜなら、C 類の中にも同様な意味の開きを示すものが存在するからである。

6.3.7 D' 類

(99) *pa*^{F}-*TA*-V《習得した能力》(< 知る)

V_1 が固定された要素であり V_2 が開いた類に属する。また Copy2 が可能であり従って V_2 が語彙的な意味を表す。

pa^{F}-*TA*-V《習得した能力》は B' 類の V-*pa*^{F}《習得した能力；傾向》と共通する意味を持つ。また、(100a,b) とも、発話時点において彼が様々な言語を話していなくても（それどころか、何も話していなくても）真であり得るということから、これらの例で現実法が *pa*^{F} についての判断を示すことがわかり、この点でも V-*pa*^{F}《習得した能力；傾向》との共通性を示す。

(100) a. yoŋ^{L} myan^{H} -ʔăca^{L}ca^{L} cau̲^{F} **-pa**^{F} -*TA* -ra^{H}.
he language -various speak **-know** -RLS -RA

彼は様々な言語を話せる。

b. yoŋ^{L} myan^{H} -ʔăca^{L}ca^{L} **pa**^{F} -*TA* -cau̲^{F} -*TA* -ra^{H}.
he language -various **know** -& -speak -RLS -RA

(同上)

以上の点から、これを D 類に準ずるものとして扱う。一語肯定回答を許さない理由は V-*pa*^{F}《習得した能力；傾向》の場合と同じである。

6.3.8 A' 類

(101) *tsay*^{H}-*TA*-V「他のことをしていて V してしまう」(< 何かをする)

V_1 が固定された要素であり V_2 が開いた類に属すること、Copy2 が可能であり従って V_2 が語彙的な意味を表すこと、および、一語肯定回答を許さないことは D' 類と共通する性質である。

D' 類との違いは、D' 類の V_1 が一語肯定回答が不可能であるにもかかわらず主要部とみなすに足る性質を持つのに対し、この類の V_1 はそれを持たないという点である。

6.3.9 *co̲*^{H} についての考察

ロンウォー語には、後続する動詞と結びついて対称的事象を表す *co̲*^{H} という形式がある。 *co̲*^{H} は単独で生起することがなく、いかなる語彙的意味も持たない。

否定辞 *mă-/tă-* を前接できることから、 *co̲*^{H} は動詞派生の前接辞か、あるいは単独で生起できない特殊な動詞であるかのいずれかであると考えることができる。本稿でこれを後者とみなす理由は以下の 3 つである。

1. ロンウォー語で明らかに動詞派生前接辞とみなすことができるものとして、名詞化前接辞 *ʔă-* がある。動詞に付く前接辞にはこの他に、前述の否定前接辞 *mă-/tă-* と、対比肯定の前接辞 *ʔă*^{L}- がある。これらに共通するのは音節弱化を起こしているという点であるが、 *co̲*^{H} はそうではない。
2. N+V 熟語動詞との共起において、 *co̲*^{H} が動詞部分に先行する場合と、名詞部分に先行する場合の両方が見られる。

(102) a. myan^{H} +**co̱^{H}** -myo^{L} -*TA* -ra^{H}.
language +RECIP -abound -RLS -RA
言い争った。

b. **co̱^{H}** -myan^{H} +myo^{L} -*TA* -ra^{H}.
RECIP -language +abound -RLS -RA
(同上)

もしも *co̱^{H}* が動詞前接辞だとしたら、(102b) のように名詞に前接されることはないはずである。(ちなみに、明らかに動詞前接辞である否定の *mă-/tă-* が N+V 熟語動詞の名詞部分に前接されることは絶対にない。cf.(8))

3. *co̱^{H}-TA*-V は Copy2 を許す。もしもこれが派生前接辞+動詞からなる一語だとしたら、Copy2 を許さないはずである。

(103)**ta̱^{H}** -ɦa^{F} co̱^{H} **-ta̱^{H}** -*TA* -ra^{H}.
speak -TOP RECIP **-speak** -RLS -RA
互いに話し合いはしたんだけど...

動詞 *co̱^{H}* を V_1 とする複動詞構造は並位節化 (8rat) を許さない。 *co̱^{H}* 自体が何らの語彙的意味も持たないので、この複動詞構造を非並位型とみなして差し支えない。

動詞 *co̱^{H}* と共に複動詞構造をなす V_2 には、以下のようなものがある。

(104) a. 動作主あるいは主題の意味役割を担う S 項を取り、対称的な事象を表す動詞。S 項は、等位接続子 *-ɦeʔ^{H}* を介した等位接続によって形成される名詞句か、あるいは複数表示の形式 *-ca̱m^{F}*, *-pam^{F}*, *-ɣe^{F}* などを後接した名詞句で、複数個体を指示する。

b. 動作主あるいは主題の意味役割を担う S 項と、共格 *-ɦeʔ^{H}* で表示された S の「相方」の項の計 2 項を取り、対称的な事象を表す動詞 [28]。

c. 動作主の A 項と、被動者/主題/受領者の P 項を取る動詞。それ以外の項を取ることもあり得る。P 項の名詞句は少なくとも有生物を指示するものでなければならない。

(104c) に該当する動詞 *ta̱^{H}*「話す」を V_2 とする複動詞構造は、Ans1, Ans2 のいずれも許さない。

(105)**co̱^{H}** -ta̱^{H} -*TA* -ʔi^{H}. 互いに話し合ったか?
RECIP -speak -RLS -Q

— ʔeŋ^{F}, **co̱^{H}** -ta̱^{H} -*TA* -ra^{H} / *co̱^{H} -*TA* -ra^{H} / *ta̱^{H} -*TA* -ra^{H}.
INTERJ RECIP -speak -RLS -RA RECIP -RLS -RA speak -RLS -RA

— うん、互いに話し合った。

このため、Ans1, Ans2 に基づいてどちらが主動詞かを決定することはできない。

しかし、(106) の例をみる限り、*co̱^{H}* 自体が複動詞構造全体としての項構造を決定していると考えるのが妥当であり、このことは *co̱^{H}* が主動詞であることの根拠とみなせる。

(106) a. ngo^{F} yao^{L} -re^{F} ta̱^{H} -*TA* -ra^{H}.
I he -ACC speak -RLS -RA
私は彼に話した。

b. yao^{L} -ɦeʔ^{H} ngo^{F} **co̱^{H}** **-*TA*** -ta̱^{H} -*TA* -ra^{H}.
he -COORD I **RECIP -&** -speak -RLS -RA
彼と私は話し合った。

c. ngo^{F} yao^{L} -fieʔ^{H} **co̱^{H} -*TA*** -ta̱^{H} -*TA* -ra^{H}.
I he -COM **RECIP -&** -speak -RLS -RA

私は彼と話し合った。

ゆえに、 *co̱^{H}* を主動詞、V_2 を補動詞として、この複動詞構造を D' 類に含める。あわせて、他の D' 類（および D 類）同様、 *co̱^{H}* の後に声調交替を引き起こす要素 -*TA* を立てる。（基本声調が *H* であるため、耳に聞こえる形での声調交替は起こらない。）

一方、V_2 が対称的事象を表す (104a) または (104b) の場合だが、残念ながら Ans1, Ans2 については未確認である。（ *co̱^{H}* が V_2 を伴うことなしには生起しない要素であるため、Ans1 が不可という推測は成り立つ。）ただこの場合には、(107) にみられるように *co̱^{H}* の存在は述部の項構造に影響を与えない。ゆえに、この場合には V_2 が主動詞、 *co̱^{H}* が修飾動詞、すなわち A' 類の複動詞構造とみなすことができる。この場合にも、A' 類および A 類の他の複動詞構造の例にならって *co̱^{H}* の後に *TA* を立てる。

(107) a. yao^{L} -fieʔ^{H} ngo^{F} **(co̱^{H} -*TA*)** -tsam^{H} -khuk^{F} -*TA* -ra^{H}.
he -COORD I **(RECIP -&)** -socialize -socialize -RLS -RA

彼と私は付き合いがある。

b. ngo^{F} yao^{L} -fieʔ^{H} **(co̱^{H} -*TA*)** -tsam^{H} -khuk^{F} -*TA* -ra^{H}.
I he -COM **(RECIP -&)** -socialize -socialize -RLS -RA

私は彼と付き合いがある。

7 分類基準として用いなかった文法現象

§5.3 で、談話役割表示辞 (DRI) によって引き起こされる現象のうち、V_1 のコピー V_1-DRI V_1V_2 ((21a) のような）は全ての複動詞構造 V_1V_2 に適用可能なため分類基準として働かず、V_1 への DRI の付加 V_1-DRI V_2 (21c) はそれを可能にする複動詞構造の特徴が明確でないため、やはり分類基準として働かないということを見た。 本節では、§5 で挙げなかった 2 つの文法現象、V_1 の連位節化と V_2 への否定辞前接が、前接で分類した複動詞構造各類においてどのようなふるまいを示すかを観察する。あわせて、談話役割表示辞の一つである話題表示辞の V_1 への付加 (Top1) についても、複動詞構造各類におけるふるまいを見る。

7.1 V_1 の連位節 (cosubordinate clause) 化 (Cosub1)

(3) に挙げたように、ロンウォー語の従属節標識には *-yaŋ^{L}* [単純接続] と *-muŋ^{L}* [継起] がある。一般に、*-muŋ^{L}* が導く節の主動詞の表す事象は主動詞の表す事象に、時間的に先行するか、あるいは話者が出来事を観察する順序において先行するかのいずれかであることが多い。

(108) moŋ^{L}pyoʔ^{L} -yoŋ^{L} xi̱t^{H} -khyo^{F} ye^{L} **-muŋ^{L}** ʔay^{L} -mo̱ŋ^{L} -taŋ^{L} -meŋ^{F}
PN -self front -ALL go **-SEQ** that.DET -thatch -bundle -LOC

yě^{L} -*TA* -lauŋ^{H} -*TA* -coʔ^{F} -*TA* -ka^{H}.
go -& -hide -& -exist -RLS -HS

モンピョッ自身は、先に行って、その藁の束に隠れていたとさ。（「モンピョッ」）

(109) moŋ^{L}pyoʔ^{L} pyu^{F} ŋat^{F} **-muŋ^{L}** moŋ^{L}lo^{L} myaŋ^{F}kha^{L} ŋat^{F} -*TA* -ka^{H}.
PN man COP **-SEQ** PN tiger COP -RLS -HS

モンピョッは人間で、モンローは虎だったとさ。(「モンピョッ」)

一方、*-yaŋ^{L}* が導く節の主動詞の表す事象は主動詞の表す事象に厳密先行する必要はなく、2 つの事象がオーバーラップしていてもよい。

(110) man^{H}tăle^{H} -meŋ^{F} tătsap^{F} ye^{L} -*TA* -thaŋ^{F} **-yaŋ^{L}** yaŋ^{L}guŋ^{L} -khyo^{F}
Mandalay -LOC for.a.while go -& -halt **-CONJ** Yangon -ALL

tam^{F} -*TA* -tshoʔ^{H} -*TA* -ye^{L} -*TA*.
again -& -continue -& -go -RLS

マンダレーにしばらく留まってから引き続きヤンゴンに行った。(コンホン氏の自伝)

(111) sak^{H} -ši^{L} -vŏ^{L}ši^{L} -tsa^{L} tso^{L} **-yaŋ^{L}** na^{F} -*TA* -lay^{F} -*TA* -lo^{F} -va^{H} -*TA*.
tree -fruit -seed -only eat **-CONJ** stay -& -pass.by -& -come$_{H}$ -RLZN -RLS

(ロンウォー人たちは) 木の実や種子だけを食べて暮らしてきた. (「ピュー人の洞窟」)

節標識 *-muŋ^{L}/-yaŋ^{L}* が導く節の述部動詞が表す事象と、主節の述部動詞が表す事象は、意味的に等位的な関係にある。しかしながら、*-muŋ^{L}/-yaŋ^{L}* が導く節がどのような発話行為タイプを担うかは、主節の文標識によって決定される。つまり、*-muŋ^{L}/-yaŋ^{L}* が導く節は主節と、Role and Reference Grammar でいうところの連位接続 cosubordination の関係にあるということができる。

(112) V_1 の従属節標識 *-muŋ^{L}* による連位節化 (Cosub1)
V_1 -V_2- を V_1 -muŋ V_2- にパラフレーズできるかどうか。
-SEQ

この現象は、Enfield (2008) の Clause-separability を思い起こさせる。

並位型複動詞構造のうち継起的なものに Cosub1 を許すものが多いのは予想されることだが、全てにおいて可能なわけでもなく、コンサルタントは *ɣam^{F}-TA-phyit^{H}*「決定する」, *ɣo^{F}-TA-myoŋ^{F}*「探して見つける」, *keŋ^{F}-TA-pyo^{F}*「分配する」, *peʔ^{F}-TA-khoʔ^{H}*「叩き割る」, *phoŋ^{F}-TA-toŋ^{L}*「逃げ去る」について Cosub1 が不可能と判断した。

一方、同義・類義的な並位型複動詞構造のうち *yi^{L}(-TA)-ɣaŋ^{F}*「大きい」, *pap^{F}-TA-ɣəm^{H}*「朽ちる」, *pyoʔ^{F}-TA-pauy^{F}*「滅びる」, *ɣam^{F}-phauŋ^{F}*「集合する」, *ŋauy^{F}-pau^{L}*「喜ぶ」, 並列的な並位型複動詞構造のうち *chauŋ^{L}-ŋauy^{H}*「讃えて歌う」については Cosub1 が可能であるとしている。

非並位型複動詞構造で Cosub1 が可能であると判断されたのは、A 類の *ce^{F}-TA*-V《優勢比較》, *khuk^{H}-TA*-V「こっそり V」, *tshoʔ^{H}-TA*-V「続けて V」, A' 類の *tsay^{H}-TA*-V「他のことをしていて V してしまう」, C 類の V-*TA-li^{H}*「V して来る」/ V-*TA-ye^{L}*「V して行く」/ V-*TA-lo^{F}*「V して定位置に戻って来る」/ V-*TA-lo^{H}*「V して定位置に戻って行く」である。

7.2 V_2 への否定辞前接 (Neg2)

一般に、ロンウォー語の複動詞構造を否定にする場合、複動詞構造の最初の動詞に否定辞 *tă-/mă-* を前接する [29]。これに加えて、一部の V_1V_2 では V_2 に否定辞を前接することが可能である。

(113) V_2 への否定辞前接 (Neg2)

V_1 - V_2 を V_1 - mă^F - V_2 の形で否定にできるかどうか。
-not-

コンサルタントが Neg2 を可能と判断した並位型複動詞構造のうち、継起的なものとしては、*tso*^{L}-*TA*-*kyi*^{L}「食べて満腹する」, *leʔ*^{H}-*TA*-*kyauk*^{H}「日干しする」, *tso*^{L}-*TA*-*kan*^{F}「食べつくす」, *yeʔ*^{F}-*TA*-*ʔauŋ*^{L}「立って売る」, *tsauŋ*^{F}-*TA*-*ʔauŋ*^{L}「座って売る」がある。このうち *tso*^{L}-*TA*-*kyi*^{L}「食べて満腹する」と *leʔ*^{H}-*TA*-*kyauk*^{H}「日干しする」については、Neg2 で V_1 が明らかに否定の作用域の外に置かれることが観察された。

(114) a. **mă-** tso^L - *TA* - kyi^L -∅.
not- eat -& - have.a.full.belly - NEG
食べて満腹しなかった。

b. tso^L - *TA* **-mă-** kyi^L -∅.
eat -& **-not-** have.a.full.belly - NEG
食べたけど満腹しなかった。

(115) a. **mă-** leʔ^H - *TA* - kyauk^H -∅.
not- dry.in.the.sun-& - dry - NEG
日干しして乾かなかった。

b. leʔ^H - *TA* **-mă-** kyauk^H -∅.
dry.in.the.sun-& **-not-** dry - NEG
日干ししたけど乾かなかった。

コンサルタントは特別な文脈なしにこの解釈を与えたので、このような読みは継起的な並位型複動詞構造の Neg2 一般に当てはまるものである可能性がある。

同義・類義的、および並列的な並位型複動詞構造では一般に Neg2 が不可能である。

なお、(114) と (115) で、V_1 と否定辞を前接した V_2 とが動詞連結子で接続されていることに注意されたい。少なくともこれらの場合には 2 つの動詞は依然として等位接続されており、V_1 が複動詞構造の外に追い出されたわけではないのである。

非並位型複動詞構造では、V_2 が主要部となる A 類, B 類に Neg2 を許すものが多い。Neg2 を許さないものとしては A 類の *tsam*^{H}-*TA*-V「連れだって V」, *tsaŋ*^{F}-*TA*-V《個別》「各々が/を/に V」, *tauŋ*^{H}-*TA*-V「過度に V」, *ɣuk*^{H}-*TA*-V《不可避；無意識》, A' 類の *tsay*^{H}-*TA*-V「他のことをしていて V してしまう」, B 類の V-*nuk*^{F}《願望》「V したい」, V-*pa*^{F}《習得した能力；傾向》, B' 類の V-*noŋ*^{F}《使役》がある。A(A') 類では V_1 の後に動詞連結子が置かれるので、並位型の (114),(115) の場合と同様、V_1 は依然として述部の中にあると言い切れるが、動詞連結子の置かれない B(B') 類でも、やはり V_1 は述部の外に出ていないとみなす。そうでなければ、§8 で扱う項の調整をうまく説明できないからである。

V_1 が主要部となる C(C') 類・D(D') 類では、C 類の V-*pyit*^{L}《授益》「V してやる」, V-*TA*-*yu*^{F}《取得》「V して取る」を除いておおむね Neg2 が不可能であった。

Neg2 と通常の否定形式の表す意味の違い、とりわけ否定の作用域の違い、また Neg2 が使用可能な文脈、調査で Neg2 が前接とされた複動詞構造についてもしかるべき文脈を整えると Neg2 が可能になるのかなど、考察すべき問題はまだたくさんあり、さらなる調査が必要である。

7.3 V_1 への話題表示辞の付加 (Top1)

非並位型の複動詞構造では、C(C') 類の多くで Top1 が不可能、それ以外の類では Top1 が可能である。つまり、一般に V_2 が語彙的（A(A')/B/ ɒɒ) の各類がこれに当てはまる）でも主動詞（A(A')/ B(B') の各類がこれに当てはまる）でもない場合に Top1 が不可能であるということになる。C 類のうち Top1 が可能であると協力者が判断した複動詞構造は、C 類の V-*TA-li*^{H}「V して来る」, V-*TA-lo*^{F}「V して定位置に戻って来る」, V-*TA-ye*^{L}「V して行く」, V-*TA-lo*^{H}「V して定位置に戻って行く」, V-*pyit*^{L}《授益》「V してやる」, V-*TA-yu*^{F}《取得》「V して取る」および V-*cho*ʔ^H《結果の残存》である。C(C') 類以外で Top1 が不可能であると判断された複動詞構造は、A 類の *tsa̲ŋ*^{F}-*TA*-V《個別》「各々が/を/に V」と *tam*^{F}-*TA*-V「再び V」である。

一方、並位型の複動詞構造では、今回調査したうち約 1/3 の複動詞構造で Top1 が不可能であると判断された。Top1 の可能性と V_1-V_2 の意味的関係のパターンの間にも、また Ans1, Ans2 の可能性との間にも、相関は見られなかった。並位型の V_2 は概して語彙的であり、また並位型では一般に Top1 と同等の機能を持つ操作である Copy2 が可能であることを鑑みると、一部の Copy2 が可能な並位型複動詞構造でなぜ Top1 が不可能なのか、不可解である。

8 複動詞構造における項の調整

§3.2. 3 で述べたように、複動詞構造は動詞述部として動詞句の主要部となることができるので、同一意味役割を担う項を 2 つ以上取ることがないように複動詞構造を構成する動詞間で項の調整が行われる必要がある。

本節では、並位型と非並位型に分けて、どのように項が調整されるかを観察する。

8.1 並位型複動詞構造における項の調整

並位型で多いのが、V_1 と V_2 がいずれも自動詞、あるいはいずれも他動詞で、両者の同じ格役割 (S/ A/P) を持つ項同士が同一の対象を指示するというパターンである。

(116) lømᴴkhoŋᴾ　　**to̲ᴴ -*TA* -yeʔᴾ** -*TA* -raᴴ.　　ルムコンは起立した。
PN　　**rise -&　-stand** -RLS　-RA

to̲^{H}-*TA-ye*ʔ^F「立ち上がる」（< 起きる＋立つ）：

$$V_1 \overset{s_1}{<\text{動作主}>} = V_2 \overset{s_2}{<\text{動作主}>}$$
S　　S

上に示した項構造図で、V_n に続く < ··· > は V_n の項構造を表す。< ··· > の ··· には V_n が項に付与する意味役割のセットが示される。意味役割の上には、V_n が単独で述部となる場合に当該意味役割を担う項の格役割が小文字で記され、意味役割の下には、複動詞構造が述部となる場合に当該意味役割を担う項の格役割が大文字で記される。動詞・項構造の間に置かれた = は、2 つの動詞が構造的に等位の関係にあることを表す。

この例では、複動詞構造 *to̲*^{H}-*TA-ye*ʔ^F の S 項が、V_1 本来の（つまり、V_1 単独で述部となる場合の）S 項に割り当てられた動作主の意味役割と、V_2 本来の S 項に割り当てられた動作主の意味役割を付与

される。自動詞 2 つからなる並位型複動詞構造の例をもう一つ挙げる。

(117) che^{L} vŏ^{L}kauŋ^{L} **pyoʔ^{F} -*TA* -pauy^{F}** -*TA* -ra^{H}. この村は滅びた。
this.DET village **break -& -scatter** -RLS -RA

pyoʔ^{F}-TA-pauy^{F}「滅びる」(< 壊れる＋霧散する)：

$$V_1 \overset{s_1}{<\text{主題}>_S} = V_2 \overset{s_2}{<\text{主題}>_S}$$

次に挙げる例では、2 つの他動詞 V_1, V_2 からなる並位型複動詞構造の A 項が、V_1 の A 項に割り当てられた意味役割と V_2 の A 項に割り当てられた意味役割を付与され、P 項が V_1 の P 項に割り当てられた意味役割と V_2 の P 項に割り当てられた意味役割を付与される。

(118) lǿm^{H}khoŋ^{F} thoŋ^{L} **kauk^{F} -*TA* -voʔ^{F}** -*TA* -ra^{H}. ルムコンは薪を集めて担いだ。
PN firewood **gather -& -shoulder** -RLS -RA

kauk^{F}-TA-voʔ^{F}「集めて担ぐ」(< 集める＋担ぐ)：

$$V_1 <\overset{a_1}{\text{動作主}}_A, \overset{p_1}{\text{主題}}_P> = V_2 <\overset{a_2}{\text{動作主}}_A, \overset{p_2}{\text{主題}}_P>$$

(119) lǿm^{H}khoŋ^{F} ŋo^{L} -šo^{L} **ya<u>u</u>ŋ^{H} -*TA* -tso^{L}** -*TA* -ra^{H}. ルムコンは魚の肉を煮て食べた。
PN fish -meat **cook -& -eat** -RLS -RA

ya<u>u</u>ŋ^{H}-TA-tso^{L}「調理して食べる」(< 調理する＋食べる)：

$$V_1 <\overset{a_1}{\text{動作主}}_A, \overset{p_1}{\text{被動者}}_P> = V_2 <\overset{a_2}{\text{動作主}}_A, \overset{p_2}{\text{被動者}}_P>$$

2 つの動詞の結合価が異なる場合、複動詞構造の項が一方の動詞からのみ意味役割を付与されるということがあり得る。

例えば、(120) の *ŋo^{F}*「私」は、V_2 の *ɣ<u>u</u>^{H}*「見せる」本来の受領者の意味役割を付与されるが、V_1 の *ɣoʔ^{F}*「織る」とは関連付けられない[30]。

(120) ʔǎmyi<u>i</u>^{H} ŋo^{F} -re^{F} may^{F}šeŋ^{H} **ɣoʔ^{F} -*TA* -ɣ<u>u</u>^{H}** -*TA* -ra^{H}.
mother I -ACC lungyi **weave -& -show** -RLS -RA

母は私にロンジーを織って見せた。

ɣoʔ^{F}-TA-ɣ<u>u</u>^{H}「織って見せる」(< 織る＋見せる)：

$$V_1 <\overset{a_1}{\text{動作主}}_A, \overset{p_1}{\text{生産物}}_P> = V_2 <\overset{a_2}{\text{動作主}}_A, \overset{p_2}{\text{主題}}_P, \overset{p'_2}{\text{受領者}}_{P'}>$$

また、(121) では *vin^{F}-TA-su^{L}* の A 項 *lǿm^{H}khoŋ^{F}* が V_1 である *vin^{F}*「担う」の A 項に割り当てられた動作主の意味役割と V_2 である *su^{L}* の S 項に割り当てられた主題の意味役割を付与され、P 項 *šo^{L}*「肉」は V_1 の P 項に割り当てられた主題の意味役割を付与される。

(121) lø̱m^{H}khoŋ^{F} šo^{L} **vin^{F} -*TA* -su^{L}** -*TA* -ra^{H}. ルムコンは肉を運んで歩いた。
PN meat **carry -& -walk** -RLS -RA

vin^{F}-TA-su^{L}「運んで歩く」(< 運ぶ＋歩く)：

a_1 p_1 s_2
V_1 <動作主，主題> = V_2 <動作主>
A P A

tau^{F}-TA-to^{H}「立たせる」(< 立てる＋起きる)，*le?^{H}-TA-kyauk^{H}*「日干しする」(< 日干しする＋乾く)，*cit^{H}-TA-te?^{F}*「愛する」(< 愛する＋付く) などの複動詞構造では、V_1 の A 項に割り当てられた意味役割が複動詞構造の A 項に付与され、V_1 の P 項に割り当てられた意味役割と V_2 の A 項に割り当てられた意味役割が複動詞構造の P 項に付与される。*tau^{F}-TA-to^{H}*「立たせる」(< 立てる＋起きる) の例を挙げる。

(122) lø̱m^{H}khoŋ^{F} yoŋ^{L} -re^{F} **tau^{F} -*TA* -to^{H}** -*TA* -ra^{H}. ルムコンは彼を助け起こした。
PN he -ACC **lift -& -rise** -RLS -RA

tau^{F}-TA-to^{H}「立たせる」(< 立てる＋起きる)：

a_1 p_1 s_2
V_1 <動作主，主題> = V_2 <動作主>
A P P

これまでの例では V_1 と V_2 の付与する意味役割は全ていずれかの項に付与されていたが、一部の意味役割が付与されない複動詞構造も存在する。例えば、(123) では *kau^{L}*「渡る」の P 項に割り当てられた経路の意味役割がいずれの項にも付与されない。なお、*te?^{F}*「付く」の着点の意味役割は *kau^{L}-TA-te?^{F}* の向格標示された項に付与される。

(123) lø̱m^{H}khoŋ^{F} thǒ^{L} -te?^{H} -khyo^{F} **kau^{L} -*TA* -te?^{F}** -*TA* -ra^{H}.
PN that.DIST -bank -ALL **cross -& -attach** -RLS -RA

ルムコンは向こう岸に渡った。

kau^{L}-TA-te?^{F}「渡る」(< 渡る＋付く)：

a_1 p_1 s_2 ALL_2
V_1 <主題，経路> = V_2 <主題，着点>
S ∅ S ALL

また、(124) では、*ŋauy^{H}*「歌う」の P 項に割り当てられた主題の意味役割がいずれの項にも付与されない。

(124) ŋǒ^{F} -nauŋ^{H} moŋ^{H}so^{F} -re^{F} **chauŋ^{L} -ŋauy^{H}** -*TA* -ra^{H}. 彼らは神を讃えて歌った。
I -PL God -ACC **praise -sing** -RLS -RA

chauŋ^{L}-ŋauy^{H}「讃えて歌う」(< 讃える＋歌う)：

a_1 p_1 a_2 p_2
V_1 <動作主，主題> = V_2 <動作主，主題>
A P A ∅

これは、キリスト教を信仰するロンウォー人にとって神を讃えて歌う歌が讃美歌と決まっているためで

あると考えられるが、 *ŋauy*^{H}「歌う」が自他両用動詞で、ここでは自動詞として用いられているという可能性もある。

今回調査した並位型複動詞構造の項の調整がロンウォー語における全てのパターンを尽くしているとは必ずしも言えないが、本節で見た例の範囲で一般化を行うと、次のようになる。

(125) 並位型複動詞構造 V_1V_2 の構成要素 V_m, V_n において、

1. V_m 本来の（つまり、単独で述部となる場合の）A 項に割り当てられた意味役割は、V_1V_2 の A 項に付与される。
2. V_m 本来の S 項に割り当てられた意味役割は、V_1V_2 の S 項または A 項に付与される。
3. ただし、一部の V_1V_2 で、V_2 の S 項の意味役割が V_1V_2 の P 項に付与されることがある。
4. V_m 本来の P 項に割り当てられた意味役割は、付与されるとすれば V_1V_2 の P 項に付与される。
5. V_m 本来の、共格・向格・位格・起格などの格標識で標示される項に割り当てられた意味役割は、付与されるとすれば V_1V_2 の同じ形式の項に付与される。

4. と 5. は、各動詞が持つ意味役割指定のうち主語以外に割り当てられた意味役割が明示的な名詞的要素に付与されない可能性がある、ということを示す。逆に言えば、主語に割り当てられた意味役割は i いずれかの名詞的要素に付与される、ということになる。そして 1.–3. は、一部の例外的なケースを除いて V_1 と V_2 が主語を共有することを示している。

8.2 非並位型複動詞構造における項の調整

8.2.1 補動詞を含むもの：B(B') 類・D(D') 類

補動詞は複動詞構造内で主動詞の「補語」となる要素のことである。（§6.3.2, §6.3.4）補動詞自体は語彙的な意味を表し、それゆえ独自の項構造を持つが、主動詞の「補語」としてそれ自体が主動詞の項構造の内部に組み込まれることになる。

B 類の V_2 となる *ɣo*^{F}「必要だ」、それと同義の *cha*^{L}、 *nuk*^{F}「欲する」および B' 類の V_2 となる *pa*^{F}（単独では「知っている」）は、単独で述部となる際に経験者の意味役割を付与される A 項と、主題の意味役割を付与される P 項の 2 項を取る。

複動詞構造においても、主動詞単独の項構造を踏まえて項構造を設定する。V_2 の P 項に相当するのは V_1 だが、それ自体が述部の一部であるため、この意味役割が述部の外の要素に付与されることはない。

V_1 が S 項を取る場合、複動詞構造全体でも S 項を取る。S 項には、V_2 単独の場合に A 項に割り当てられた経験者の意味役割と、V_1 単独の場合に S 項に割り当てられた意味役割が付与される。

V_1 が A 項・P 項を取る場合、複動詞構造全体でも A 項・P 項を取る。A 項には、V_2 の経験者の意味役割と、V_1 の A 項に割り当てられた意味役割が付与される。P 項には、V_1 の P 項に割り当てられた意味役割が付与される。

(126) は *V-nuk*^{F} の例である。

(126) ŋo^{F} **ta̲^{H} -nuk^{F}** -*TA* -ra^{H}. 私は話したい。
I **speak -want** -RLS -RA

V-*nuk*^{F}《願望》「V したい」（V-*ɣo*^{F}「V する必要がある」, V-*cha*^{L}「V する必要がある」, V-*pa*^{F}《習得した能力；傾向》）：

a_2 p_2 s_1/ a (p$_1$)
V_2 < 経験者，V_1 < X，(Y) >>
S/A S/A (P)

D 類の V_1 となる *nuk*^{F}-*TA*-V および D' 類の V_1 となる *pa*^{F}-*TA*-Vは、それぞれ V-*nuk*^{F}, V-*pa*^{F} と鏡像の関係にある。*ɣo*^{H}-*TA*-V もこれらと同じパターンを取る。

(127) ŋo^{F} **nuk^{F} -*TA* -ta^{H}** -*TA* -ra^{H}. 私は話したい。
I **want -& -speak** -RLS -RA

nuk^{F}-*TA*-V《願望》「V したい」（*pa*^{F}-*TA*-V《習得した能力》, *ɣo*^{H}-*TA*-V《状況による可能；許可》）：

a_1 p_1 s_2/a_2 (p$_2$)
V_1 < 経験者，V_2 < X，(Y) >>
S/A S/A (P)

B' 類の V_2 となる *noŋ*^{F} は、単独で「遣わす」という意味を表し、動作主の A 項と、受領者および主題の 2 つの P 項を取る。V_2 の A 項に割り当てられた意味役割は複動詞構造の A 項に付与され、V_2 の P 項と V_1 の S 項（A 項）に割り当てられる意味役割は複動詞構造の P 項に付与される。V_1 が P 項を取る場合それに割り当てられる意味役割は複動詞構造の P' 項に付与される。

(128) noŋ^{F} ŋŏ^{F} -re^{F} **kyauk^{F} -noŋ^{F}** -*TA* -ra^{H}.
you I -ACC **be.scared -send.sb** -RLS -RA

あなたは私を怖がらせた。

V-*noŋ*^{F}《使役》：

a_2 p_2 p'$_2$ s_1/ a (p$_1$)
V_2 < 動作主，受領者，V_1 < X，(Y) >>
A P P (P')

D 類の V_1 となる *pin*^{F}「終わる」と *kay*^{F}「良い」は、いずれも単独では S 項を取る。複動詞構造では V_2 が V_1 の S 項に相当する。V_2 の S 項（A 項）に割り当てられた意味役割は複動詞構造の S 項（A 項）に付与され、V_2 が P 項を取る場合、それに割り当てられた意味役割は複動詞構造の P 項に付与される。

(129) yoŋ^{L} kauŋ^{L} **pin^{F} -*TA* -chit^{H}** -*TA* -ra^{H}. 彼は体を洗い終えた。
he body **finish -& -wash** -RLS -RA

pin^{F}-*TA*-V《完了》「V し終わる」（*kay*^{F}-*TA*-V《潜在的可能性；先天的能力》）：

s_1 s_2/ a (p$_2$)
V_1 < V_2 < X，(Y) >>
S/A (P)

B 類の V_2 となる *ɣuk*^{L}「難しい」と *lauy*^{F}「容易だ」も、単独では S 項を取る。複動詞構造では V_2 は A 項・P 項を取る V_1 のみと結びつき、これが V_2 の S 項に相当する。V_1 の A 項に割り当てられた意味役割はいかなる項にも付与されず、動作主が不定であると解釈される。一方、V_1 の P 項に割り当てられた意味役割は複動詞構造の S 項に付与される。

(130) は V- *ɣuk*^{F} の例である。

(130) tat^{H}si^{L} **ɣo̱^{F} -ɣuk^{L}** -*TA* -ra^{H}. ガソリンは探しにくい。
gasoline **search -difficult** -RLS -RA

V-*ɣuk*^{L}「V しにくい」(V-*lauy*^{F}「V しやすい」):

$$V_2 < \overset{s_2}{V_1} < \underset{\varnothing}{\overset{a_1}{X}}, \underset{S}{\overset{p_1}{Y}} >>$$

D 類の V_1 となる *veŋ*^{H}「勇敢だ」は、単独で人間の S 項を取る。ゆえに複動詞構造の V_2 は V_1 の補動詞ではあるが、必須の要素ではない[31]。項構造図では、このような補動詞を V_1 の項構造の外に置き、← で結ぶことによって表す。V_1 の S 項に割り当てられた意味役割と、V_2 の S 項（A 項）に割り当てられた意味役割は複動詞構造の S 項（A 項）に、V_2 が P 項を取る場合それに割り当てられた意味役割は複動詞構造の P 項に、それぞれ付与される。

(131) ʔay^{L} -lau^{L}teʔ^{F} -ɦa^{F} yoŋ^{L} -*TA* pyin^{F}choŋ^{L} -ɣě^{F} -re^{F} mă- **veŋ^{H} -*TA* -ta̱^{H}** -yaŋ^{L} ···
that.DET -adult -TOP he -ATTR friend -PLR -ACC not- **dare -&** **-speak** -CONJ

その人は友達に話す勇気がなくて ···（ヂョンモーの村人）

veŋ^{H}-*TA*-V「V する勇気がある」:

$$V_1 < \underset{S/A}{\overset{s_1}{主題}} > \leftarrow V_2 < \underset{S/A}{\overset{s_2/a_2}{X}}, \underset{(P)}{\overset{(p_2)}{(Y)}} >$$

§6.3.9 で D' 類と認定した、*co̱^{H}*-*TA*-V《相互》のうち非対称的事象を表す V_2 を取るものの項構造については、以下の事柄を述べるにとどめる。

- 複動詞構造全体として、(104a, b) の対称的事象を表す動詞と同じ項のセットを取る。
- V_2 の A 項に割り当てられた意味役割、および P 項に割り当てられた意味役割のいずれも、(104a) の場合は複動詞構造全体の S 項に、(104b) の場合は複動詞構造全体の S 項およびその「相方」の共格標示された項の両方に、それぞれ付与される。
- 複動詞構造の意味解釈は大まかに言って、S 項（その「相方」がある場合にはそれも含む）が指示する個体が 2 個体 *m, n* であり、V_2 の表す事象が *R(x, y)* である場合、*R(m, n)&R(n, m)* である。

8.2.2 修飾動詞を含むもの：A(A') 類・C(C') 類

A 類の V_1 および C 類の V_2 は、いずれも主動詞の意味に修飾を加える修飾動詞として働く。これら修飾動詞はそれ自身の補語を取ることはない。

一見、この反例に見える例が存在する。(132a) において、格名詞 *thoʔ*^{H}-*meŋ*^{F} で標示された比較の対象を表す補語は、A 類の複動詞構造 *ce*^{F}-*TA*-V《優勢比較》の修飾動詞 *ce*^{F} と呼応している。しかし (132b) のように、 *ce*^{F} を落としても文は成立し、(132a) と同様の事態を表すことができる。

(132) a. pay^{L}ceʔ^{L} -šo^{L} -ɦa^{F} ya̱m^{F} -ɣoʔ^{F} -šo^{L} **-thoʔ^{H} -meŋ^{F}** **ce^{F}** **-*TA*** -myo̱ʔ^{H} -*TA* -ra^{H}.
duck -meat -TOP house -chicken -meat **-above -LOC** **surpass -&** -delicious -RLS -RA

アヒルの肉は、飼育した鶏の肉よりも美味しい。(Lhaovo Primer)

b. pay^{L}ceʔ^{L} -šo^{L} -ɦa^{F} ya̱m^{F} -ɣoʔ^{F} -šo^{L} **-thoʔ^{H} -meŋ^{F}** myo̱ʔ^{H} -*TA* -ra^{H}.
duck -meat -TOP house -chicken -meat **-above** -LOC delicious -RLS -RA

（同上）（作例）

このことは、*ce*^{F} が比較対象の補語を取っているわけではないことを意味する。同様のことは、C 類の複動詞構造 V-*pyit*^{L}《授益》「V してやる」の修飾動詞 *pyit*^{L} と受益者の補語 NP *ɣi̱t*^{H}*-meŋ*^{F} の間にも当てはまる。

修飾動詞がそれ自体の補語を取らないということは、主動詞が修飾動詞と複動詞構造を成すことによって、主動詞が取らなかった項が新しく増えることがないということである。また、主動詞が割り当てる意味役割が、単独の場合と異なる形式の項に付与されることも、あるいは、いずれの項にも割り当てられないこともない。つまり、補動詞と異なり、修飾動詞が主動詞の項構造に影響を与えることはないのである。

9 複動詞構造の「語らしさ」

最後に、Aikhenvald (2006) の基準のうち C.、つまり、ロンウォー語の複動詞構造が一語的なのか、それとも多語的なのかという点について考察する。

9.1 項の調整

一般に、§8 で見たような項の調整が行われるという事実は、複動詞構造が一語的であり、形態論の語彙形成規則で形成されるという分析を支持するように見える。例えば、(120) の並位型複動詞構造を含む動詞句を、V_1, V_2 がそれぞれの補語を取る構造

(133) [$_{VP_1}$ 母$_i$ ロンジー$_j$ 織る$_{V_1}$] [$_{VP_2}$ $\emptyset_i$ 私$_k$ $\emptyset_j$ 見せる$_{V_2}$]

から作り出すためには、V_1「織る」を V_2「見せる」からのみ意味役割を付与される項「私$_k$」より後に移動させ、2 つの動詞の間に動詞連結子を挿入する操作を認める必要が生じる。また (126) の非並位型 B 類の複動詞構造を含む動詞句、および (127) の非並位型 D 類の複動詞構造を含む動詞句を、動詞句 VP_2 が動詞 V_1 の項となる構造

(134) [$_{VP_1}$ 私$_i$ [$_{VP_2}$ $\emptyset_i$ ··· 話す$_{V_2}$] 欲する$_{V_1}$]

から作り出すためには、(126) のために句境界を越えて V_1「話す」を V_2「欲する」の前に移動させる操作を、(127) のために句境界を越えて V_1 を V_2 の後に移動させ、2 つの動詞の間に動詞連結子を挿入する操作を、それぞれ認めなければならなくなる。

9.2 N+V 熟語動詞を含む複動詞構造

N+V 熟語動詞が非並位型複動詞構造 D(D') 類の補動詞となる場合、主動詞は補動詞の名詞部分と動詞部分の間に割って入る。

(135) a. chẽ^{L} -yauk^{F} na̱k^{H} +yo^{L}-*TA*. この人は怒った。
this.DET -CLF heart +?[32] -RLS

b. chě^{L} -yauk^{F} na̲k^{H} +pa^{F} -***TA*** -yo^{L} -*TA*. この人は怒りっぽい。
this.DET -CLF heart +**tend -&** -? -RLS

非並位型複動詞構造 A(A') 類の主動詞となる場合にも、修飾動詞が主動詞の名詞部分と動詞部分の間に割って入るのが普通である。(ただし修飾動詞のうち *tam*^{F}「再び…」と *ce*^{F}《優勢比較》については、名詞部分に先行する形式も認められる。)[33]

(136) a. lăkha^{L} na̲k^{H} +po^{F} -*TA*. 犬は賢い。
this.DET heart +included -RLS

b. lăkha^{L} na̲k^{H} +**ce**^{F} -***TA*** -po^{F} -*TA*. 犬はより賢い。
this. DET heart +**surpass -&** -included -RLS

これらのことも、複動詞構造が一語的であり、形態論の語彙形成規則で形成されるという分析を支持するように見える。複動詞構造が統語論で形成されるとすると、(135b), (136b) のように N+V 熟語動詞の名詞部分と動詞部分の間に他の要素が介在する配列のままでは、N+V 熟語動詞の意味解釈も、複動詞構造内での項の調整も困難である。D(D') 類 (135b) については、前節でみたような、句境界を越えて補動詞である N+V 熟語の動詞部分を主動詞の後に移動させるという操作を認めることが必要となる。また A(A') 類 (136b) についても、主動詞である N+V 熟語の動詞部分の前に修飾動詞を移動する操作を認める必要が生じる。

9.3 否定前接辞の位置

§7.2 で見たように、ロンウォー語の複動詞構造 V_1V_2 を否定にする場合、全ての複動詞構造で V_1 への否定辞 *mă-/tă-* の前接がデフォルトであり、これに加えて継起的な並位型複動詞構造の一部と、V_2 が主動詞である A 類・B(B') 類の非並位型複動詞構造の多くで、V_2 に否定辞を前接することもできる (Neg2)。仮にデフォルトの場合に複動詞構造が一語的であったとしても、Neg2 の形式で V_1 と(否定辞が前接された)V_2 の前に動詞連結子 *TA* が介在する場合には、複動詞構造は多語的とみなされる。

9.4 談話役割表示辞を伴う V_2 のコピー

§5.3 で述べたように、Copy2 に代表される、談話役割表示辞を伴う V_2 のコピーは、V_2 が語彙的意味を表す場合に適用可能な操作である。つまり Copy2 はその適用に際して、語彙的であるという V_2 の性質を参照しているということになる。もしも複動詞構造が一語的であるとすると、語の一部である V_2 が持つ性質を参照できるとは考えにくい。

このことは、少なくとも Copy2 が可能である全ての並位型複動詞構造、および、A(A')/B/D(D') 類の非並位型複動詞構造を多語的とみなす根拠となり得る。

9.5 談話役割表示辞の V_1 への付加

これも §5.3 で見たように、Top1 に代表される、談話役割表示辞の V_1 への付加は、V_2 が語彙的でも主動詞でもない場合に適用可能な、

a. 談話役割表示辞を伴った V_1 を動詞の列から抜き出す操作
b. 談話役割表示辞を伴った V_1 をコピーした後に元の V_1 を削除する操作

のいずれかであると考えられる。

複動詞構造が一語的だとすると、a. は語の一部を抜き出す操作ということになる。しかも、談話役割表示辞は補語や従属節、すなわち句あるいはそれより大きい単位に後続する小辞であり、この操作の場合だけ談話役割表示辞に先行する要素が語の一部であるとは考えにくい。一方、b. は語の一部をコピーした後で元の位置にあるその要素、すなわち語の一部を削除する操作ということになる。つまり、談話役割表示辞の V_1 の付加が a., b. どちらであったとしても問題が生じる。また、Copy2 の場合と同様、語の一部である V_2 が持つ性質や機能を参照できるとは考えにくい。

これらのことは、Top1 が可能な A(A')/ B(B')/ D(D') 類の非並位型複動詞構造のほとんどと並位型複動詞構造の多くを多語的であるとみなす根拠となり得る。

9.6 句としての「述部」

以上、ロンウォー語の複動詞構造の「語らしさ」にかかわる現象を検討してきた。ロンウォー語の複動詞構造は原則として Aikhenvald (2006) の接触型 (cf. §4.3) であり、N+V 熟語動詞の名詞部分を除いて動詞以外の要素が動詞の間に割って入ることはない。それゆえ、複動詞構造を統語操作で扱おうとすると、§9.1, §9.2 でみたように、句の境界を越えた動詞の移動を認めなければならなくなる。一方、Neg2 (§9.3), Copy2 (§9.4), Top1 (§9.5) などの操作は、その適用が可能な複動詞構造が多語的であるとみなす根拠を提示する。上記の操作のいずれも不可能な複動詞構造は一部の例外を除いた C(C') 類の非並位型複動詞構造のみであり、一方 A 類・B 類の非並位型複動詞構造の多くと、継起的な並位型複動詞構造の一部は、上記の操作のいずれも可能である。

複動詞構造が一語的であるとみなすと、必然的に各動詞要素は語の一部ということになり、Neg2, Copy1, Top1 に関する事実と整合しなくなる。それを避けるためには、複動詞構造が多語的であるとみなすより他なさそうである。これはすなわち、動詞述部自体を動詞（N+V 熟語があればその名詞要素も）および動詞連結子 *TA* からなる特殊な句とみなす、ということを意味する。

動詞とその補語からなる句を「動詞句」と呼ぶのであれば、ここで仮定する句は補語を含まないので「動詞句」と呼ぶことはできない。良い名称を思いつかないので、仮にこれを「述部」と呼び続けることにしよう。複動詞構造を構成する動詞は、互いに等位あるいは従位の関係に立つ。そして、§8 で見たような項の調整は「述部」内での項構造の調整によって行われるものとする。談話役割表示辞を付加された語（動詞か、あるいは N+V 熟語の名詞要素）は、「述部」の最も外側、左端に置かれるものとする。これは、談話役割表示辞が語に付加されるという特殊な操作を、「述部」という特殊な領域の中に限るためである。（通常、談話役割表示辞は句かそれより大きい単位に付加されることを思い起こされたい。）

述部が単純動詞からなる場合にも、これを句とみなす。これは、名詞句が単一の名詞からなる場合にもこれを句とみなすのと同じ論理である。

今回行った「述部」の措定はまだ素案の域を出ない。この分析が本稿で取り扱わなかったロンウォー語の現象、とりわけ未だ十分な観察を進めていない複合名詞形成において齟齬をきたさないかについて、さらなる考察と検討が必要であることは言うまでもない。

10 おわりに

本稿では、ロンウォー語の複動詞構造 V_1V_2 の形式的基準に基づく分類を試みた。まず、並位節化 (Parat) の基準に基づいて並位型と非並位型に分類した。前者については、V_1 と V_2 の意味関係として継起、対置、同義・類義の 3 つを認め、また 2 つの動詞の形式的・意味的重みの違いが一語肯定回答

(Ans1, Ans2) の可能性に影響を与えることを示した。後者については、一語肯定回答および談話表示辞を伴った V_2 のコピー (Copy2) の基準に基づいて V_1, V_2 の主要部性と語彙性を判断し、A 類（修飾動詞－主動詞）・B 類（補動詞－主動詞）・C 類（主動詞－修飾動詞）・D 類（主動詞－補動詞）の 4 類に分類した。設定した下位分類に基づき、形式的基準として用いなかった文法現象の分布を観察し、また複動詞構造形成の当然の帰結とも言うべき項の調整を記述した。最後に、上記の内容を踏まえて複動詞構造の「語らしさ」について考察し、暫定的ではあるが動詞述部を句とみなすという案を提示した。

本稿を閉じるにあたって、問題点をいくつか指摘しておく。

本稿で取り上げた並位型複動詞構造の数は 50 余りである。取り扱った例がこの研究にとって十分かつ偏りのないものであるかどうかという点については疑問の余地があろう。今回行った調査の結果を元にデータを補充する必要がある。ただ、一方の要素が固定されている非並位型はまだしも、必ずしもそうでない並位型の複動詞構造については用例の収集と抽出自体がかなり困難な作業であることもまた否めない。

調査協力を依頼したコンサルタントは前述の通り 1 名である。それゆえにエリシテーションの際の判断に諸々のバイアスがかかっていることを検知できていない可能性はある。バイアスのありかを発見するためには複数の話者を対象に調査を行う必要があるが、そうすると、例えば *ɣi*^{L}*(-TA)-ɣaŋ*^{F}「大きい」に見られた声調交替の有無に関するもののような変異がさらに見つかることも考えられる。

3 つの判断基準を適用する際に、文についてでなく、動詞述部＋文標識からなる形態論的単位についてエリシテーションを行ったことについては、欠点と利点の両方があると考える。コンサルタントがどのような意味解釈の下で当該基準に対する判断を行ったかについては、可能な限りコンサルタントに質問し把握することに努めたが、把握漏れ、すなわち、著者の想定しない意味解釈のもとで判断がなされた複動詞構造がある可能性は皆無ではない。一方で、先行する補語や修飾要素がコンサルタントの判断に与え得る影響をある程度捨象できたとは言える。今後は複動詞構造を含む文の用例を増やし、気づかなかった事実を掘り起こし、偏りを修正していきたい。

複動詞構造の、というよりむしろ動詞述部のと言うべきかもしれないが、そのステータスについてはインフォーマルな折衷案の域を出ないという誹りを受けるかもしれない。Aikhenvald (2006) は、通言語的に見て文法的語 grammatical word と音韻的語 phonological word が必ずしも一致しないことを述べ、連続動詞構造が複数の音韻語からなる 1 文法語であることも、逆に複数の文法語からなる 1 音韻語であることもあり得ると述べている。(p.38) しかし、§9 で観察した諸現象が「語らしさ」に関する相反する主張へと導くことの原因を、文法的語と音韻的語の不一致に帰することはできない。なぜなら、いずれの現象にも項構造や構成要素の性質・機能といった文法的なしくみや概念がかかわっているからである。語の定義の種類の違いに依存しない形での解決を模索した結果が、本稿での提案となったわけである。

注

1 従来は「動詞等位接続子」と呼んできたが、等位の関係にない 2 つの動詞をつなぐこともあるため、「動詞連結子」に改める。

2 Xiong (2015) によると、雲南省に居住するロンウォー語話者の一部は彝族としてのアイデンティティを持つ。

3 ローマ字表記はビルマ語形式からの（非体系的な）音声転写。以下の村名についても同じ。ビルマ語には歯茎破擦音音素がないため、ビルマ語形式に由来するこの表記も（やむを得ないことではある

が）原音をうまく表せていない。地名のカナ表記はロンウォー語形式 /vătshe^{F}/ に拠っている。北緯 26 度 16 分、東経 98 度 28 分。

4 ロンウォー語形式は /vămyit^{H}/ 。北緯 26 度 16 分、東経 98 度 27 分。

5 ロンウォー語形式は /lăkin̲^{F}/ 。北緯 26 度 36 分、東経 98 度 24 分。

6 ロンウォー語形式は /thoʔ^{H}loŋ̲^{F}/ 。北緯 26 度 38 分、東経 98 度 22 分。

7 ジンポー語の Nhkai が本来の名称。ビルマ語には成音節鼻音がないため、前に母音を付けて /iɴ/ のように発音したもの。この村落群に属する La Hkaw Ga 村の位置は、北緯 26 度 39 分、東経 97 度 58 分。

8 表記は 1968 年 12 月 29 日に定められたロンウォー語正書法による。Lamaung: は姓。カチンはミャンマーの他の民族と異なり、人名に姓・名の別がある。

9 ロンウォー語形式は /phăla^{F}/ 。北緯 26 度 02 分、東経 98 度 11 分。

10 澤田 (2013) ではこれを名詞化前接辞 *ʔă-* と同一視していたが (p.297)、声調 *L* を持つ動詞に付加された場合の声調のふるまいから、名詞化前接辞とは別形式とみなすべきであるので、そのように改めた。

11 原文（漢語）では「能願動詞」。

12 本稿で扱うロンウォー語の形式と、声調が異なる。

13 動詞「見る」が脱意味化したものと考えられるが、本稿で扱うロンウォー語のこの形式にはこの用法はない。

14 本稿で扱うロンウォー語のこの形式にはこの用法はない。

15 *TA* が動詞連結子であるとする本稿の分析と異なる。

16 §4.3 で示す Aikhenvald の連続動詞構造の定義に照らすと、不完了標識を付加された動詞とそれに後続する動詞は連続動詞構造を形成しないことになる。

17 ロンウォー語の複動詞構造に頻繁に現れる動詞連結子 *TA* がここでいう overt marker に該当するかどうかは、overt が分節的な形式のみを意味するかどうかにかかっている。もし該当するとすれば、本稿で取り上げる複動詞構造のかなりの部分が Aikhenvald の SVC でないことになる。ただ、動詞連結子は継起的関係のみならず、修飾－被修飾、被修飾－修飾さらには主動詞－補動詞といった様々な関係に立つ 2 つの動詞を連結するという、かなり漠然とした機能を担うものであるため、Aikhenvald のいう marker に該当するかどうか自体、微妙である。

18 ロンウォー語と同じビルマ語群の南部下位語群に属し、チベット＝ビルマ系でも有数の大言語と言えるビルマ語の複動詞構造を、形式的・音韻的な基準から分類することを試みた研究として、澤田 (1988) があり、また、他言語におけるこの種の構造の研究や Aikhenvald (2006) など類型論的研究、また通時的研究の成果を背景に、音韻的・意味的・統語的基準に基づいてビルマ語の連続動詞構文を分類した研究として、Vittrant (2012) がある。

19 *-ra^{H}* がどのような役割を果たしているかは未だ明らかでない。伝聞の発話行為態度表示辞 *-ka^{H}* と共起しないこと、助動詞 *-va^{H}* との共起例も少ないことが確認されている。また、語りの中での出現率はさほど高くない。語りの中で小さなまとまりの終わりを示す働きを持つと思われるふしがあるが、さらなる用例の収集と分析が必要である。

20 Ozerov and Daudey (to appear) はチベット=ビルマ系言語に幅広くみられるこの構造の例として、ロンウォー語と系統的に近い標準口語ビルマ語と、中国雲南省と四川省の境で話されるプミ語の Wadu 変種に見られるコピー動詞構造を分析し、この構造が情報構造の概念に関連した様々な解釈を生み出すことを示した。前者については、コピーされた動詞に後接される談話接語 discourse clitic に 1 つの累加－相関的 cumulative-correlative 接語、1 つの話題的 topical 接語といくつかの焦点的 focal 接語があること、話題的接語/-tɔ́/ が、動詞の語彙的内容の話題化および動詞に付随する文法範疇（極性など）の焦点

化の機能を持つことなどを述べている。(p.26)

21 「食べてみた。」という解釈もできる。

22 同一語の基本的意味と派生的意味なのか、あるいは同音異義語なのか判然としない。

23 例外として、韻文形式では単独で述部として使用される例が見られる。

24 第 2 要素 *myit*^{H} が単独で述部を形成することのない要素であるためかとも考えたが、同様の複動詞構造の中にも並位節化のパラフレーズが可能なものが存在するため。これを理由と考えることはできない。

25 Aikhenvald (2006) の Cause-effect SVCs に該当する。(pp.14–16)

26 *yauŋ*^{H} が「飾る」と「煮る」の両方の意味を持つ動詞だったとしても、その本来の意味は「飾る」の方であったと考えられる。*yauŋ*^{H} には音韻的に対応づけられた単純動詞ー使役動詞の対をなす *yauŋ*^{H}「美しい」という動詞があるが、*yauŋ*^{H} は「煮える」という意味を表さないからである。

27 B 類の V_2 はいずれも状態動詞であり、現実法は発話時点でその状態が成立していることを表す。

28 一般に、(104b) の項構造を持つ動詞は (104a) の項構造も持つ。また、S 項の名詞が単一個体を表すものであっても、(104b) の動詞は (104a) の動詞と同様、主語の複数性を表す助動詞 *-ko*^{H}/*- ke*^{F} と共起することができる。ゆえに、(104b) の項構造が (104a) の項構造と何らかのしかたで関連付けられることは疑いない。

29 複動詞構造の先頭の語彙的動詞が N+V 熟語動詞である場合、否定辞は最初の動詞要素に前接される。*cf.* (8)

30 ロンウォー語の差異的格標示 differential case marking を扱った Sawada (2012) では、ロンウォー語で授与の事象を表す動詞が述部となる場合に、被動者の補語と受領者の補語の格標示のしかたが同一の要因によって決定され、そのため格標示の観点からみてこの言語が Dryer (1986) のいう主要目的語型言語 PO (Primary Object) language および直接目的語型言語 DO (Direct Object) languages のどちらでもないことを示した。(120) で被動者と受領者の補語の格役割をいずれも P とし、プライムの有無で識別するだけにしてあるのはそのためである。

31 ゆえにこのケースだけは、厳密には「項」の調整と言えない。

32 この形式はビルマ語の/ya^{H}/ ယား {yaa:}「かゆい」と同源だが、ロンウォー語ではその意味で用いられず、専ら *nak*^{H} との N+V 熟語として用いられる。

33 N+V 熟語動詞の名詞要素と動詞要素の間に割って入ることのできる要素としては、他に *kyay*^{F}「非常に」(<Jing. *grai*) がある。*kyay*^{F} に否定辞が前接されることはないため、これが動詞でないことは明らかである。また動詞の間に *kyay*^{F} が入ることもない。

参考文献

Aikhenvald, Alexandra Y. (2006) “Serial verb constructions in typological perspective,” in Aikhenvald, Alexandra Y. and R. M. W. Dixon eds. *Serial Verb Constructions: A Cross-Linguistic Typology*: Oxford University Press, pp. 1–68.

Dryer, Matthew S. (1986) “Primary objects, secondary objects and antidative,” *Language*, Vol. 62(4), pp. 808–845.

Enfield, Nick J. (2008) “Verbs and multi-verb constructions in Lao,” in Diller, Anthony, Jerry Edmondson, and Yongxian Luo eds. *The Tai-Kadai Languages (Routledge Language Family Series)*: Routledge, pp. 83–183.

Lhaovo Littero-Cultural Committee"A short information about Lhaovo people."

Lustig, Anton (2010) *A Grammar and Dictionary of Zaiwa,* 2 vols.: Leiden, Boston: Brill.

Ozerov, Pavel and Henriette Daudey (to appear) "Copy-verb constructions in Tibeto-Burman and beyond," *Linguistic Typology*.

Sawada, Hideo (2010) "'upward-curling' realization of tone L in Lhaovo (maru) language," in Dai, Zhaoming, J.A. Matisoff, Hongkai Sun, and Qingxia Dai eds. *Forty Years of Sino-Tibetan Language Studies: Proceedings of ICSTLL-40*, pp. 168-175, Heilongjiang University Press.

——— (2012) "Optional marking of NPs with core case functions P and A in Lhaovo," *LTBA*, Vol. 35-1, pp. 15–34.

Vittrant, Alice (2012) "How typology allows for a new analysis of verb phrase in burmese," *Lidil*, Vol. 46, pp. 101–126.

Xiong, Shunqing (2015) "Historical development of the Achang," Abstract of Thesis, Sociolinguistics of Language Endangerment 4. Payap University, Chiangmai. 26 May 2015.

澤田 英夫 (1988)「現代ビルマ語における動詞配列の類型について」,『言語学研究』, 第 7 巻, pp. 73–110.

——— (2013) 「ロンウォー語の動詞句」, 東南アジア諸言語研究会（編）『東南アジア大陸部諸言語の動詞句』, 東京：慶應義塾大学言語文化研究所, pp. 294–362.

戴　慶厦 (2005)『浪速語研究』, 中国新発現語言研究叢書, 北京：民族出版社.

タイ語、クメール語、ベトナム語の「～てくる」

三 上 直 光

1　はじめに
2　タイ語、クメール語、ベトナム語の動詞連続
2.1　継起
2.2　目的
2.3　方法
2.4　付帯
2.5　因果
2.6　並列
3　タイ語、クメール語、ベトナム語の「～てくる」
3.1　同時
3.1.1　VP1 が付帯状況を表す
3.1.2　VP1 が移動の経路を表す
3.1.3　VP1 が方向を表す
3.2　継起
3.2.1　V1 が入手の意味を表す
3.2.2　V1 が作成の意味を表す
3.2.3　その他
4　おわりに

1　はじめに

日本語において、「行く」「来る」という動詞は、空間移動を表す最も基本的な動詞であり、それぞれ「話し手から遠ざかる移動」、「話し手に近づく移動」を本義とする直示動詞である。日本語の「行く」「来る」は、本動詞として用いられるほかに、他の動詞に後接して補助動詞としても用いられ、多様な意味を表す。本稿で記述の対象とする孤立型言語のタイ語、クメール語、ベトナム語においても、日本語の「行く」「来る」に対応する動詞は、単独での用法に加えて、他の動詞(句)の後に連続して生起する用法も持ち、多様な意味を表す点で、日本語との類似性も認められる。

本稿では、タイ語、クメール語、ベトナム語において、「来る」に相当する動詞が他の動詞(句)に後続し、空間移動を表す場合に限定して、３言語の表現を比較対照し、そこから見えてくることをまとめておきたい。動詞連続（serial verb construction）のひとつの現れとして、動詞連続全体の議論に組み込まれるべきものである。

2　タイ語、クメール語、ベトナム語の動詞連続

タイ語、クメール語、ベトナム語の「～てくる」の考察に入る前に、まずこの３言語の動詞連続について概観しておこう。これらの言語において、動詞連続は概略［[$_{VP1}$［V1(＋NP1)]］[$_{VP2}$［V2(＋NP2)]］＋…］（VP＝動詞句、V＝動詞、NP＝名詞句）として形式化される。すなわち、動詞句と動詞句が相互の関係を表す標識を介在させることなく連接される構造をいう。動詞連続の成立には様々な要因が関与しているが、重要なものとして動詞句間の緊密な意味関係がある。より具体的には、複数個の動詞句がそれぞれ独立した個別的事態として解釈されるのではなく、相互に関連したひとまとまりの事態として解釈される必要があるということである。動詞句同士が関連したひとまとまりの事態として解釈されるか否かは、最終的には当該言語の社会的、文化的背景に照らして判断されることになる。ここでは、ベトナム語の動詞連続（動詞句が２つ連続する場合）の成立を可能にする、動詞句間の意味関係として、三上（2015）が取り上げた継起、目的、方法、付帯、因果、並列について、用例（動詞句の結合のみを示す）を掲げながら３言語間の対応を見ていく[1)]。以下の記述において、(T)、(K)、(V) はそれぞれタイ語、クメール語、ベトナム語を指す。

2.1　継起

VP1 の動作が終了した後、続いて VP2 の動作が生じる（２つの動作は時間的に重ならない）という動作の継起的関係を表すものである。VP1、VP2 とも随意動詞が現れる。

（１）花を買って家に帰る

(T) súɯɯ dɔ̀ɔk máay klàp bâan（買う＋花＋帰る＋家）

(K) tèɲ pkaa tàv ptèəh（買う＋花＋行く＋家）

(V) mua hoa về nhà（買う＋花＋帰る＋家）

上記の動詞連続は、花を買って家に持ち帰る場面で自然に用いられる。つまり、２つの動作はそれぞれ独立した個別的な動作としての継起性を表しているのではなく、緊密な関連性をもった、ひとまとまりの出来事として捉えられているわけである。継起的関係の存在のみで動詞連続が成立するなら、次の（２）も適格となるはずであるが、実際はそうではない。

（２）食事して家に帰る

(T) *kin khâaw klàp bâan（食べる＋ごはん＋帰る＋家）

(K) *ɲam baaj tàv ptèəh（食べる＋ごはん＋行く＋家）

(V) *ăn cơm về nhà（食べる＋ごはん＋帰る＋家）

「食事をする」と「家に帰る」をこの順序で結合した形式では、２つの動作の間に意味的関連性を見出すことができないと判断される。かりに継起的関係の意味を持たせるとするならば、それには２つの動作の先後関係を明示する語句が要求される。たとえば、（３）のように「それから」の意を表す接続語（(T) lɛ́ɛw, (K) haəj, (V) rồi）を動詞句間に挿入す

るのもひとつの方法である。

（３）食事をしてから家に帰る

（T）kin khâaw *lɛ́ɛw* klàp bâan（食べる＋ごはん＋それから＋帰る＋家）

（K）ɲam baaj *haəj* təv ptɛ̀əh（食べる＋ごはん＋それから＋行く＋家）

（V）ăn cơm *rồi* về nhà（食べる＋ごはん＋それから＋帰る＋家）

2.2　目的

VP2 が VP1 の目的を表す場合である。VP1 と VP2 は動作の生起順に並べられる。両動詞句とも随意動詞が用いられる。

（４）食べるために肉を焼く

（T）yâaŋ núa kin（焼く＋肉＋食べる）

（K）ʔaŋ sac ɲam（焼く＋肉＋食べる）

（V）nướng thịt ăn（焼く＋肉＋食べる）

次の（５）は、先に挙げた（２）の動詞句の順序を入れ替えたものであるが、容認可能となる。

（５）食事をしに家に帰る

（T）klàp bâan kin khâaw（帰る＋家＋食べる＋ごはん）

（K）təv ptɛ̀əh ɲam baaj（行く＋家＋食べる＋ごはん）

（V）về nhà ăn cơm（帰る＋家＋食べる＋ごはん）

（５）は（２）と異なり、２つの動詞句が VP2 を目的として VP1 が行われるという意味的関連性を持って結ばれていると解釈される。

2.3　方法

VP1 が VP2 の方法を表す関係をいう。この場合、２つの動作は継起的ではなく、同時的に成立している。動詞句は随意動詞同士の組み合わせである。

（６）車を運転してここに来る

（T）khàp rót maa thîi nîi（運転する＋車＋来る＋ここ）

（K）baək laan mɔ̀ɔk tii nih（運転する＋車＋来る＋ここ）

（V）lái xe đến đây（運転する＋車＋来る＋ここ）

2.4　付帯

VP2 に付随する事態を VP1 が表す。VP2 の成立時に、VP1 の動きや状態が持続しているという時間的な重なりがある。VP1 の持続的意味を担う動詞は、変化の結果維持を表す動詞、継続動作を表す動詞、状態を表す動詞などである。

（７）座って本を読む

（T）nâŋ ʔàan náŋsǔɯ（座る＋読む＋本）

(K) ʔɔŋkòj ʔaan siəvphàv（座る＋読む＋本）

(V) ngồ iđọc sác h（座る＋読む＋本）

（7）は「座ってから本を読む」という継起的動作の意味ではなく、「座った状態で本を読む」ことを表す。

2.5 因果

VP1の結果、VP2が生ずることを表す。VP1には随意動詞、不随意動詞、VP2には不随意動詞が現れるのがふつうである。

（8）ごはんを食べて満腹になる

(T) kin khâaw ʔìm（食べる＋ごはん＋満腹の）

(K) ɲam baaj cʔaet（食べる＋ごはん＋満腹の）

(V) ăn cơm no（食べる＋ごはん＋満腹の）

2.6 並列

VP1とVP2が対等な意味関係で結ばれる場合をいう。結びつきが固定化された表現が多い。

（9）歌い踊る

(T) rɔ́ɔŋ ram tham phleeŋ（歌う＋踊る＋作る＋音楽）

(K) c riəŋrɔəm/rɔəm c riəŋ（歌う＋踊る/踊る＋歌う）

(V) múa hát（踊る＋歌う）

以上、簡単に3言語間の対応を見てきた。それぞれの言語には固有の特徴も存在するが、ここでは詳細には立ち入らず、3言語の動詞連続の性格が似通っていることを確認するにとどめておく。三上（2015）では、上記6種の意味関係が時間性を基準として、先後と同時にまとめられるとする提案も示した。

3 タイ語、クメール語、ベトナム語の「～てくる」

タイ語、クメール語、ベトナム語において、日本語の「来る」に相当する動詞、つまり話し手に向かう移動を表す場合に用いられる動詞は、それぞれmaa、mɔ̀ɔk、đến である。このうちベトナム語のđến は特に注意を要する。この語は本来「着く」を意味する動詞であり、その意味ゆえに、話し手に向かう移動だけでなく、聞き手や第三者に向かう移動にも用いられる。つまり、日本語の「着く」「行く」「来る」いずれの動詞にも相当する用法を併せ持っているわけであるが、本稿ではとりあえず話し手に向かう移動を述べる文におけるđến の使用可能性を問題にする。

本稿で「来る」の動詞連続用法として検討するのは、次の表現形式である。

NP0＋VP1＋「来る」

VP1→V1＋NP1

「来る」: (T) maa /(K) mɔ̀ɔk/(V) đến

NP0 は VP1 が表す動きの主体でもあり、移動の主体でもある。(V) では đến だけでなく、về「帰る」も考察の対象となる。以下では、VP1 と「来る」との意味関係を大きく同時と継起に分けて見ていく。同時は継起よりも VP1 と移動動作の融合性が高いことを意味する。

3.1 同時

同時とは、VP1 の動きと移動動作の間に時間的重なりがあることを表す。この場合、VP1 に現れる動詞としては、移動の付帯状況（方法、様態）を表す動詞、移動の経路を表す動詞、方向性を含む動詞がある。

3.1.1 VP1 が付帯状況を表す

移動と直接的に関わる付随的な動きを表す動詞には、「歩く、走る、車を運転する」など、何らかの方法・手段を表すものがあり、「来る」はこれらの動詞と問題なく結合する。

(10) 私は{歩いて/走って}来ました。

(T) chán {*dəən/wîŋ*} maa（私＋{歩く/走る}＋来る）

(K) kɲom {*daə/rɔ̀t*} mɔ̀ɔk（私＋{歩く/走る}＋来る）

(V) Tôi {*đi bộ/chạy*} đến.（私＋{歩く/走る}＋着く）

(11) 私は車を運転して来ました。

(T) chán *khàp rót* maa（私＋運転する＋車＋来る）

(K) kɲom *baək laan* mɔ̀ɔk（私＋運転する＋車＋来る）

(V) Tôi *lái xe* đến.（私＋運転する＋車＋着く）

移動の状態・様態を表す動詞も同様に、「来る」と結びつきやすい。

(12) 私は恋人を連れて来ました。

(T) chán *phaa fɛɛn* maa（私＋連れる＋恋人＋来る）

(K) kɲom *nɔəm sɔŋsaa* mɔ̀ɔk（私＋連れる＋恋人＋来る）

(V) Tôi *đưa người yêu* đến.（私＋連れる＋恋人＋着く）

(13) 猫がついて来た。

(T) mɛɛw *taam chán* maa（猫＋従う＋私＋来る）

(K) cmaa mɔ̀ɔk *taam kɲom*（猫＋来る＋従う＋私）

(V) Con mèo *theo tôi* đến.（猫＋従う＋私＋着く）

(T)(V) の「VP1＋「来る」」の語順に対して、(K) では逆の語順になる。

(14) 鳥がたくさん飛んで来た。

(T) nók *bin* maa lǎay tua（鳥＋飛ぶ＋来る＋何匹も）

(K) sat *haə* mɔ̀ɔk craən（鳥＋飛ぶ＋来る＋たくさん）

(V) Nhiều chim *bay* đến.（多くの＋鳥＋飛ぶ＋着く）

(15) ボールが転がって来た。

(T) lûuk bɔɔn *klîŋ* maa（ボール＋転がる＋来る）

(K) bal *rɔ̀ɔmiəl* mɔ̀ɔk（ボール＋転がる＋来る）

(V) Quả bóng *lăn* đến.（ボール＋転がる＋着く）

次の（16）は、移動とは意味的関連性のない動詞「着る」が「来る」と結合した例である。着る動きの結果状態の持続的局面が取り上げられ、着物を着た状態での移動が表されている[2)]。

(16) 私は着物を着て来ました。

(T) chán *sày kìʔmoonoo* maa（私＋着る＋着物＋来る）

(K) kŋom *pèək kiimoonoo* mɔ̀ɔk（私＋着る＋着物＋来る）

(V) Tôi *mặc kimônô* đến.（私＋着る＋着物＋着く）

3.1.2 VP1が移動の経路を表す

動詞が「渡る」の例を挙げておく。

(17) 私は橋を渡って来ました。

(T) chán *khâam saphaan* maa（私＋渡る＋橋＋来る）

(K) kŋom *clɔɔŋ spèən* mɔ̀ɔk（私＋渡る＋橋＋来る）

(V) Tôi *qua cầu* đến.（私＋渡る＋橋＋着く）

3.1.3 VP1が方向を表す

VP1に方向性を持つ動詞が用いられ、その動詞に「来る」が接近の意味を加える働きをする場合である。(18) は｛上がる/下りる/入る/出る｝に後続する「来る」が場所句を伴わずに生起した例である。

(18) 彼は｛上がって/下りて/入って/出て｝来た。

(T) kháw｛*khûn/loŋ/khâw/ʔɔ̀ɔk*｝maa（彼＋｛上がる/下りる/入る/出る｝＋来る）

(K) kɔət｛*laəŋ/coh/cool/ceŋ*｝mɔ̀ɔk（彼＋｛上がる/下りる/入る/出る｝＋来る）

(V) Anh ấy đã｛*lên/xuống/vào/ra*｝đến.

（彼＋〈既然〉＋｛上がる/下りる/入る/出る｝＋着く）

(T)(K) では話し手への接近が表される。(V) では、動きの最中を表す đang（「～しているところ」）とは共起しないことからもわかるように、接近ではなく、到着が表される。

(19) *Anh ấy đang｛*lên/xuống/vào/ra*｝đến.

(20) は、「来る」が場所句を伴った例である。

(20) 私は２階に上がって来た。

(T) kháw *khûn* maa chán sɔ̌ɔŋ（彼＋上がる＋来る＋２階）

(K) kɔət *laəŋ* mɔ̀ɔk cɔən tii pii（彼＋上がる＋来る＋２階）

(V) Anh ấy *lên* đến tầng hai.（彼＋上がる＋着く＋２階）

（21）私は１階に下りて来た。

（T）kháw *loŋ* maa chán nùŋ（彼＋下りる＋来る＋１階）

（K）kɔət *coh* mɔ̀ɔk cɔən tii muoj（彼＋下りる＋来る＋１階）

（V）Anh ấy *xuống* đến tầng một.（彼＋下りる＋着く＋１階）

（20V）（21V）は、đang との共起を許す。この２文では đến が着点を表す前置詞として機能していると考えられる。

次の（22）（23）の「来る」は、動詞性が弱まり、方向性の意味が強まるが、（V）では đến は現れず、単に「葉が落ちた」「死体が浮かんだ」と表現する。

（22）葉が落ちて来た。

（T）bay máay *rûaŋ*（loŋ）maa（葉＋木＋落ちる（＋下りる）＋来る）

（K）slək chɛ̀ə *cruh* mɔ̀ɔk（葉＋木＋落ちる＋来る）

（V）Lá *rụng*.（葉＋落ちる）

（23）死体が浮かんで来た。

（T）sòp *lɔ̀ɔy khûn* maa（死体＋浮かぶ＋上がる＋来る）

（K）saak sɔp *ʔɔndaet laəŋ* mɔ̀ɔk（死体＋浮かぶ＋上がる＋来る）

（V）Xác người *nổi lên*.（死体＋浮かぶ＋上がる）

以上、話し手に向かう移動に関して、移動の付帯状況、移動の経路、方向性を含む動詞と「来る」との結合可能性について見てきた。取り上げた用例に関する限り、方向性を含む動詞との結合に、（T）maa、（K）mɔ̀ɔk と（V）đến の違いが表れていることが確認された。

3.2　継起

継起とは、VP1 が表す動作が終了した後で、話し手に近づく移動が行われることを表す。3.1 の**同時**では、移動と意味的に関わる動詞と「来る」とが動詞連続を形成しやすいことを確認したが、**継起**の場合には、移動とは直接的関連性を持たない動詞と「来る」との結合が扱われることになり、事情は異なってくる。前節で見たように、動詞連続が成立するには、動詞句間の緊密な意味関係が必要になる。2.1 の**継起**では、動詞連続の成立に移動物の存在が関与していることを指摘した。そこで、移動可能なものが存在するかどうかという観点から、VP1 に現れる動詞 V1 を次の（ｉ）～（iii）の３類に分類し、順次 VP1 と「来る」との結合可能性について検討することにする[3)]。その際、下記①～⑥の結合が含まれる例文を中心に見ていく。

（ｉ）V1＝「入手」の意味を表す動詞、NP1＝V1 の対象

①「パンを買う＋来る」

（ii）V1＝「作成」の意味を表す動詞、NP1＝V1 の対象

②「弁当を作る＋来る」

（iii）V1＝（ｉ）（ii）以外の動詞（「3.1　**同時**」の意味で用いられる動詞も除く）

③「コップを洗う＋来る」　④「衣服を洗う＋来る」
⑤「ごはんを食べる＋来る」　⑥「市場に行く＋来る」

以下では、まず移動が行われた後の発話としての「～てくる」表現を取り上げ、その後で異なった場面での発話にも触れる。

3.2.1　V1が入手の意味を表す

VP1に「何かを手に入れる」という意味合いが含まれる場合である。(24) はV1に「買う」、NP1に「パン」が用いられた例である。

(24) 私はパンを買って来ました。(結合例 ①)

(T) chán *súɯ khanǒm paŋ* maa（私＋買う＋パン＋来る）

(K) kɲom *tèɲ nòm paŋ* mɔ̀ɔk haəj（私＋買う＋パン＋来る＋〈完了〉）[4)]

(V) Tôi đã *mua bánh mì* đến.（私＋〈既然〉＋買う＋パン＋着く）

３言語とも動詞連続が可能である。「パンを買って、そのパンを持って来た」という場面で自然に発せられる文である。(K) (V) では、買ったパンは話し手と共に移動する必要があるが、(T) では必ずしもそうでなくてもよいようである。そのことは、次の (25) の容認度の違いにも表れている。買う対象が家の場合、移動不可能とされ、(K) (V) では容認されないが、(T) では容認される。

(25) 私は家を買って来ました。

(T) chán súɯ bâan maa（私＋買う＋家＋来る）

(K) *kɲom tèɲ ptɛ̀əh mɔ̀ɔk haəj（私＋買う＋家＋来る＋〈完了〉）

(V) *Tôi đã mua nhà đến.（私＋〈既然〉＋買う＋家＋着く）

(K) には、「パンを買う」と「来る」の先後関係において (24K) と共通する (26) のような表現もある。

(26) kɲom *mɔ̀ɔk pii* tèɲ nòm paŋ（私＋来る＋～から＋買う＋パン）

(26) の「mɔ̀ɔk pii～（～から来る：pii は移動の起点を表す前置詞）」は、その後続要素として名詞句も動詞句も許す。名詞句が続く場合は「どこから来たか」、そして動詞句が続く場合（動詞連続表現ではない）は「何をし（終え）てから来たか」を伝える表現である。(26) は、(24K) と異なり、パンの移動は含意されない。

次の (27) は、場所句「市場で/市場から」を加えた文である。

(27) 私は市場｛で/から｝パンを買って来ました。

(T) chán súɯ khanǒm paŋ {*thîi talàat* maa/maa *càak talàat*}
（私＋買う＋パン＋｛～で＋市場＋来る/来る＋～から＋市場｝）

(K) a.　kɲom tèɲ nòm paŋ {ʔ*nàv/pii*} *psaa* mɔ̀ɔk（私＋買う＋パン＋～で＋市場＋来る）
b.　kɲom tèɲ nòm paŋ mɔ̀ɔk *pii psaa*（私＋買う＋パン＋来る＋～から＋市場）

(V) Tôi đã mua bánh mì {*ở/từ*} *chợ* đến.
（私＋〈既然〉＋買う＋パン＋｛～で/～から｝＋市場＋着く）

(T) (V) では、動きの場所を表す前置詞も移動の起点を表す前置詞も使用可能であるが、(K) では、起点を表す前置詞を用いて表現するのが自然である[5)]。

「買う」と同じく、入手の意味合いを持つ動詞には、次のようなものがあり、いずれも「来る」との結合が可能である。

「(お金を) 盗む」(T) khamooy (ŋən), (K) luoc (lòj), (V) lấy trộm (tiền)
「(魚を) 釣る」(T) tòk (plaa), (K) stuuc (trəj), (V) câu (cá)
「(傘を) 取る」(T) ʔaw (rôm), (K) yɔ̀ɔk (chat), (V) lấy (dù)
「(本を) 借りる」(T) yɯɯm (náŋsŭɯ), (K) kcəj (siəvphèv), (V) mượn (sách)
「(水を) 汲む」(T) tàk (náam), (K) dɔɔŋ (tɯk), (V) múc (nước)
「(ヘビを) 捕まえる」(T) càp (ŋuu), (K) cap (pòh), (V) bắt (rắn)
「(花を) 摘む」(T) dèt (dɔ̀ɔk máay), (K) beh (pkaa), (V) hái (hoa)

3.2.2 V1が作成の意味を表す

VP1に「何かを作り出す」という意味合いが含まれる場合である。(K) (V) では、(28) を適格文とするには、作成したものを持って移動することが条件となる。

(28) 私は弁当を作って来ました。(結合例 ②)

(T) chán *tham khâaw klòŋ* maa (私＋作る＋弁当＋来る)

(K) kŋom *tvàə baaj pr ɔɔʔp* mɔ̀ɔk haəj (私＋作る＋弁当＋来る＋〈完了〉)

(V) Tôi đã *làm cơm hộp* đến. (私＋〈既然〉＋作る＋弁当＋着く)

(K) (V) では「弁当を作って、その弁当を持って来た」と解釈されることで、動詞句間に意味関係が生まれ、容認可能とはなるが、「持って来る」ことを表現したほうが落ち着きのよい文(「来る」の前に (K) yɔ̀ɔk「取る」、(V) mang「携帯する」を置いた文) とされる。(T) では「作った弁当をどこかに置いて、持たずに来た」場合でも使用可能となる。

なお、2つの動作の先後関係を明示的に示すには、(29) のような文が用いられる。

(29) 私は弁当を作ってから来ました。

(T) chán tham khâaw klòŋ *léɛw* maa (私＋作る＋弁当＋それから＋来る)

(K) a. kŋom tvàə baaj prɔɔʔɔp *haəj* baan mɔ̀ɔk (私＋作る＋弁当＋それから＋得る＋来る)

b. kŋom mɔ̀ɔk pii tvàə baaj prɔɔʔɔp (私＋来る＋～から＋作る＋弁当)

(V) Tôi đã làm cơm hộp *rồi* đến (đây). (私＋〈既然〉＋作る＋弁当＋それから＋着く (＋ここ))

「作る」に類する動詞には、次のようなものがある。

「(宿題を) する」(T) tham (kaan bâan), (K) tvàə (lòmhat), (V) làm (bài tập)
「(写真を) 撮る」(T) thàay (rûup), (K) thɔɔt (ruup), (V) chụp (ảnh)
「(答えを) 写す」(T) lɔ̂ɔk (kham tɔ̀ɔp), (K) cəmlɔɔŋ (cəmlaəj), (V) chép lại (câu trả lời)
「(手紙を) 書く」(T) khĭan (còtmăay), (K) sɔɔsee (sɔmbot), (V) viết (thư)

(V) では、一般にこの類の動詞と đến の結合は避けられ、移動物がある場合には、「持って来る」ことを明示する傾向が強いようである。

3.2.3　その他

入手の意味も作成の意味も持たない動詞（「**同時**」の意味に解されない動詞も含まれる）が「来る」に先行する場合である。まず、(30) を見よう。

(30) 私はコップを洗って来ました。(結合例 ③)

(T) chán *láaŋ kêɛw* maa（私＋洗う＋コップ＋来る）

(K) kɲom *lèəŋ kaew* mɔ̀ɔk haəj（私＋洗う＋コップ＋来る＋〈完了〉）

(V) Tôi đã *rửa cốc* đến.（私＋〈既然〉＋洗う＋コップ＋着く）

「コップを洗う」には、入手の意味も作成の意味も含まれない。(T) では洗ったコップの移動は必要とされないが、(K) (V) では必須の条件となる。

次の (31) も、意味内容に関しては (30) と類似する。

(31) 私は洗濯して来ました。(結合例 ④)

(T) chán *sák sûa phâa* maa（私＋洗う＋衣服＋来る）

(K) kɲom *baok khao ʔaaw* mɔ̀ɔk haəj（私＋洗う＋衣服＋来る＋〈完了〉）

(V) Tôi đã *giặt quần áo* đến.（私＋〈既然〉＋衣服＋来る）

(K) (V) では衣服の移動が必要である。しかし、(31) は (30) に比べて、理解しづらい文と感じられる。その理由として、(30) はふつうに行われる出来事とみなされるが、(31) はそうではないということが関係しているという。いずれにしても、(30) (31) とも移動物と解釈されうるものが存在しているとはいえ、持って来る場合には、そのことを明示したほうが好まれる。あるいは「来る」を表現せずにすませるのである。

次に、移動物が関与しない場合の例として、「ごはんを食べる」が VP1 の位置を占める (32) を挙げる。

(32) 私はごはんを食べて来ました。(結合例 ⑤)

(T) chán *kin khâaw* maa（私＋食べる＋ごはん＋来る）

(K) kɲom *ɲam baaj* mɔ̀ɔk haəj（私＋食べる＋ごはん＋来る＋〈完了〉）

(V) Tôi đã *ăn cơm* {đến/về}.（私＋〈既然〉＋食べる＋ごはん＋着く）[6)]

(32) の発話場面はどのようなものであろうか。(T) と (V : về を用いた文) は、「どこに行って来たのですか？」((T) pay nǎy maa、(V) Đi đâu về?) という質問に対する返答として用いられる。(K) と (V : đến を用いた文) は、次の動作への展開がある場合（たとえば、食事で中断していた話を食後に再開する場合）、あるいは相手に食事をして来るように促された場合などには使うことができるとされるものの、一般には「来る」を使わずに、「もうごはんを食べました」という表現が好まれる[7)]。

ところが、場所句を挿入すると、「ごはんを食べる＋来る」も問題なく容認される。起点を表示することで、「来る」を使う必要性が生ずるためであると考えられる。

(33) 私は家で食事をして来ました。

(K) a.　kɲom ɲam baaj mɔ̀ɔk *pii ptèəh*（私＋食べる＋ごはん＋来る＋～から＋家）

b. kɲom ɲam baaj *pii ptèəh* mɔ̀ɔk（私＋食べる＋ごはん＋～から＋家＋来る）

（V）Tôi đã ăn cơm *ở nhà* đến.（私＋〈既然〉＋食べる＋ごはん＋～で＋家＋着く）

VP1 が「行く」の場合は、（K）が不適格、（V）では đến が不自然とされる。

（34）私は市場へ行って来ました。（結合例 ⑥）

（T）chán *pay talàat* maa（私＋行く＋市場＋来る）

（K）*kɲom *tàv psaa* mɔ̀ɔk vuŋ haəj（私＋行く＋市場＋来る＋元に＋〈完了〉）

（V）Tôi đã *đi chợ* {?đến/về}.（私＋行く＋市場＋{着く/帰る}）

（34T, V）は、往復動作を表す表現（（T）「pay＋名詞句＋maa」、（V）「đi＋名詞句＋về（đến は不自然）」として適格である。（K）では、次のような表現が用いられる。

（35）a. kɲom mɔ̀ɔk pii psaa　私は市場から（帰って）来ました。
（私＋来る＋～から＋市場）

b. kɲom tàv psaa haəj baan mɔ̀ɔk　私は市場に行って、それから来ました。
（私＋行く＋市場＋それから＋得る＋来る）

（34）は「行く＋NP1＋来る」の例であったが、NP1 の位置に動詞句が現れる「行く＋VP1＋来る」についても触れておく。これは、VP1 を目的としてある場所を離れ、そこに戻って来たことを叙述する表現（「～しに行って来た」）であり、動詞類（（ｉ）～（iii））の別とは関係なく、（T）で「pay＋VP1＋maa」、（K）で「tàv＋VP1＋mɔ̀ɔk vuŋ haəj」、（V）で「đi＋VP1＋về」の形で用いられる。

以上の観察から、継起の意味での「VP1＋来る」の容認度を言語ごとに簡単に整理すると、次の通りである。（T）では動詞類による目立った違いはないようである。（K）（V）では物の移動を表しやすい動詞ほど、「VP1＋来る」の容認度が高まる。すなわち、入手の意味を表す動詞、作成の意味を表す動詞、入手の意味も作成の意味も表さない動詞の順に、容認度が落ちる。容認度が低いほど、コンテクストの支えが必要とされることになる。

これまでは、移動直後に発せられる「～てくる」表現を問題にしてきたが、今度は移動前に発せられる「～てくる」表現に目を転じよう。ここでは、話し手が発話場所を一旦離れ、VP1 で示される動作を行って再び発話場所に戻って来るという場面設定のもとで、「ちょっと待ってください」と発した後に続ける文について検討する。（36）は VP1 に入手の意味を表す動詞が現れる例である。

（36）私はパンを買って来ます。

（T）dĭaw chán súɯɯ khanŏm paŋ maa（今＋私＋行く＋買う＋パン）

（K）kɲom tèɲ nòm paŋ mɔ̀ɔk（私＋買う＋パン＋ちょっと）

（V）Tôi mua bánh mì {*đến/về}.（私＋行く＋買う＋パン＋{着く/帰る}）

（T）（K）では、それぞれ maa、mɔ̀ɔk を用いることができるが、（V）では về が自然に用いられる。đến も使用可能であるが、その場合は発話場所以外への移動の意味（「行く」に対応する）になる。ただし、đến の後に đây「ここ」を加えて、Tôi mua bánh mì đến đây. とすると容認される（「私はパンを買ってここに来ます」の意）。

発話場所が出発点となることから、「行く」（(T) pay,（K）tàv,（V）đi）の使用可能性も生ずる。発話場所に戻って来ることが、状況から理解される場合には、あえて戻って来ることを表現せずに「行く＋VP1」が多用される。

（37）私はパンを買いに行きます。

（T）dǐaw chán pay súɯɯ khanǒm paŋ（今＋私＋行く＋買う＋パン）

（K）kŋom tàv tèŋ nòm paŋ muoi plɛ̀ɛt（私＋行く＋買う＋パン＋ちょっと）

（V）Tôi đi mua bánh mì.（私＋行く＋買う＋パン）

戻って来ることを明示した表現が「行く」と共起することも可能である。

（38）私はパンを買いに行って来ます。

（T）dǐaw chán pay súɯɯ khanǒm paŋ maa kɔ̀ɔn（今＋私＋行く＋買う＋パン＋来る＋先に）

（K）kŋom tàv tèŋ nòm paŋ mɔ̀ɔk vɯŋ ʔəjləv haəj
（私＋行く＋買う＋パン＋来る＋元に＋今＋〈完了〉）

（V）Tôi đi mua bánh mì về.（私＋行く＋買う＋パン＋帰る）

（36）～（38）は、入手の意味を表す動詞（動詞類（ｉ）：結合例①）の例であるが、それ以外の動詞類では、次のようになる。(T) では、おおむね入手を表す動詞と同じ状況である。(K) (V) では、移動物があると解釈されるか（動詞類（ii）：結合例②、動詞類（iii）：結合例③④）、ないと解釈されるか（動詞類（iii）：結合例⑤）が形式選択の重要な要因になる。(K)「VP1＋mɔ̀ɔk」、(V)「VP1+về（あるいは、đến đây)」の連続形式が容認されやすいのは、前者の場合である。VP1 の前に「行く」を置いた形式は、移動物の有無を問わず用いられる。(K) における「tàv＋VP1」「tàv＋VP1＋mɔ̀ɔ k vɯŋʔəjləv haəj」、(V) における「đi＋VP1」「đi＋VP1＋về」がその例である。結合例⑥については、「行く＋VP1」あるいは上記（38）の VP1 を「市場」に置き換えた形式が可能である[8]。

4　おわりに

以上、タイ語、クメール語、ベトナム語の「～てくる」表現について、「来る」に先行する動詞句の性質に注目しながら、３言語を対照させた。その結果、「来る」との連続構造の成否が先行動詞句の意味により予測可能であるとの見通しを立てることができた。しかしながら、「来る」の出没に関する制約については、明確な形で提示するには至らなかった。「動詞句＋来る」の形式は、コンテクストの存在や他の要素（アスペクト形式、副詞的要素など）の付加を前提としなければ許されない場合が多い。様々な場面を設定した上での精細な記述が求められる。

「～てくる」表現に関しては、本稿で取り上げた３言語や日本語を含めて、補助動詞的に用いられる「来る」（さらには「行く」）を持つ言語（特に、東アジアや東南アジアの言語）を比較対照することによって、新たな知見が得られることが期待される。３言語と日本語を比べると、特に継起の意味では、３言語の「来る」の使用には日本語よりも厳しい制約が課される。逆に言えば、制約の緩さに日本語の特徴を見ることができるかもしれな

い[9]。

注

1）三上（2015）で考察の対象とした動詞連続は「述語が２つの動詞句の連鎖から成り、その２つの動詞句が表す動きや状態の主体が同一であり（従って V1、V2 とも動詞としての語彙的意味と自立性を有している）、そして動詞句と動詞句がポーズを置かずに発音されるもの」に限定されている。

なお、用例に付した（　）内のグロスは、必ずしも分かち書きしてある語それぞれに対応するものではなく、何語かをまとめた意味を記した場合もある。各言語の表記は、タイ語、クメール語が音韻表記、ベトナム語が正書法による。クメール語の音韻表記は、坂本恭章（1988）「クメール語」亀井孝、河野六郎、千野栄一編『言語学大辞典　第１巻 世界言語編（上）』三省堂、に従う。

2）「歌う」「食べる」など、移動とは直接的関連性のない、動きの継続を表す動詞などは、「来る」と直接結合して、付帯状況を表すことはできない。

3）「入手の意味を表す動詞」、「作成の意味を表す動詞」は、それぞれ荒川（2015）の「獲得義を持つ動詞、離脱から獲得義を持つ動詞」、「生産義を持つ動詞」に対応する。

4）（K）の「～てくる」表現では、この文のように、文末に完了を表す haəj を付加したほうがよいと判断されるものがある。

5）「mɔ̀ɔk pii＋動詞句」を用いると、nə̀v psaa「市場で」も使用可能となる。

kɲom *mɔ̀ɔk pii* tèɲ nòm paŋ *nə̀v psaa*（私＋来る＋～から＋買う＋パン＋～で＋市場）

私は市場でパンを買ってから来ました。

6）（V）では、時間幅の広い đã のかわりに vừa「～したばかり」を用いたほうが意味が明確になり、分かりやすい表現になるという。

Tôi vừa ăn cơm đến.（私＋～したばかり＋食べる＋ごはん＋着く）

私はごはんを食べて来たところです。

7）動詞類（iii）の例として、「先生に会う＋来る」の結合を見てみる。

例：私は先生に会って来ました。

（T）chán *phóp khruu* maa（私＋会う＋先生＋来る）

（K）*kɲom *cuop kruu* mɔ̀ɔk（私＋会う＋先生＋来る）

（V）*Tôi đã *gặp thầy giáo* đến.（私＋〈既然〉＋会う＋先生＋着く）

（T）は継起的動作の解釈を許すが、（K）（V）では「ごはんを食べる＋来る」以上に「来る」使用の不自然さが感じられるようである。

8）（K）（V）では、移動行為を「昨日」「明日」の出来事として述べる場合も同様に、移動物の有無によって「来る」の出没が左右される。すなわち、移動物があれば（結合例①～④）、「VP1＋来る」は使用可能となるが、なければその形式は避けられる。

9）日本語の「忘れて来る」は、３言語では「来る」は表現されない。

例：私は部屋に傘を忘れて来ました。

（T）chán lɯɯm rôm wáy nay hɔ̂ŋ（私＋忘れる＋傘＋置く＋中＋部屋）

（K）kɲom plèc chat tòk nəv knoŋ bɔntòp（私＋忘れる＋傘＋置く＋～に＋中＋部屋）

（V）Tôi quên cái ô ở phòng.（私＋忘れる＋傘＋～に＋部屋）

3言語では、空間移動を表す「来る」と無意志性動詞との結合はふつうではない。

また、「ぶつかって来る」のように方向性の意味が強い「来る」は、（T）（K）でも「来る」が用いられるが、「来る＋ぶつかる」の語順をとる。（V）では đến は現れない。

例：車が私にぶつかって来ました。

（T）rót maa chon chán（車＋来る＋ぶつかる＋私）

（K）laan mɔ̀ɔk bok kɲom（車＋来る＋ぶつかる＋私）

（V）Xe đụng vào tôi.（車＋ぶつかる＋入る＋私）

（T）（K）の語順は、私に向かう移動に続いて衝突が起きるという継起性を反映している。（V）は「車が私にぶつかった」ことを述べる文であり、私への接近の意味を表すものではない。

参考文献

荒川清秀（2015）『動詞を中心にした中国語文法論集』白帝社.

田中茂範・松本　曜（1997）『空間と移動の表現』研究社出版.

東南アジア諸言語研究会（2003）『東南アジア大陸部諸言語の「行く・来る」』慶應義塾大学言語文化研究所.

三上直光（2015）「ベトナム語動詞連続の意味的特徴について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』46：441-456.

〔謝辞〕本稿作成に当たり、インフォーマントとして Rattanan　Jirayupat 氏（タイ語）、Han Makara 氏（クメール語）、Vũ Đăng Khuê 氏（ベトナム語）にご協力いただいた。記して感謝の意を表したい。

執筆者一覧（論文掲載順）

春日　淳（かすが　あつし）　神田外語大学

清水政明（しみず　まさあき）　大阪大学

上田広美（うえだ　ひろみ）　東京外国語大学

岡田知子（おかだ　ともこ）　東京外国語大学

峰岸真琴（みねぎし　まこと）　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

鈴木玲子（すずき　れいこ）　東京外国語大学

岡野賢二（おかの　けんじ）　東京外国語大学

澤田英夫（さわだ　ひでお）　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

三上直光（みかみ　なおみつ）　慶應義塾大学

東南アジア大陸部諸言語の動詞連続

2017（平成 29）年 3 月 20 日発行

編者　東南アジア諸言語研究会
発行　慶應義塾大学言語文化研究所
〒108-8345　東京都港区三田 2-15-45
印刷　株式会社　白峰社
〒170-0013　東京都豊島区東池袋 5-49-6